芥川龍之介全集

第三巻

全集

大正十年三月十四日撮影

書齋（二階）

第三卷目錄

秋

一

信子は女子大學にゐた時から、才媛の名聲を擔つてゐた。彼女が早晩作家として文壇に打つて出る事は、殆ど誰も疑はなかつた。中には彼女が在學中、既に三百何枚かの自敍傳體小說を書き上げたなどと吹聽して步くものもあつた。が、學校を卒業して見ると、まだ女學校も出てゐない妹の照子と彼女とを抱へて、後家を立て通して來た母の手前も、さうは我儘を云はれない、複雜な事情もないではなかつた。そこで彼女は創作を始める前に、まづ世間の習慣通り、緣談からきめてかかるべく餘儀なくされた。

彼女には俊吉と云ふ從兄があつた。彼は當時まだ大學の文科に籍を置いてゐたが、やはり將來は作家仲間に身を投ずる意志があるらしかつた。信子はこの從兄の大學生と、昔から親しく往來してゐた。それが互に文學と云ふ共通の話題が出來てからは、愈親しみが增したやうであつた。

唯、彼は信子と違つて、當世流行のトルストイズムなどには一向敬意を表さなかつた。さうして始終フランス仕込みの皮肉や警句ばかり並べてゐた。かう云ふ俊吉の冷笑的な態度は、時々萬事眞面目な信子を怒らせてしまふ事があつた。が、彼女は怒りながらも俊吉の皮肉や警句の中に、何か輕蔑出來ないものを感じない譯には行かなかつた。

だから彼女は在學中も、彼と一しよに展覽會や音樂會へ行く事が稀ではなかつた。尤も大抵そんな時には、妹の照子も同伴であつた。彼等三人は行きも返りも、氣兼ねなく笑つたり話したりした。が、妹の照子だけは、時々話の圈外へ置きざりにされる事もあつた。それでも照子は子供らしく、飾窓の中のパラソルや絹のショオルを覗き歩いて、格別閑却された事を不平に思つてもゐないらしかつた。信子はしかしそれに氣がつくと、必話頭を轉換して、すぐに又元の通り妹にも口をきかせようとした。その癖まづ照子を忘れるものは、何時も信子自身であつた。俊吉はすべてに無頓着なのか、不相變氣の利いた冗談ばかり投げつけながら、目まぐるしい往來の人通りの中を、大股にゆつくり歩いて行つた。……

信子と從兄との間がらは、勿論誰の眼に見ても、來るべき彼等の結婚を豫想させるのに十分で

あつた。同窓たちは彼女の未來をてんでに羨んだり妬んだりした。殊に俊吉を知らないものは、(滑稽と云ふより外はないが、)一層これが甚しかつた。信子も亦一方では彼等の推測を打ち消しながら、他方ではその確な事をそれとなく故意に仄かせたりした。從つて同窓たちの頭の中には、彼等が學校を出るまでの間に、何時か彼女と俊吉との姿が、恰も新婦新郎の寫眞の如く、一しよにはつきり燒きつけられてゐた。

所が學校を卒業すると、信子は彼等の豫期に反して、大阪の或商事會社へ近頃勤務する事になつた、高商出身の青年と、突然結婚してしまつた。さうして式後二三日してから、新夫と一しよに勤め先きの大阪へ向けて立つてしまつた。その時中央停車場へ見送りに行つたものの話によると、信子は何時もと變りなく、晴れ晴れした微笑を浮べながら、ともすれば涙を落し勝ちな妹の照子をいろいろと慰めてゐたと云ふ事であつた。

同窓たちは皆不思議がつた。その不思議がる心の中には、妙に嬉しい感情と、前とは全然違つた意味で妬ましい感情とが交つてゐた。或者は彼女を信賴して、すべてを母親の意志に歸した。又或ものは彼女を疑つて、心がはりがしたとも云ひふらした。が、それらの解釋が結局想像に過

ぎない事は、彼等自身さへ知らない譯ではなかつた。彼女はなぜ俊吉と結婚しなかつたか？　彼等はその後暫くの間、よるとさはると重大らしく、必この疑問を話題にした。さうして彼是二月ばかり經つと──全く信子を忘れてしまつた。勿論彼女が書く筈だつた長篇小說の噂なぞも。

信子はその間に大阪の郊外へ、幸福なるべき新家庭をつくつた。彼等の家はその界隈でも、最も閑靜な松林にあつた。松脂の匂と日の光と、──それが何時でも夫の留守は、二階建の新しい借家の中に、活き活きした沈默を領してゐた。信子はさう云ふ寂しい午後、時々理由もなく氣が沈むと、きつと針箱の引出しを開けては、その底に疊んでしまつてある桃色の書簡箋をひろげて見た、書簡箋の上にはこんな事が、細々とペンで書いてあつた。

「──もう今日かぎり御姉様と御一しよにゐる事が出來ないと思ふと、これを書いてゐる間でさへ、止め度なく涙が溢れて來ます。御姉樣。どうか、どうか私を御赦し下さい。照子は勿體ない御姉様の犧牲の前に、何と申し上げて好いかもわからずに居ります。

「御姉様は私の爲に、今度の御緣談を御きめになりました。さうではないと仰有つても、私にはよくわかつて居ります。何時ぞや御一しよに帝劇を見物した晚、御姉樣は私に俊さんは好きかと

御尋きになりました。それから又好きならば、御姉樣がきつと骨を折るから、俊さんの所へ行けとも仰有いました。あの時もう御姉樣は、私が俊さんに差上げる筈の手紙を讀んでいらしつたのでせう。あの手紙がなくなつた時、ほんたうに私は御姉樣を御恨めしく思ひました。(御免遊ばせ。この事だけでも私はどの位申し譯がないかわかりません。)ですからその晩も私には、御姉樣の親切な御言葉も、皮肉のやうな氣さへ致しました。私が怒つて御返事らしい御返事も碌に致さなかつた事は、もちろん御忘れになりもなさりますまい。けれどもあれから二三日經つて、御姉樣の御縁談が急にきまつてしまつた時、私はそれこそ死んででも、御詫びをしようかと思ひました。御姉樣も俊さんが御好きなのでございますもの。(御隱しになつてはいや。私はよく存じて居りましてよ。)私の事さへ御かまひにならなければ、きつと御自分が俊さんの所へいらしつたのに違ひございません。それでも御姉樣は私に、俊さんなぞは思つてゐないと、何度も繰返して仰有いました。さうしてとうとう心にもない御結婚をなすつて御しまひになりました。私の大事な御姉樣。私が今日鷄を抱いて來て、大阪へいらつしやる御姉樣に、御挨拶をなさいと申した事をまだ覺えていらしつて? 私は飼つてゐる鷄にも、私と一しよに御姉樣へ御詫びを申して貰ひたか

つたの。さうしたら、何にも御存知ない御母様まで御泣きになりましたのね。

「御姉様。もう明日は大阪へいらしつて御しまひなさるでせう。けれどもどうか何時までも、御姉様の照子を見捨てずに頂戴。照子は毎朝鷄に餌をやりながら、御姉様の事を思ひ出して、誰にも知れず泣いてゐます。……」

信子はこの少女らしい手紙を讀む每に、必涙が滲んで來た。殊に中央停車場から汽車に乘らうとする間際、そつとこの手紙を彼女に渡した照子の姿を思ひ出すと、何とも云はれずにいぢらしかつた。が、彼女の結婚は果して妹の想像通り、全然犧牲的なそれであらうか。さう疑を挾む事は、涙の後の彼女の心へ、重苦しい氣持ちを擴げ勝ちであつた。信子はこの重苦しさを避ける爲に、大抵はじつと快い感傷の中に浸つてゐた。そのうちに外の松林へ一面に當つた日の光が、だんだん黃ばんだ暮方の色に變つて行くのを眺めながら。

二

結婚後彼是三月ばかりは、あらゆる新婚の夫婦の如く、彼等も亦幸福な日を送つた。

夫は何處か女性的な、口數を利かない人物であつた。それが毎日會社から歸つて來ると、必晩飯後の何時間かは、信子と一しよに過す事にしてゐた。信子は編物の針を動かしながら、近頃世間に騷がれてゐる小說や戲曲の話などもした。その話の中には時によると、基督敎の匂のする女子大學趣味の人生觀が織りこまれてゐる事もあつた。夫は晩酌の頰を赤らめた儘、讀みかけた夕刊を膝へのせて、珍しさうに耳を傾けてゐた。が、彼自身の意見らしいものは、一言も加へた事がなかつた。

彼等は又殆日曜每に、大阪やその近郊の遊覽地へ氣散じな一日を暮しに行つた。信子は汽車電車へ乘る度に、何處でも飮食する事を憚らない關西人が皆卑しく見えた。それだけおとなしい夫の態度が、格段に上品なのを嬉しく感じた。實際身綺麗な夫の姿は、さう云ふ人中に交つてゐると、帽子からも、背廣からも、或は又赤皮の編上げからも、化粧石鹼の匂に似た、一種清新な雰圍氣を放散させてゐるやうであつた。殊に夏の休暇中、舞子まで足を延した時には、同じ茶屋に來合せた夫の同僚たちに比べて見て、一層誇りがましいやうな心もちがせずにはゐられなかつた。が、夫はその下卑た同僚たちに、存外親しみを持つてゐるらしかつた。

その内に信子は長い間、捨ててあつた創作を思ひ出した。そこで夫の留守の内だけ、一二時間づつ机に向ふ事にした。夫はその話を聞くと、「愈女流作家になるかね。」と云つて、やさしい口もとに薄笑ひを見せた。しかし机には向ふにしても、思ひの外ペンは進まなかつた。彼女はぼんやり頰杖をついて、炎天の松林の蟬の聲に、我知れず耳を傾けてゐる彼女自身を見出し勝ちであつた。

所が殘暑が初秋へ振り變らうとする時分、夫は或日會社の出がけに、汗じみた襟を取變へようとした。が、生憎襟は一本殘らず洗濯屋の手に渡つてゐた。夫は日頃身綺麗なだけに、不快らしく顏を曇らせた。さうしてズボン吊を掛けながら、「小說ばかり書いてゐちや困る。」と何時になく厭味を云つた。信子は默つて眼を伏せて、上衣の埃を拂つてゐた。

それから二三日過ぎた或夜、夫は夕刊に出てゐた食糧問題から、月々の經費をもう少し輕減出來ないものかと云ひ出した。「お前だつて何時までも女學生ぢやあるまいし。」――そんな事も口へ出した。信子は氣のない返事をしながら、夫の襟飾の縫刺しをしてゐた。すると夫は意外な位執拗に、「その襟飾にしてもさ、買ふ方が反つて安くつくぢやないか。」と、やはりねちねちした調

子で云つた。彼女は猶更口が利けなくなつた。夫もしまひには白けた顏をして、つまらなさうに商賣向きの雜誌か何かばかり讀んでゐた。が、寢室の電燈を消してから、信子は夫に背を向けた儘、「もう小說なんぞ書きません。」と、囁くやうな聲で云つた。夫はそれでも默つてゐた。暫くして彼女は、同じ言葉を前よりもかすかに繰返した。それから間もなく泣く聲が洩れた。夫は二言三言彼女を叱つた。その後でも彼女の啜泣きは、まだ絕え絕えに聞えてゐた。が、信子は何時の間にか、しつかりと夫にすがつてゐた。……

翌日彼等は又元の通り、仲の好い夫婦に返つてゐた。

と思ふと今度は十二時過ぎても、まだ夫が會社から歸つて來ない晚があつた。しかも漸く歸つて來ると、雨外套も一人では脫げない程、酒臭い匂を呼吸してゐた。信子は眉をひそめながら、甲斐甲斐しく夫に着換へさせた。夫はそれにも關らず、まはらない舌で皮肉さへ云つた。「今夜は僕が歸らなかつたから、餘つ程小說が捗取つたらう。」——さう云ふ言葉が、何度となく女のやうな口から出た。彼女はその晚床にはいると、思はず淚がほろほろ落ちた。こんな處を照子が見たら、どんなに一しよに泣いてくれるであらう。照子。照子。私が便りに思ふのは、たつたお前一

人ぎりだ。――信子は度々心の中でから妹に呼びかけながら、夫の酒臭い寢息に苦しまされて、殆夜中まんじりともせずに、寢返りばかり打つてゐた。

が、それも亦翌日になると、自然と仲直りが出來上つてゐた。

そんな事が何度か繰返される内に、だんだん秋が深くなつて來た。信子は何時か机に向つて、ペンを執る事が稀になつた。その時にはもう夫の方も、前程彼女の文學談を珍しがらないやうになつてゐた。彼等は夜毎に長火鉢を隔てて、瑣末な家庭の經濟の話に時間を殺す事を覺え出した。その上又かう云ふ話題は、少くとも晩酌後の夫にとつて、最も興味があるらしかつた。それでも信子は氣の毒さうに、時々夫の顏色を窺つて見る事があつた。が、彼は何も知らず、近頃延した髭を嚙みながら、何時もより餘程快活に、「これで子供でも出來て見ると――」なぞと、考へ考へ話してゐた。

するとその頃から月々の雜誌に、從兄の名前が見えるやうになつた。信子は結婚後忘れたやうに、俊吉との文通を絕つてゐた。唯、彼の動靜は、――大學の文科を卒業したとか、同人雜誌を始めたとか云ふ事は、妹から手紙で知るだけであつた。又それ以上彼の事を知りたいと云ふ氣も

起さなかつた。が、彼の小說が雜誌に載つてゐるのを見ると、懷しさは昔と同じであつた。彼女はその頁をはぐりながら、何度も獨り微笑を洩らした。俊吉はやはり小說の中でも、冷笑と諧謔との二つの武器を宮本武藏のやうに使つてゐた。彼女にはしかし氣のせゐか、その輕快な皮肉の後に、何か今までの從兄にはない、寂しさうな捨鉢の調子が潜んでゐるやうに思はれた。と同時にさう思ふ事が、後めたいやうな氣もしないではなかつた。

信子はそれ以來夫に對して、一層優しく振舞ふやうになつた。夫は夜寒の長火鉢の向うに、何時も晴れ晴れと微笑してゐる彼女の顏を見出した。その顏は以前より若々しく、化粧をしてゐるのが常であつた。彼女は針仕事の店を擴げながら、彼等が東京で式を擧げた當時の記憶なぞも話したりした。夫にはその記憶の細かいのが、意外でもあり、嬉しさうでもあつた。「お前はよくそんな事まで覺えてゐるね。」――夫にかう調戲はれると、信子は必無言の儘、眼にだけ媚のある返事を見せた。が、何故それ程忘れずにゐるか、彼女自身も心の內では、不思議に思ふ事が度々あつた。

それから程なく、母の手紙が、信子に妹の結納が濟んだと云ふ事を報じて來た。その手紙の中

には父、俊吉が照子を迎へる爲に、山の手の或郊外へ新居を設けた事もつけ加へてあつた。彼女は早速母と妹とへ、長い祝ひの手紙を書いた。「何分當方は無人故、式には不本意ながら參りかね候へども……」――そんな文句を書いてゐる内に、(彼女には何故かわからなかつたが、)筆の澁る事も再三あつた。すると彼女は眼を擧げて、必外の松林を眺めた。松は初冬の空の下に、簇々と蒼黑く茂つてゐた。

その晩信子と夫とは、照子の結婚を話題にした。夫は何時もの薄笑ひを浮べながら、彼女が妹の口眞似をするのを、面白さうに聞いてゐた。が、彼女には何となく、彼女自身に照子の事を話してゐるやうな心もちがした。「どれ、寢るかな。」――二三時間の後、夫は柔な髭を撫でながら、大儀さうに長火鉢の前を離れた。信子はまだ妹へ祝つてやる品を決し兼ねて、火箸で灰文字を書いてゐたが、この時急に顏を擧げて、「でも妙なものね、私にも弟が一人出來るのだと思ふと。」と云つた。「當り前ぢやないか、妹もゐるんだから。」――彼女は夫にかう云はれても、考深い眼つきをした儘、何とも返事をしなかつた。

照子と俊吉とは、師走の中旬に式を擧げた。當日は午少し前から、ちらちら白い物が落ち始め

た。信子は獨り午の食事をすませた後、何時までもその時の魚の匂が、口について離れなかつた。「東京も雪が降つてゐるかしら。」――こんな事を考へながら、信子はじつとうす暗い茶の間の長火鉢にもたれてゐた。雪が愈烈しくなつた。が、口中の生臭さは、やはり執念く消えなかつた。

………

三

信子はその翌年の秋、社命を帯びた夫と一しよに、久しぶりで東京の土を踏んだ。が、短い日限内に、果すべき用向きの多かつた夫は、唯彼女の母親の所へ、來匆々顔を出した時の外は、殆一日も彼女をつれて、外出する機會を見出さなかつた。彼女はそこで妹夫婦の郊外の新居を尋ねる時も、新開地じみた電車の終點から、たつた一人俥に揺られて行つた。

彼等の家は、町並が葱畑に移る近くにあつた。しかし隣近所には、いづれも借家らしい新築が、せせこましく軒を並べてゐた。のき打ちの門、要もちの垣、それから竿に干した洗濯物、――すべてがどの家も變りはなかつた。この平凡な住居の容子は、多少信子を失望させた。

が、彼女が案内を求めた時、聲に應じて出て來たのは、意外にも從兄の方であつた。俊吉は以前と同じやうに、この珍客の顔を見ると、「やあ。」と快活な聲を擧げた。彼女は彼が何時の間にか、いが栗頭でなくなつたのを見た。「暫らく。」「さあ、御上り。生憎僕一人だが。」「照子は？　留守？」「使に行つた。女中も。」――信子は妙に恥しさを感じながら、派手な裏のついた上衣をそつと玄關の隅に脱いだ。

俊吉は彼女を書齋兼客間の八疊へ坐らせた。座敷の中には何處を見ても、本ばかり亂雜に積んであつた。殊に午後の日の當つた障子際の、小さな紫檀の机のまはりには、新聞雜誌や原稿用紙が、手のつけやうもない程散らかつてゐた。その中に若い細君の存在を語つてゐるものは、唯床の間の壁に立てかけた、新しい一面の琴だけであつた。信子はかう云ふ周圍から、暫らく物珍しい眼を離さなかつた。

「來ることは手紙で知つてゐたけれど、今日來ようとは思はなかつた。」――俊吉は卷煙草へ火をつけると、さすがに懷しさうな眼つきをした。「どうです、大阪の御生活は？」「俊さんこそ如何？　幸福？」――信子も亦二言三言話す内に、やはり昔のやうな懷しさが、よみ返つて來るのを意識し

た。文通さへ碌にしなかつた、彼是二年越しの氣まづい記憶は、思つたより彼女を煩はさなかつた。

彼等は一つ火鉢に手をかざしながら、いろいろな事を話し合つた。俊吉の小説だの、共通な知人の噂だの、東京と大阪との比較だの、話題はいくら話しても、盡きない位澤山あつた。が、二人とも云ひ合せたやうに、全然暮し向きの問題には觸れなかつた。それが信子には一層從兄と、話してゐると云ふ感じを強くさせた。

時々はしかし沈默が、二人の間に來る事もあつた。その度に彼女は微笑した儘、眼を火鉢の灰に落した。其處には待つとは云へない程、かすかに何かを待つ心もちがあつた。すると故意か偶然か、俊吉はすぐに話題を見つけて、何時もその心もちを打ち破つた。彼女は次第に從兄の顏を窺はずにはゐられなくなつた。が、彼は平然と巻煙草の煙を呼吸しながら、格別不自然な表情を裝つてゐる氣色も見えなかつた。

その内に照子が歸つて來た。彼女は姉の顏を見ると、手をとり合はないばかりに嬉しがつた。信子も脣は笑ひながら、眼には何時かもう涙があつた。二人は暫くは俊吉も忘れて、去年以來の

生活を互に尋ねたり尋ねられたりしてゐた。殊に照子は活き活きと、血の色を頬に透かせながら、今でも飼つてゐる鷄の事まで、話して聞かせる事を忘れなかつた。俊吉は卷煙草を啣へた儘、滿足さうに二人を眺めて、不相變にやにや笑つてゐた。

　其處へ女中も歸つて來た。俊吉はその女中の手から、何枚かの端書を受取ると、早速側の机へ向つて、せつせとペンを動かし始めた。照子は女中も留守だつた事が、意外らしい氣色を見せた。

「ぢや御姉樣がいらしつた時は、誰も家にゐなかつたの。」「ええ、俊さんだけ。」――信子はかう答へる事が、平氣を強ひるやうな心もちがした。すると俊吉が向うを向いたなり、「旦那樣に感謝しろ。その茶も僕が入れたんだ。」と云つた。照子は姉と眼を見合せて、惡戲さうにくすりと笑つた。が、夫にはわざとらしく、何とも返事をしなかつた。

　間もなく信子は、妹夫婦と一しよに、晩飯の食卓を圍むことになつた。照子の說明する所によると、膳に上つた玉子は皆、家の鷄が產んだものであつた。俊吉は信子に葡萄酒をすすめながら、「人間の生活は掠奪で持つてゐるんだね。小はこの玉子から――」なぞと社會主義じみた理窟を並べたりした。その癖此處にゐる三人の中で、一番玉子に愛着のあるのは俊吉自身に違ひなかつた。

照子はそれが可笑しいと云つて、子供のやうな笑ひ聲を立てた。信子はかう云ふ食卓の空氣にも、遠い松林の中にある、寂しい茶の間の暮方を思ひ出さずにゐられなかつた。

話は食後の果物を荒した後も盡きなかつた。微醉を帶びた俊吉は、夜長の電燈の下にあぐらをかいて、盛に彼一流の詭辯を弄した。その談論風發が、もう一度信子を若返らせた。彼女は熱のある眼つきをして、「私も小說を書き出さうかしら。」と云つた。すると從兄は返事をする代りに、グウルモンの警句を拋りつけた。それは「ミユウズたちは女だから、彼等を自由に虜にするものは、男だけだ。」と云ふ言葉であつた。信子と照子とは同盟して、グウルモンの權威を認めなかつた。「ぢや女でなけりや、音樂家になれなくつて？ アポロは男ぢやありませんか。」——照子は眞面目にこんな事まで云つた。

その暇に夜が更けた。信子はとうとう泊る事になつた。

寢る前に俊吉は、緣側の雨戶を一枚開けて、寢間着の儘狹い庭へ下りた。それから誰を呼ぶともなく「ちよいと出て御覽。好い月だから。」と聲をかけた。信子は獨り彼の後から、沓脫ぎの庭下駄へ足を下した。足袋を脫いだ彼女の足には、冷たい露の感じがあつた。

月は庭の隅にある、痩せがれた檜の梢にあつた。從兄はその檜の下に立つて、うす明い夜空を眺めてゐた。「大へん草が生えてゐるのね。」――信子は荒れた庭を氣味惡さうに、怯づ怯づ彼のゐる方へ歩み寄つた。が、彼はやはり空を見ながら、「十三夜かな。」と呟いただけであつた。

暫く沈默が續いた後、俊吉は靜に眼を返して、「鷄小屋へ行つて見ようか。」と云つた。信子は默つて頷いた。鷄小屋は丁度檜とは反對の庭の隅にあつた。二人は肩を並べながら、ゆつくり其處まで歩いて行つた。しかし蓆圍ひの内には、唯鷄の匂のする、朧げな光と影ばかりがあつた。俊吉はその小屋を覗いて見て、殆獨り言かと思ふやうに、「寢てゐる。」と彼女に囁いた。「玉子を人に取られた鷄が。」――信子は草の中に佇んだ儘、さう考へずにはゐられなかつた。……

二人が庭から返つて來ると、照子は夫の机の前に、ぼんやり電燈を眺めてゐた。靑い横ばひがたつた一つ、笠に這つてゐる電燈を。

四

翌朝俊吉は一張羅の背廣を着て、食後匆々玄關へ行つた。何でも亡友の一周忌の墓參をするの

だとか云ふ事であつた。「好いかい。待つてゐるんだぜ。午頃までにやきつと歸つて來るから。」——彼は外套をひつかけながら、かう信子に念を押した。が彼女は華奢な手に彼の中折を持つた儘、默つて微笑したばかりであつた。

照子は夫を送り出すと、姉を長火鉢の向うに招じて、まめまめしく茶をすすめなどした。隣の奧さんの話、訪問記者の話、それから俊吉と見に行つた或外國の歌劇團の話、——その外愉快なるべき話題が、彼女にはまだいろいろあるらしかつた。が、信子の心は沈んでゐた。彼女はふと氣がつくと、何時も好い加減な返事ばかりしてゐる彼女自身が其處にあつた。それがとうとうしまひには、照子の眼にさへ止るやうになつた。妹は心配さうに彼女の顏を覗きこんで、「どうして？」と尋ねてくれたりした。しかし信子にもどうしたのだか、はつきりした事はわからなかつた。柱時計が十時を打つた時、信子は懶さうな眼を擧げて、「俊さんは中々歸りさうもないわね。」と云つた。照子も姉の言葉につれて、ちよいと時計を仰いだが、これは存外冷淡に、「まだ——」とだけしか答へなかつた。信子にはその言葉の中に、夫の愛に飽き足りてゐる新妻の心があるやうな氣がした。さう思ふと愈彼女の氣もちは、憂鬱に傾かずにはゐられなかつた。

「照さんは幸福ね。」――信子は頤を半襟に埋めながら、冗談のやうにかう云つた。が、自然と其處へ忍びこんだ、眞面目な羨望の調子だけは、どうする事も出來なかつた。照子はしかし無邪氣らしく、やはり活き活きと微笑しながら、「覺えていらつしやい。」と睨む眞似をした。それからすぐに又「御姉樣だつて幸福の癖に。」と、甘えるやうにつけ加へた。その言葉がぴしりと信子を打つた。

彼女は心もち眶を上げて、「さう思つて？」と問ひ返した。問ひ返して、すぐに後悔した。照子は一瞬間妙な顏をして、姉と眼を見合せた。その顏にも亦蔽ひ難い後悔の心が動いてゐた。信子は強ひて微笑した。――「さう思はれるだけでも幸福ね。」

二人の間には沈默が來た。彼等は柱時計の時を刻む下に、長火鉢の鐵瓶がたぎる音を聞くともなく聞き澄ませてゐた。

「でも御兄樣は御優しくはなくつて？」――やがて照子は小さな聲で、恐る恐るかう尋ねた。その聲の中には明かに、氣の毒さうな響が籠つてゐた。が、この場合信子の心は、何よりも憐憫を反撥した。彼女は新聞を膝の上へのせて、それに眼を落したなり、わざと何とも答へなかつた。

新聞には大阪と同じやうに、米價問題が掲げてあつた。

その内に靜な茶の間の中には、かすかに人の泣くけはひが聞え出した。信子は新聞から眼を離して、袂を顏に當てた妹を長火鉢の向うに見出した。「泣かなくつたつて好いのよ。」――照子は姉にさう慰められても、容易に泣き止まうとはしなかつた。信子は殘酷な喜びを感じながら、暫くは妹の震へる肩へ無言の視線を注いでゐた。それから女中の耳を憚るやうに、照子の方へ顏をやりながら、「惡るかつたら、私があやまるわ。私は照さんさへ幸福なら、何より難有いと思つてゐるの。ほんたうよ。俊さんが照さんを愛してゐてくれれば――」と、低い聲で云ひ續けた。云ひ續ける内に、彼女の聲も、彼女自身の言葉に動かされて、だんだん感傷的になり始めた。すると突然照子は袖を落して、涙に濡れてゐる顏を擧げた。彼女の眼の中には、意外な事に、悲しみも怒りも見えなかつた。が、唯、抑へ切れない嫉妬の情が、燃えるやうに瞳を火照らせてゐた。「ぢや御姉樣は――御姉樣は何故昨夜も――」照子は皆まで云はない内に、又顏を袖に埋めて、發作的に烈しく泣き始めた。……

二三時間の後、信子は電車の終點に急ぐべく、幌俥の上に搖られてゐた。彼女の眼にはひる外

の世界は、前部の幌を切りぬいた、四角なセルロイドの窓だけであつた。其處には場末らしい家家と色づいた雜木の梢とが、徐にしかも絶え間なく、後へ後へと流れて行つた。もしその中に一つでも動かないものがあれば、それは薄雲を漂はせた、冷やかな秋の空だけであつた。

彼女の心は靜かであつた。が、その靜かさを支配するものは、寂しい諦めに外ならなかつた。照子の發作が終つた後、和解は新しい涙と共に、容易く二人を元の通り仲の好い姉妹に返してゐた。しかし事實は事實として、今でも信子の心を離れなかつた。彼女は從兄の歸りも待たずこの俥上に身を託した時、既に妹とは永久に他人になつたやうな心もちが、意地惡く彼女の胸の中に氷を張らせてゐたのであつた。――

信子はふと眼を擧げた。その時セルロイドの窓の中には、ごみごみした町を歩いて來る、杖を抱へた從兄の姿が見えた。彼女の心は動搖した。俥を止めようか。それともこの儘行き違はうか。彼女は動悸を抑へながら、暫くは唯幌の下に、空しい逡巡を重ねてゐた。が、俊吉と彼女との距離は、見る見る内に近くなつて來た。彼は薄日の光を浴びて、水溜りの多い往來にゆつくりと靴を運んでゐた。

「俊さん。」――さう云ふ聲が一瞬間、信子の脣から洩れようとした。實際俊吉はその時もう、彼女の俥のすぐ側に、見慣れた姿を現してゐた。が、彼女は又ためらつた。その暇に何も知らない彼は、とうとうこの幌俥とすれ違つた。薄濁つた空、疎らな屋並、高い木々の黃ばんだ梢、――後には不相變人通りの少い場末の町があるばかりであつた。

「秋――」

信子はうすら寒い幌の下に、全身で寂しさを感じながら、しみじみかう思はずにはゐられなかつた。

（大正九年三月）

黑衣聖母

――この涙の谷に呻き泣きて、御身に願ひをかけ奉る。……御身の憐みの御眼をわれらに廻らせ給へ。……深く御柔軟、深く御哀憐、すぐれて甘くまします「びるぜん、さんたまりや」様――

――和譯「けれんど」――

「どうです、これは。」

田代君はかう云ひながら、一體の麻利耶觀音を卓子の上へ載せて見せた。

麻利耶觀音と稱するのは、切支丹宗門禁制時代の天主教徒が、屢聖母麻利耶の代りに禮拜した、多くは白磁の觀音像である。が、今田代君が見せてくれたのは、その麻利耶觀音の中でも、博物館の陳列室や世間普通の蒐集家のキャビネットにあるやうなものではない。第一これは顏を除いて、他は悉く黑檀を刻んだ、一尺ばかりの立像である。のみならず頸のまはりへ懸けた十字

架形の瓔珞も、金と青貝とを象嵌した、極めて精巧な細工らしい。その上顏は美しい牙彫で、しかも脣には珊瑚のやうな、一點の朱まで加へてある。……

私は默つて腕を組んだ儘、暫くはこの黑衣聖母の美しい顏を眺めてゐた。が、眺めてゐる内に、何か怪しい表情が、象牙の顏の何處だかに、漂つてゐるやうな心もちがした。いや、怪しいと云つたのでは物足りない。私にはその顏全體が、或惡意を帶びた嘲笑を漲らしてゐるやうな氣さへしたのである。

「どうです、これは。」

田代君はあらゆる蒐集家に共通な矜誇の微笑を浮べながら、卓子の上の麻利耶觀音と私の顏とを見比べて、もう一度かう繰返した。

「これは珍品ですね。が、何だかこの顏は、無氣味な所があるやうぢやありませんか。」

「圓滿具足の相好とは行きませんかな。さう云へばこの麻利耶觀音には、妙な傳說が附隨してゐるのです。」

「妙な傳說？」

私は眼を麻利耶觀音から、思はず田代君の顏に移した。田代君は存外眞面目な表情を浮べながら、ちよいとその麻利耶觀音を卓子の上から取り上げたが、すぐに又元の位置に戻して、

「ええ、これは禍を轉じて福とする代りに、福を轉じて禍とする、緣起の惡い聖母だと云ふ事ですよ。」

「まさか。」

「處が實際さう云ふ事實が、持ち主にあつたと云ふのです。」

田代君は椅子に腰を下すと、殆物思はしげなとも形容すべき、陰鬱な眼つきになりながら、私にも卓子の向うの椅子へかけろと云ふ手眞似をして見せた。

「ほんたうですか。」

私は椅子へかけると同時に、我知らず怪しい聲を出した。田代君は私より一二年前に大學を卒業した、秀才の聞えの高い法學士である。且又私の知つてゐる限り、所謂超自然的現象には寸毫の信用も置いてゐない、教養に富んだ新思想家である。その田代君がこんな事を云ひ出す以上、まさかその妙な傳說と云ふのも、荒唐無稽な怪談ではあるまい。――

「ほんたうですか。」
私が再から念を押すと、田代君は燐寸の火を徐にパイプへ移しながら、
「さあ、それはあなた自身の御判斷に任せるより外はありますまい。が、兎も角もこの麻利耶觀音には、氣味の惡い因緣があるのださうです。御退屈でなければ、御話しますが。――」

この麻利耶觀音は、私の手にはひる以前、新潟縣の或町の稻見と云ふ素封家にあつたのです。勿論骨董としてあつたのではなく、一家の繁榮を祈るべき宗門神としてあつたのですが。

その稻見の當主と云ふのは、丁度私と同期の法學士で、これが會社にも關係すれば、銀行にも手を出してゐると云ふ、まあ仲々の事業家なのです。そんな關係上、私も一二度稻見の爲に、或便宜を計つてやつた事がありました。その禮心だつたのでせう。稻見は或年上京した序に、この家重代の麻利耶觀音を私にくれて行つたのです。

私の所謂妙な傳說と云ふのも、その時稻見の口から聞いたのですが、彼自身は勿論さう云ふ不思議を信じてゐる譯でも何でもありません。たゞ、母親から聞かされた通り、この聖母の謂はれ

因緣をざつと說明しただけだつたのです。

何でも稻見の母親が十か十一の秋だつたさうです。年代にすると、黑船が浦賀の港を擾がせた嘉永の末年にでも當りますか――その母親の弟になる、茂作と云ふ八ツばかりの男の子が、重い痲疹に罹りました。稻見の母親はお榮と云つて、二三年前の疫病に父母共世を去つて以來、この茂作と姉弟二人、もう七十を越した祖母の手に育てられて來たのださうです。ですから茂作が重病になると、稻見には曾祖母に當る、その切髮の隱居の心配と云ふものは、一通りや二通りではありません。が、いくら醫者が手を盡しても、茂作の病氣は重くなるばかりで、殆一週間と經たない内に、もう今日か明日かと云ふ容體になつてしまひました。

すると或夜の事、お榮のよく寢入つてゐる部屋へ、突然祖母がはひつて來て、眠むがるのを無理に抱き起してから、人手も借りず甲斐甲斐しく、ちやんと着物を着換へさせたさうです。お榮はまだ夢でも見てゐるやうな、ぼんやりした心もちでゐましたが、祖母はすぐにその手を引いて、うす暗い雪洞に人氣のない廊下を照らしながら、晝でも滅多にはひつた事のない土藏へお榮をつれて行きました。

土藏の奥には昔から、火伏せの稻荷が祀つてあると云ふ、白木の御宮がありました。祖母は帶の間から鍵を出して、その御宮の扉を開けましたが、今雪洞の光に透かして見ると、古びた錦の御戸張の後に、端然と立つてゐる御神體は、外でもない、この麻利耶觀音なのです。お榮はそれを見ると同時に、急に蟀の鳴く聲さへしない眞夜中の土藏が怖くなつて、思はず祖母の膝に縋りついた儘、しくしく泣き出してしまひました。が、祖母は何時もと違つて、お榮の泣くのにも頓着せず、その麻利耶觀音の御宮の前に坐りながら、恭しく額に十字を切つて、何かお榮にわからない御祈禱をあげ始めたさうです。

それが凡そ十分あまりも續いてから、祖母は靜に孫娘を抱き起すと、怖がるのを頻りになだめなだめ、自分の隣に坐らせました。さうして今度はお榮にもわかるやうに、この黑檀の麻利耶觀音へ、こんな願をかけ始めました。

「童貞聖麻利耶樣、私が天にも地にも、杖柱と賴んで居りますのは、當年八歲の孫の茂作と、此處につれて參りました姉のお榮ばかりでございます。お榮もまだ御覽の通り、壻をとる程の年でもございません。もし唯今茂作の身に萬一の事でもございましたら、稻見の家は明日が日にも世

嗣が絶えてしまふのでございます。そのやうな不祥がございませんやうに、どうか茂作の一命を御守りなすつて下さいまし。それも私風情の信心には及ばない事でございましたら、せめては私の息のございます限り、茂作の命を御助け下さいまし。私もとる年でございますし、靈魂を天主に御捧げ申すのも、長い事ではございますまい。しかし、それまでには孫のお榮も、不慮の災難でもございませなんだら、大方年頃になるでございませう。何卒私が目をつぶりますまででよろしうございますから、死の天使の御劍が茂作の體に觸れませんやう、御慈悲を御垂れ下さいまし。」

祖母は切髮の頭を下げて、熱心にかう祈りました。するとその言葉が終つた時、恐る恐る顏を擡げたお榮の眼には、氣のせゐか麻利耶觀音が微笑したやうに見えたと云ふのです。お榮は勿論小さな聲をあげて、又祖母の膝に縋りつきました。が、祖母は反つて滿足さうに、孫娘の背をさすりながら、

「さあ、もうあちらへ行きませう。麻利耶樣は難有い事に、この御婆さんの御祈りを御聞き入れになつて下すつたからね。」

と、何度も繰り返して云つたさうです。

さて明くる日になつて見ると、成程祖母の願がかなつたか、茂作は昨日よりも熱も下つて、今まではまるで夢中だつたのが、次第に正氣さへついて來ました。この容子を見た祖母の喜びは、仲々口には盡せません。何でも稻見の母親は、その時祖母が笑ひながら、涙をこぼしてゐた顏が、未に忘れられないとか云つてゐるさうです。その内に祖母は病氣の孫がすやすや眠り出したのを見て、自分も連夜の看病疲れを暫く休める心算だつたのでせう。病間の隣へ床をとらせて、珍らしく其處へ横になりました。

その時お榮は御弾きをしながら、祖母の枕もとに坐つてゐましたが、隱居は精根も盡きる程、疲れ果ててゐたと見えて、まるで死んだ人のやうに、すぐに寢入つてしまつたとか云ふ事です。處が彼是一時間ばかりすると、茂作の介抱をしてゐた年輩の女中が、そつと次の間の襖を開けて、「御孃樣ちよいと御隱居樣を御起し下さいまし。」と、慌てたやうな聲で云ひました。そこでお榮は子供の事ですから、早速祖母の側へ行つて、「御婆さん、御婆さん。」と二三度搔卷きの袖を引いたさうです。が、どうしたのかふだんは眼慧い祖母が、今日に限つていくら呼んでも返事をする

氣色さへ見えません。その内に女中が不審さうに、病間からこちらへはひつて來ましたが、これは祖母の顏を見ると、氣でも違つたかと思ふ程、いきなり隱居の掻卷きに縋りついて、「御隱居樣、御隱居樣。」と、必死の淚聲を擧げ始めました。けれども祖母は眼のまはりにかすかな紫の色を止めた儘、やはり身動きもせずに眠つてゐます。と間もなくもう一人の女中が、慌しく襖を開けたと思ふとこれも、色を失つた顏を見せて、「御隱居樣、――坊ちやんが――御隱居樣。」と、震へ聲で呼び立てました。勿論この女中の「坊ちやんが――」は、お榮の耳にも明かに、茂作の容態の變つた事を知らせる力があつたのです。が、祖母は依然として、今は枕もとに泣き伏した女中の聲も聞えないやうに、じつと眼をつぶつてゐるのでした。……

茂作もそれから十分ばかりの内に、とうとう息を引き取りました。麻利耶觀音は約束通り、祖母の命のある間は、茂作を殺さずに置いたのです。

田代君はかう話し終ると、又陰鬱な眼を擧げて、ぢつと私の顏を眺めた。

「どうです。あなたにはこの傳說が、ほんたうにあつたとは思はれませんか。」

私はためらつた。

「さあ――しかし――どうでせう。」

田代君は暫く默つてゐた。が、やがて煙の消えたパイプへもう一度火を移すと、

「私はほんたうにあつたかとも思ふのです。唯、それが稻見家の聖母のせゐだつたかどうかは、疑問ですが、――さう云へば、まだあなたはこの麻利耶觀音の臺座の銘をお讀みにならなかつたでせう。御覽なさい。此處に刻んである横文字を。――DESINE FATA DEUM LECTI SPERARE 「汝の祈禱、神神の定め給ふ所を動かすべしと望む勿れ」の意 PRECANDO……」

私はこの運命それ自身のやうな麻利耶觀音へ、思はず無氣味な眼を移した。聖母は黒檀の衣を纏つた儘、やはりその美しい象牙の顏に、或惡意を帶びた嘲笑を、永久に冷然と湛へてゐる。――

（大正九年四月）

或敵打の話

發端

肥後の細川家の家中に、田岡甚太夫と云ふ侍がゐた。これは以前日向の伊藤家の浪人であつたが、當時細川家の番頭に陞つてゐた內藤三左衞門の推薦で、新知百五十石に召し出されたのであつた。

所が寬文七年の春、家中の武藝の仕合があつた時、彼は表藝の槍術で、相手になつた侍を六人まで突き倒した。その仕合には、越中守綱利自身も、老職一同と共に臨んでゐたが、餘り甚太夫の槍が見事なので、更に劍術の仕合をも所望した。甚太夫は竹刀を執つて、又三人の侍を打ち据ゑた。四人目には家中の若侍に、新陰流の劍術を指南してゐる瀨沼兵衞が相手になつた。甚太夫は指南番の面目を思つて、兵衞に勝を讓らうと思つた。が、勝を讓つたと云ふ事が、心あるものには分るやうに、手際よく負けたいと云ふ氣もないではなかつた。兵衞は甚太夫と立合ひながら、

さう云ふ心もちを直覺すると、急に相手が憎くなつた。そこで甚太夫がわざと受太刀になつた時、奮然と一本突きを入れた。甚太夫は強く喉を突かれて、仰向けに其處へ倒れてしまつた。その容子が如何にも見苦しかつた。綱利は彼の槍術を賞しながら、この勝負があつた後は、甚だ不興氣な顏をした儘、一言も彼を犒はなかつた。

甚太夫の負けざまは、間もなく蔭口の的になつた。「甚太夫は戰場へ出て、槍の柄を切り折られたら何とする。可哀や劍術は竹刀さへ、一人前には使へないさうな。」――こんな噂が誰云ふとなく、忽ち家中に廣まつたのであつた。それには勿論同輩の嫉妬や羨望も交つてゐた。が、彼を推擧した内藤三左衞門の身になつて見ると、綱利の手前へ對しても默つてゐる譯には行かなかつた。そこで彼は甚太夫を呼んで、「あゝ云ふ見苦しい負を取られては、拙者の眼がね違ひばかりではすまされぬ。改めて三本勝負を致されるか、それとも拙者が殿への申譯けに切腹しようか。」とまで激語した。家中の噂を聞き流してゐたのでは、甚太夫も武士が立たなかつた。彼はすぐに三左衞門の意を帶して、改めて指南番瀨沼兵衞と三本勝負をしたいと云ふ願書を出した。

日ならず二人は綱利の前で、晴れの仕合をする事になつた。始は甚太夫が兵衞の小手を打つた。

二度目は兵衛が甚太夫の面を打つた。が、三度目には又甚太夫が、したたか兵衛の小手を打つた。綱利は甚太夫を賞する爲に、五十石の加增を命じた。兵衛は蚯蚓腫になつた腕を撫でながら、悄悄綱利の前を退いた。

それから三四日經つた或雨の夜、加納平太郎と云ふ同家中の侍が、西岸寺の塀外で暗打ちに遇つた。平太郎は知行二百石の側役で、算筆に達した老人であつたが、平生の行狀から推して見ても、恨を受けるやうな人物では決してなかつた。が、翌日瀬沼兵衛の逐天した事が知れると共に、始めてその敵が明かになつた。甚太夫と平太郎とは、年輩こそ可成違つてゐたが、背恰好はよく似寄つてゐた。その上定紋は二人とも、同じ丸に抱き明姜であつた。兵衛はまづ供の仲間が、雨の夜路を照らしてゐる提灯の紋に欺かれ、それから合羽に傘をかざした平太郎の姿に欺かれて、粗忽にもこの老人を甚太夫と誤つて殺したのであつた。

平太郎には當時十七歳の、求馬と云ふ嫡子があつた。求馬は早速公の許を得て、江越喜三郎と云ふ若黨と共に、當時の武士の習慣通り、敵打の旅に上る事になつた。甚太夫は平太郎の死に責任の感を免れなかつたのか、彼も亦後見の爲に旅立ちたい旨を申し出でた。と同時に求馬と念

友の約があつた、津崎左近と云ふ侍も、同じく助太刀の儀を願ひ出した。綱利は奇特の事とあつて、甚太夫の願は許したが、左近の云ひ分は取り上げなかつた。

求馬は甚太夫喜三郎の二人と共に、父平太郎の初七日をすますと、もう暖國の櫻は散り過ぎた熊本の城下を後にした。

一

津崎左近は助太刀の請を却けられると、二三日家に閉ぢこもつてゐた。兼ねて求馬と取換した起請文の面を反故にするのが、如何にも彼にはつらく思はれた。のみならず朋輩たちに、後指をさされはしないかと云ふ、懸念も滿更ないではなかつた。が、それにも增して堪へ難かつたのは、念友の求馬を唯一人甚太夫に託すと云ふ事であつた。そこで彼は敵打の一行が熊本の城下を離れた夜、とうとう一封の書を家に遺して、彼等の後を慕ふべく、双親にも告げず家出をした。

彼は國境を離れると、すぐに一行に追ひついた。一行はその時、或山驛の茶店に足を休めてゐた。左近はまづ甚太夫の前へ手をつきながら、幾重にも同道を懇願した。甚太夫は始は苦々しげ

に、「身どもの武道では心もとないと御思ひか。」と、容易に承け引く色を示さなかつた。が、しまひには彼も我を折つて、求馬の顏を尻眼にかけながら、喜三郎の取りなしを機會にして、左近の同道を承諾した。まだ前髪の殘つてゐる、女のやうな非力の求馬は、左近をも一行に加へたい氣色を隱す事が出來なかつたのであつた。左近は喜びの餘り眼に淚を浮べて、喜三郎にさへ何度となく禮の言葉を繰返してゐた。

一行四人は兵衞の妹壻が淺野家の家中にある事を知つてゐたから、まづ文字が關の瀨戶を渡つて、中國街道をはるばると廣島の城下まで上つて行つた。が、其處に滯在して、敵の在處を探る内に、家中の侍の家へ出入する女の針立の世間話から、兵衞は一度廣島へ來て後、妹壻の知るべがある豫州松山へ密々に旅立つたと云ふ事がわかつた。そこで敵打の一行はすぐに伊豫船の便を求めて、寛文七年の夏の最中、恙なく松山の城下へはひつた。

松山に渡つた一行は、毎日編笠を深くして、敵の行方を探して歩いた。しかし兵衞も用心が嚴しいと見えて、容易に在處を露さなかつた。一度左近が兵衞らしい梵論子の姿に目をつけて、いろいろ探りを入れて見たが、結局何の由縁もない他人だと云ふ事が明かになつた。その内にもう

秋風が立つて、城下の屋敷町の武者窓の外には、溝を塞いでゐた藻の下から、追ひ追ひ水の色が擴がつて來た。それにつれて一行の心には、だんだん焦燥の念が動き出した。殊に左近は出合ひをあせつて、殆晝夜の嫌ひなく、松山の内外を窺つて歩いた。敵打の初太刀は自分が打ちたい。萬一甚太夫に遲れては、主親をも捨てて一行に加はつた、武士たる自分の面目が立たぬ。——彼にはかう心の内に、堅く思ひつめてゐたのであつた。

松山へ來てから二月餘り後、左近はその甲斐があつて、或日城下に近い海岸を通りかかると、忍駕籠につき添うた二人の若黨が、漁師たちを急がせて、舟を仕立ててゐるのに遇つた。やがて舟の仕度が出來たと見えて、駕籠の中の侍が外へ出た。侍はすぐに編笠をかぶつたが、ちらりと見た顏貌は瀬沼兵衞に紛れなかつた。左近は一瞬間ためらつた。此處に求馬が居合せないのは、返へす返へすも殘念である。が、今兵衞を打たなければ、又何處かへ立ち退いてしまふ。しかも海路を立ち退くとあれば、行く方をつき止める事も出來ないのに違ひない。これは自分一人でも、名乘をかけて打たねばならぬ。——左近はかう咄嗟に決心すると、身仕度をする間も惜しいやうに、編笠をかなぐり捨てるが早いか、「瀬沼兵衞、加納求馬が兄分、津崎左近が助太刀覺えたか。」

と呼びかけながら、刀を抜き放つて飛びかかつた。が、相手は編笠をかぶつた儘、騒ぐ氣色もなく左近を見て、「うろたへ者め。人違ひをするな。」と叱りつけた。左近は思はず躊躇した。その途端に侍の手が刀の柄前にかかつたと思ふと、重ね厚の大刀が大袈裟に左近を斬り倒した。左近は尻居に倒れながら、目深くかぶつた編笠の下に、殆めて瀬沼兵衛の顔をはつきり見る事が出來たのであつた。

二

左近を打たせた三人の侍は、それから彼是二年間、敵兵衛の行く方を探つて、五畿内から東海道を殆隅なく遍歴した。が、兵衛の消息は、杳として再聞えなかつた。

寛文九年の秋、一行は落ちかかる雁と共に、殆めて江戸の土を踏んだ。江戸は諸國の老若貴賤が集まつてゐる所だけに、敵の手がかりを尋ねるのにも、何かと便宜が多さうであつた。そこで彼等はまづ神田の裏町に假の宿を定めてから甚太夫は怪しい謡を唱つて合力を請ふ浪人になり、求馬は小間物の箱を背負つて町家を廻る商人に化け、喜三郎は旗本能勢惣右衛門へ年期切りの草

履取りにはひつた。

求馬は甚太夫とは別々に、毎日府内をさまよつて歩いた。物慣れた甚太夫は破れ扇に鳥目を貰ひながら、根氣よく盛り場を窺ひまはつて、更に倦む氣色も示さなかつた。が、年若な求馬の心は、編笠に憔れた顔を隱して、秋晴れの日本橋を渡る時でも、結局彼等の敵打は徒勞に終つてしまひさうな寂しさに沈み勝ちであつた。

その内に筑波颪しがだんだん寒さを加へ出すと、求馬は風邪が元になつて、時々熱が昂ぶるやうになつた。が、彼は惡寒を冒しても、やはり日毎に荷を負うて、商に出る事を止めなかつた。甚太夫は喜三郎の顔を見ると、必求馬のけなげさを語つて、この主思ひの若黨の眼に涙を催させるのが常であつた。しかし彼等は二人とも、病さへ靜に養ふに堪へない求馬の寂しさには氣がつかなかつた。

やがて寛文十年の春が來た。求馬はその頃から人知れず、吉原の廓に通ひ出した。相方は和泉屋の楓と云ふ、所謂散茶女郎の一人であつた。が、彼女は勤めを離れて、心から求馬の爲に盡した。彼も楓のもとへ通つてゐる内だけ、僅に落莫とした心もちから、自由になる事が出來たので

あつた。
澁谷の金王櫻の評判が、洗湯の二階に賑はふ頃、彼は楓の眞心に感じて、とうとう敵打の大事を打ち明けた。すると思ひがけなく彼女の口から、兵衞らしい侍が松江藩の侍たちと一しよに、一月ばかり以前和泉屋へ遊びに來たと云ふ事がわかつた。幸、その侍の相方の籤を引いた楓は、面體から持ち物まで、可成はつきりした記憶を持つてゐた。のみならず彼が二三日中に、江戸を立つて雲州松江へ赴かうとしてゐる事なぞも、ちらりと小耳に挾んでゐた。求馬は勿論喜んだ。が、再敵打の旅に上る爲に、楓と當分――或は永久に別れなければならない事を思ふと、自然求馬の心は勇まなかつた。彼はその日彼女を相手に、何時もに似合はず爛醉した。さうして宿へ歸つて來ると、すぐに夥しく血を吐いた。

求馬は翌日から枕に就いた。が、何故か敵の行方が略わかつた事は、一言も甚太夫には話さなかつた。甚太夫は袖乞ひに出る合ひ間を見ては、求馬の看病にも心を盡した。所が或日葺屋町の芝居小屋などを徘徊して、暮方宿へ歸つて見ると、求馬は遺書を啣へた儘、もう火のはひつた行燈の前に、刀を腹へ突き立てて、無殘な最後を遂げてゐた。甚太夫はさすがに仰天しながら、兎

も角もその遺書を開いて見た。遺書には敵の消息と自刃の仔細とが認めてあつた。「私儀柔弱多病につき、敵打の本懐も遂げ難きやに存ぜられ候間……」――これがその仔細の全部であつた。しかし血に染んだ遺書の中には、もう一通の書面が巻きこんであつた。甚太夫はこの書面へ眼を通すと、徐に行燈をひき寄せて、燈心の火をそれへ移した。火はめらめらと紙を焼いて、甚太夫の苦い顔を照らした。

書面は求馬が今年の春、楓と二世の約束をした起請文の一枚であつた。

三

寛文十年の夏、甚太夫は喜三郎と共に、雲州松江の城下へはひつた。始めて大橋の上に立つて、宍道湖の天に群つてゐる雲の峯を眺めた時、二人の心には云ひ合せたやうに、悲壮な感激が催された。考へて見れば一行は、故郷の熊本を後にしてから、丁度これで旅の空に四度目の夏を迎へるのであつた。

彼等はまづ京橋界隈の旅籠に宿を定めると、翌日からすぐに例の如く、敵の所在を窺ひ始めた。

するとそろそろ秋が立つ頃になつて、やはり松平家の侍に不傳流の指南をしてゐる、恩地小左衛門と云ふ侍の屋敷に、兵衛らしい侍のかくまはれてゐる事が明かになつた。二人は今度こそ本望が達せられると思つた。いや、達せずには置かないと思つた。殊に甚太夫はそれがわかつた日から、時々心頭に抑へ難い怒と喜を感ぜずにはゐられなかつた。兵衛は既に平太郎一人の敵ではなく、左近の敵でもあれば、求馬の敵でもあつた。が、それよりも先にこの三年間、彼に幾多の艱難を嘗めさせた彼自身の怨敵であつた。――甚太夫はさう思ふと、日頃沈着な彼にも似合はず、すぐさま恩地の屋敷へ踏みこんで、勝負を決したいやうな心もちさへした。

しかし恩地小左衛門は、山陰に名だたる劍客であつた。それだけに又彼の手足となる門弟の數も多かつた。甚太夫はそこで惴りながらも、兵衛が一人外出する機會を待たなければならなかつた。

機會は容易に來なかつた。兵衛は殆ど晝夜とも、屋敷にとぢこもつてゐるらしかつた。その内に彼等の旅籠の庭には、もう百日紅の花が散つて、踏石に落ちる日の光も次第に弱くなり始めた。二人は苦しい焦燥の中に、三年以前返り打に遇つた左近の祥月命日を迎へた。喜三郎はその夜、

近くにある祥光院の門を敲いて、和尚に佛事を修して貰つたが、萬一を慮つて、左近の俗名は洩らさずにゐた。すると寺の本堂に、意外にも左近と平太郎との俗名を記した位牌があつた。喜三郎は佛事が終つてから、何氣ない風を裝つて、所化にその位牌の由緣を尋ねた。所が更に意外な事には、祥光院の檀家たる恩地小左衛門のかかり人が、月に二度の命日には必回向に來ると云ふ答があつた。「今日も早くに見えました。」――所化は何も氣がつかないやうに、こんな事までもつけ加へた。喜三郎は寺の門を出ながら、加納親子や左近の靈が彼等に冥助を與へてゐるやうな、氣強さを感ぜずにはゐられなかつた。

甚太夫は喜三郎の話を聞きながら、天運の到來を祝すと共に、今まで兵衛の寺詣でに氣づかなかつた事を口惜しく思つた。「もう八日經てば、大檀那樣の御命日でございます。御命日に敵が打てますのも、何かの因緣でございませう。」――喜三郎はかう云つて、この喜ばしい話を終つた。そんな心もちは甚太夫にもあつた。二人はそれから行燈を圍んで、夜もすがら左近や加納親子の追憶をさまざま語り合つた。が、彼等の菩提を弔つてゐる兵衛の心を酌む事なぞは、二人とも全然忘却してゐた。

平太郎の命日は、一日毎に近づいて來た。二人は妬刃を合せながら、心靜にその日を待つた。今はもう敵打は、成否の問題ではなくなつてゐた。すべての懸案は唯その日、唯その時刻だけであつた。甚太夫は本望を遂げた後の、逃き口まで思ひ定めてゐた。

遂にその日の朝が來た。二人はまだ天が明けない内に、行燈の光で身仕度をした。甚太夫は菖蒲革の裁付に黑紬の袷を重ねて、同じ紬の紋付の羽織の下に細い革の襷をかけた。差料は長谷部則長の刀に來國俊の脇差しであつた。喜三郎も羽織は着なかつたが、肌には着込みを纏つてゐた。二人は冷酒の盃を換はしてから、今日までの勘定をすませた後、勢よく旅籠の門を出た。

外はまだ人通りがなかつた。二人はそれでも編笠に顏を包んで、兼ねて敵打の場所と定めた祥光院の門前へ向つた。所が宿を離れて一二町行くと、甚太夫は急に足を止めて、「待てよ。今朝の勘定は四文釣錢が足らなかつた。おれはこれから引き返して、釣錢の殘りを取つて來るわ。」と云つた。喜三郎はもどかしさうに、「高が四文のはした錢ではございませんか。御戻りになるがものはございますまい。」と云つて、一刻も早く鼻の先の祥光院まで行つてゐようとした。しかし甚太夫は聞かなかつた。「鳥目は元より惜しくはない。だが甚太夫程の侍も、敵打の前にはうろたへて、

旅籠の勘定を誤つたとあつては、末代までの恥辱になるわ。その方は一足先へ參れ。身どもは宿まで取つて返さう。」――彼はかう云ひ放つて、一人旅籠へ引き返した。喜三郎は甚太夫の覺悟に感服しながら、云はれた通り自分だけ敵打の場所へ急いだ。

が、程なく甚太夫も、祥光院の門前に待つてゐた喜三郎と一しよになつた。その日は薄雲が空に迷つて、朧げな日ざしはありながら、時々雨の降る天氣であつた。二人は兩方に立ち別れて、棗の葉が黄ばんでゐる寺の塀外を徘徊しながら、勇んで兵衛の參詣を待つた。

しかし彼是午近くなつても、未に兵衛は見えなかつた。喜三郎はいら立つて、さりげなく彼の參詣の有無を寺の門番に尋ねて見た。が、門番の答にも、やはり今日はどうしたのだか、まだ參られぬと云ふ事であつた。

二人は惴る心を靜めて、じつと寺の外に立つてゐた。その間に時は用捨なく移つて、やがて夕暮の色と共に、棗の實を食み落す鴉の聲が、寂しく空に響くやうになつた。喜三郎は氣を揉んで、甚太夫の側へ寄ると、「一そ恩地の屋敷の外へ參つて居りませうか。」と囁いた。が、甚太夫は頭を振つて、許す氣色も見せなかつた。

やがて寺の門の空には、這ひ塞つた雲の間に、疎な星影がちらつき出した。けれども甚太夫は塀に身を寄せて、執念く兵衛を待ち續けた。實際敵を待つ兵衛の身としては、夜更けに人知れず佛參をすます事がないとも限らなかつた。

とうとう初夜の鐘が鳴つた。それから二更の鐘が鳴つた。二人は露に濡れながら、まだ寺のほとりを去らずにゐた。

が、兵衛は何時まで經つても、遂に姿を現さなかつた。……

大團圓

甚太夫主從は宿を變へて、更に兵衛をつけ狙つた。が、その後四五日すると、甚太夫は突然眞夜中から、烈しい吐瀉を催し出した。喜三郎は心配の餘り、すぐにも醫者を迎へたかつたが、病人は大事の洩れるのを惧れて、どうしてもそれを許さなかつた。

甚太夫は枕に沈んだ儘、買ひ藥を命に日を送つた。しかし吐瀉は止まなかつた。喜三郎はとうとう堪へ兼ねて、一應醫者の診脈を請ふべく、漸く病人を納得させた。そこで取りあへず旅籠の

主人に、かかりつけの醫者を迎へて貰つた。主人はすぐに人を走らせて、近くに技を賣つてゐる、松木蘭袋と云ふ醫者を呼びにやつた。

蘭袋は向井靈蘭の門に學んだ、神方の名の高い人物であつた。が、一方又豪傑肌の所もあつて、日夜杯に親みながら更に黄白を意としなかつた。「天雲の上をかけるも谷水をわたるも鶴のつとめなりけり」――かう自ら歌つた程、彼の藥を請ふものは、上は一藩の老職から、下は露命も繋ぎ難い乞食非人にまで及んでゐた。

蘭袋は甚太夫の脈をとつて見るまでもなく、痢病と云ふ見立てを下した。しかしこの名醫の藥を飲むやうになつてもやはり甚太夫の病は癒らなかつた。喜三郎は看病の傍、ひたすら諸々の佛神に甚太夫の快方を祈願した。病人も夜長の枕元に藥を煮る煙を嗅ぎながら、多年の本望を遂げるまでは、どうかして生きてゐたいと念じてゐた。

秋は益〱深くなつた。喜三郎は蘭袋の家へ藥を取りに行く途中、群を成した水鳥が、屢〱空を渡るのを見た。すると或日彼は蘭袋の家の玄關で、やはり藥を貰ひに來てゐる一人の仲間と落ち合つた。それが恩地小左衞門の屋敷のものだと云ふ事は、蘭袋の内弟子と話してゐる言葉にも

自ら明かであつた。彼はその仲間が歸つてから、顏馴染の內弟子に向つて、「恩地殿のやうな武藝者も、病には勝てぬと見えますな。」と云つた。「いえ、病人は恩地樣ではありません。あそこに御出でになる御客人です。」――人の好ささうな內弟子は、無頓着にかう返事をした。

それ以來喜三郎は藥を貰ひに行く度に、さりげなく兵衞の容子を探つた。所がだんだん聞き出して見ると、兵衞は丁度平太郎の命日頃から、甚太夫と同じ痢病の爲に、苦しんでゐると云ふ事がわかつた。して見れば兵衞が祥光院へ、あの日に限つて詣でなかつたのも、その病のせゐに違ひなかつた。甚太夫はこの話を聞くと、一層病苦に堪へられなくなつた。もし兵衞が病死したら、勿論いくら打ちたくとも、敵の打てる筈はなかつた。と云つて兵衞が生きたにせよ、彼自身が命を墜したら、やはり永年の艱難は水泡に歸すのも同然であつた。彼は遂に枕を嚙みながら、彼自身の快癒を祈ると共に、併せて敵瀨沼兵衞の快癒も祈らざるを得なかつた。

が、運命は飽くまでも、田岡甚太夫に刻薄であつた。彼の病は重りに重つて、蘭袋の藥を貰つてから、まだ十日と經たない內に、今日か明日かと云ふ容態になつた。彼はさう云ふ苦痛の中にも、執念く敵打の望を忘れなかつた。喜三郎は彼の呻吟の中に、屢八幡大菩薩と云ふ言葉がか

すかに洩れるのを聞いた。殊に或夜は喜三郎が、例の如く藥を勸めると、甚太夫はじつと彼を見て、「喜三郎。」と弱い聲を出した。それから又暫くして、「おれは命が惜しいわ。」と云つた。喜三郎は疊へ手をついた儘、顏を擡げる事さへ出來なかつた。

その翌日、甚太夫は急に思ひ立つて、喜三郎に蘭袋を迎へにやつた。蘭袋はその日も酒氣を帶びて、早速彼の病床を見舞つた。「先生、永々の御介抱、甚太夫辱く存じ申す。」——彼は蘭袋の顏を見ると、床の上に起直つて、苦しさうにかう云つた。「が、身ども息のある内に、先生を御見かけ申し、何分願ひたい一儀がござる。御聞き屆け下されうか。」蘭袋は快く頷いた。すると甚太夫は途切れ途切れに、彼が瀨沼兵衞をつけ狙ふ敵打の仔細を話し出した。彼の聲はかすかであつたが、言葉は長物語の間にも、更に亂れる容子がなかつた。蘭袋は眉をひそめながら、熱心に耳を澄ませてゐた。が、やがて話が終ると、甚太夫はもう喘ぎながら、「身ども今生の思ひ出には、兵衞の容態が承りたうござる。兵衞はまだ存命でござるか。」と云つた。喜三郎は既に泣いてゐた。蘭袋もこの言葉を聞いた時には、涙が抑へられないやうであつた。しかし彼は膝を進ませると、病人の耳へ口をつけるやうにして、「御安心めされい。兵衞殿の臨終は、今朝寅の上刻に、

愚老確に見届け申した。」と云つた。甚太夫の顔には微笑が浮んだ。それと同時に窶れた頬へ、冷たく涙の痕が見えた。「兵衛――兵衛は冥加な奴でござる。」――甚太夫は口惜しさうに呟いた儘、蘭袋に禮を云ふつもりか、床の上へ亂れた頭を垂れた。さうして遂に空しくなつた。……

寛文十年陰暦十月の末、喜三郎は獨り蘭袋に辭して、故郷熊本へ歸る旅程に上つた。彼の振分けの行李の中には、求馬左近甚太夫の三人の遺髮がはひつてゐた。

後談

寛文十一年の正月、雲州松江祥光院の墓所には、四基の石塔が建てられた。施主は緊く祕したと見えて、誰も知つてゐるものはなかつた。が、その石塔が建つた時、二人の僧形が紅梅の枝を提げて、朝早く祥光院の門をくぐつた。

その一人は城下に名高い、松木蘭袋に紛れなかつた。もう一人の僧形は、見る影もなく病み耄けてゐたが、それでも凛凛しい物ごしに、何處か武士らしい容子があつた。二人は墓前に紅梅の枝を手向けた。それから新しい四基の石塔に順々に水を注いで行つた。……

後年黄檗慧林の會下に、當時の病み耄けた僧形とよく似寄つた老衲子がゐた。これも順鶴と云ふ僧名の外は、何も素性の知れない人物であつた。

（大正九年四月）

女

雌蜘蛛は眞夏の日の光を浴びた儘、紅い庚申薔薇の花の底に、ぢつと何か考へてゐた。

すると空に翅音がして、忽ち一匹の蜜蜂が、なぐれるやうに薔薇の花へ下りた。蜘蛛は咄嗟に眼を擧げた。ひつそりした眞晝の空氣の中には、まだ蜂の翅音の名殘りが、かすかな波動を殘してゐた。

雌蜘蛛は何時か音もなく、薔薇の花の底から動き出した。蜂はその時もう花粉にまみれながら、蕊の下にひそんでゐる蜜へ嘴を落してゐた。

殘酷な沈默の數秒が過ぎた。

紅い庚申薔薇の花びらは、やがて蜜に醉つた蜂の後へ、徐に雌蜘蛛の姿を吐いた。と思ふと蜘蛛は猛然と、蜂の首もとへ跳りかかつた。蜂は必死に翅を鳴らしながら、無二無三に敵を刺さうとした。花粉はその翅に煽られて、紛々と日の光の中に舞ひ上つた。が、蜘蛛はどうしても、嚙

みついた口を離さなかつた。

爭鬪は短かつた。

蜂は間もなく翅が利かなくなつた。それから脚には痲痺が起つた。最後に長い嘴が痙攣的に二三度空を突いた。それが悲劇の終局であつた。人間の死と變りない、刻薄な悲劇の終局であつた。――一瞬の後、蜂は紅い庚申薔薇の底に、嘴を伸ばした儘横はつてゐた。翅も脚も悉、香の高い花粉にまぶされながら、………

雌蜘蛛はぢつと身じろぎもせず、靜に蜂の血を啜り始めた。

恥を知らない太陽の光は、再び薔薇に返つて來た眞晝の寂寞を切り開いて、この殺戮と掠奪とに勝ち誇つてゐる蜘蛛の姿を照らした。灰色の繻子に酷似した腹、黑い南京玉を想はせる眼、それから癩を病んだやうな、醜い節々の硬まつた脚、――蜘蛛は殆「惡」それ自身のやうに、何時までも死んだ蜂の上に底氣味惡くのしかかつてゐた。

かう云ふ殘虐を極めた悲劇は、何度となくその後繰返された。が、紅い庚申薔薇の花は息苦しい光と熱との中に、毎日美しく咲き狂つてゐた。――

その内に雌蜘蛛は或眞晝、ふと何か思ひついたやうに、薔薇の葉と花との隙間をくぐつて、一つの枝の先へ這ひ上つた。先には土いきれに凋んだ莟が、花びらを暑熱に捩られながら、かすかに甘い匂を放つてゐた。雌蜘蛛は其處まで上りつめると、今度はその莟と枝との間に休みない往來を續けだした。と同時にまつ白な、光澤のある無數の絲が、半ばその素枯れた莟をからんで、だんだん枝の先へまつはり出した。

暫くの後、其處には絹を張つたやうな圓錐形の嚢が一つ、眩い程もう白々と、眞夏の日の光を照り返してゐた。

蜘蛛は巣が出來上ると、その華奢な嚢の底に、無數の卵を產み落した。それから又嚢の口へ、厚い絲の敷物を編んで、自分はその上に座を占めながら、更にもう一天井、紗のやうな幕を張り渡した。幕はまるで圓頂閣のやうな、唯一つの窓を殘して、この獰猛な灰色の蜘蛛を眞晝の靑空から遮斷してしまつた。が、蜘蛛は——產後の蜘蛛は、まつ白な廣間のまん中に、瘦せ衰へた體を橫たへた儘、薔薇の花も太陽も蜂の翅音も忘れたやうに、たつた一匹兀兀と、物思ひに沈んでゐるばかりであつた。

何週間かは經過した。

その間に蜘蛛の嚢の中では、無數の卵に眠つてゐた、新らしい生命が眼を覺ました。それを誰より先に氣づいたのは、あの白い廣間のまん中に、食さへ斷つて横はつてゐる、今は老い果てた母蜘蛛であつた。蜘蛛は絲の敷物の下に、何時の間にか蠢き出した、新らしい生命を感ずると、徐に弱つた脚を運んで、母と子とを隔ててゐる嚢の天井を嚙み切つた。無數の仔蜘蛛は續々と、其處から廣間へ溢れて來た。と云ふよりは寧ろその敷物自身が、百十の微粒分子になつて、動き出したとも云ふべき位であつた。

仔蜘蛛はすぐに圓頂閣の窓をくぐつて、日の光と風との通つてゐる、庚申薔薇の枝へなだれ出した。彼等の或一團は炎暑を重く支へてゐる薔薇の葉の上にひしめき合つた。又其一團は珍しさうに、幾重にも蜜の匂を抱いた薔薇の花の中へまぐれこんだ。さうして更に又或一團は、縱横に青空を裂いてゐる薔薇の枝と枝との間へ、早くも眼には見えない程、細い絲を張り始めた。もし彼等に聲があつたら、この白日の庚申薔薇は、梢にかけたヴイオロンが自ら風に歌ふやうに、鳴りどよんだのに違ひなかつた。

しかしその圓頂閣の窓の前には、影の如く瘦せた母蜘蛛が、寂しさうに獨り蹲つてゐた。のみならずそれは何時まで經つても、脚一つ動かす氣色さへなかつた。まつ白な廣間の寂寞と凋んだ薔薇の莟の匂と、――無數の仔蜘蛛を生んだ雌蜘蛛はさう云ふ産所と墓とを兼ねた、紗のやうな幕の天井の下に、天職を果した母親の限りない歡喜を感じながら、何時か死に就いてゐたのであつた。――あの蜂を嚙み殺した、殆「惡」それ自身のやうな、眞夏の自然に生きてゐる女は。

（大正九年四月）

素戔嗚尊

一

高天原の國も春になつた。

今は四方の山々を見渡しても、雪の殘つてゐる峯は一つもなかつた。牛馬の遊んでゐる草原は一面に仄かな緑をなすつて、その裾を流れて行く天の安河の水の光も、何時か何となく人懷しい暖みを湛へてゐるやうであつた。ましてその河下にある部落には、もう燕も歸つて來れば、女たちが瓶を頭に載せて、水を汲みに行く噴き井の椿も、とうに點々と白い花を濡れ石の上に落してゐた。――

さう云ふ長閑な春の日の午後、天の安河の河原には大勢の若者が集まつて、餘念もなく力競べに耽つてゐた。

始、彼等は手ん手に弓矢を執つて、頭上の大空へ矢を飛ばせた。彼等の弓の林の中からは、勇ましい弦の鳴る音が風のやうに起つたり止んだりした。さうしてその音の起る度に、矢は無數の蝗

の如く、日の光に羽根を光らせながら、折から空に懸つてゐる霞の中へ飛んで行つた。が、その中でも白い隼の羽根の矢ばかりは、必外の矢よりも高く――殆影も見えなくなる程高く揚つた。それは黒と白と市松模様の倭衣を着た、容貌の醜い一人の若者が、太い白檀木の弓を握つて、時々切つて放す利り矢であつた。

その白羽の矢が舞ひ上る度に、外の若者たちは空を仰いで、口々に彼の技倆を褒めそやした。が、その矢が何時も彼等のより高く揚る事を知ると、彼等は次第に彼の征矢に冷淡な態度を裝ひ出した。のみならず彼等の中の何者かゞ、彼には到底及ばなくとも、可成高い所まで矢を飛ばすと、反つてその方へ贊辭を與へたりした。

容貌の醜い若者は、それでも快活に矢を飛ばせ續けた。すると外の若者たちは、誰からともなく弓を引かなくなつた。だから今まで紛々と亂れ飛んでゐた矢の雨も、見る見る數が少くなつて來た。さうしてとうとうしまひには、彼の射る白羽の矢ばかりが、まるで晝見える流星のやうに、たつた一筋空へ上るやうになつた。

その内に彼も弓を止めて、得意らしい色を浮べながら、仲間の若者たちの方を振返つた。が、

彼の近所にはその滿足を共にすべく、一人の若者も見當らなかつた。彼等はもうその時には、みんな河原の水際により集まつて、美しい天の安河の流れを飛び越えるのに熱中してゐた。

彼等は互に競ひ合つて、同じ河の流れにしても、幅の廣い所を飛び越えようとした。時によると不運な若者は、燒太刀のやうに日を照り返した河の中へ轉げ落ちて、眩ゆい水煙を揚げる事もあつた。が、大抵は向うの汀へ、丁度谷を渡る鹿のやうに、ひらりひらりと飛び移つて行つた。さうして今まで立つてゐたこちらの汀を振返つては聲々に笑つたり話したりしてゐた。

容貌の醜い若者はこの新しい遊戲を見ると、すぐに弓矢を砂の上に捨てゝ、身輕く河の流れを躍り越えた。其處は彼等が飛んだ中でも、最も幅の廣い所であつた。けれども外の若者たちは更に彼には頓着しなかつた。彼等には彼の後で飛んだ――彼よりも幅の狹い所を彼よりも樂に飛び越えた、背の高い美貌の若者の方が、遙に人氣があるらしかつた。その若者は彼と同じ市松の倭衣を着てゐたが、頸に懸けた勾玉や腕に嵌めた釧などは、誰よりも精巧な物であつた。彼は腕を組んだ儘、ちよいと羨しさうな眼を擧げて、その若者を眺めたが、やがて彼等の群を離れて、たつた一人陽炎の中を河下の方へ歩き出した。

二

河下の方へ歩き出した彼は、やがて誰一人飛んだ事のない、三丈程も幅のある流れの汀へ足を止めた。其處は一旦湍つた水が今までの勢を失ひながら、兩岸の石と砂との間に青々と澱んでゐる所であつた。彼は暫くその水面を目測してゐるらしかつたが、急に二三歩汀を去ると、まるで石投げを離れた石のやうに、勢よく其處を飛び越えようとした。が、今度はとうとう飛び損じて、凄じい水煙を立てながら、まつさかさまに深みへ落ちこんでしまつた。

彼の河へ落ちた所は、外の若者たちがゐる所と大して離れてゐなかつた。だから彼の失敗はすぐに彼等の目にもはいつた。彼等の或者はこれを見ると、「ざまを見ろ」と云ふやうに腹を抱へて笑ひ出した。と同時に又或者は、やはり囃し立てながらも、以前よりは遙に同情のある聲援の言葉を與へたりした。さう云ふ好意のある連中の中には、あの精巧な勾玉や釧の美しさを誇つてゐる若者なども交つてゐた。彼等は彼の失敗の爲に、世間一般の弱者の如く、始めて彼に幾分の親しみを持つ事が出來たのであつた。が、彼等も一瞬の後には、又以前の沈默に——敵意を藏した

沈默に還らなければならない事が出來た。

と云ふのは河に落ちた彼が、濡れ鼠のやうになつた儘、向うの汀へ這ひ上つたと思ふと、執念深くもう一度その幅の廣い流れの上を飛び越えようとしたからであつた。いや、飛び越えようとしたばかりではない。彼は足を縮めながら、明礬色の水の上へ踊り上つたと思ふ内に、難なく其處を飛び越えた。さうしてこちらの水際へ、雲のやうな砂煙を舞ひ上げながら、どさりと大きな尻餅をついた。それは彼等の笑を買ふべく、餘りに壯嚴すぎる滑稽であつた。勿論彼等の間からは、喝采も歡呼も起らなかつた。

　彼は手足の砂を拂ふと、やつとずぶ濡れになつた體を起して、仲間の若者たちの方を眺めやつた。が、彼等はもうその時には、流れを飛び越えるのにも飽きたと見えて、又何か新しい力競べを試むべく、面白さうに笑ひ興じながら、河上の方へ急ぐ所であつた。それでもまだ容貌の醜い若者は、快活な心もちを失はなかつた。と云ふよりも失ふ筈がなかつた。何故と云へば彼等の不快は未に彼には通じなかつた。彼はかう云ふ點になると、實際何處までも御目出度く出來上つた人間の一人であつた。しかし又その御目出度さがあらゆる強者に特有な烙印である事も事實であ

つた。だから仲間の若者たちが河上の方へ行くのを見ると、彼はまだ滴を垂らした儘、麗らかな春の日に目かげをして、のそのそ砂の上を歩き出した。

その間に外の若者たちは、河原に散在する巖石を持上げ合ふ遊戯を始めてゐた。岩は牛程の大きさのも、羊程の小さゝのも、いろいろ陽炎の中に轉がつてゐた。彼等はみんな腕まくりをして、なる可く大きい岩を抱き起さうとした。が、手ごろな巖石の外は、中でも膂力の逞しい五六人の若者たちでないと、容易に砂から離れなかつた。そこでこの力競べは、自然と彼等五六人の獨占する遊戯に變つてしまつた。彼等は何れも大きな岩を輕々と擡げたり投げたりした。殊に赤と白と三角模樣の倭衣の袖をまくり上げた、顏中鬚に埋まつてゐる、背の低い猪首の若者は、誰も持ち上げない巖石を自由に動かして見せた。周圍に佇んだ若者たちは、彼の非凡な力業に賞讃の聲を惜まなかつた。彼も亦その賞讃の聲に報ゆべく、次第に大きな巖石に力を試みようとするらしかつた。

あの容貌の醜い若者は、丁度この五六人の力競の眞最中へ來合せたのであつた。

三

あの容貌の醜い若者は、兩腕を胸に組んだ儘、暫くは力自慢の五六人が勝負を爭ふのを眺めてゐた。が、やがて技癢に堪へ兼ねたのか、自分も水だらけな袖をまくると、幅の廣い肩を聳かせて、まるで洞穴を出る熊のやうに、のそのそとその連中の中へはいつて行つた。さうしてまだ誰も持ち上げない巖石の一つを抱くが早いか、何の苦もなくその岩を肩の上までさし上げて見せた。

しかし大勢の若者たちは、依然として彼には冷淡であつた。唯、その中でもさつきから賞讚の聲を浴びてゐた、背の低い猪首の若者だけは、容易ならない競爭者が現れた事を知つたと見えて、さすがに妬ましさうな流し眼をぢろぢろ彼の方へ注いでゐた。その内に彼は擔いだ岩を肩の上で一揺り揺つてから、人のゐない向ふの砂の上へ勢よくどうと投げ落した。するとあの猪首の若者は丁度餌に饑ゑた虎のやうに、猛然と身を躍らせながら、その巖石へ飛びかかつたと思ふと、咄嗟の間に抱へ上げて、彼にも劣らず樂々と肩よりも高くかざして見せた。

それはこの二人の腕力が、外の力自慢の連中よりも數段上にあると云ふ事を雄辯に語つてゐる

證據であつた。そこで今まで臆面も無く力競べをしてゐた若者たちはいづれも興のさめた顏を見合せながら、周圍に佇んでゐる見物仲間へ嫌でも加はらずにはゐられなかつた。その代り又後に殘つた二人は、本來さほど敵意のある間柄でもなかつたが、騎虎の勢で已むを得ず、どちらか一方が降參するまで雌雄を爭はずにはゐられなくなつた。この形勢を見た多勢の若者たちは、あの猪首の若者がさし上げた岩を投げると同時に、これまでよりは一層熱心にどつとどよみを作りながら、今度はずぶ濡れになつた彼の方へ何時になく一齊に眼を注いだ。が、彼等が唯勝負にのみ興味を持つてゐると云ふ事は、――彼自身に對してはやはり好意を持つてゐないと云ふ事は、彼等の意地惡るさうな眼の中にも、明かによめる事實であつた。

それでも彼は相不變悠々と手に唾など吐きながら、さつきのより更に一嵩大きい巖石の側へ歩み寄つた。それから兩手に岩を抑へて、暫く呼吸を計つてゐたが、忽ちうんと力を入れると、一氣に腹まで抱へ上げた。最後にその手をさし換へてから、見る見る内に又肩まで物も見事に擔いで見せた。が、今度は投げ出さずに、眼で猪首の若者を招くと、人の好ささうな微笑を浮べながら、

「さあ、受取るのだ。」と聲をかけた。

猪首の若者は數歩を隔てゝ、時々髭を嚙みながら、嘲るやうに彼を眺めてゐたが、

「よし。」と一言答へると、つかつかと彼の側へ進み寄つて、すぐにその巖石を小山のやうな肩へ抱き取つた。さうして二三歩歩いてから、一度眼の上までさし上げて置いて、力の限り向ふへ抛り投げた。岩は凄じい地響きをさせながら、見物の若者たちの近くへ落ちて、銀粉のやうな砂煙を揚げた。

大勢の若者たちは又以前のやうにどよめき立つた。が、その聲がまだ消えない内に、もうあの猪首の若者は、更に勝敗を爭ふべく、前にも增して大きい岩を水際の砂から抱き起してゐた。

四

二人はかう云ふ力競べを何回となく闘はせた。その内に追ひ追ひ二人とも、疲勞の氣色を現して來た。彼等の顏や手足には、玉のやうな汗が滴つてゐた。のみならず彼等の着てゐる倭衣は、模樣の赤黑も見えない程、一面に砂にまみれてゐた。それでも彼等は息を切らせながら、必死に

巖石を擡げ合つて、最後の勝敗が決するまでは容易に止めさうな容子もなかつた。

彼等を取り巻いた若者たちの興味は、二人の疲勞が加はるのにつれて、益々強くなるらしかつた。この點ではこの若者たちも闘鷄や闘犬の見物同樣、殘忍でもあれば冷酷でもあつた。彼等はもう猪首の若者に特別な好意を持たなかつた。それには既に勝負の興味が、餘りに強く彼等の心を興奮の網に捉へてゐた。だから彼等は二人の力者に、代る代る聲援を與へた。古來その爲に無數の鷄、無數の犬、無數の人間が徒らに尊い血を流した、――宿命的にあらゆる物を狂氣にさせる聲援を與へた。

勿論この聲援は二人の若者にも作用した。彼等は互の血走つた眼の中に、恐るべき憎惡を感じ合つた。殊に背の低い猪首の若者は、露骨にその憎惡を示して憚らなかつた。彼の投げ捨てる巖石は、屢々偶然とは解釋し難い程、あの容貌の醜い若者の足もとに近く轉げ落ちた。が、彼はさう云ふ危險に全然無頓着でゐるらしかつた。或は無頓着に見える位、刻々近づいて來る勝敗に心を奪はれてゐるのかも知れなかつた。

彼は今も相手の投げた巖石を危く躱しながら、とうとうしまひには勇を鼓して、これも水際に

横はつてゐる牛程の岩を引起しにかかつた。岩は斜に流れを裂いて、淙々とたぎる春の水に千年の苔を洗はせてゐた。この大岩を擡げる事は、高天原第一の强力と云はれた手力雄命でさへ、たやすく出來ようとは思はれなかつた。が、彼はそれを兩手に抱くと、片膝砂へついた儘、渾身の力を揮ひ起して、兎も角も岩の根を埋めた砂の中からは抱へ上げた。

この人間以上の膂力は、周圍に佇んだ若者たちから、殆ど聲援を與ふべき餘裕さへ奪つた觀があつた。彼等は皆息を呑んで千曳の大岩を抱へながら、砂に片膝ついた彼の姿を眼も離さずに眺めてゐた。彼は暫くの間動かなかつた。しかし彼が懸命の力を盡してゐる事だけは、その手足から滴り落ちる汗の絶えないのにも明かであつた。それが稍久しく續いた後、聲をひそめてゐた若者たちは、誰からともなく又どよみを擧げた。唯そのどよみは前のやうな、勢の好い聲援の叫びではなく、思はず彼等の口を洩れた驚歎の呻きに外ならなかつた。何故と云へばこの時彼は、大岩の下に肩を入れて、今までついてゐた片膝を少しづつ擡げ出したからであつた。岩は彼が身を起すと共に、一寸づつ、一分づつ、ぢり〳〵砂を離れて行つた。さうして再彼等の間から一種のどよみが起つた時には、彼は旣に突兀たる巖石を肩に支へながら、みづらの髮を額に亂して、

恰も大地を裂いて出た土雷の神の如く、河原に横はる亂石の中に雄々しくも立ち上つてゐた。

五

千曳の大岩を擔いだ彼は、二足三足蹌踉と流れの汀から歩みを運ぶと、必死に食ひしばつた齒の間から、殆ど呻吟する様な聲で、「好いか渡すぞ。」と相手を呼んだ。

猪首の若者は逡巡した。少くとも一瞬間は、凄壯そのものゝやうな彼の姿に一種の威壓を感じたらしかつた。が、これもすぐに又絶望的な勇氣を振ひ起して、

「よし。」と噛みつくやうに答へたと思ふと、奮然と大手を擴げながら、やにはにあの大岩を抱き取らうとした。

岩は程なく彼の肩から、猪首の若者の肩へ移り出した。それは恰も雲の峯が押し移るが如く緩慢であつた。と同時に又雲の峯が堰き止め難い如く刻薄であつた。猪首の若者はまつ赤になつて、狼のやうに牙を噛みながら、次第にのしかゝつて來る千曳の岩を逞しい肩に支へようとした。

しかし岩が相手の肩から全く彼の肩へ移つた時、彼の體は刹那の間、大風の中の旗竿の如く搖れ

動いたやうに思はれた。すると忽ち彼の顏も半面を埋めた鬚を除いて、見る見る色を失ひ出した。さうしてその青ざめた額から、足もとの眩い砂の上へ頻に汗の玉が落ち始めた。——と思ふ間もなく今度は肩の岩が、丁度さつきとは反對に一寸づつ、一分づつ、ぢりぢり彼を壓して行つた。彼はそれでも死力を盡して、兩手に岩を支へながら、最後まで惡鬪を續けようとしたが、岩は依然として運命の如く下つて來た。彼の體は曲り出した。彼の頭も垂れるやうになつた。今の彼は何處から見ても、石塊の下にもがいてゐる蟹と更に變りはなかつた。

周圍に集まつた若者たちは、餘りの事に氣を奪はれて、茫然とこの悲劇を見守つてゐた。又實際彼等の手では、到底千曳の大岩の下から彼を救ひ出す事はむづかしかつた。いや、あの容貌の醜い若者でさへ、今となつては相手の背からさつき擡げた大盤石を取りのける事が出來るかどうか、疑はしいのは勿論であつた。だから彼も暫くの間は、恐怖と驚愕とを代る代る醜い顏に表しながら、唯、漫然と自失した眼を相手に注ぐより外はなかつた。

その内に猪首の若者は、とうとう大岩に背を壓されて、崩折れるやうに砂へ膝をついた。その拍子に彼の口からは、叫ぶとも呻くとも形容出來ない、苦しさうな聲が一聲溢れて來た。あの容

貌の醜い若者は、その聲が耳にはいるが早いか、急に惡夢から覺めた如く、猛然と身を飜して、相手の上に蔽ひかぶさつた大岩を向うへ押しのけようとした。が、彼がまだ手さへかけない内に、猪首の若者は多愛もなく砂の上にのめりながら、岩にひしがれる骨の音と共に、眼からも口からも夥しく鮮な血を迸らせた。それがこの憐むべき强力の若者の最期であつた。

あの容貌の醜い若者は、ぼんやり手を束ねた儘、陽炎の中に倒れてゐる相手の屍骸を見下した。それから苦しさうな視線を擧げて、無言の答を求めるやうに、おづおづ周圍に立つてゐる若者たちを見廻した。が、大勢の若者たちは麗らかな日の光を浴びて、いづれも默念と眼を伏せながら、一人も彼の醜い顏を仰ぎ見ようとするものはなかつた。

六

高天原の國の若者たちは、それ以來この容貌の醜い若者に冷淡を裝ふ事が出來なくなつた。彼等の或一團は彼の非凡な腕力に露骨な嫉妬を示し出した。他の一團は又犬の如く盲目的に彼を崇拜した。更に又他の一團は彼の野性と御目出度さとに殘酷な嘲笑を浴せかけた。最後に數人の若

者たちは心から彼に信服した。が、敵味方の差別なく彼等が何れも彼に對して、一種の威壓を感じ始めた事は、打ち消しやうのない事實であつた。

かう云ふ彼等の感情の變化は、勿論彼自身も見逃さなかつた。が、彼の爲めに悲慘な死を招いた、あの猪首の若者の記憶は、未だに彼の心の底に傷ましい痕跡を殘してゐた。この記憶を抱いてゐる彼は、彼等の好意と反感との前に、いづれも當惑に似た感じを味はないではゐられなかつた。殊に彼を尊敬する一團の若者たちに接する時は、殆ど童女にでも似つかはしい羞恥の情さへ感じ勝ちであつた。これが彼の味方には、今までより又一層、彼に好意の目なざしを向けさせることになるらしかつた。と同時に彼の敵には、それだけ彼に反感を加へさせる事にもなるらしかつた。

彼は成る可く人を避けた。さうして多くはたつた一人、その部落を繞る山間の自然の中に時を過ごした。自然は彼に優しかつた。森は木の芽を煙らせながら、孤獨に苦しんでゐる彼の耳へも、人懷しい山鳩の聲を送つて來る事を忘れなかつた。澤も芽ぐんだ蘆と共に、彼の寂寥を慰むべく、仄かに暖い春の雲を物靜な水に映してゐた。藪木の交る針金雀花、熊笹の中から飛び立つ雉子、

それから深い谷川の水光りを亂す鮎の群、――彼は殆至る所に、仲間の若者たちの間には感じられない、安息と平和とを見出した。其處には愛憎の差別はなかつた、すべて平等に日の光と微風との幸福に浴してゐた。しかし――

しかし彼は人間であつた。

時々彼が谷川の石の上に、水を掠めて去來する岩燕を眺めてゐると、或は山峽の辛夷の下に、蜜に醉つて飛びも出來ない虻の羽音を聞いてゐると、何とも云ひやうのない寂しさが突然彼を襲ふ事があつた。彼はその寂しさが、何處から來るのだかわからなかつた。唯、それが何年か前に、母を失つた時の悲しみと似てゐるやうな氣もちだけがした。彼はその當座何處へ行つても、當然其處にゐるべき母のゐない事を見せられると、必ず落莫たる空虚の感じに壓倒されるのが常であつた。その悲しみに比べると、今の彼の寂しさが、より強いものとは思はれなかつた。が、一人の母を戀ひ歎くより、より大きいと云ふ心もちはあつた。だから彼は山間の春の中に、鳥や獸の如くさまよひながら、幸福と共に不可解な不幸をも味はずにはゐられなかつた。

彼はこの寂しさに惱まされると、屢山腹に枝を張つた、高い柏の梢に上つて、遙か目の下の

谷間の景色にぼんやりと眺め入る事があつた。谷間には何時も彼の部落が、天の安河の河原に近く、碁石のやうに點々と茅葺き屋根を並べてゐた。どうかすると又その屋根の上には、火食の煙が幾すぢもかすかに立ち昇つてゐる樣も見えた。彼は太い柏の枝へ馬乘りに跨がりながら、長い間その部落の空を渡つて來る風に吹かれてゐた。風は柏の小枝を搖つて、折々枝頭の若芽の匂を日の光の中に煽り立てた。が、彼にはその風が、彼の耳元を流れる度に、かう云ふ言葉を細々と囁いて行くやうに思はれた。

「素戔嗚よ。お前は何を探してゐるのだ。お前の探してゐるものは、この山の上にもなければ、あの部落の中にもないではないか。おれと一しよに來い。おれと一しよに來い。お前は何をためらつてゐるのだ。素戔嗚よ。……」

七

しかし素戔嗚は風と一しよに、さまよつて歩かうとは思はなかつた。では何が孤獨な彼を高天原の國に繫いでゐたか。——彼は自らさう尋ねると、必ず恥かしさに顏が赤くなつた。それはこ

の容貌の醜い若者にも、私かに彼が愛してゐる部落の娘がゐたからであつた。さうしてその娘に彼のやうな野人が戀をすると云ふ事は、彼自身にも何となく不似合の感じがしたからであつた。

彼が始めてこの娘に遇つたのは、やはりあの山腹の柏の梢に、たつた一人上つてゐた時であつた。彼はその日も茫然と、目の下に白くうねつてゐる天の安河を眺めてゐると、意外にも柏の枝の下から晴れ晴れした女の笑ひ聲が起つた。その聲はまるで氷の上へばらばらと礫を投げたやうに、彼の寂しい眞晝の夢を突嗟の間に打ち碎いてしまつた、彼は眠を破られた人の腹立たしさを感じながら、柏の下に草を敷いた林間の空き地へ眼を落した。すると其處には三人の女が、麗らかな日の光を浴びて、木の上の彼には氣がつかないのか、頻に何か笑ひ興じてゐた。

彼等は皆竹籠を臂にかけてゐる所を見ると、花か木の芽か山獨活を摘みに來た娘らしかつた。素戔嗚はその女たちを一人も見知つて居なかつた。が、彼等があの部落の中でも、卑しいもの丶娘でない事は、彼等の肩に懸つてゐる、美しい領巾を見ても明かであつた。彼等はその領巾を微風に飜しながら、若草の上に飛び惱んでゐる一羽の山鳩を追ひまはしてゐた。鳩は女たちの手の間を縫つて、時々一生懸命に痛めた羽根をばたつかせたが、どうしても地上三尺とは飛び上る事

が出來ないやうであつた。

素戔嗚は高い柏の上から、暫くこの騒ぎを見下してゐた。するとその内に女たちの一人は臂に懸けた竹籠も其處へ捨てゝ、危く鳩を捕へようとした。鳩は又一しきり飛び立ちながら、柔かい羽根を雪のやうに紛々とあたりへ撒き散らした。彼はそれを見るが早いか、今まで跨つてゐた太枝を掴んで、だらりと宙に吊り下つた。と思ふと一つ彈みをつけて、柏の根元の草の上へ、勢ひよくどさりと飛び下りた。が、その拍子に足を辷らせて、呆氣にとられた女たちの中へ、仰向けさまに轉がつてしまつた。

女たちは一瞬間、啞のやうに顏を見合せてゐたが、やがて誰から笑ふともなく、愉快さうに放笑ひ出した。すぐに草の上から飛び起きた彼は、さすがに間の惡さうな顏をしながら、それでもわざと傲然と、女たちの顏を睨めまはした。鳩はその間に羽根を引き引き、木の芽に煙つてゐる林の奥へ、ばたばた逃げて行つてしまつた。

「あなたは一體何處にいらしつたの？」

やつと笑ひ止んだ女たちの一人は蔑むやうにかう云ひながら、じろじろ彼の姿を眺めた。が、

その聲には、まだ抑へ切れない可笑しさが殘つてゐるやうであつた。
「あすこにゐた。あの柏の枝の上に。」
素戔嗚は兩腕を胸に組んで、やはり傲然と返事をした。

八

女たちは彼の答を聞くと、もう一度顏を見合せて笑ひ出した。それが素戔嗚尊には腹も立てば同時に又何となく嬉しいやうな心もちもした。彼は醜い顏をしかめながら、故に彼等を脅すべく、一層不機嫌らしい眼つきを見せた。
「何が可笑しい？」
が、彼等には彼の威嚇も、一向效果がないらしかつた。彼等はさんざん笑つてから、漸く彼の方を向くと、今度はもう一人が稍恥しさうに、美しい領巾を弄びながら、
「ぢやどうして又、あすこから下りていらしつたの？」と云つた。
「鳩を助けてやらうと思つたのだ。」

「私たちだつて助けてやる心算でしたわ。」

三番目の娘は笑ひながら、活き活きと横合ひから口を出した。彼女はまだ童女の年輩から、いくらも出てはゐないらしかつた。が、二人の友だちに比べると、顏も一番美しければ、容子もすぐれて潑溂としてゐた。さつき竹籠を投げ捨てながら、危く鳩を捕へようとしたのも、この利發らしい娘に違ひなかつた。彼は彼女と眼を合はすと、何故と云ふ事もなく狼狽した。が、それだけに、又一方では、彼女の前にその慌て方を見せたくないと云ふ心もちもあつた。

「噓をつけ。」

彼は一生懸命に、亂暴な返事を拋りつけた。が、その噓でない事は、誰よりもよく彼自身が承知してゐさうな氣もちがしてゐた。

「あら、噓なんぞつくものですか。ほんとうに助けてやる心算でしたわ。」

彼女がかう彼をたしなめると、面白さうに彼の當惑を見守つてゐた二人の女たちも、一度に小鳥の如くしやべり出した。

「ほんとうですわ。」

「どうして嘘だと御思ひ？」

「あなたばかり鳩が可愛いのぢやございません。」

彼は暫く返答も忘れて、まるで巣を壞された蜜蜂の如く、三方から彼の耳を襲つて來る女たちの聲に驚嘆してゐた。が、やがて勇氣を振ひ起すと、胸に組んでゐた腕を解いて、今にも彼等を片つ端から薙倒しさうな擬勢を示しながら、雷のやうに怒鳴りつけた。

「うるさい。嘘でなければ、早く向うへ行け。行かないと、――」

女たちはさすがに驚いたらしく、慌てゝ彼の側を飛びのいた。が、すぐに又聲を立てゝ笑ひながら、丁度足もとに咲いてゐた嫁菜の花を摘み取つては、一齊に彼へ拋りつけた。薄紫の嫁菜の花は所嫌はず紛々と、素戔嗚尊の體に降りかゝつた。彼はこの匂の好い雨を浴びた儘、呆氣にとられて立ちすくんでゐた。が、忽ち今怒鳴りつけた事を思ひ出して、兩腕を大きく開くや否や、猛然と惡戲な女たちの方へ、二足三足突進した。

彼等はしかしその瞬間に、素早く林の外へ逃げて行つた。彼は茫然と立ち止つたなり、次第に遠くなる領巾の色を、見送るともなく見送つた。それからあたりの草の上に、點々と優しくこぼ

れてゐる嫁菜の花へ眼をやつた。すると何故か薄笑ひが、自然と脣に上つて來た。彼はごろりと其處へ横になつて、芽をふいた梢の向うにある、麗らかな春の空を眺めた。林の外ではかすかながら、まだ女たちの笑ひ聲が聞えた。が、間もなくそれも消えて、後には唯草木の榮を孕んだ、明るい沈默があるばかりになつた。……

何分か後、あの羽根を傷けた山鳩は、怯づ怯づ又其處へ還つて來た。その時もう草の上の彼は、靜な寢息を洩らしてゐた。が、仰向いた彼の顏には、梢から落ちる日の光と一しよに、未だに微笑の影があつた。鳩は嫁菜の花を踏みながら、そつと彼の近くへ來た。さうして彼の寢顏を覗くと、仔細らしく首を傾けた。恰もその微笑の意味を考へようとでもするやうに。——

九

その日以來、彼の心の中には、あの快活な娘の姿が、時々鮮かに浮ぶやうになつた。彼は前にも云つた如く、彼自身にもかう云ふ事實を認める事が恥しかつた。まして仲間の若者たちには、一言もこの事情を打ち明けなかつた。又實際仲間の若者たちも彼の祕密を嗅ぎつけるには、餘り

に平生の素戔嗚が、戀愛とは遙に緣の遠い、野蠻な生活を送り過ぎてゐた。

彼は相不變人を避けて、山間の自然に親しみ勝ちであつた。どうかすると一夜中、森林の奥を歩き廻つて、冒險を探す事もないではなかつた。其間に彼は大きな熊や猪などを仕止めたことがあつた。又時には何時になつても春を知らない峯を越えて、岩石の間に棲んでゐる大鷲を射殺しにも行つたりした。が、彼は未嘗、その非凡な膂力を盡すべき、手强い相手を見出さなかつた。山の向うに穴居してゐる、慓悍の名を得た侏儒でさへ彼に出合ふ度毎に、必一人づつは屍骸になつた。彼はその屍骸から奪つた武器や、矢先にかけた鳥獸を時々部落へ持つて歸つた。

その内に彼の武勇の名は、益々多くの敵味方を部落の中につくつて行つた。從つて彼等は機會さへあると、公然と啀み合ふ事を憚らなかつた。彼は勿論出來るだけ、かう云ふ爭ひを起させまいとした。が、彼等は彼等自身の爲に、彼の意嚮には頓着なく、殆何事にも軋轢し合つた。其處には何か宿命的な、必然の力も動いてゐた。彼は敵味方の反目に不快な感じを抱きながら、しかもその反目の唯中へ、我知らず次第に引き込まれて行つた。——

現に一度はかう云ふことがあつた。

或麗かな春の日暮、彼は弓矢をたばさみながら、部落の後に擴がつてゐる草山を獨り下つて來た。その時の彼の心の中には、さつき射損じた一頭の牡鹿が、まだ折々は未練がましく、鮮かな姿を浮べてゐた。所が草山が稍平になつて、一本の楡の若葉の下に、夕日を浴びた部落の屋根が一目に見えるあたりまで來ると、其處には四五人の若者たちが、一人の若者を相手にして、頻に何か云ひ爭つてゐた。彼等が皆この草山へ、牛馬を飼ひに來るものたちだと云ふ事は、彼等のまはりに草を食んでゐる家畜を見ても明らかであつた。殊にその一人の若者は、彼を崇拜する若者たちの中でも、殆奴僕の如く彼へ仕へる爲に、反つて彼の反感を買つた事がある男に違ひなかつた。

彼は彼等の姿を見ると、咄嗟に何事か起りさうな、忌はしい豫感に襲はれた。しかし此處へ來かゝつた以上、元より彼等の口論を見て過ぎる譯にも行かなかつた。そこで彼はまづ見覺えのある、その一人の若者に、

「どうしたのだ。」と聲をかけた。

その男は彼の顏を見ると、まるで百萬の味方にでも遭つたやうに、嬉しさうに眼を輝かせなが

ら、相手の若者たちの理不盡な事を滔々と早口にしやべり出した。何でもその言葉によると、彼等はその男を憎むあまり、彼の飼つてゐる牛馬をも傷けたり虐めたりするらしかつた。彼はさう云ふ不平を鳴す間も、時々相手を睨みつけて、

「逃げるなよ。今に返報をしてやるから。」などと、素戔嗚の勇力を笠に着た、横柄な文句を並べたりした。

十

素戔嗚は彼の不平を聞き流してから、相手の若者たちの方を向いて、野蠻な彼にも似合はない、調停の言葉を述べようとした。するとその刹那に彼の崇拜者は、よくよく口惜しさに堪へ兼ねたのか、いきなり近くにゐた若者に飛びかかると、したたかその頬を打ちのめした。打たれた若者はよろめきながら、すぐに又相手へ摑みかかつた。

「待て。こら、待てと云つたら待たないか。」

から叱りながら素戔嗚は、無理に二人を引き離さうとした。所が打たれた若者は、彼に腕を摑

まれると、血迷つた眼を嗔らせながら、今度は彼へ獅嚙みついて來た。と同時に彼の崇拜者は、腰にさした鞭をふりかざして、まるで氣でも違つたやうに、やはり口論の相手だつた若者たちの中へ飛びこんだ。若者たちも勿論この男に、おめおめ打たれるやうなものばかりではなかつた。彼等は咄嗟に二組に分れて、一方はこの男を圍むが早いか、一方は不慮の出來事に度を失つた素戔嗚へ、紛々と拳を加へに來た。此處に立ち至つてはもう素戔嗚にも、喧嘩に加はるより外に途はなかつた。のみならず遂に相手の拳が、彼の頭に下つた時、彼は理非も忘れる程眞底から一時に腹が立つた。

忽ち彼等は入り亂れて、互に打つたり打たれたりし出した。あたりに草を食んでゐた牛や馬も、この騷ぎに驚いて、四方へ一度に逃げて行つた。が、それらの飼ひ主たちは拳を揮ふのに夢中になつて、暫くは誰も家畜の行方に氣をとめる容子は見えなかつた。

が、その内に素戔嗚と爭つたものは、手を折られたり、足を挫かれたりして、だんだん浮き足が立つやうになつた。さうしてとうとうしまひには、誰からともなく算を亂して、意氣地なく草山を逃げ下つて行つた。

素戔嗚は相手を追ひ拂ふと、今度は彼の崇拜者が、まだ彼等に未練があるのを押し止めなければならなかつた。

「騷ぐな。騷ぐな。逃げるものは逃がしてやるのが好いのだ。」

若者はやつと彼の手を離れると、べたりと草の上へ坐つてしまつた。彼が手ひどく毆られた事は、一面に地腫のした彼の顏が、明白に語つてゐる事實であつた。素戔嗚は彼の顏を見ると、腹立たしい心のどん底から、急に可笑しさがこみ上げて來た。

「どうした？　怪我はしたかつたか？」

「何、したつてかまひはしません。今日と云ふ今日こそはあいつらに、一泡吹かせてやつたのですから。――それよりあなたこそ、御怪我はありませんか。」

「うん、瘤が一つ出きただけだつた。」

素戔嗚はかう云ふ一言に忌々しさを吐き出しながら、其處にあつた一本の楡の根本に腰を下した。彼の眼の前には部落の屋根が、草山の腹にさす夕日の光の中に、やはり赤々と浮き上つてゐた。その景色が素戔嗚には、不思議に感じる位平和に見えた。それだけ又今までの格鬪が、夢の

やうな氣さへしないではなかつた。

二人は草を敷いた儘、暫くは默つて物靜な部落の日暮を見下してゐた。

「どうです。瘤は痛みますか。」

「大して痛まない。」

「米を嚙んでつけて置くと好いさうですよ。」

「さうか。それは好い事を聞いた。」

十一

丁度この喧嘩と同じやうに、素戔嗚は次第に或一團の若者たちを嫌でも敵にしなければならなくなつた。しかしそれが數の上から云ふと、殆この部落の若者たちの三分の二以上の多勢であつた。この連中は彼の味方が、彼を首領と仰ぐやうに、思兼尊だの手力雄尊だのと云ふ年長者に敬意を拂つてゐた。しかしそれらの尊たちは、格別彼に敵意らしい何物も持つてゐないらしかつた。

殊に思兼尊などは、寧ろ彼の野蠻な性質に好意を持つてゐるやうであつた。現にあの草山の喧嘩から、二三日經つた或日の午後、彼が例の如くたつた一人、山の中の古沼へ魚を釣りに行つてゐると、偶然其處へ思兼尊が、これも獨り分け入つて來た。さうして隔意なく彼と一しよに、朽木の幹へ腰を下して、思ひの外打融けた世間話などをし始めた。

尊はもう髮も髯も白くなつた老人ではあるが、部落第一の學者でもあり、豫ねて又部落第一の詩人と云ふ名譽も擔つてゐた。その上部落の女たちの中には、尊を非凡な呪物師のやうに思つてゐるものもないではなかつた。これは尊が暇さへあると、山谷の間をさまよひ歩いて、藥草などを探して來るからであつた。

彼は勿論思兼尊に、反感を抱くべき理由がなかつた。だから絲を垂れた儘、喜んで尊の話相手になつた。二人はそこで長い間、古沼に臨んだ柳の枝が、銀のやうな花をつけた下に、いろいろな事を話し合つた。

「近頃はあなたの剛力が、大分評判のやうぢやありませんか。」

暫くしてから思兼尊は、かう云つて、片頰に笑を浮べた。

「評判だけ大きいのです。」

「それだけでも結構ですよ。すべての事は評判があつて、始めてあり甲斐があるのですから。」

素戔嗚にはこの答が、一向腑に落ちなかつた。

「さうでせうか。ぢや評判がなかつたら、いくら私が剛力でも――」

「更に剛力ではなくなるのです。」

「しかし人が掬はなくつても、砂金は始から砂金でせう。」

「さあ、砂金だとわかるのは、人に掬はれてからの上ぢやありませんか。」

「すると人が、唯の砂を砂金だと思つて掬つたら――」

「やはり唯の砂でも砂金になるでせう。」

素戔嗚は何だか思兼尊に、調戯はれてゐるやうな心もちがした。が、さうかと思つて相手を見ても、尊の皺だらけな目尻には、唯微笑が宿つてゐるばかりで、人の悪さうな氣色は少しもなかつた。

「何だかそれぢや砂金になつても、つまらないやうな氣がしますが。」

「勿論つまらないものなのですよ。それ以上に考へるのは、考へる方が間違つてゐるのです。」
思兼尊はかう云ふと、實際つまらなさうな顔をしながら、何處かで摘んで來たらしい蕗の薹の匂を嗅ぎ始めた。

十二

素戔嗚は暫く默つてゐた。すると又思兼尊が、彼の非凡な腕力へ途切れた話頭を持つて行つた。
「何時ぞや力競べがあつた時、あなたと岩を擡げ合つて、死んだ男がゐたぢやありませんか。」
「氣の毒な事をしたものです。」
素戔嗚は何となく、非難でもされたやうな心もちになつて、思はず眼を薄日がさした古沼の上へ漂はせた。古沼の水は底深さうに、まはりに芽ぐんだ春の木々をひつそりと仄明るく映してゐた。しかし思兼尊は無頓着に、時々蕗の薹へ鼻をやつて、
「氣の毒ですが、莫迦げてゐますよ。第一私に云はせると、競爭する事が既によろしくない。第

二に到底勝てさうもない競爭をするのが論外です。第三に命まで捨てるに至つては、それこそ愚の骨頂ぢやありませんか。」

「しかし私は何となく氣が咎めてならないのですが。」

「何、あれはあなたが殺したのぢやありません。力競べを面白がつてゐた、外の若者たちが殺したのです。」

「けれども私はあの連中に、反つて憎まれてゐるやうです。」

「それは勿論憎まれますよ。その代りもしあなたが死んで、あなたの相手が勝負に勝つたら、あの連中はきつとあなたの相手を憎んだのに違ひないでせう。」

「世の中はさう云ふものでせうか。」

その時尊は返事をする代りに、「引いてゐますよ」と注意した。

素戔嗚はすぐに糸を上げた。糸の先には山目が一尾、潑溂と銀のやうに躍つてゐた。

「魚は人間より幸福ですね。」

尊は彼が竹の枝を山目の顎へ通すのを見ると、又にやにや笑ひながら、彼には殆ど通じない一

種の理窟を並べ出した。

「人間が鉤を恐れてゐる内に、魚は遠慮なく鉤を呑んで、樂々と一思ひに死んでしまふ。私は魚が羨しいやうな氣がしますよ。」

彼は默つてもう一度、古沼へ糸を拋りこんだ。が、やがて當惑らしい眼を尊へ向けて、

「どうもあなたの仰有る事は、私にはよく分りませんが。」と云つた。

尊は彼の言葉を聞くと、思ひの外眞面目な調子になつて、白い顎髯を捻りながら、

「わからない方が結構ですよ。さもないとあなたも私のやうに、何もする事が出來なくなります。」

「どうしてですか。」

彼はわからないと云ふ口の下から、すぐに又かう尋ねずにはゐられなかつた。實際思兼尊の言葉は、眞面目とも不眞面目ともつかない内に、蜜か毒藥か、不思議な程心を惹くものが潛んでゐたのであつた。

「鉤が呑めるのは魚だけです。しかし私も若い時には――」

思兼尊の皺だらけな顏には、一瞬間何時にない寂しさうな色が去來した。

「しかし私も若い時には、いろいろ夢を見た事がありましたよ。」

二人はそれから久しい間、互に別々な事を考へながら、靜に春の木々を映してゐる、古沼の上を眺めてゐた。沼の上には翡翠が、時々水を掠めながら、礫を打つやうに飛んで行つた。

十三

その間もあの快活な娘の姿は、絶えず素戔嗚の心を領してゐた。殊に時たま部落の内外で、偶然彼女と顏を合はせると、殆あの山腹の柏の下で、始めて彼女と遇つた時のやうに、譯もなく顏が熱くなつたり、胸がはずんだりするのが常であつた。が、彼女は何時も取澄まして、全然彼を見知らないかの如く、頭を下げる容子も見せなかつた。——

或朝彼は山へ行く途中、丁度部落のはづれにある噴き井の前を通りかゝると、あの娘が三四人の女たちと一しよに、水甕へ水を汲んでゐるのに遇つた。噴き井の上には白椿が、まだ疎に咲き殘つて、絶えず湧きこぼれる水の水沫は、その花と葉とを洩れる日の光に、かすかな虹を描いてゐた。娘は身をかがめながら、苔蒸した井筒に溢れる水を素燒の甕へ落してゐたが、外の女たち

はもう水を汲み了へたのか、皆甕を頭に載せて、しつきりなく飛び交ふ燕の中を、家々へ歸らうとする所であつた。が、彼が其處へ來た途端に、彼女は品好く身を起すと、一ぱいになつた水甕を重さうに片手に下げた儘、ちらりと彼の顔へ眼をやつた、さうして何時になく、人懷しげに口元へ微笑を浮べて見せた。

彼は例の通り當惑しながら、ちよいと挨拶の點頭を送つた。娘は水甕を頭へ載せながら、眼でその挨拶に答へると、仲間の女たちの後を追つて、やはり釘を撒くやうな燕の中を歩き出した。彼は娘と入れ違ひに噴井の側へ歩み寄つて、大きな掌へ掬つた水に、二口三口喉を沾した。沾しながら彼女の眼つきや脣の微笑を思ひ浮べて、何か嬉しいやうな、恥かしいやうな心もちに顔を赤めてゐた。と同時に又己自身を嘲りたいやうな氣もしないではなかつた。

その間に女たちはそよ風に領巾を飜しながら、頭の上の素焼の甕にさわやかな朝日の光を浴びて次第に噴き井から遠ざかつて行つた。が、間もなく彼等の中からは一度に愉快さうな笑ひ聲が起つた。それにつれて彼等の或者は、笑顔を後へ振り向けながら、足も止めずに素戔嗚の方へ、嘲るやうな視線を送りなぞした。

噴き井の水を飲んでゐた彼は、幸その視線に煩はされなかつた。しかし彼等の笑ひ聲を聞くと、愈々妙に間が惡くなつて、今更飲みたくもない水を、もう一杯手で掬つて飲んだ。すると中高になつた噴き井の水に、意外にも誰か人の姿が、咄嗟に覺束ない影を落した。素戔嗚は慌てた眼を擧げて、噴き井の向うの白椿の下へ、鞭を持つた一人の若者が、のそのそと歩み寄つたのと顏を合せた。それは先日草山の喧嘩に、とうとう彼まで卷添へにした、あの牛飼の崇拜者であつた。

「お早うございます。」

若者は愛想笑ひを見せながら、恭しく彼に會釋をした。

「お早う。」

彼はこの若者にまで、狼狽した所を見られたかと思ふと、思はず顏をしかめずにはゐられなかつた。

十四

が、若者はさり氣ない調子で、噴き井の上に枝垂れかゝつた白椿の花を搔りながら、

「もう瘤は御癒りですか。」
「うん、とうに癒つた。」
彼は眞面目にこんな返事をした。
「生米を御つけになりましたか。」
「つけた。あれは思つたより利き目があるらしかつた。」
若者は挘つた椿の花を噴き井の中へ抛りこむと、急に又にやにや笑ひながら、
「ぢやもう一つ、好い事を御教へしませうか。」
「何だ。その好い事と云ふのは。」
彼が不審さうにかう問返すと、若者はまだ意味ありげな笑を頰に浮べた儘、
「あなたの頸にかけて御出でになる、勾玉を一つ頂かせて下さい。」と云つた。
「勾玉をくれ？　くれと云へばやらないものでもないが、勾玉を貰つてどうするのだ？」
「まあ、默つて頂かせて下さい。悪いやうにはしませんから。」
「嫌だ。どうするのだか聞かない内は、勾玉なぞをやる譯には行かない。」

素戔嗚はそろそろ焦れ出しながら、突慳貪に若者の請を却けた。すると相手は狡猾さうに、じろりと彼の顔へ眼をやつて、

「ぢや云ひますよ。あなたは今此處へ水を汲みに來てゐた、十五六の娘が御好きでせう。」

彼は苦い顔をして、相手の眉の間を睨みつけた。が、内心は少からず、狼狽に狼狽を重ねてゐた。

「御好きぢやありませんか、あの思兼尊の姪を。」

「さうか。あれは思兼尊の姪か。」

彼は際どい聲を出した。若者はその容子を見ると、凱歌を擧げるやうに笑ひ出した。

「そら、御覧なさい。隱したつてすぐに露はれます。」

彼は又口を噤んで、ぢつと足もとの石を見つめてゐた。水沫を浴びた石の間には、疎に羊齒の葉が芽ぐんでゐた。

「ですから私に勾玉を一つ、御よこしなさいと云ふのです。御好きたら又御好きなやうに、取計らひやうもあるぢやありませんか。」

若者は鞭を弄びながら、透かさず彼を追窮した。彼の記憶には二三日前に、思兼尊と話し合つた、あの古沼のほとりの柳の花が、忽ち鮮に浮んで來た。もしあの娘が尊の姪なら――彼は眼を足もとの石から擧げると、やはり顔をしかめたなり、

「さうして勾玉はどうするのだ？」と云つた。

しかし彼の眼の中には、明かに今まで見えなかつた希望の色が動いてゐた。

十五

若者の答へは無造作であつた。

「何、その勾玉をあの娘に渡して、あなたの思召しを傳へるのです。」

素戔嗚はちよいとためらつた。この男の辯舌を弄する事は、何となく彼には不快であつた。と云つて彼自身、彼の心を相手に訴へるだけの勇氣もなかつた。若者は彼の醜い顔に躊躇の色が動くのを見ると、わざと冷やかに言葉を繼いだ。

「御嫌なら仕方はありませんが。」

二人は暫くの間默つてゐた。が、やがて素戔嗚は頸に懸けた勾玉の中から、美しい琅玕の玉を拔いて、無言の儘若者の手に渡した。それは彼が何よりも、大事にかけて持つてゐる、歿くなつた母の遺物であつた。

若者はその琅玕に物欲しさうな眼を落しながら、

「これは立派な勾玉ですね、こんな性の好い琅玕は、さう澤山はありますまい。」

「この國の物ぢやない。海の向うにゐる玉造が、七日七晩磨いたと云ふ玉だ。」

彼は腹立たしさうにかう云ふと、くるりと若者に背を向けて、大股に噴き井から歩み去つた。若者はしかし勾玉を掌の上に載せながら、慌てゝ後を追ひかけて來た。

「待つてゐて下さい。必ず二三日中には、吉左右を御聞かせしますから。」

「うん、急がなくつて好いが。」

彼等は倭衣の肩を並べて、絶え間なく飛び交ふ燕の中を山の方へ歩いて行つた。後には若者の投げた椿の花が、中高になつた噴き井の水に、まだくるくる廻りながら、流れもせず浮んでゐた。

その日の暮方、若者は例の草山の楡の根がたに腰を下して、又素戔嗚に預けられた勾玉を掌へ

載せて見ながら、あの娘に云ひ寄るべき手段をいろいろ考へてゐた。すると其處へもう一人の若者が、斑竹の笛を帶へさして、ぶらりと山を下つて來た。夫は部落の若者たちの中でも、最も精巧な勾玉や釧の所有者として知られてゐる、背の高い美貌の若者であつた。彼は其處を通りかゝると、どう思つたかふと足を止めて、楡の下の若者に「おい、君。」と聲をかけた。若者は慌てゝ、顏を擧げた。が、彼はこの風流な若者が、彼の崇拜する素戔嗚の敵の一人だと云ふ事を承知してゐた。そこで如何にも無愛想に、

「何か御用ですか。」と返事をした。

「ちよいとその勾玉を見せてくれないか。」

若者は苦い顏をしながら、琅玕を相手の手に渡した。

「君の玉かい。」

「いゝえ、素戔嗚尊の玉です。」

今度は相手の若者の方が、苦い顏をしずにはゐられなかつた。

「ぢや何時もあの男が、自慢さうに下げてゐる玉だ。尤もこの外に下げてゐるのは、石塊同樣の

玉ばかりだが。」

若者は毒口を利きながら、暫くその勾玉を弄んでゐたが、自分もその楡の根がたへ樂々と腰を下すと、

「どうだらう。物は相談と云ふが、一つ君の計らひで、この玉を僕に賣つてくれまいか。」と、大膽な事を云ひ出した。

十六

牛飼ひの若者は否と返事をする代りに、頰を脹らせた儘默つてゐた。すると相手は流し眼に彼の顏を覗きこんで、

「その代り君には御禮をするよ。刀が欲しければ刀を進上するし、玉が欲しければ玉も進上するし、――」

「駄目ですよ。その勾玉は素戔嗚尊が、或人に渡してくれと云つて、私に預けた品なのですから。」

「へええ、或人へ渡してくれ？　或人と云ふのは、或女と云ふ事かい。」

相手は好奇心を動かしたと見えて、急に氣ごんだ調子になつた。
「女でも男でも好いぢやありませんか。」
若者は餘計なおしやべりを後悔しながら面倒臭さうにかう答を避けた。が、相手は腹を立てた氣色もなく、反つて薄氣味が惡い程、優しい微笑を漏らしながら、
「そりやどつちでも好いさ。どつちでも好いが、その人へ渡す品だつなら、其處は君の働き一つで、外の勾玉を持つて行つても、大した差支はなささうぢやないか。」
若者は又口を噤んで、草の上へ眼を反らせてゐた。
「勿論多少は面倒が起るかも知れないさ。しかしその位な事はあつても、刀なり、玉なり、鎧なり、乃至は又馬の一匹なり、君の手にはいつた方が――」
「ですがね、もし先方が受け取らないと云つたら、私はこの玉を素戔嗚尊へ返さなければならないのですよ。」
「受け取らないと云つたら？」
相手はちよいと顏をしかめたが、すぐに優しい口調に返つて、

「もし先方が女だつたら、そりや素戔嗚の玉なぞは受け取らないね。その上こんな琅玕は、若い女には似合はないよ。だから反つてこの代りに、もつと派手な玉を持つて行けば、案外すぐに受け取るかも知れない。」

若者は相手の云ふ事も、一理ありさうな氣がし出した。實際如何に高貴な物でも、部落の若い女たちが、かう云ふ色の玉を好むかどうか、疑はしいには違ひなかつたのであつた。

「それからだね――」

相手は脣を舐めながら、愈々尤もらしく言葉を繼いだ。

「それからだね、たとひ玉が違つたにしても、受け取つて貰つた方が、受け取らずに返されるよりは、素戔嗚も喜ぶだらうぢやないか。して見れば玉は取り換へた方が、反つて素戔嗚の爲になるよ。素戔嗚の爲になつて、おまけに君が刀でも、馬でも手に入れるとなれば、もう文句はない筈だがね。」

若者の心の中には、兩方に刃のついた劍やら、水晶を削つた勾玉やら、逞ましい月毛の馬やらが、はつきりと浮び上つて來た。彼は誘惑を避けるやうに、思はず眼をつぶりながら、二三度頭

を強く振つた。が、眼を開けると彼の前には、依然として微笑を含んでゐる、美しい相手の顏があつた。

「どうだらう。それでもまだ不服かい。不服なら――まあ、何とか云ふよりも、僕の所まで來てくれ給へ。刀も鎧も丁度君に御誂へなのがある筈だ。廐には馬も五六匹ゐる。」

相手は飽くまでも滑な舌を弄しながら氣輕く楡の根がたを立ち上つた。若者はやはり默然と、煮え切らない考に沈んでゐた。しかし相手が歩き出すと、彼も亦その後から、重さうな足を運び始めた。――

彼等の姿が草山の下に、全く隱れてしまつた時、更に一人の若者が、のそのそ其處へ下つて來た。夕日の光はとうに薄れて、あたりにはもう靄さへ動いてゐたが、その若者が素戔嗚だと云ふ事は、一目見てさへ知れる事であつた。彼は今日射止めたらしい山鳥を二三羽肩にかけて、悠々と楡の下まで來ると、暫く疲れた足を休めて、暮色の中に横たはつてゐる部落の屋根を見下した。さうして獨り脣に幸福な微笑を漂はせた。

何も知らない素戔嗚は、あの快活な娘の姿を心に思ひ浮べたのであつた。

十七

素戔嗚は一日一日と、若者の返事を待ち暮した。が、若者は何時になつても、容易に消息を齎さなかつた。のみならず故意か偶然か、殆その後素戔嗚とは顔も合さない位であつた。彼は若者の計畫が失敗したのではないかと思つた。その爲に彼と會ふ事が恥しいのではないかと思つた。が、その又一方では、やはりまだあの快活な娘に、近づく機會がないのかも知れないと思ひ返さずにはゐられなかつた。

その間に彼はあの娘と、朝早く同じ噴き井の前で、たつた一度落合つた事があつた。娘は例の如く素燒の甕を頭の上に載せながら、四五人の部落の女たちと一しよに、丁度白椿の下を去らうとしてゐた。が、彼の顔を見ると、彼女は急に脣を歪めて、蔑むやうな表情を水々しい眼に浮べた儘、昂然と一人先に立つて、彼の傍を通り過ぎた。彼は何時もの通り顔を赤めた上に、その日は何とも名狀し難い不快な感じまで味はされた。「おれは莫迦だ。あの娘はたとひ生まれ變つても、おれの妻になるやうな女ではない。」――さう云ふ絶望に近い心もちも、暫くは彼を離れなかつた。

しかし牛飼の若者が、否やの返事を持つて來ない事は、人の好い彼に多少たがら、希望を抱かせる力になつた。彼はそれ以來すべてをこの未知の答へに懸けて、二度と苦しい思ひをしない爲に、當分はあの噴き井の近くへも立ち寄るまいと私かに決心した。

所が彼は或日の日暮、天の安河の河原を歩いてゐると、折からその若者が馬を洗つてゐるのに出合つた。若者は彼に見つかつた事が、明かに氣まづいやうであつた。同時に彼も何となく口が利き悪い氣もちになつて、暫くは入日の光に煙つた河原蓬の中へ佇みながら、艶々と水をかぶつてゐる黑馬の毛並を眺めてゐた。が、追ひ追ひその沈默が、妙に苦しくなり始めたので、とり敢へず話題を開拓すべく、目前の馬を指さしながら、

「好い馬だな。持主は誰だい。」と、まづ聲をかけた。すると意外にも若者は得意らしい眼を擧げて、

「私です。」と返事をした。

「さうか。そりや――」

彼は感嘆の言葉を呑みこむと、又元の通り口を噤んでしまつた。が、さすがに若者は素知らぬ

顔も出來ないと見えて、
「先達あの勾玉を御預りしましたが――」と、ためらひ勝ちに切り出した。
「うん、渡してくれたかい。」
彼の眼は子供のやうに、純粹な感情を湛へてゐた、若者は彼と眼を合はすと、慌ててその視線を避けながら、故に馬の足搔くのを叱つて、
「ええ、渡しました。」
「さうか。それでおれも安心した。」
「ですが――」
「ですが？　何だい。」
「急には御返事が出來ないと云ふ事でした。」
「何、急がなくつても好い。」
彼は元氣よくかう答へると、もう若者には用がないと云つたやうに、夕霞のたなびいた春の河原を元來た方へ歩き出した。彼の心の中には、今までにない幸福の意識が波立つてゐた。河原蓬

も、空も、その空に一羽啼いてゐる雲雀も、悉く彼には嬉しさうであつた。彼は頭を擧げて歩きながら、危く霞に紛れさうな雲雀と時々話をした。

「おい、雲雀。お前はおれが羨ましさうだな。羨ましくないと？ 嘘をつけ。それなら何故そんなに啼き立てるのだ。雲雀。おい、雲雀。返事をしないか。雲雀。……」

十八

素戔嗚はそれから五六日の間、幸福そのものゝやうな日を送つた。所がその頃から部落には、作者は誰とも判然しない、新しい歌が流行り出した。それは醜い山鴉が美しい白鳥に戀をして、ありとあらゆる空の鳥の哂ひ物になつたと云ふ歌であつた。彼はその歌が唱はれるのを聞くと、今まで照してゐた幸福の太陽に、雲が懸つたやうな心もちがした。

しかし彼は多少の不安を感じながら、まだ幸福の夢から覺めずにゐた。既に美しい白鳥は、醜い山鴉の戀を容れてくれた。ありとあらゆる空の鳥は、愚な彼を哂ふのではなく、反つて仕合せな彼を羨んだり妬んだりしてゐるのであつた。——さう彼は信じてゐた。少くともさう信ぜずに

はゐられないやうな氣がしてゐた。

だから彼はその後又、あの牛飼の若者に遇つた時も、唯同じ答を聞きたいばかりに、「あの勾玉は確に渡してくれたのだらうな。」と、輕く念を押しただけであつた。若者はやはり間の惡るさうな顏をしながら、

「ええ、確に渡しました。しかし御返事の所は――」とか何とか、曖昧に言葉を濁してゐた。それでも彼は渡したと云ふ言葉に滿足して、その上立ち入つた事情なぞは尋ねようとも思はなかつた。

すると三四日經つた或夜の事、彼が山へ寢鳥でも捕へに行かうと思つて、月明りを幸、部落の往來を獨りぶらぶら歩いてゐると、誰か笛を吹きすさびながら、薄い靄の下りた中を、これも悠悠と來かゝるものがあつた。野蠻な彼は幼い時から、歌とか音樂とか云ふものには更に興味を感じなかつた。が、藪木の花の匂のする春の月夜に包まれながら、だんだんこちらへやつて來る笛の聲に耳を傾けるのは、彼にとつても何となく、心憎い氣のするものであつた。

その内に彼とその男とは、顏を合せるばかりに近くなつて來た。しかし相手は鼻の先へ來ても、

相不變笛を吹き止めなかつた。彼は路を讓りながら、天心に近い月を負つて、相手の顏を透かして見た。美しい顏、燦びやかな勾玉、それから口に當てた斑竹の笛――相手はあの背の高い、風流な若者に違ひなかつた。彼は勿論この若者が、彼の野性を輕蔑する敵の一人だと云ふことを承知してゐた。そこで始は昂然と肩を擧げて、挨拶もせずに通り過ぎようとした。が、愈々二人がすれ違はうとした時、何かゞもう一度彼の眼を若者の體へ惹きつけた。と、相手の胸の上には、彼の母が遺物に殘した、あの琅玕の勾玉が、曇りない月の光に濡れて、水々しく輝いてゐたではないか。

「待て。」

彼は咄嗟に腕を伸ばすと、若者の襟をしつかり摑んだ。

「何をする。」

若者は思はずよろめきながら、さすがに懸命の力を絞つて、とられた襟を振り離さうとした。が、彼の手はさながら萬力にかけた如く、いくらもがいても離れなかつた。

十九

「貴様はこの勾玉を誰に貰つた？」
素戔嗚は相手の喉をしめ上げながら噛みつくやうにかう尋ねた。
「離せ。こら、何をする。離さないか。」
「貴様が白状するまでは離さない。」
「離さないと――」
若者は襟を取られた儘、斑竹の笛をふり上げて、横拂ひに相手を打たうとした。が、素戔嗚は手もとを緩めるまでもなく、遊んでゐた片手を動かして、苦もなくその笛を扭ぢ取つてしまつた。
「さあ、白状しろ。さもないと、貴様を絞殺すぞ。」
實際素戔嗚の心の中には、狂暴な怒が燃え立つてゐた。
「この勾玉は――おれが――おれが馬と取換へたのだ。」
「嘘をつけ。これはおれが――」

「あの娘に」と云ふ言葉が、何故か素戔嗚の舌を硬ばらせた。彼は相手の蒼ざめた顔に熱い息を吹きかけながら、もう一度唸るやうな聲を出した。

「嘘をつけ。」

「離さないか。貴様こそ、——ああ、喉が絞まる。——あれ程離すと云つた癖に、貴様こそ嘘をつく奴だ。」

「證據があるか、證據が。」

すると若者はまだ必死に、もがきながら、

「あいつに聞いて見るが好い。」と、吐き出すやうな、一言を洩らした。「あいつ」があの牛飼ひの若者であると云ふ事は、怒り狂つた素戔嗚にさへ、問ふまでもなく明かであつた。

「よし。ぢや、あいつに聞いて見よう。」

素戔嗚は言下に意を決すると、いきなり相手を引つ立てながら、あの牛飼ひの若者がたつた一人住んでゐる、其處を餘り離れてゐない小家の方へ歩き出した。その途中も時々相手は、襟にかかつた素戔嗚の手を一生懸命に振り離さうとした。しかし彼の手は相不變、鐵のやうにしつかり

相手を捉へて、打つても、叩いても離れなかつた。
　空には依然として、春の月があつた。往來にも藪木の花の匂が、やはりうす甘く立ち罩めてゐた。が、素戔嗚の心の中には、まるで大暴風雨の天のやうに、渦巻く疑惑の雲を裂いて、憤怒と嫉妬との稻妻が、絶え間なく閃き飛んでゐた。彼を欺いたのはあの娘であらうか。それとも牛飼ひの若者であらうか。それとも又この相手が何か狡猾な手段を弄して、娘から勾玉を卷き上げたのであらうか。……
　彼はずるずる若者を引きずりながら、とうとう目ざす小家まで來た。見ると幸小家の主人は、まだ眠らずにゐると見えて、仄かな一盞の燈火の光が、戶口に下げた簾の隙から、軒先の月明と鬪いでゐた。襟をつかまれた若者は、丁度この戶口の前へ來た時、始めて彼の手から自由にならうとする、最後の努力に成功した、と思ふと時ならない風が、さつと若者の顏を拂つて、足さへ宙に浮くが早いか、あたりが俄に暗くなつて、唯一しきり火花のやうな物が、四方へ散亂するやうな心もちがした。――彼は戶口へ來ると同時に、犬の子よりも造作なく、月の光を堰いた簾の內へ、まつさかさまに投げこまれたのであつた。

二十

家の中にはあの牛飼の若者が、土器にともした油火の下に、夜なべの藁沓を造つてゐた。彼は戸口に思ひがけない人のけはひが聞えた時、一瞬間忙しい手を止めて、用心深く耳を澄ませたが、その途端に軒の簾が、大きく夜を煽つたと思ふと、突然一人の若者が、取り亂した藁のまん中へ、仰向けざまに轉げ落ちた。

彼はさすがに膽を消して、うつかりあぐらを組んだ儘、半ば引きちぎられた簾の外へ、思はず狼狽の視線を飛ばせた。すると其處には素戔嗚が、油火の光を全身に浴びて、顏中に怒りを漲らせながら、小山の如く戸口を塞いでゐた。若者はその姿を見るや否や、死人のやうな色になつて、暫く唯狹い家の中をきよろきよろ見廻すより外はなかつた。素戔嗚は荒々しく若者の前へ歩み寄ると、ぢつと彼の顏を睨み据ゑて、

「おい。貴樣は確にあの娘へ、おれの勾玉を渡したと云つたな。」と忌々しさうな聲をかけた。

若者は答へなかつた。

「それがこの男の頸に懸つてゐるのは一體どうした始末なのだ？」

素戔嗚はあの美貌の若者へ、燃えるやうな瞳を移した。が、彼はやはり藁の中に、氣を失つたのか、假死か、眼を閉ぢた儘倒れてゐた。

「渡したと云ふのは嘘か？」

「いえ、嘘ぢやありません。ほんとうです。ほんとうです。」

牛飼ひの若者は、始めて必死の聲を出した。

「ほんとうですが、――ですが、實はあの琅玕の代りに、珊瑚の――その管玉を……」

「どうして又そんな眞似をしたのだ？」

素戔嗚の聲は雷の如く、度を失つた若者の心を一言毎に打ち碎いた。彼はとうとうしどろもどろに、美貌の若者が勸める通り、琅玕と珊瑚と取り換へた上、禮には黑馬を貰つた事まで殘りなく白狀してしまつた。その話を聞いてゐる内に、刻々素戔嗚の心の中には、泣きたいやうな、叫びたいやうな息苦しい羞憤の念が、大風の如く昂まつて來た。

「さうしてその玉は渡したのだな。」

「渡しました。渡しましたが——」

若者は逡巡した。

「渡しましたが——あの娘は——何しろああ云ふ娘ですし、——白鳥は山鴉になどと——、失禮な口上ですが、——受け取らないと申し——」

若者は皆まで云はない内に、仰向けにどうと蹴倒された。蹴倒されたと思ふと、大きな拳がしたゝか彼の頭を打つた。その拍子に燈火の盞が落ちて、あたりの床に亂れた藁は、忽ち一面の炎になつた。牛飼ひの若者はその火に毛脛を燒かれながら、悲鳴を擧げて飛び起きると、無我夢中に高這ひをして、裏手の方へ逃げ出さうとした。

怒り狂つた素戔嗚は、まるで傷いた猪のやうに、猛然とその後から飛びかかつた。いや、將に飛びかからうとした時、今度は足もとに倒れてゐた、美貌の若者が身を起すと、これも死物狂に劍を拔いて、火の中に片膝ついた儘、いきなり彼の足を拂はうとした。

二十一

その劍の光を見ると、突然素戔嗚の心の中には、長い間眠つてゐた、流血に憧れる野性が目ざめた。彼は素早く足を縮めて、相手の武器を飛び越えると、咄嗟に腰の劍を拔いて、牛の吼えるやうな聲を擧げた。さうしてその聲を擧げるが早いか、無二無三に相手へ斬つてかゝつた。彼等の劍は凄じい音を立てゝ、濛々と渦卷く煙の中に、二三度眼に痛い火花を飛ばせた。

しかし美貌の若者は、勿論彼の敵ではなかつた。彼の振り廻す幅廣の劍は、一太刀毎にこの若者を容赦なく死地へ追ひこんで行つた。いや、彼は數合の内に、殆ど一氣に相手の頭を斬り割る所まで肉薄してゐた。するとその途端に甕が一つ、何處からか彼の頭を目がけて、勢好く宙を飛んで來た。が、幸それは狙ひが外れて、彼の足もとへ落ちると共に、粉微塵に碎けてしまつた。彼は太刀打を續けながら、猛り立つた眼を擧げて、忙しく家の中を見廻した。見廻すと、裏手の蔀戸の前には、さつき彼に後を見せた、あの牛飼ひの若者が、これも眼を血走らせた儘、相手の危急を救ふべく、今度は大きな桶を一つ、持ち上げてゐる所であつた。

彼は再び牛のやうな叫び聲を擧げながら、若者が桶を投げるより先に、渾身の力を劍にこめて、相手の腦天へ打ち下さうとした。が、その時旣に大きな桶は、炎の空に風を切つて、ぐわんと彼

の頭に中つた。彼はさすがに眼が眩んだのか、大風に吹かれた旗竿のやうに思はずよろ／＼足を亂して、危く其處へ倒れようとした。その暇に相手の若者は、奮然と身を躍らせると、――もう火の移つた簾を衝いて、片手に劍を提げながら、靜な外の春の月夜へ、一目散に逃げて行つた。

彼は齒を喰ひしばつた儘、漸く足を踏み固めた。しかし眼を開いて見ると、火と煙とに溢れた家の中には、とうに誰もゐなくなつてゐた。

「逃げたな、何、逃げようと云つても、逃がしはしないぞ。」

彼は髮も着物も燒かれながら、戸口の簾を切り拂つて、蹌踉と家の外へ出た。月明に照らされた往來は、屋根を燃え拔いた火の光を得て、眞晝のやうに明るかつた。さうしてその明るい往來には、部落の家々から出て來た人の姿が、黑々と何人も立ち並んでゐた。のみならずその人影は、劍を下げた彼を見ると、誰からともなく騷ぎ立つて、「素戔嗚だ。素戔嗚だ。」と呼び交す聲が、忽ち高くなり始めた。彼はさう云ふ聲を浴びて、暫くはぼんやり佇んで居た。又實際それより外に、何の分別もつかない程、殺氣立つた彼の心の中には、氣も狂ひさうな混亂が、益々烈しくなつて居たのであつた。

その内に往來の人影は、見る見る數を加へ出した。と同時に騷がしい叫び聲も、何時か憎惡を孕んで居る險惡な調子を帶び始めた。

「火つけを殺せ。」

「盜人を殺せ。」

「素戔嗚を殺せ。」

二十二

此時部落の後にある、草山の楡の木の下には、髯の長い一人の老人が天心の月を眺めながら、悠々と腰を下してゐた。物靜な春の夜は、藪木の花のかすかな匂を柔かく靄に包んだ儘、此處でも唯梟の聲が、丁度山その物の吐息のやうに、一天の疎な星の光を時々曇らせてゐるばかりであつた。

が、その內に眼の下の部落からは、思ひもよらない火事の煙が、風の斷えた中空へ一すぢまつ直に上り始めた。老人はその煙の中に立ち昇る火の粉を眺めても、やはり膝を抱きながら、氣樂

さうに小聲の歌を唱つて、一向驚くらしい氣色も見せなかつた。しかし間もなく部落からは、まるで蜂の巣を壞したやうな人どよめきの音が聞えて來た。のみならずその音は次第に高くざわめき立つて、とうとう戰でも起つたかと思ふ、烈しい喊聲さへ傳はり出した。これにはさすがの老人も、聊か意外な氣がしたと見えて、白い眉をひそめながら、徐に腰を擡げると、兩手を耳へ當てがつて、時ならない部落の騷動をぢつと聞き澄まさうとするらしかつた。

「はてな。劍の音などもするやうだが。」

老人はかう呟きながら、暫くは其處に伸び上つて、絕えず金粉を煽つてゐる火事の煙に見入つてゐた。

すると程なく部落から、逃げて來たらしい七八人の男女が、喘ぎ喘ぎ草山へ上つて來た。彼等の或者は髮を垂れた、十には足りない童兒であつた。或者は肌も見える位、襟や裳紐を取り亂した、寢起きらしい娘であつた。さうして又或者は弓よりも猶腰の曲つた、立居さへ苦しさうな老婆であつた。彼等は草山の上まで來ると、云ひ合せたやうに皆足を止めて、月夜の空を焦してゐる部落の火事へ眼を返した。が、やがてその中の一人が、楡の根がたに佇んだ老人の姿を見るや

否や、氣づかはしさうに寄り添つた。この足弱の一群からは、「思兼尊、思兼尊。」と云ふ言葉が、ため息と一しよに溢れて來た。と同時に胸も露はな、夜目にも美しい娘が一人、「伯父樣。」と聲をかけながら、こちらを振り向いた老人の方へ、小鳥のやうに身輕く走り寄つた。

「どうしたのだ、あの騷ぎは。」

思兼尊はまだ眉をひそめながら、取りすがつた娘を片手に抱いて、誰にともなくかう尋ねた。

「素戔嗚尊がどうした事か、急に亂暴を始めたとか申す事でございますよ。」

答へたのはあの快活な娘でなくて、彼等の中に交つてゐた、眼鼻も見えないやうな老婆であつた。

「何、素戔嗚尊が亂暴を始めた？」

「はい、それ故大勢の若者たちが、尊を搦めようと致しますと、平生尊の味方をする若者たちが承知致しませんで、とうとうあのやうに何年にもない、大騷動が始まつたさうでございますよ。」

思兼尊は考深い目つきをして、部落に上つてゐる火事の煙と、尊の胸にすがつてゐる娘の顏とを見比べた。娘は月に照らされたせいか、鬢の亂れた頰の色が、透き徹るかと思ふ程青ざめ

てゐた。

「火を弄ぶものは、氣をつけないと、――素戔嗚尊ばかりではない。火を弄ぶものは、氣をつけないと――」

尊は皺だらけな顏に苦笑を浮べて、今は更に擴がつたらしい火の手を遙に眺めながら、默つて震へてゐる姪の髮を劬るやうに撫でゝやつた。

二十三

部落の戰ひは翌朝まで續いた。が、寡は遂に衆の敵ではなかつた。素戔嗚は味方の若者たちと共に、とうとう敵の手に生捉られた。日頃彼に惡意を抱いてゐた若者たちは、鞠のやうに彼を縛めた上、いろいろ亂暴な凌辱を加へた。彼は打たれたり蹴られたりする度毎に、ごろごろ地上を轉がりまはつて、牛の吼えるやうな怒聲を擧げた。

部落の老若は悉く、律通り彼を殺して、騷動の罪を贖はせようとした。が、思兼尊と手力雄尊と、この二人の勢力家だけは、容易に贊同の意を示さなかつた。手力雄尊は素戔嗚の罪を憎み

ながらも、彼の非凡な膂力には愛惜の情を感じてゐた。これは同時に又思兼尊が、むざむざ彼程の若者を殺したくない理由でもあつた。のみならず尊は彼ばかりでなく、すべて人間を殺すと云ふ事に、極端な嫌惡を抱いてゐた。——

部落の老若は彼の罪を定める爲に、三日の間議論を重ねた。が、二人の尊たちはどうしても意見を改めなかつた。彼等はそこで死刑の代りに、彼を追放に處する事にした。しかしこの儘、彼の繩を解いて、彼に廣い國外の自由の天地を與へるのは、到底彼等の忍び難い、寛大に過ぎた處置であつた。彼等はまづ彼の鬚を、一本殘らずむしり取つた。それから彼の手足の爪を、まるで貝でも剝がすやうに、未練未釋なく拔いてしまつた。その上彼の繩を解くと、殆ど手足も利かない彼へ、手ん手に石を投げつけたり、慓悍な狩犬をけしかけたりした。彼は血にまみれながら、殆ど高這ひをしないばかりに、蹌踉と部落を逃れて行つた。

彼が高天原の國をめぐる山々の峯を越えたのは、丁度その後二日經つた、空模樣の怪しい午後であつた。彼は山の頂きへ來た時、嶮しい岩むらの上へ登つて、住み慣れた部落の横はつてゐる、盆地の方を眺めて見た。が、彼の眼の下には、唯うす白い霧の海が、それらしい平地をぼんやり

と、透かして見せるばかりであつた。彼はしかし岩の上に、朝燒の空を負ひながら、長い間ぢつと坐つてゐた。すると谷間から吹き上げる風が、昔の通り彼の耳へ、聞き慣れた囁きを送つて來た。「素戔嗚よ。お前は何をさがしてゐるのだ。おれと一しよに來い。おれと一しよに來い。素戔嗚よ。……」

彼は漸く立ち上つた。さうしてまだ知らない國の方へ、徐に山を下り出した。

その内に朝燒の火照りが消えると、ぽつぽつ雨が落ちはじめた。彼は一枚の衣の外に、何もまとつてはゐなかつた。頸珠や劍は云ふまでもなく、生捉りになつた時に奪はれてゐた。雨はこの追放人の上に、おひおひ烈しくなり始めた。風も横なぐりに落して來ては、時々ずぶ濡れになつた衣の裾を裸の脚へたゝきつけた。彼は齒を食ひしばりながら、足もとばかり見つめて歩いた。

實際眼に見えるものは、足もとに重なる岩だけであつた。その外は一面に暗い霧が、山や谷を封じてゐた。霧の中では風雨の音か、それとも谷川の水の音か、凄じくざつと遠近に煮えくり返る音があつた。が、彼の心の中には、それよりも更に凄じく、寂しい怒が荒れ狂つてゐた。

二十四

やがて足もとの岩は、濕つた苔になつた。苔は又間もなく、深い羊歯の茂みになつた。それから丈の高い熊笹に、――何時の間にか素戔嗚は、山の中腹を埋めてゐる森林の中へはいつたのであつた。

森林は容易に盡きなかつた。風雨も依然として止まなかつた。空には樅や栂の枝が、暗い霧を拂ひながら、悩ましい悲鳴を擧げてゐた。彼は熊笹を押し分けて、遮二無二その中を下つて行つた。熊笹は彼の頭を埋めて、絶えず濡れた葉を飛ばせてゐた。まるで森全體が、彼の行手を遮るべく、生きて動いてゐるやうであつた。

彼は休みなく進み續けた。彼の心の内には相不變鬱勃として怒が燃え上つてゐた。が、それにも關らず、この荒れ模樣の森林には、何か狂暴な喜びを眼ざまさせる力があるらしかつた。彼は草木や蔦蘿を腕一ぱいに掻きのけながら、時々大きな聲を出して、吼つて行く風雨に答へたりした。

午も稍過ぎた頃、彼はとうとう一すぢの谷川に、がむしやらな進路を遮られた。谷川の水のたぎる向うは、削つたやうな絶壁であつた。彼はその流れに沿つて、再び熊笹を掻き分けて行つた。すると暫くして向うの岸へ、藤蔓を編んだ棧橋が、水煙と雨のしぶきとの中に、危く懸つてゐる所へ出た。

棧橋を隔てた絶壁には、火食の煙が靡いてゐる、大きな洞穴が幾つか見えた。彼はためらはずに棧橋を渡つて、その穴の一つを覗いて見た。穴の中には二人の女が、爐の火を前に坐つてゐた。二人とも火の光を浴びて、描いたやうに赤く見えた。一人は猿のやうな老婆であつたが、一人はまだ年も若いらしかつた。それが彼の姿を見ると、同時に聲を擧げながら、洞穴の奥へ逃げこまうとした。が、彼は彼等の外に男手のないのを見るが早いか、猛然と穴の中へ突き進んだ。さうしてまづ造作もなく、老婆を其處へ扭ぢ伏せてしまつた。

若い女は壁に懸けた刀子へ手をかけるや否や、素早く彼の胸を刺さうとした。が、彼は片手を揮つて、一打にその刀子を打ち落した。女は更に劍を拔いて、執念く彼を襲つて來た。しかし劍は一瞬の後、やはり鏘然と床に落ちた。彼はその劍を拾ひ取ると、切先を齒に啣へながら苦もな

く二つに折つて見せた。さうして冷笑を浮べた儘、戰ひを挑むやうに女を見た。
女は旣に斧を執つて、三度彼に手向はうとしてゐた。が、彼が劍を折つたのを見ると、すぐに斧を投げ捨てて、彼の憐に訴ふべく、床の上にひれ伏してしまつた。
「おれは腹が減つてゐるのだ。食事の仕度をしれい。」
彼は捉へてゐた手を緩めて、猿のやうな老婆をも自由にした。それから爐の火の前へ行つて、樂々とあぐらをかいた。二人の女は彼の命令通り、默々と食事の仕度を始めた。

二十五

洞穴の中は廣かつた。壁にはいろいろな武器が懸けてあつた。それが爐の火の光を浴びて、いづれも美々しく輝いてゐた。床には又鹿や熊の皮が、何枚も其處此處に敷いてあつた。その上何から起るのか、うす甘い匂が快く暖な空氣に漂つてゐた。
その内に食事の仕度が出來た。野獸の肉、谷川の魚、森の木の實、干した貝、――さう云ふ物が盤や坏に堆く盛られた儘、彼の前に並べられた。若い女は瓶を執つて、彼に酒を勸むべく、爐

のほとりへ坐りに來た。目近に坐つてゐるのを見れば、色の白い、髮の豐な、愛嬌のある女であつた。

彼は獸のやうに、飮んだり食つたりした。盤や坏は見る見る内に、一つ殘らず空になつた。女は健啖な彼を眺めながら子供のやうに微笑してゐた。彼に刀子を加へようとした、以前の慓悍な氣色などは、何處を探しても見えなかつた。

「さあ、これで腹は出來た。今度は着る物を一枚くれい。」

彼は食事をすませると、かう云つて、大きな欠伸をした。女は洞穴の奧へ行つて、絹の着物を持つて來た。それは今まで彼の見た事のない、精巧な織模樣のある着物であつた。彼は身仕度をすませると、壁の上の武器の中から、頭椎の劍を一振とつて、左の腰に結び下げた。それから又爐の火の前へ行つて、さつきのやうにあぐらを搔いた。

「何かまだ御用がございますか。」

暫くの後、女は又側へ來て、ためらふやうな尋ね方をした。

「おれは主人の歸るのを待つてゐるのだ。」

「待つて、――どうなさるのでございますか。」

「太刀打をしようと思ふのだ。おれは女を劫して、盗人を働いたなどとは云はれたくない。」

女は顔にかかる髪を掻き上げながら、鮮な微笑を浮べて見せた。

「それでは御待ちになるがものはございません。私がこの洞穴の主人なのでございますから。」

素戔嗚は意外の感に打たれて、思はず眼を大きくした。

「男は一人もゐないのか。」

「一人も居りません。」

「この近くの洞穴には？」

「皆私の妹たちが、二三人づつ住んで居ります。」

彼は顔をしかめた儘二三度頭を強く振つた。火の光、床の毛皮、それから壁上の太刀や劔、――すべてが彼には、怪しげな幻のやうな心もちがした。殊にこの若い女は、きらびやかな頸珠や劔を飾つてゐるだけに、餘計人間離れのした、山媛のやうな氣がするのであつた。しかし風雨の森林を長い間さまよつた後この危害の惧のない、暖な洞内に坐つてゐるのは、兎に角快いには

違ひなかつた。

「妹たちは大勢ゐるのか。」

「十六人居ります。――唯今姥が如らせに參りましたから、その内に皆御眼にかかりに、出て參るでございませう。」

成程さう云はれて見れば、あの猿のやうな老婆の姿は、何時の間にか見えなくなつてゐた。

二十六

素戔嗚は膝を抱へた儘、洞外をどよもす風雨の音にぼんやり耳を傾けてゐた。すると女は爐の中へ、新に焚き木を加へながら、

「あの――御名前は何と仰有いますか。私は大氣都姫と申しますが。」と云つた。

「おれは素戔嗚だ。」

彼がかう名乘つた時、大氣都姫は驚いた眼を擧げて、今更のやうにこの無樣な若者を眺めた。素戔嗚の名は彼女の耳にも、明かに熟してゐるやうであつた。

「では今まではあの山の向うの、高天原の國にいらしつたのでございますか。」

彼は默つて頷いた。

「高天原の國は、好い所だと申すではございませんか。」

この言葉を聞くと共に、一時靜まつてゐた心頭の怒火が、又彼の眼の中に燃えあがつた。

「高天原の國か。高天原の國は、鼠が猪よりも強い所だ。」

大氣都姫は微笑した。その拍子に美しい齒が、鮮に火の光に映つて見えた。

「此處は何と云ふ所だ？」

彼は強ひて冷かに、かう話頭を轉換した。が、彼女は微笑を含んで、彼の逞しい肩のあたりへぢつと眼を注いだ儘、何ともその問に答へなかつた。彼は苛立たしい眉を動かして、もう一度同じ事を繰返した。大氣都姫は始めて我に返つたやうに、滴るやうな媚を眼に浮べて、

「此處でございますか。此處は——此處は猪が鼠より強い所でございます。」と答へた。

その時俄に人のけはひがして、あの老婆を先頭に、十五人の若い女たちが、風雨にめげた氣色もなく、ぞろぞろ洞穴の中へはいつて來た。彼等は皆頰に紅をさして、高々と黑髮を束ねてゐた。

それが順々に大氣都姫と、親しさうな挨拶を交換すると、呆氣にとられた彼のまはりへ、馴れ馴れしく手ん手に席を占めた。頸珠の色、耳環の光、それから着物の絹ずれの音、——洞穴の内はさう云ふ物が、榾明りの中に充み滿ちたせいか、急に狹くなつたやうな心もちがした。

十六人の女たちは、すぐに彼を取りまいて、かう云ふ山の中にも似合はない、陽氣な酒盛を開き始めた。彼は始は啞のやうに、唯勸められる盃を一息にぐいぐい飲み干してゐた。が、醉がまはつて來ると、追ひおひ大きな聲を擧げて、笑つたり話したりする樣になつた。女たちの或者は、玉を飾つて琴を彈いた。又或者は、盃を控へて、艷かしい戀の歌を唱つた。洞穴は彼等のゑらぐ聲に、鳴りどよむばかりであつた。

その内に夜になつた。老婆は爐に焚き木を加へると共に、幾つも油火の燈臺をともした。その晝のやうな光の中に、彼は泥のやうに醉ひ痴れながら、前後左右に周旋する女たちの自由になつてゐた。十六人の女たちは、時々彼を奪ひ合つて、互に嬌嗔を帶びた聲を立てた。が、大抵は大氣都姫が、妹たちの怒には頓着なく、酒に中つた彼を壟斷してゐた。彼は風雨も、山々も、或は又高天原の國も忘れて、洞穴を罩めた脂粉の氣の中に、全く沈湎してゐるやうであつた。唯その

大騷ぎの最中にも、あの猿のやうな老婆だけは、靜に片隅に蹲つて、十六人の女たちの、人目を憚らない醉態に皮肉な流し目を送つてゐた。

二十七

夜は次第に更けて行つた。空になつた盤や瓶は、時々けたゝましい音を立てゝ、床の上にころげ落ちた。床の上に敷いた毛皮も、絶えず机から滴る酒に、何時かぐつしより濡らされてゐた。十六人の女たちは、殆ど正體もないらしかつた。彼等の口から洩れるものは、唯意味のない笑ひ聲か、苦しさうな吐息の音ばかりであつた。

やがて老婆は立ち上つて、明るい油火の燈臺を一つ一つ消して行つた。後には爐に消えかゝつた、煤臭い榾の火だけが殘つた。そのかすかな火の光は、十六人の女に虐まれてゐる、小山のやうな彼の姿を朦朧と何時までも照してゐた。………

翌日彼は眼をさますと、洞穴の奧にしつらへた、絹や毛皮の寢床の中に、たつた一人横になつてゐた。寢床には菅疊を延べる代りに、堆く桃の花が敷いてあつた。昨日から洞中に溢れてゐた、

あのうす甘い、不思議な匂は、この桃の花の匂に違ひなかつた。彼は鼻を鳴らしながら、暫くは唯ぼんやりと岩の天井を眺めてゐた。すると氣違ひじみた昨夜の記憶が、夢の如く眼に浮んで來た。と同時に又妙な腹立たしさが、むらむらと心頭を襲ひ出した。

「畜生。」

素戔嗚はかう呻きながら、勢よく寢床を飛び出した。その拍子に桃の花が、煽つたやうに空へ舞ひ上つた。

洞穴の中には例の老婆が、餘念なく朝飯の仕度をしてゐた。大氣都姫は何處へ行つたか、全く姿を見せなかつた。彼は手早く靴を穿いて、頭椎の太刀を腰に帶びると、老婆の挨拶には頓着なく、大股に洞外へ歩を運んだ。

微風は彼の頭から、すぐさま宿醉を吹き拂つた。彼は兩腕を胸に組んで、谷川の向うに戰いでゐる、さわやかな森林の梢を眺めた。森林の空には高い山々が、中腹に懸つた靄の上に、巑岏たる肌を曝してゐた。しかもその巨大な山々の峯は、既に朝日の光を受けて、まるで彼を見下しながら、聲もなく昨夜の狂態を嘲笑つてゐるやうに見えるのであつた。

この山々と森林とを眺めてゐると、彼は急に洞穴の空氣が、嘔吐を催す程不快になつた。今は爐の火も、瓶の酒も、乃至寢床の桃の花も、悉く忌はしい腐敗の匂に充滿してゐるとしか思はれなかつた。殊にあの十六人の女たちは、いづれも死穢を隱す爲に、巧な紅粉を裝つてゐる、屍骨のやうな心もちさへした。彼はそこで山々の前に、思はず深い息をつくと、悄然と頭を低れながら、洞穴の前に懸つてゐる藤蔓の橋を渡らうとした。

が、その時賑かな笑ひ聲が、靜な谷間に谺しながら、活き活きと彼の耳にはいつた。彼は我知らず足を止めて、聲のする方を振り返つた。と、洞穴の前に通つてゐる、細い岨路の向うから、十五人の妹をつれた、昨日よりも美しい大氣都姫が、眼早く彼の姿を見つけて、眩い絹の裳を飜しながら、こちらへ急いで來る所であつた。

「素戔嗚尊。素戔嗚尊。」

彼等は小鳥の囀るやうに、口々に彼を呼びかけた。その聲は殆ど宿命的に、折角橋を渡りかけた素戔嗚の心を蕩漾させた。彼は彼自身の腑甲斐なさに驚きながら、何時か顏中に笑を浮べて、彼等の近づくのを待ちうけてゐた。

二十八

それ以來素戔嗚は、この春のやうな洞穴の中に、十六人の女たちと放縦な生活を送るやうになつた。

一月ばかりは、瞬く暇に過ぎた。

彼は毎日酒を飲んだり、谷川の魚を釣つたりして暮らした。谷川の上流には瀑があつて、その又瀑のあたりには年中桃の花が開いてゐた。十六人の女たちは、朝毎にこの瀑壺へ行つて、桃花の匂を浸した水に肌を洗ふのが常であつた。彼はまだ朝日のささない内に、女たちと一しよに水を浴ぶべく、遠い上流まで熊笹の中を、分け上る事も稀ではなかつた。

その内に偉大な山々も、谷川を隔てた森林も、おひおひ彼と交渉のない、死んだ自然に變つて行つた。彼は朝夕靜寂な谷間の空氣を呼吸しても、寸毫の感動さへ受けなくなつた。のみならずさう云ふ心の變化が、全然彼には氣にならなかつた。だから彼は安んじて、酒びたりな日毎を迎へながら、幻のやうな幸福を樂んでゐた。

しかし或夜夢の中に、彼は山上の岩むらに立つて、再び高天原の國を眺めやつた。高天原の國には日が當つて、天の安河の大きな水が燒太刀の如く光つてゐた。彼は勁い風に吹かれながら、眼の下の景色を見つめてゐると、急に云ひやうのない寂しさが、胸一ぱいに漲つて來た、さうして思はず、聲を立てゝ泣いた。その聲にふと眼がさめた時、涙は實際彼の頰に、冷たい痕を止めてゐた。彼はそれから身を起して、かすかな榾明りに照らされた、洞穴の中を見廻した。彼と同じ桃花の寢床には、酒の匂のする大氣都姫が、安らかな寢息を立ててゐた。これは勿論彼にとつて、珍しい事でも何でもなかつた。が、その姿に眼をやると、彼女の顏は不思議にも、眉目の形こそ變らないが、垂死の老婆と同じ事であつた。

彼は恐怖と嫌惡とに、わななく齒を噛みしめながら、そつと生暖い寢床を辷り脫けた。さうして素早く身仕度をすると、あの猿のやうな老婆も感づかない程、こつそり洞穴の外へ忍んで出た。外には暗い夜の底に、谷川の音ばかりが聞えてゐた。彼は藤蔓の橋を渡るが早いか、獸のやうに熊笹を潜つて、木の葉一つ動かない森林を、奧へ奧へと分けて行つた。星の光、冷かな露、苔の匂、梟の眼――すべてが彼には今までにない、爽かな力に溢れてゐるやうであつた。

彼は後も振返らずに、夜が明けるまで歩み續けた。森林の夜明けは美しかつた。暗い栂や樅の空が燃えるやうに赤く染まつた時、彼は何度も聲を擧げて、あの洞穴を逃れ出した彼自身の幸福を祝したりした。

やがて太陽が、森の眞上へ來た。彼は梢の山鳩を眺めながら、弓矢を忘れて來た事を後悔した。が、空腹を充すべき木の實は、何處にでも澤山あつた。

日の暮は嶮しい崖の上に、寂しさうな彼を見出した。森はその崖の下にも、針葉樹の鋒を並べてゐた。彼は岩かどに腰を下して、谷に沈む日輪を眺めながら、うす暗い洞穴の壁に懸つてゐる、劍や斧を思ひやつた。すると何故か、山々の向うから、十六人の女の笑ひ聲が、かすかに傳はつて來るやうな心もちがした。それは想像も出來ない位、怪しい誘惑に富んだ幻であつた。彼は暮れかゝる岩と森とを、食ひ入るやうに見据ゑた儘、必死にその誘惑を禦がうとした。が、あの洞穴の榾火の思ひ出は、まるで眼に見えない網のやうに、ぢりぢり彼の心を捉へて行つた。

二十九

素戔嗚は一日の後、又あの洞中に歸つて來た。十六人の女たちは、皆彼の逃げた事も知らないやうな顏をしてゐた。それはどう考へても、無關心を裝つてゐるとは思はれなかつた。寧ろ彼等は始めから、或不思議な無感受性を持つてゐるやうな氣がするのであつた。

この彼等の無感受性は、當座の間彼を苦しませた。が、更に一月ばかり經つて見ると、反つて彼はその爲に、前よりも猶安々と、何時までも醒めない醉のやうな、怪しい幸福に浸る事が出來た。

一年ばかりの月日は、再び夢のやうに通り過ぎた。

すると或日女たちは、何處から洞穴へつれて來たか、一頭の犬を飼ふやうになつた。犬は全身まつ黑な、犢程もある牡であつた。彼等は、殊に大氣都姬は、人間のやうにこの犬を可愛がつた。彼も始は彼等と一しよに、盤の魚や獸の肉を投げてやる事を嫌はなかつた。或は又酒後の戲れに、相撲をとる事も度々あつた。犬は時々前足を飛ばせて、醉ひ痴れた彼を投げ倒した。彼等はその度に手を叩いて、賑かに笑ひ興じながら、意氣地のない彼を嘲り合つた。所が犬は一日毎に、益々彼等に愛されて行つた。大氣都姬はとうとう食事の度に、彼と同じ盤

や瓶を、犬の前にも並べるやうになつた。彼は苦い顔をして、一度は犬を逐ひ拂はうとした。が、彼女は何時になく、美しい眼の色を變へて、彼の我儘を咎め立てた。その怒を犯してまでも、犬を成敗しようと云ふ勇氣は、既に彼には失はれてゐた。彼はそこで犬と共に、肉を食つたり酒を飲んだりした。犬は彼の不快を知つてゐるやうに、何時も盤を舐め廻しながら、彼の方へ牙を剝いて見せた。

しかしその間は、まだ好かつた。或朝彼は、女たちに遲れて、例の通り瀑を浴びに行つた。季節は夏に近かつたが、そのあたりの桃は相不變、谷間の霧の中に開いてゐた。彼は熊笹を押し分けながら、桃の落花を湛へてゐる、すぐ下の瀑壺へ下りようとした。その時彼の眼は思ひがけなく、水を浴びてゐる×××××黑い獸が動いてゐるのを見た。×××××××××××××××××××××。彼はすぐに腰の劍を拔いて、一刺しに犬を刺さうとした。が、女たちはいづれも犬をかばつて、自由に劍を揮はせなかつた。その暇に犬は水を垂らしながら、瀑壺の外へ躍り上つて、洞穴の方へ逃げて行つてしまつた。

それ以來夜毎の酒盛りにも、十六人の女たちが、一生懸命に奪ひ合ふのは、素戔嗚ではなくて、

黒犬であつた。彼は酒に中りながら、洞穴の奥に蹲つて、一夜中醉泣きの涙を落してゐた。彼の心は犬に對する、燃えるやうな嫉妬で一ぱいであつた。が、その嫉妬の淺間しさなどは、寸毫も念頭には上らなかつた。

或夜彼が又洞穴の奥に、泣き顔を兩手へ埋めてゐると、突然誰かが忍びよつて、兩手に彼を抱きながら艶めかしい言葉を囁いた。彼は意外な眼を擧げて、油火には遠い薄暗がりに、ぢつと相手の顔を透かして見た。と同時に怒聲を發して、いきなり相手を突き放した。相手は一たまりもなく床に倒れて、苦しさうな呻吟の聲を洩らした。——それはあの腰も碌に立たない、猿のやうな老婆の聲であつた。

三十

老婆を投げ倒した素戔嗚は、涙に濡れた顔をしかめた儘、虎のやうに身を起した。彼の心はその瞬間、嫉妬と憤怒と屈辱との煮え返つてゐる坩堝であつた。彼は眼前に犬と戯れてゐる、十六人の女たちを見るが早いか、頭椎の太刀を引き拔きながら、この女たちの群つた中へ、我を忘れ

て突進した。

犬は咄嗟に身を飜して、危く彼の太刀を避けた。と同時に女たちは、哮り立つた彼を引き止むべく、右からも左からもからみついた。が、彼はその腕を振り離して、切先下りにもう一度狂ひまはる犬を刺さうとした。

しかし太刀は犬の代りに、彼の武器を奪はうとした、大氣都姫の胸を刺した。彼女は苦痛の聲を洩らして、のけざまに床の上へ倒れた。それを見た女たちは、皆悲鳴を擧げながら、糅然と四方へ逃げのいた。燈臺の倒れる音、けたゝましく犬の吠える聲、それから盤だの瓶だのが粉微塵に碎ける音、――今まで笑ひ聲に滿ちてゐた洞穴の中も、一しきりはまるで嵐のやうな、混亂の底に投げこまれてしまつた。

彼は彼自身の眼を疑ふやうに、一刹那は茫然と佇んでゐた。が、忽ち太刀を捨てゝ、兩手に頭を抑へたと思ふと、息苦しさうな呻き聲を發して、弦を離れた矢よりも早く、洞穴の外へ走り出した。

空には暈のかゝつた月が、無氣味な位ぼんやり蒼ざめてゐた。森の木々もその空に、暗枝をさ

し交せて、ひつそり谷を封じた儘、何か凶事が起るのを待ち構へてゐるやうであつた。が、彼は何も見ず、何も聞かずに走り續けた。熊笹は露を振ひながら、恰も彼を埋めようとする如く、何處まで行つても浪を立てゝゐた。時々夜鳥がその中から、翼の薄い燐光を帶びて、風もない梢へ昇つて行つた。……

明け方彼は彼自身を、大きな湖の岸に見出した。湖は曇つた空の下に丁度鉛の板かと思ふ程、波一つ揚げてゐなかつた。周圍に聳えた山々も重苦しい夏の綠の色が、僅に人心地のついた彼には、殆ど永久に癒やす事を知らない、憂鬱そのものゝ如くに見えた。彼は岸の熊笹を分けて、乾いた砂の上に下りた。それから其處に腰を下して、寂しい水面へ眼を送つた。湖には遠く一二點、かいつぶりの姿が浮んでゐた。

すると彼の心には、急に悲しさがこみ上げて來た。彼は高天原の國にゐた時、無數の若者を敵にしてゐた。それが今では、一匹の犬が、彼の死敵のすべてであつた。――彼は兩手に顏を埋めて、長い間大聲に泣いてゐた。

その間に空模樣が變つた。對岸を塞いだ山の空には、二三度鍵の手の稻妻が飛んだ。續いて殷

殷と雷が鳴つた。彼はそれでも泣きながら、ぢつと砂の上に坐つてゐた。やがて雨を孕んだ風が、大うねりに岸の熊笹を渡つた。と、俄に湖が暗くなつて、ざわざわ波が騷ぎ始めた。
雷が猶鳴り續けた。その內に對岸の山が煙り出すと、何處ともなくざつと木々が鳴つて、一旦暗くなつた湖が、見る見る向うから又白くなつた。彼は始めて顏を擧げた。その途端に天を傾けて、瀑のやうな大雨が、沛然と彼を襲つて來た。

三十一

對岸の山は既に見えなくなつた。湖も立ち罩めた雲煙の中に、やゝともすると紛れさうであつた。唯、稻妻の閃く度に、波の逆立つた水面が、一瞬間遠くまで見渡された。と思ふと雷の音が、必空を搔きむしるやうに、續けさまに轟々と爆發した。
素戔嗚はずぶ濡れになりながら、未に汀の砂を去らなかつた。彼の心は頭上の空より、更に晦濛の底へ沈んでゐた。其處には穢れ果てた自己に對する、憤懣より外に何もなかつた。しかも今はその憤懣を恣に洩らす力さへ、――大樹の幹に頭を打ちつけるか、湖の底に身を投ずるか、

一氣に自己を亡すべき、最後の力さへ涸れ盡きてゐた。だから彼は心身とも、まるで破れた船のやうに、空しく騷ぎ立つ波に臨んだ儘、まつ白に落す豪雨を浴びて、默然と坐つてゐるより外はなかつた。

天は愈々暗くなつた。風雨も一層力を加へた。さうして——突然彼の眼の前が、ぎらぎらと凄まじい薄紫になつた。山が、雲が、湖が皆半空に浮んで見えた。同時に地軸も碎けたやうな、落雷の音が耳を裂いた。彼は思はず飛び立たうとした。が、すぐに又前へ倒れた。雨は俯伏せになつた彼の上へ未練未釋なく降り濺いだ。しかし彼は砂の中に半ば顏を埋めた儘、身動きをする氣色も見えなかつた。……

何時間か過ぎた後、失神した彼は徐に、砂の上から起き上つた。彼の前には靜な湖が、油のやうに開いてゐた。空にはまだ雲が立ち迷つて唯一幅の日の光が、丁度對岸の山の頂へ帶のやうに長く落ちてゐた。さうしてその光のさした所が、其處だけ外より鮮かな黄ばんだ綠に仄めいてゐた。

彼は茫然と眼を擧げて、この平和な自然を眺めた。空も、木々も、雨後の空氣も、すべてが彼

には、昔見た夢の中の景色のやうな、懷しい寂寞に溢れてゐた。「何かおれの忘れてゐた物が、あの山々の間に潜んでゐる。」――彼はさう思ひながら、貪るやうに湖を眺め續けた。しかしそれが何だつたかは、遠い記憶を辿つて見ても、容易に彼には思ひ出せなかつた。

その内に雲の影が移つて、彼を圍む眞夏の山々へ、一時に日の光が照り渡つた。山々を埋める森の綠は、それと共に美しく湖の空に燃え上つた。この時彼の心には異樣な戰慄が傳はるのを感じた。彼は息を呑みながら、熱心に耳を傾けた。すると重なり合つた山々の奧から、今まで忘れてゐた自然の言葉が聲のない雷のやうに轟いて來た。

彼は喜びに戰いた。戰きながらその言葉の威力の前に壓倒された。彼はしまひには砂に伏して、必死に耳を塞がうとした。が、自然は語り續けた。彼は嫌でもその言葉に、ぢつと聞き入るより途はなかつた。

湖は日に輝きながら、潑溂とその言葉に應じた。彼は――その汀にひれ伏してゐる、小さな一人の人間は、代る代る泣いたり笑つたりしてゐた。が、山々の中から湧き上る聲は、彼の悲喜には頓着なく、恰も目に見えない波濤のやうに、絶えまなく彼の上へ漲つて來た。

三十二

素戔嗚はその湖の水を浴びて、全身の穢れを洗ひ落した。それから岸に臨んでゐる、大きな樅の木の陰へ行つて、久しぶりに健な眠に沈んだ。が、夢はその間も、深い眞夏の空の奥から、鳥の羽根が一すぢ落ちるやうに、靜に彼の上へ舞ひ下つて來た。――

夢の中は薄暗かつた。さうして大きな枯木が一本、彼の前に枝を伸してゐた。

其處へ一人の大男が、何處からともなく歩いて來た。顏ははつきり見えなかつたが、柄に龍の飾のある高麗劍を佩いてゐる事は、その龍の首が朦朧と金色に光つてゐるせいか、一目にもすぐに見分けられた。

大男は腰の劍を拔くと、無造作にそれを鍔元まで、大木の根本へ突き通した。

素戔嗚はその非凡な膂力に、驚嘆しずにはゐられなかつた。すると誰か彼の耳に、

「あれは火雷命だ。」と、囁いてくれるものがあつた。

大男は靜に手を擧げて、彼に何か相圖をした。それが彼には何となく、その高麗劍を拔けと云

ふ相圖のやうに感じられた。さうして急に夢が覺めた。
彼は茫然と身を起した。微風に動いてゐる樅の梢には、既に星が撒かれてゐた。周圍にも薄白い湖の外は、熊笹の戰ぎや苔の匂が、かすかに動いてゐる夕闇があつた。彼は今見た夢を思ひ出しながら、さう云ふあたりへ何氣なく、懶い視線を漂はせた。
と、十歩と離れてゐない所に、夢の中のそれと變りのない、一本の枯木のあるのが見えた。彼は考へる暇もなく、その枯木の側へ足を運んだ。
枯木はさつきの落雷に、裂かれたものに違ひなかつた。だから根元には何かの針葉が、枝ごと一面に散らばつてゐた。彼はその針葉を踏むと同時に、夢が夢でなかつた事を知つた。――枯木の根本には一振の高麗劍が龍の飾のある柄を上に殆ど鍔も見えない程、深く突き立つてゐたのであつた。
彼は兩手に柄を摑んで、渾身の力をこめながら、一氣にその劍を引き拔いた。劍は今し方磨いだやうに鍔元から切先まで冷やかな光を放つてゐた。「神々はおれを守つて居て下さる。」――さう思ふと彼の心には、新しい勇氣が湧くやうな氣がした。彼は枯木の下に跪いて天上の神々に祈

りを捧げた。

その後彼は又樅の木陰へ歸つて、しつかり劍を抱きながら、もう一度深い眠に落ちた。さうして三日三晩の間、死んだやうに眠り續けた。

眠から覺めた素戔嗚は再び體を淸むべく、湖の汀へ下りて行つた。風の凪ぎ盡した湖は、小波さへ砂を搖すらなかつた。その水が彼の足もとへ、汀に立つた彼の顏を、鏡の如く鮮かに映して見せた。それは高天原の國にゐた時の通り、心も體も逞しい、醜い神のやうな顏であつた。が、彼の眼の下には、今までにない一筋の皺が、何時の間にか一年間の悲しみの痕を刻んでゐた。

三十三

それ以來彼はたつた一人、或時は海を渡り、或時は又山を越えて、いろいろな國をさまよつて歩いた。しかしどの國のどの部落も、未嘗彼の足を止めさせるには足らなかつた。それらは皆名こそ變つてゐたが、其處に住んでゐる民の心は、高天原の國と同じ事であつた。彼は——高天原の國に未練のなかつた彼は、それらの民に一臂の勞を借してやつた事はあつても、それらの民

の一人となつて、老いようと思つた事は一度もなかつた。「素戔嗚よ。お前は何を探してゐるのだ。おれと一しよに來い。おれと一しよに來い。……」

彼は風が囁く儘に、あの湖を後にしてから、丁度滿七年の間、はてしない漂泊を續けて來た。さうしてその七年目の夏、彼は出雲の簸の川を溯つて行く、一艘の獨木舟の帆の下に、蘆の深い兩岸を眺めてゐる、退屈な彼自身を見出したのであつた。

蘆の向うには一面に、高い松の木が茂つてゐた。この松の枝が、むらむらと、互に鬩ぎ合つた上には、夏霞に煙つてゐる、陰鬱な山々の頂があつた。さうしてその又山々の空には、時々鷺が兩三羽、眩く翼を閃かせながら、斜に渡つて行く影が見えた。が、この鷺の影を除いては、川筋一帶何處を見ても、殆人を脅すやうな、明い寂寞が支配してゐた。

彼は舷に身を凭せて、日に蒸された松脂の匂を胸一ぱいに吸ひこみながら、長い間獨木舟を風の吹きやるのに任せてゐた。實際この寂しい川筋の景色も、幾多の冒險に慣れた素戔嗚には、まるで高天原の八衢のやうに、今では寸分の刺戟さへない、平凡な往來に過ぎないのであつた。

夕暮が近くなつた時、川幅が狹くなると共に、兩岸には蘆が稀になつて、節くれ立つた松の根

ばかりが、水と泥との交る所を、荒涼と絡つてゐるやうになつた。彼は今夜の泊りを考へながら、前よりは稍注意深く、兩岸に眼を配つて行つた。松は水の上まで枝垂れた枝を、鐵網のやうに纏め合せて、林の奧の神祕な世界を、執念く人目から隱してゐた。それでも時たまその松が、鹿でも水を飮みに來るせいか、疎に透いてゐる所には不氣味な程赤い大茸が、薄暗い中に簇々と群つてゐる朽木も見えた。

益々夕暮が迫つて來た。その時、彼は遙か向うの、水に臨んでゐる一枚岩の上に、人間らしい姿が一つ、坐つてゐるのを發見した。勿論この川筋には、さつきから全然人煙の擧つてゐる容子は見えなかつた。だからこの姿を發見した時も、彼は始は眼を疑つて、高麗劍の柄にこそ手をかけて見たが、まだ體は悠々と獨木舟の舷に凭せてゐた。

その内に舟は水脈を引いて、次第に其處へ近づいて來た。すると一枚岩の上にゐるのも、愈人間に紛れなくなつた。のみならず程なくその姿は、白衣の裾を長く引いた、女だと云ふ事まで明らかになつた。彼は好奇心に眼を輝かせながら、思はず獨木舟の舳に立ち上つた。舟はその間も帆に微風を孕んで、小暗く空に蔓つた松の下を、刻々一枚岩の方へ近づきつつあつた。

三十四

舟はとう〳〵一枚岩の前へ來た。岩の上には松の枝が、やはり長々と枝垂れてゐた。素戔嗚は素早く帆を下すと、その松の枝を片手に摑んで、兩足へうんと力を入れた。と同時に舟は大きく搖れながら、舳に岩角の苔をかすつて、忽ち其處へ横づけになつた。

女は彼の近づくのも知らず、岩の上へ獨り泣き伏してゐた。が、人のけはひに驚いたのか、この時ふと顏を擡げて、舟の中の彼を見たと思ふと、やにはに悲鳴を擧げながら、半ば岩を抱いてゐる、太い松の蔭に隱れようとした。しかし彼はその途端に、片手に岩角を摑んだ儘、「御待ちなさい。」と云ふより早く、後へ引き殘した女の裳を、片手にしつかり握りとめた。女は思はず其處へ倒れて、もう一度短い悲鳴を漏らした。が、それぎり身を起す氣色もなく、又前のやうに泣き入つてしまつた。

彼は纜を松の枝に結ぶと、身輕く岩の上へ飛び上つた。さうして女の肩へ手をかけながら、

「御安心なさい。私は何もあなたの體に、害を加へようと云ふのぢやありません。唯、あなたが

こんな所に、泣いてゐるのが不審でしたから、どうしたのかと思つて、舟を止めたのです。」と云つた。
女はやつと顔を擧げて、水の上を罩めた暮色の中に、怯づ怯づ彼の姿を見上げた。彼はその刹那にこの女が、夢の中にのみ見る事が出來る、例へばこの夏の夕明りのやうな、何處となくもの悲しい美しさに溢れてゐる事を知つたのであつた。
「どうしたのです。あなたは路でも迷つたのですか。それとも惡者にでも浚はれたのですか。」
女は默つて、首を振つた。その拍子に頸珠の琅玕が、かすかに觸れ合ふ音を立てた。彼はこの子供のやうな、否と云ふ返事の身ぶりを見ると、我知らず微笑が脣に上つて來ずにはゐられなかつた。が、女はその次の瞬間には、見る見る恥しさうな色に頰を染めて、また涙に沾んだ眼を、もう一度膝へ落してしまつた。
「では、――ではどうしたのです。何か難儀な事でもあつたら、遠慮なく話して御覽なさい。私に出來る事でさへあれば、どんな事でもして上げます。」
彼がかう優しく慰めると、女は始めて勇氣を得たやうに、時々まだ口ごもりながら、兎に角一

切の事情を話して聞かせた。それによると女の父は、この川上の部落の長をしてゐる、足名椎と云ふものであつた。所が近頃部落の男女が、續々と疫病に仆れる爲、足名椎は早速巫女に命じて、神々の心を尋ねさせた。すると意外にも、此處にゐる、櫛名田姫と云ふ一人娘を、高志の大蛇の犧にしなければ、部落全體が一月の内に、死に絶えるであらうと云ふ託宣があつた。そこで足名椎は已むを得ず、部落の若者たちと共に舟を艤して、遠い部落からこの岩の上まで、櫛名田姫を運んで來た後、彼女一人を後に殘して、歸つて行つたと云ふ事であつた。

三十五

櫛名田姫の話を聞き終ると、素戔嗚は項を反らせながら、愉快さうに黄昏の川を見廻した。

「その高志の大蛇と云ふのは、一體どんな怪物なのです。」

「人の噂を聞きますと、頭と尾とが八つある、八つの谷にも亙る位、大きな蛇だとか申す事でございます。」

「さうですか。それは好い事を聞きました。そんな怪物には何年にも、出合つた事がありません

から、話を聞いたばかりでも、力瘤の動くやうな氣がします。」

櫛名田姫は心配さうに、そつと涼しい眼を擧げて、無頓着な彼を見守つた。

「かう申す内にもいつ何時、大蛇が參るかわかりませんが、あなたは――」

「大蛇を退治する心算です。」

彼はきつぱりから答へると、兩腕を胸に組んだ儘、靜に一枚岩の上を歩き出した。

「退治すると仰有つても、大蛇は只今申し上げた通り、一方ならない神でございますから――」

「さうです。」

「萬一あなたがその爲に、御怪我をなさらないとも限りませんし、――」

「さうです。」

「どうせ私は犧になるものと、覺悟をきめた體でございます。たとひこの儘、――」

「御待ちなさい。」

彼は歩みを續けながら、何か眼に見えない物を拂ひのけるやうな手眞似をした。

「私はあなたをおめおめと大蛇の犧にはしたくないのです。」

「それでも大蛇が強ければ――」

「仕方がないと云ふのですか。たとひ仕方がないにしても、私はやはり戰ふのです。」

櫛名田姫は又顏を赤めて、帶に下げた鏡をまさぐりながら、かすかに彼の言葉を押し返した。

「私が大蛇の犧になるのは、神々の思召しでございます。」

「さうかも知れません。しかし犧になると云ふ事がなかつたら、あなたは今時分たつた一人、こんな所に來てはゐないでせう。して見ると神々の思召しは、あなたを大蛇の犧にするより、反つて私に大蛇の命を斷たせようと云ふのかも知れません。」

彼は櫛名田姫の前に足を止めた。と同時に一瞬間、嚴な權威の閃きが彼の醜い眉目の間に磅礴したやうに思はれた。

「けれども巫女が申しますには――」

櫛名田姫の聲は殆聞えなかつた。

「巫女は神々の言葉を傳へるものです。神々の謎を解くものではありません。」

この時突然二頭の鹿が、もう暗くなつた向うの松の下から、僅に薄白んだ川の中へ、水煙を立

てて跳りこんだ。さうして角を並べた儘、必死にこちらへ泳ぎ出した。

「あの鹿の慌てやうは――もしや來るのではございますまいか。あれが、――あの恐ろしい神が、――」

櫛名田姫はまるで狂氣のやうに、素戔嗚の腰へ縋りついた。

「さうです。とう／＼來たやうです、神々の謎の解ける時が。」

彼は對岸に眼を配りながら、徐に高麗劍の柄へ手をかけた。するとその言葉がまだ終らない内に、驟雨の襲ひかかるやうな音が、對岸の松林を震はせながら、その上に疎な星を撒いた、山々の空へ上り出した。

（大正九年五月）

老いたる素戔嗚尊

高志の大蛇を退治した素戔嗚は、櫛名田姫を娶ると同時に、足名椎が治めてゐた部落の長となる事になつた。

足名椎は彼等夫婦の爲に、出雲の須賀へ八廣殿を建てた。宮は千木が天雲に隱れる程大きな建築であつた。

彼は新しい妻と共に、靜な朝夕を送り始めた。風の聲も浪の水沫も、或は夜空の星の光も今は再彼を誘つて、廣漠とした太古の天地に、さまよはせる事は出來なくなつた。既に父とならうとしてゐた彼は、この宮の太い棟木の下に、――赤と白とに狩の圖を描いた、彼の部屋の四壁の內に、高天原の國が與へなかつた爐邊の幸福を見出したのであつた。

彼等は一しよに食事をしたり、未來の計畫を話し合つたりした。時時は宮のまはりにある、柏

の林に歩みを運んで、その小さな花房の地に落ちたのを踏みながら、夢のやうな小鳥の啼く聲に、耳を傾ける事もあつた。彼は妻に優しかつた。聲にも、身ぶりにも、眼の中にも、昔のやうな荒荒しさは、二度と影さへも現さなかつた。

しかし稀に夢の中では、暗黒に蠢く怪物や、見えない手の揮ふ劍の光が、もう一度彼を殺伐な爭鬪の心につれて行つた。が、何時も眼がさめると、彼はすぐ妻の事や部落の事を思ひ出す程、綺麗にその夢を忘れてゐた。

間もなく彼等は父母になつた。彼はその生れた男の子に、八島士奴美と云ふ名を與へた。八島士奴美は彼よりも、女親の櫛名田姫に似た、氣立ての美しい男であつた。

月日は川のやうに流れて行つた。

その間に彼は何人かの妻を娶つて、更に多くの子の父になつた。それらの子は皆人となると、彼の命ずる儘に兵士を率ゐて、國國の部落を從へに行つた。

彼の名は子孫の殖えると共に、次第に遠くまで傳はつて行つた。國國の部落は彼のもとへ、續續と貢を奉りに來た。それらの貢を運ぶ舟は、絹や毛革や玉と共に、須賀の宮を仰ぎに來る國國

の民をも乘せてゐた。

或日彼はさう云ふ民の中に、高天原の國から來た三人の若者を發見した。彼等は皆當年の彼のやうな、筋骨の逞しい男であつた。彼は彼等を宮に召して、手づから酒を飮ませてやつた。それは今まで何人も、この勇猛な部落の長から、受けたことのない待遇であつた。若者たちも始の內は、彼の意嚮を量りかねて、多少の畏怖を抱いたらしかつた。しかし酒がまはり出すと、彼の所望する通り、甕の底を打ち鳴らして、高天原の國の歌を唱つた。

彼等が宮を下る時、彼は一振の劍を取つて、

「これはおれが高志の大蛇を斬つた時、その尾の中にあつた劍だ。これをお前たちに預けるから、お前たちの故郷の女君に渡してくれい。」と云ひつけた。

若者たちはその劍を捧げて、彼の前に跪きながら、死んでも彼の命令に背かないと云ふ誓ひを立てた。

彼はそれから獨り海邊へ行つて、彼等を乘せた舟の帆が、だんだん荒い波の向うに、遠くなつて行くのを見送つた。帆は霧を破る日の光を受けて、丁度中空を行くやうに、たつた一つ閃いて

ゐた。

二

しかし死は素戔嗚夫婦をも赦さなかつた。

八島士奴美がおとなしい若者になつた時、櫛名田姫はふと病に罹つて、一月ばかりの後に命を殞した。何人か妻があつたとは云へ、彼が彼自身のやうに愛してゐたのは、やはり彼女一人だけであつた。だから彼は喪屋が出來ると、まだ美しい妻の死骸の前に、七日七晩坐つた儘、默然と淚を流してゐた。

宮の中はその間、慟哭の聲に溢れてゐた。殊に幼い須世理姫が、しつきりなく歎き悲しむ聲には、宮の外を通るものさへ、淚を落さずにはゐられなかつた。彼女は――この八島士奴美のたつた一人の妹は、兄が母に似てゐる通り、情熱の烈しい父に似た、男まさりの娘であつた。

やがて櫛名田姫の亡き骸は、生前彼女が用ひてゐた、玉や鏡や衣服と共に、須賀の宮から遠くない、小山の腹に埋められた。が、素戔嗚はその上に、黄泉路の彼女を慰むべく、今まで妻に仕

へてゐた十一人の女たちをも、埋め殺す事を忘れなかつた。女たちは皆、裝ひを凝らして、いそいそと死に急いで行つた。するとそれを見た部落の老人たちは、いづれも眉をひそめながら、私に素戔嗚の暴擧を非難し合つた。

「十一人！　尊は部落の舊習に全然無頓着で御出でなさる。第一の妃が御なくなりなすつたのに、十一人しか黄泉の御供を御させ申さないと云ふ法があらうか？　たつた皆で十一人！」

葬りが全く終つた後、素戔嗚は急に思ひ立つて、八島士奴美に世を讓つた。さうして彼自身は須世理姫と共に、遠い海の向うにある根堅洲國へ移り住んだ。

其處は彼が流浪中に、最も風土の美しいのを愛した、四面海の無人島であつた。彼はこの島の南の小山に、茅葺の宮を營ませて、安らかな餘生を送る事にした。

彼は既に髮の毛が、麻のやうな色に變つてゐた。が、老年もまだ彼の力を奪ひ去る事が出來ない事は、時時彼の眼に去來する、精悍な光にも明かであつた。いや、彼の顏はどうかすると、須賀の宮にゐた時より、更に野蠻な精彩を加へる事もないではなかつた。彼は彼自身氣づかなかつたが、この島に移り住んで以來、今まで彼の中に眠つてゐた野性が、何時か又眼をさまして來た

のであつた。

彼は娘の須世理姫と共に、蜂や蛇を飼ひ馴らした。蜂は勿論蜜を取る爲、蛇は征矢の鏃に塗るべき、劇烈な毒を得る爲であつた。それから狩や漁の暇に、彼は彼の學んだ武藝や魔術を、一一須世理姫に教へ聞かせた。須世理姫はかう云ふ生活の中に、だんだん男にも負けないやうな、雄雄しい女になつて行つた。しかし姿だけは依然として、櫛名田姫の面影を止めた、氣高い美しさを失はなかつた。

宮のまはりにある椋の林は、何度となく芽を吹いて、何度となく又葉を落した。其度に彼は髯だらけの顏に、愈皺の數を加へ、須世理姫は始終微笑んだ瞳に、益涼しさを加へて行つた。

三

或日素戔嗚が宮の前の、椋の木の下に坐りながら、大きな牡鹿の皮を剝いでゐると、海へ水を浴びに行つた須世理姫が、見慣れない若者と一しよに歸つて來た。

「御父様、この方に唯今御目にかかりましたから、此處まで御伴して參りました。」

須世理姫はかう云つて、やつと身を起した素戔嗚に、遠い國の若者を引き合はせた。

若者は眉目の描いたやうな、肩幅の廣い男であつた。それが赤や青の頸珠を飾つて、太い高麗劍を佩いてゐる容子は、殆ど年少時代そのものが目前に現れたやうに見えた。

素戔嗚は恭しい若者の會釋を受けながら、

「御前の名は何と云ふ？」と、無躾な問を抛りつけた。

「葦原醜男と申します。」

「どうしてこの島へやつて來た？」

「食物や水が欲しかつたものですから、わざわざ舟をつけたのです。」

若者は悪びれた顏もせずに、一一はつきり返事をした。

「さうか。ではあちらへ行つて、勝手に食事をするが好い。須世理姫、案内はお前に任せるから。」

二人が宮の中にはいつた時、素戔嗚は又椋の木かげに、器用に刀子を動かしながら、牡鹿の皮を剝ぎ始めた。が、彼の心は何時の間にか、妙な動搖を感じてゐた。それは丁度晴天の海に似た、今までの靜な生活の空に、嵐を先觸れる雲の影が、動かうとするやうな心もちであつた。

鹿の皮を剝ぎ終つた彼が、宮の中へ歸つたのは、もう薄暗い時分であつた。彼は廣い階段を上ると、何時もの通り何氣なく、大廣間の戸口に垂れてゐる、白い帷を掲げて見た。すると須世理姫と葦原醜男とが、まるで塒を荒らされた、二羽の睦じい小鳥のやうに、倉皇と菅疊から身を起した。彼は苦い顏をしながら、のそのそ部屋の中へ歩を運んだが、やがて葦原醜男の顏へ、じろりと忌忌しさうな視線をやると、

「お前は今夜此處へ泊つて、舟旅の疲れを休めて行くが好い。」と、半ば命令的な言葉をかけた。

葦原醜男は彼の言葉に、嬉しさうな會釋を返したが、それでもまだ何となく、間の惡げな氣色は隱せなかつた。

「ではすぐにあちらへ行つて、遠慮なく横になつてくれい。須世理姫――」

素戔嗚は娘を振り返ると、突然嘲るやうな聲を出した。

「この男を早速蜂の室へつれて行つてやるが好い。」

須世理姫は一瞬間、色を失つたやうであつた。

「早くしないか！」

父親は彼女がためらふのを見ると、荒熊のやうに唸り出した。

「はい、ではあなた、どうかこちらへ。」

葦原醜男はもう一度、叮嚀に素戔嗚へ禮をすると、須世理姫の後を追つて、いそいそと大廣間を出て行つた。

四

大廣間の外へ出ると、須世理姫は肩にかけた領巾を取つて、葦原醜男の手に渡しながら囁くやうにかう云つた。

「蜂の室へ御はひりになつたら、これを三遍御振りなさいまし。さうすると蜂が刺しませんから。」

葦原醜男は何の事だか、相手の言葉がのみこめなかつた。が、問ひ返す暇もなく、須世理姫は小さな扉を開いて、室の中へ彼を案内した。

室の中はもうまつ暗であつた。葦原醜男は其處へはいると、手さぐりに彼女を捉へようとした。が、手は僅に彼女の髪へ、指の先が觸れたばかりであつた。さうしてその次の瞬間には、慌しく

扉を閉ぢる音が聞えた。

彼は領巾をたまさぐりながら、茫然と室の中に佇んでゐた。すると眼が慣れたせゐか、だんだんあたりが思つたより、薄明く見えるやうになつた。

その薄明りに透して見ると、室の天井からは幾つとなく、大樽程の蜂の巣が下つてゐた。しかもその又巣のまはりには、彼の腰に下げた高麗劍より、更に一かさ大きい蜂が、何匹も悠悠と這ひまはつてゐた。

彼は思はず身を飜して、扉の方へ飛んで行つた。が、いくら推しても引いても、扉は開きさうな氣色さへなかつた。のみならずその時一匹の蜂は、斜に床の上へ舞ひ下ると、鈍い翅音を起しながら、次第に彼の方へ這ひ寄つて來た。

餘りの事に度を失つた彼は、まだ蜂が足もとまで來ない内に、倉皇とそれを踏み殺さうとした。しかし蜂は其途端に、一層翅音を高くしながら、彼の頭上へ舞上つた。と同時に多くの蜂も、人のけはひに腹を立てたと見えて、まるで風を迎へた火矢のやうに、ばらばらと彼の上へ落ちかかつて來た。……………

須世理姫は廣間へ歸つて來ると、壁に差した松明へ火をともした。火の光は赤赤と、菅疊の上に寢ころんだ素戔嗚の姿を照らし出した。

「確に蜂の室へ入れて來たらうな?」

素戔嗚は眼を娘の顏に注ぎながら、また忌忌しさうな聲を出した。

「私は御父樣の御云ひつけに背いた事はございません。」

須世理姫は父樣の眼を避けて、廣間の隅へ席を占めた。

「さうか? では勿論これからも、おれの云ひつけは背くまいな?」

素戔嗚のかう云ふ言葉の中には、皮肉な調子が交つてゐた。須世理姫は頸珠を氣にしながら、背くとも背かないとも答へなかつた。

「默つてゐるのは背く氣か?」

「いいえ。——御父樣はどうしてそんな——」

「背かない氣ならば、云ひ渡す事がある。おれはお前があの若者の妻になる事を許さないぞ。素戔嗚の娘は素戔嗚の目がねにかなつた夫を持たねばならぬ。好いか? これだけの事を忘れるな。」

夜が既に更けた後、素戔嗚は鼾をかいてゐたが、須世理姫は獨り悄然と、廣間の窓に倚りかかりながら、赤い月が音もなく海に沈むのを見守つてゐた。

五

翌朝素戔嗚は何時もの通り、岩の多い海へ泳ぎに行つた。すると其處へ葦原醜男が、意外にも彼の後を追つて、勢よく宮の方から下つて來た。

彼は素戔嗚の姿を見ると、愉快さうな微笑を浮べながら、

「御早うございます。」と、會釋をした。

「どうだな、昨夕はよく眠られたかな？」

素戔嗚は岩角に佇んだ儘、迂散らしく相手の顏を見やつた。實際この元氣の好い若者がどうして室の蜂に殺されなかつたか？　それは全然彼自身の推測を超越してゐたのであつた。

「ええ、御かげでよく眠られました。」

葦原醜男はかう答へながら、足もとに落ちてゐた岩のかけを拾つて、力一ぱい海の上へ抛り投

げた。岩は長い弧線を描いて、雲の赤い空へ飛んで行つた。さうして素戔嗚が投げたにしても、届くまいと思はれる程、遠い沖の波の中に落ちた。

素戔嗚は脣を嚙みながら、ぢつとその岩の行く方を見つめてゐた。

二人が海から歸つて來て、朝餉の膳に向つた時、素戔嗚は苦い顏をして、鹿の片腿を嚙りながら、彼と向ひ合つた葦原醜男に、

「この宮が氣に入つたら、何日でも泊つて行くが好い。」と云つた。

傍にゐた須世理姫は、この怪しい親切を辭せしむべく、そつと葦原醜男の方へ、意味ありげな瞬きを送つて見せた。が、彼は丁度その時、盤の魚に箸をつけてゐたせゐか、彼女の相圖には氣もつかずに、

「難有うございます。ではもう二三日、御厄介になりませうか。」と、嬉しさうな返事をしてしまつた。

しかし幸ひ午後になると、素戔嗚が晝寢をしてゐる暇に、二人の戀人は宮を拔け出て彼の獨木舟が繋いである、寂しい海邊の岩の間に、慌しい幸福を偸む事が出來た。須世理姫は香りの好い

海草の上に横はりながら、暫くは唯夢のやうに、葦原醜男の顔を仰いでゐたが、やがて彼の腕を引き離すと、

「今夜も此處に御泊りなすつては、あなたの御命が危うございます。私の事なぞは御かまひなく、一刻も早く御逃げ下さいまし。」と、心配さうに促し立てた。

しかし葦原醜男は笑ひながら、子供のやうに首を振つて見せた。

「あなたが此處にゐる間は、殺されても此處を去らない心算です。」

「それでもあなたの御體に、萬一の事でもあつた日には――」

「ではすぐにも私と一しよに、この島を逃げてくれますか？」

須世理姫はためらつた。

「さもなければ私は何時までも、此處にゐる覺悟をきめてゐます。」

葦原醜男はもう一度、無理に彼女を抱きよせようとした。が、彼女は彼を突きのけると急に海草の上から身を起して、

「御父様が呼んでゐます。」と、氣づかはしさうな聲を出した。さうして咄嗟に岩の間を、若い鹿

よりも身輕さうに、宮の方へ上つて行つた。
後に殘つた葦原醜男は、まだ微笑を浮べながら、須世理姫の姿を見送つた。と、彼女の寢てゐた所には、昨夕彼が貰つたやうな、領巾がもう一枚落ちてゐた。

六

その夜素戔嗚は人手を借らず、蜂の室と向ひ合つた、もう一つの室の中に、葦原醜男を抛りこんだ。
室の中は昨日の通り、もう暗黑が擴がつてゐた。が、唯一つ昨日と違つて、その暗黑の其處此處には、まるで地の底に埋もれた無數の寶石の光のやうに、點點ときらめく物があつた。
葦原醜男は心の中に、この光物の正體を怪しみながら、暫くは眼が暗黑に慣れる時の來るのを待つてゐた。すると間もなく彼の周圍が、次第にうす明くなるにつれて、その星のやうな光物が、殆ど馬さへ吞みさうな、凄じい大蛇の眼に變つた。しかも大蛇は何匹となく、或は梁に卷きついたり、或は桷を傳はつたり、或は又床にとぐろを卷いたり、室一ぱいに氣味惡く、蠢き合つてゐ

るのであつた。

彼は思はず腰に下げた劍の柄に手をかけた。が、たとひ劍を拔いた所が、彼が一匹斬る内には、もう一匹が造作なく彼を卷き殺すのに違ひなかつた。いや、現に一匹の大蛇が、彼の顏を下から覗きこむと、それより更に大きい一匹は、梁に尾をからんだ儘、ずるりと宙に吊り下つて、丁度彼の肩の上へ、鎌首をさしのべてゐるのであつた。

室の扉は勿論開かなかつた。のみならずその後には、あの白髮の素戔嗚が、皮肉な微笑を浮べながら、ぢつと扉の向うの容子に耳を傾けてゐるらしかつた。葦原醜男は懸命に劍の柄を握りながら、暫時は眼ばかり動かせてゐた。その内に彼の足もとの大蛇は、徐に山のやうなとぐろを解くと、一際高く鎌首を擧げて、今にも猛然と彼の喉へ嚙みつきさうなけはひを示し出した。

この時彼の心の中には、突然光がさしたやうな氣がした。彼は昨夜室の蜂が、彼のまはりへ群がつて來た時、須世理姫に貰つた領巾を振つて、危い命を救ふ事が出來た。して見ればさつき須世理姫が、海邊の岩の上に殘して行つた領巾にも、同じやうな奇特があるかも知れぬ。――さう思つた彼は咄嗟の間に、拾つて置いた領巾を取出して、三度ひらひらと振り廻して見た。……

翌朝素戔嗚は乂石の多い海のほとりで、愈元氣の好ささうな葦原醜男と顔を合せた。

「どうだな。昨夜はよく眠られたかな?」

「ええ、御かげでよく眠られました。」

素戔嗚は顔中に不快さうな色を漲らせて、じろりと相手を睨みつけたが、どう思つたかもう一度、何時もの冷靜な調子に返つて、

「さうか。それはよかつた。ではこれからおれと一しよに、一泳ぎ水を浴びるが好い。」と隔意なささうな聲をかけた。

二人はすぐに裸になつて、波の荒い明け方の海を、沖へ沖へと泳ぎ出した。素戔嗚は高天原の國にゐた時から、並ぶもののない泳ぎ手であつた。が、葦原醜男は彼にも増して、殆ど海豚にも劣らない程、自由自在に泳ぐ事が出來た。だから二人のみづらの頭は、黑白二羽の鷗のやうに、岩の屏風を立てた岸から、見る見る内に隔たつてしまつた。

七

海は絶えず膨れ上つて、雪のやうな波の水沫を二人のまはりへ漲らせた。素戔嗚はその水沫の中に、時時葦原醜男の方へ意地惡さうな視線を投げた。が、相手は悠悠とどんなに高い波が來ても、乘り越え乘り越え進んでゐた。

それが暫く續く内に、葦原醜男は少しづつ素戔嗚より先へ進み出した。素戔嗚は私に牙を嚙んで、一尺でも彼に遲れまいとした。しかし相手は大きな波が、二三度泡を撒き散らす間に、苦もなく素戔嗚を拔いてしまつた。さうして重なる波の向うに、何時の間にか姿を隱してしまつた。

「今度こそあの男を海に沈めて、邪魔を拂はうと思つたのだが、――」

さう思ふと素戔嗚は、愈彼を殺さない内は、腹が癒えないやうな心もちになつた。

「畜生！　あんな惡賢い浮浪人は、鰐にでも食はしてしまふが好い。」

しかし程なく葦原醜男は、彼自身がまるで鰐のやうに、樂樂とこちらへ返つて來た。

「もつと御泳ぎになりますか？」

彼は波に搖られながら、日頃に變らない微笑を浮べて、遙に素戔嗚へ聲をかけた。素戔嗚は如何に剛情を張つても、この上泳がうと云ふ氣にはなれなかつた。…………

その日の午後素戔嗚は、更に葦原醜男をつれて、島の西に開いた荒野へ、狐や兎を狩りに行つた。

二人は荒野のはづれにある、小高い大岩の上へ登つた。荒野は目の及ぶ限り、二人の後から吹下す風に、枯草の波を靡かせてゐた。素戔嗚は少時默然と、さう云ふ景色を見守つた後、弓に矢を番へながら、葦原醜男を振り返つた。

「風があつては都合が悪いが、兎に角どちらの矢が遠く行くか、お前と弓勢を比べて見よう。」

「ええ、比べて見ませう。」

葦原醜男は弓矢を執つても、自信のあるらしい容子であつた。

「好いか？　同時に射るのだぞ。」

二人は肩を並べながら、力一ぱい弓を引き絞つて、さうして同時に切つて離した。矢は波立つた荒野の上へ、一文字に遠く飛んで行つた。が、どちらが先へ行つたともなく、唯一度日の光にきらりと矢羽根が光つた儘、忽ち風下の空に紛れて、二本とも一しよに消えてしまつた。

「勝負があつたか？」

「いいえ。——もう一度やつて見ませうか？」

素戔嗚は眉をひそめながら、苛立たしさうに頭を振つた。

「何度やつても同じ事だ。それより面倒でも一走り、おれの矢を探しに行つてくれい。あれは高天原の國から來た、おれの大事な丹塗の矢だ。」

葦原醜男は云ひつかつた通り、風に鳴る荒野へ飛びこんで行つた。すると素戔嗚はその後姿が、高い枯草に隱れるや否や、腰に下げた袋の中から、手早く火打鎌と石とを出して、岩の下の枯茨へ火を放つた。

八

色のない焰は瞬く内に、濛濛と黑煙を擧げ始めた。と同時にその煙の下から、茨や小篠の燒ける音が、けたたましく耳を彈き出した。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚は高い岩の上に、ぢつと弓杖をつきながら、兇猛な微笑を浮べてゐた。

火は益燃え擴がつた。鳥は苦しさうに鳴きながら、何羽も赤黑い空へ舞ひ上つた。が、すぐに又煙に卷かれて、紛紛と火の中へ落ちて行つた。それがまるで遠くからは、嵐に振はれた無數の木の實が、しつきりなくこぼれ飛ぶやうに見えた。

「今度こそあの男を片づけたぞ。」

素戔嗚はかう心の中に、もう一度滿足の吐息を洩らすと、何故か云ひやうのない寂しさがかすかに湧いて來るやうな心もちがした。……………

その日の薄暮、勝ち誇つた彼は腕を組んで、宮の門に佇みながら、まだ煙の迷つてゐる荒野の空を眺めてゐた。すると其處へ須世理姫が、夕餉の仕度の出來たことを氣がなささうに報じに來た。彼女は近親の喪を弔ふやうに、何時の間にかまつ白な裳を夕明りの中に引きずつてゐた。

素戔嗚はその姿を見ると、急に彼女の悲しさを踏みにじりたいやうな氣がし出した。

「あの空を見ろ。葦原醜男は今時分――」

「存じて居ります。」

須世理姫は眼を伏せてゐたが、思ひの外はつきりと、父親の言葉を遮つた。

「さうか？　ではさぞかし悲しからうな？」

「悲しうございます。よしんば御父様が御歿くなりなすつても、これ程悲しくございますまい。」

素戔嗚は色を變へて、須世理姫の顏を睨みつけた。が、それ以上彼女を懲らす事は、どう云ふものか出來なかつた。

「悲しければ、勝手に泣くが好い。」

彼は須世理姫に背を向けて、荒荒しく門の内へはひつて行つた。さうして宮の階段を上りながら、忌忌しさうに舌を打つた。

「何時ものおれなら口も利かずに、打ちのめしてやる所なのだが……」

須世理姫は彼の去つた後も、暫くは、暗く火照つた空へ、涙ぐんだ眼を擧げてゐたが、やがて頭を垂れながら、悄然と宮へ歸つて行つた。

その夜素戔嗚は何時までも、眠に就く事が出來なかつた。それは葦原醜男を殺した事が、何となく彼の心の底へ毒をさしたやうな氣がするからであつた。

「おれは今までにもあの男を何度殺さうと思つたかわからない。しかしまだ今夜のやうに、妙な

氣のした事はないのだが……」

彼はこんな事を考へながら、青い匂のする菅疊の上に、幾度となく寢返りを打つた。眠はそれでも彼の上へ、容易に下らうとはしなかつた。

その間に寂しい曉は早くも暗い海の向うに、うすら寒い色を擴げ出した。

九

翌朝もう朝日の光が、海一ぱいに當つてゐる頃であつた。まだ寢の足りない素戔嗚は眩しさうに眉をひそめながら、のそのそ宮の戸口へ出かけて來た。すると其處の階段の上には、驚くまい事か、葦原醜男が、須世理姫と一しよに腰をかけて、何事か嬉しさうに話し合つてゐた。

二人も素戔嗚の姿を見ると、吃驚したらしい容子であつた。が、すぐに葦原醜男は相不變快活に身を起して、一筋の丹塗矢をさし出しながら、

「幸ひ矢も見つかりました。」と云つた。

素戔嗚はまだ驚きが止まなかつた。しかしその中にも何となく、無事な若者の顏を見るのが、

悦ばしいやうな心もちもした。

「よく怪我をしなかつたな？」

「ええ。全く偶然助かりました。あの火事が燃えて來たのは、丁度私がこの丹塗矢を拾ひ上げた時だつたのです。私は煙の中をくぐりながら、兎も角火のつかない方へ、一生懸命に逃げて行きましたが、いくらあせつて見た所が、到底西風に煽られる火よりも早くは走られません。……」

葦原醜男はちよいと言葉を切つて、彼の話に聞き入つてゐる親子の顏へ微笑を送つた。

「そこでもう今度は燒け死ぬに違ひないと、覺悟をきめた時でした。走つてゐる内にどうしたはずみか、急に足もとの土が崩れると、大きな穴の中へ落ちこんだのです。穴の中は最初まつ暗でしたが、縁の枯草が燃えるやうになると、忽ち底まで明くなりました。見ると私のまはりには、何百匹とも知れない野鼠が、土の色も見えない程ひしめき合つてゐるのです……。」

「まあ、野鼠でよろしうございました。それが蝮ででもございましたら……」

須世理姫の眼の中には、涙と笑とが刹那の間、同時に動いたやうであつた。

「いや、野鼠でも莫迦にはなりません。この丹塗矢の羽根のないのは、その時みんな食はれたの

です。が、仕合せと火事は何事もなく、穴の外を焼き通つてしまひました。」

　素戔嗚はこの話を聞いてゐる内に、だんだん又この幸運な若者を憎む心が動いて來た。のみならず、一度殺さうと思つた以上、どうしてもその目的を遂げない中は、昔から挫折した覺えのない意力の誇りが滿足しなかつた。

「さうか。それは運が好かつたな。が、運と云ふものは、何時風向きが變るかわからないものだ。……が、そんな事はどうでも好い。兎に角命が助つたのなら、おれと一しよにこちらへ來て、頭の虱をとつてくれい。」

　葦原醜男と須世理姫とは、仕方なく彼の後について、朝日の光のさしこんでゐる、大廣間の白い帷をくぐつた。

　素戔嗚は廣間のまん中に、不機嫌らしい大あぐらを組むと、みづらに結んだ髮を解いて、無造作に床の上に垂らした。素枯れた蘆の色をした髮は、殆ど川のやうに長かつた。

「おれの虱はちと手強いぞ。」

　かう云ふ彼の言葉を聞き流しながら、葦原醜男はその白髮を分けて、見つけ次第虱を捻らうと

した。が、髪の根に蠢いてゐるのは、小さな虱と思ひの外、毒毒しい、銅色の、大きな百足ばかりであつた。

十

葦原醜男はためらつた。すると側にゐた須世理姫が、何時の間に忍ばせて持つて來たか、一握りの椋の實と赤土とをそつと彼の手へ渡した。彼はそこで齒を鳴らして、その椋の實を嚙みつぶしながら、赤土も一しよに口へ含んで、さも百足をとつてゐるらしく、床の上へ吐き出し始めた。

その内に素戔嗚は、昨夕寢なかつた疲れが出て、我知らずにうとうと眠にはひつた。

……高天原の國を逐はれた素戔嗚は、爪を剝がれた足に岩を踏んで、嶮しい山路を登つてゐた。岩むらの羊齒、鴉の聲、それから冷たい鋼色の空、——彼の眼に入る限りの風物は、悉く荒涼それ自身であつた。

「おれに何の罪があるか？　おれは彼等よりも強かつた。が、強かつた事は罪ではない。罪は寧ろ彼等にある。嫉妬心の深い、陰險な、男らしくもない彼等にある。」

彼はから憤りながら、暫く苦しい歩みを續けて行つた。と、路を遮つた、龜の背のやうな大岩の上に、六つの鈴のついてゐる、白銅鏡が一面のせてあつた。彼はその岩の前に足をとめると、何氣なく鏡へ眼を落した。鏡は冴え渡つた面の上に、ありありと年若な顏を映した。が、それは彼の顏ではなく、彼が何度も殺さうとした、葦原醜男の顏であつた。……さう思ふと、急に夢がさめた。

彼は大きな眼を開いて、廣間の中を見廻した。廣間には唯朝日の光が、うららかにさしてゐるばかりで、葦原醜男も須世理姬も、どうしたか姿が見えなかつた。のみならずふと氣がついて見ると、彼の長い髪は三つに分けて、天井の桷に括りつけてあつた。

「欺しをつたな！」

咄嗟に一切悟つた彼は、稜威の雄たけびを發しながら、力一ぱい頭を振つた。すると忽ち宮の屋根には、地震よりも凄まじい響が起つた。それは髪を括りつけた、三本の桷が三本とも一時にひしげ飛んだ響であつた。しかし素戔嗚は耳にもかけず、まづ右手をさし伸べて、太い天の鹿兒弓を取つた。それから左手をさし伸べて、天の羽羽矢の靫を取つた。最後に兩足へ力を入れて、

うんと一息に立ち上ると、三本の椚を引きずりながら、雲の峯の崩れるやうに、傲然と宮の外へ搖るぎ出した。

宮のまはりの椋の林は、彼の足音に鳴りどよんだ。それは梢に巣食つた栗鼠も、ばらばらと大地へ落ちる程であつた。彼はその椋の木の間を、嵐のやうに通り拔けた。

林の外は切り岸の上、切り岸の下は海であつた。彼は其處に立ちはだかると、眉の上に手をやりながら、廣い海を眺め渡した。海は高い浪の向うに、日輪さへかすかに蒼ませてゐた。その又浪の重なつた中には、見覺えのある獨木舟が一艘、沖へ沖へと出る所だつた。

素戔嗚は弓杖をついたなり、ぢつとこの舟へ眼を注いだ。舟は彼を嘲るやうに、小さい篠帆を光らせながら、輕輕と浪を乘り越えて行つた。のみならず艫には葦原醜男、艫には須世理姫の乘つてゐる容子も、手にとるやうに見る事が出來た。

素戔嗚は天の鹿兒弓に、しづしづと天の羽羽矢を番へた。弓は見る見る引き絞られ、鏃は目の下の獨木舟に向つた。が、矢は一文字に保たれた儘、容易に弦を離れなかつた。その内に何時か彼の眼には、微笑に似たものが浮び出した。微笑に似た、――しかし其處には同時に又涙に似た

もものもないではなかつた。彼は肩を聳やかせた後、無造作に弓矢を抛り出した。それから、――さも堪へ兼ねたやうに、瀑よりも大きい笑ひ聲を放つた。

「おれはお前たちを祝ぐぞ！」

素戔嗚は高い切り岸の上から、遙かに二人をさし招いだ。

「おれよりももつと手力を養へ。おれよりももつと智慧を磨け。おれよりももつと、……」

素戔嗚はちよいとためらつた後、底力のある聲に祝ぎ續けた。

「おれよりももつと仕合せになれ！」

彼の言葉は風と共に、海原の上へ響き渡つた。この時わが素戔嗚は、大日孁貴と爭つた時より、高天原の國を逐はれた時より、高志の大蛇を斬つた時より、ずつと天上の神神に近い、悠悠たる威嚴に充ち滿ちてゐた。

（大正九年）

南京の基督

一

或秋の夜半であつた。南京奇望街の或家の一間には、色の蒼ざめた支那の少女が一人、古びた卓の上に頬杖をついて、盆に入れた西瓜の種を退屈さうに噛み破つてゐた。

卓の上には置きランプが、うす暗い光を放つてゐた。その光は部屋の中を明くすると云ふよりも、寧ろ一層陰鬱な效果を與へるのに力があつた。壁紙の剝げかかつた部屋の隅には、毛布のはみ出した籐の寢臺が、埃臭さうな帷を垂らしてゐた。それから卓の向うには、これも古びた椅子が一脚、まるで忘れられたやうに置き捨ててあつた。が、その外は何處を見ても、裝飾らしい家具の類なぞは何一つ見當らなかつた。

少女はそれにも關らず、西瓜の種を噛みやめては、時々涼しい眼を擧げて、卓の一方に面した壁をぢつと眺めやる事があつた。見ると成程その壁には、すぐ鼻の先の折れ釘に、小さな眞鍮の

十字架がつつましやかに懸つてゐた。さうしてその十字架の上には、稚拙な受難の基督が、高々と兩腕をひろげながら、手ずれた浮き彫の輪廓を影のやうにぼんやり浮べてゐた。少女の眼はこの耶蘇を見る毎に、長い睫毛の後の寂しい色が、一瞬間何處かへ見えなくなつて、その代りに無邪氣な希望の光が、生き生きとよみ返つてゐるらしかつた。が、すぐに又視線が移ると、彼女は必吐息を洩らして、光澤のない黑繻子の上衣の肩を所在なささうに落しながら、もう一度盆の西瓜の種をぽつりぽつり噛み出すのであつた。

少女は名を宋金花と云つて、貧しい家計を助ける爲に、夜々その部屋に客を迎へる、當年十五歳の私窩子であつた。秦淮に多い私窩子の中には、金花程の容貌の持ち主なら、何人でもゐるのに違ひなかつた。が、金花程氣立ての優しい少女が、二人とこの土地にゐるかどうか、それは少くとも疑問であつた。彼女は朋輩の賣笑婦と違つて、嘘もつかなければ我儘も張らず、夜毎に愉快さうな微笑を浮べて、この陰鬱な部屋を訪れる、さまざまな客と戯れてゐた。さうして彼等の拂つて行く金が、稀に約束の額より多かつた時は、たつた一人の父親を、一杯でも餘計好きな酒に飽かせてやる事を樂しみにしてゐた。

かう云ふ金花の行状は、勿論彼女が生れつきにも、據つてゐるのに違ひなかつた。しかしまだその外に何か理由があるとしたら、それは金花が子供の時から、壁の上の十字架が示す通り、歿くなつた母親に教へられた、羅馬加特力教の信仰をずつと持ち續けてゐるからであつた。

——さう云へば今年の春、上海の競馬を見物かたがた、南部支那の風光を探りに來た、若い日本の旅行家が、金花の部屋に物好きな一夜を明かした事があつた。その時彼は葉卷を啣へて、洋服の膝に輕々と小さな金花を抱いてゐたが、ふと壁の上の十字架を見ると、不審らしい顏をしながら、

「お前は耶蘇教徒かい。」と、覺束ない支那語で話しかけた。

「ええ、五つの時に洗禮を受けました。」

「さうしてこんな商賣をしてゐるのかい。」

彼の聲にはこの瞬間、皮肉な調子が交つたやうであつた。が、金花は彼の腕に、鴉髻の頭を凭せながら、何時もの通り晴れ晴れと、糸切齒の見える笑を洩らした。

「この商賣をしなければ、阿父樣も私も餓ゑ死をしてしまひますから。」

「お前の父親は老人なのかい。」
「ええ——もう腰も立たないのです。」
「しかしだね、——しかしこんな稼業をしてゐたのでは、天國に行かれないと思やしないか。」
「いいえ。」
金花はちよいと十字架を眺めながら、考深さうな眼つきになつた。
「天國にいらつしやる基督様は、きつと私の心もちを汲みとつて下さると思ひますから。——それでなければ基督様は姚家巷の警察署の御役人も同じ事ですもの。」
若い日本の旅行家は微笑した。さうして上衣の隠しを探ると、翡翠の耳環を一雙出して、手づから彼女の耳へ下げてやつた。
「これはさつき日本へ土産に貰つた耳環だが、今夜の記念にお前にやるよ。」——
金花は始めて客をとつた夜から、實際かう云ふ確信に自ら安んじてゐたのであつた。
所が彼是一月ばかり前から、この敬虔な私窩子は不幸にも、悪性の楊梅瘡を病む體になつた。
これを聞いた朋輩の陳山茶は、痛みを止めるのに好いと云つて、鴉片酒を飲む事を教へてくれた。

その後又やはり朋輩の毛迎春は、彼女自身が服用した汞藍丸や迦路米の殘りを、親切にもわざわざ持つて來てくれた。が、金花の病はどうしたものか、客をとらずに引き籠つてゐても、一向快方には向はなかつた。

すると或日陳山茶が、金花の部屋へ遊びに來た時に、こんな迷信じみた療法を尤もらしく話して聞かせた。

「あなたの病氣は御客から移つたのだから、早く誰かに移し返しておしまひなさいよ。さうすればきつと二三日中に、よくなつてしまふのに違ひないわ。」

金花は頰杖をついた儘、浮かない顏色を改めなかつた。が、山茶の言葉には多少の好奇心を動かしたと見えて、

「ほんたう？」と、輕く聞き返した。

「ええ、ほんたうだわ。私の姉さんもあなたのやうに、どうしても病氣が癒らなかつたのよ。それでも御客に移し返したら、ぢきによくなつてしまつたわ。」

「その御客はどうして？」

「御客はそれは可哀さうよ。おかげで目までつぶれたつて云ふわ。」
山茶が部屋を去つた後、金花は獨り壁に懸けた十字架の前に跪いて、受難の基督を仰ぎ見ながら、熱心にかう云ふ祈禱を捧げた。
「天國にいらつしやる基督樣。私は阿父樣を養ふ爲に、賤しい商賣を致して居ります。しかし私の商賣は、私一人を汚す外には、誰にも迷惑はかけて居りません。ですから私はこの儘死んでも、必天國に行かれると思つて居りました。けれども唯今の私は、御客にこの病を移さない限り、今までのやうな商賣を致して參る事は出來ません。して見ればたとひ餓ゑ死をしても、——さうすればこの病も、癒るさうでございますが、——御客と一つ寢臺に寢ないやうに、心がけねばなるまいと存じます。さもなければ私は、私どもの仕合せの爲に、怨みもない他人を不仕合せに致す事になりますから。しかし何と申しても、私は女でございます。いつ何時どんな誘惑に陷らないものでもございません。天國にいらつしやる基督樣。どうか私を御守り下さいまし。私はあなた御一人の外に、たよるもののない女でございますから。」
かう決心した宋金花は、その後山茶や迎春にいくら商賣を勸められても、剛情に客をとらずに

ゐた。又時々彼女の部屋へ、なじみの客が遊びに來ても、一しよに煙草でも吸ひ合ふ外に、決して客の意に從はなかつた。

「私は恐しい病氣を持つてゐるのです。側へいらつしやると、あなたにも移りますよ。」

それでも客が醉つてでもゐて、無理に彼女を自由にしようとすると、金花は何時もかう云つて、實際彼女の病んでゐる證據を示す事さへ憚らなかつた。だから客は彼女の部屋には、おひおひ遊びに來ないやうになつた。と同時に又彼女の家計も、一日毎に苦しくなつて行つた。……

今夜も彼女はこの卓に倚つて、長い間ぼんやり坐つてゐた。が、不相變彼女の部屋へは、客の來るけはひも見えなかつた。その内に夜は遠慮なく更け渡つて、彼女の耳にはひる音と云つては、唯何處かで鳴いてゐる蟋蟀の聲ばかりになつた。のみならず火の氣のない部屋の寒さは、床に敷きつめた石の上から、次第に彼女の鼠繻子の靴を、その靴の中の華奢な足を、水のやうに襲つて來るのであつた。

金花はうす暗いランプの火に、さつきからうつとり見入つてゐたが、やがて身震ひを一つすると翡翠の輪の下つた耳を掻いて、小さな欠伸を噛み殺した。すると殆その途端に、ペンキ塗りの

戸が勢よく開いて、見慣れない一人の外國人が、よろめくやうに外からはひつて來た。その勢が烈しかつたからであらう。卓の上のランプの火は、一しきりぱつと燃え上つて、妙に赤々と煤けた光を狹い部屋の中に漲らせた。客はその光をまともに浴びて、一度は卓の方へのめりかかつたが、すぐに又立ち直ると、今度は後へたじろいで、今し方しまつたペンキ塗りの戸へ、どしりと背を凭せてしまつた。

金花は思はず立ち上つて、この見慣れない外國人の姿へ、呆氣にとられた視線を投げた。客の年頃は三十五六でもあらうか。縞目のあるらしい茶の背廣に、同じ巾地の鳥打帽をかぶつた、眼の大きい、顋鬚のある、頰の日に燒けた男であつた。が、唯一つ合點の行かない事には、外國人には違ひないにしても、西洋人か東洋人か、奇體にその見分けがつかなかつた。それが黑い髮の毛を帽の下からはみ出させて、火の消えたパイプを啣へながら、戸口に立ち塞つてゐる有樣は、どう見ても泥醉した通行人が戸まどひでもしたらしく思はれるのであつた。

「何か御用ですか。」

金花は稍無氣味な感じに襲はれながら、やはり卓の前に立ちすくんだ儘、詰るやうにかう尋ね

て見た。すると相手は首を振つて、支那語はわからないと云ふ相圖をした。それから横啣へにしたパイプを離して、何やら意味のわからない滑かな外國語を一言洩らした。が、今度は金花の方が、卓の上のランプの光に、耳環の翡翠をちらつかせながら、首を振つて見せるより外に仕方がなかつた。

客は彼女が當惑らしく、美しい眉をひそめたのを見ると、突然大聲に笑ひながら、無造作に鳥打帽を脱ぎ離して、よろよろこちらへ歩み寄つた。さうして卓の向うの椅子へ、腰が抜けたやうに尻を下した。金花はこの時この外國人の顏が、何時何處と云ふ記憶はないにしても、確に見覺えがあるやうな、一種の親しみを感じ出した。客は無遠慮に盆の上の西瓜の種をつまみながら、と云つてそれを噛むでもなく、じろじろ金花を眺めてゐたが、やがて又妙な手眞似まじりに、何か外國語をしやべり出した。その意味も彼女にはわからなかつたが、唯この外國人が彼女の商賣に、多少の理解を持つてゐる事は、朧げながらも推測がついた。

支那語を知らない外國人と、長い一夜を明す事も、金花には珍しい事ではなかつた。そこで彼女は椅子にかけると、殆習慣になつてゐる、愛想の好い微笑を見せながら、相手には全然通じ

ない冗談などを云ひ始めた。が、客はその冗談がわかるのではないかと疑はれる程、一言二言しやべつては、上機嫌の笑ひ聲を擧げながら、前よりも更に目まぐるしく、いろいろな手眞似を使ひ出した。

　客の吐く息は酒臭かつた。しかしその陶然と赤くなつた顏は、この索寞とした部屋の空氣が、明くなるかと思ふ程、男らしい活力に溢れてゐた。少くともそれは金花にとつては、日頃見慣れてゐる南京の同國人は云ふまでもなく、今まで彼女が見た事のある、どんな東洋西洋の外國人よりも立派であつた。が、それにも關らず、前にも一度この顏を見た覺えのあると云ふ、さつきの感じだけはどうしても、打ち消す事が出來なかつた。金花は客の額に懸つた、黑い捲き毛を眺めながら、氣輕さうに愛嬌を振り撒く內にも、この顏に始めて遇つた時の記憶を、一生懸命に喚び起さうとした。

「この間肥つた奧さんと一しよに、畫舫に乘つてゐた人かしら。いやいや、あの人は髮の色が、もつとずつと赤かつた。では秦淮の孔子樣の廟へ、寫眞機を向けてゐた人かも知れない。しかしあの人はこの御客より、年をとつてゐたやうな心もちがする。さうさう、何時か利渉橋の側の飯

館の前に、人だかりがしてゐると思つたら、丁度この御客によく似た人が、太い籐の杖を振り上げて、人力車夫の背中を打つてゐたつけ。事によると、――が、どうもあの人の眼は、もつと瞳が青かつたやうだ。……」

金花がこんな事を考へてゐる内に、不相變愉快さうな外國人は、何時かパイプに煙草をつめて、匂の好い煙を吐き出してゐた。それが急に又何とか云つて、今度はおとなしくにやにや笑ふと、片手の指を二本延べて、金花の眼の前へ突き出しながら、?と云ふ意味の身ぶりをした。指二本が二弗と云ふ金額を示してゐることは、勿論誰の眼にも明かであつた。が、客を泊めない金花は、器用に西瓜の種を鳴らして、否と云ふ印に二度ばかり、これも笑ひ顔を振つて見せた。すると客は卓の上に横柄な兩肘を凭せた儘、うす暗いランプの光の中に、近々と醉顔をさし延ばして、ぢつと彼女を見守つたが、やがて又指を三本出して、答を待つやうな眼つきをした。

金花はちよいと椅子をずらせて、西瓜の種を含んだ儘、當惑らしい顏になつた。客は確に二弗の金では、彼女が體を任せないと云つたやうに思つてゐるらしかつた。と云つて言葉の通じない彼に、立ち入つた仔細をのみこませる事は、到底出來さうにも思はれなかつた。そこで金花は今

更のやうに、彼女の輕率を後悔しながら、涼しい視線を外へ轉じて、仕方なく更にきつぱりと、もう一度頭を振つて見せた。

所が相手の外國人は、暫くうす笑ひを浮べながら、ためらふやうな氣色を示した後、四本の指をさし延ばして、何か又外國語をしやべつて聞かせた。途方に暮れた金花は頰を抑へて、微笑する氣力もなくなつてゐたが、咄嗟にもうかうなつた上は、何時までも首を振り續けて、相手が思ひ切る時を待つ外はないと決心した。が、さう思ふ内にも客の手は、何か眼に見えないものでも捉へるやうに、とうとう五指とも開いてしまつた。

それから二人は長い間、手眞似と身ぶりとの入り交つた押し問答を續けてゐた。その間に客は根氣よく、一本づつ指の數を增した揚句、しまひには十弗の金を出しても、惜しくないと云ふ意氣ごみを示すやうになつた。が、私窩子には大金の十弗も、金花の決心は動かせなかつた。彼女はさつきから椅子を離れて、斜に卓の前へ佇んでゐたが、相手が兩手の指を見せると、苛立たしさうに足踏みして、何度も續けさまに頭を振つた。その途端にどう云ふ拍子か、釘に懸つてゐた十字架がはづれて、かすかな金屬の音を立てながら、足もとの敷石の上に落ちた。

彼女は慌しい手を延べて、大切な十字架を拾ひ上げた。その時何氣なく十字架に彫られた、受難の基督の顏を見ると、不思議にもそれが卓の向うの、外國人の顏と生き寫しであつた。

「何でも何處かで見たやうだと思つたのは、この基督樣の御顏だつたのだ。」

金花は黑繻子の上衣の胸に、眞鍮の十字架を押し當てた儘、卓を隔てた客の顏へ、思はず驚きの視線を投げた。客はやはりランプの光に、酒氣を帶びた顏を火照らせながら、時々パイプの煙を吐いては、意味ありげな微笑を浮べてゐた。しかもその眼は彼女の姿へ、――恐らくは白い頸すぢから、翡翠の環を下げた耳のあたりへ、絶えずさまよつてゐるらしかつた。しかしかう云ふ客の容子も、金花には優しい一種の威嚴に、充ち滿ちてゐるかのやうな心もちがした。

やがて客はパイプを止めると、わざとらしく小首を傾けて、何やら笑ひ聲の言葉をかけた。それが金花の心には、殆巧妙な催眠術師が、被術者の耳に囁き聞かせる、暗示のやうな作用を起した。彼女はあの健氣な決心も、全く忘れてしまつたのか、そつとほほ笑んだ眼を伏せて、眞鍮の十字架を手まさぐりながら、この怪しい外國人の側へ、羞しさうに歩み寄つた。

客はズボンの隱しを探つて、じやらじやら銀の音をさせながら、依然とうす笑ひを浮べた眼に、

暫くは金花の立ち姿を好ましさうに眺めてゐた。が、その眼の中のうす笑ひが、熱のあるやうな光に變つたと思ふと、いきなり椅子から飛び上つて、酒の匂のする背廣の腕に、力一ぱい金花を抱きすくめた。金花はまるで喪心したやうに、翡翠の耳環の下がつた頭をぐつたりと後へ仰向けた儘、しかし蒼白い頬の底には、鮮な血の色を仄めかせて、鼻の先に迫つた彼の顏へ、恍惚としたうす眼を注いでゐた。この不思議な外國人に、彼女の體を自由にさせるか、それとも病を移さない爲に、彼の接吻を刎ねつけるか、そんな思慮をめぐらす餘裕は、勿論何處にも見當らなかつた。金花は髯だらけな客の口に、彼女の口を任せながら、唯燃えるやうな戀愛の歡喜が、始めて知つた戀愛の歡喜が、激しく彼女の胸もとへ、突き上げて來るのを知るばかりであつた……
……

二

數時間の後、ランプの消えた部屋の中には、唯かすかな蟋蟀の聲が、寢臺を洩れる二人の寢息に、寂しい秋意を加へてゐた。しかしその間に金花の夢は、埃じみた寢臺の帷から、屋根の上に

ある星月夜へ、煙のやうに高高と昇つて行つた。

×　×　×　×　×　×

――金花は紫檀の椅子に坐つて、卓の上に並んでゐる、さまざまな料理に箸をつけてゐた。燕の巣、鮫の鰭、蒸した卵、燻した鯉、豚の丸煮、海參の羹、――料理はいくら數へても、到底數へ盡されなかつた。しかもその食器が悉、べた一面に青い蓮華や金の鳳凰を描き立てた、立派な皿小鉢ばかりであつた。

彼女の椅子の後には、絳紗の帷を垂れた窓があつて、その又窓の外には川があるのか、靜な水の音や櫂の音が、絕えず此處まで聞えて來た。それがどうも彼女には、幼少の時から見慣れてゐる、秦淮らしい心もちがした。しかし彼女が今ゐる所は、確に天國の町にある、基督の家に違ひなかつた。

金花は時々箸を止めて、卓の周圍を眺めまはした。が、廣い部屋の中には、龍の彫刻のある柱だの、大輪の菊の鉢植ゑだのが、料理の湯氣に仄めいてゐる外は、一人も人影は見えなかつた。

それにも關らず卓の上には、食器が一つからになると、忽ち何處からか新しい料理が、暖な香氣を漲らせて、彼女の眼の前へ運ばれて來た。と思ふと又箸をつけない內に、丸燒きの雉などが羽搏きをして、紹興酒の瓶を倒しながら、部屋の天井へばたばたと、舞ひ上つてしまふ事もあつた。

その內に金花は誰か一人、音もなく彼女の椅子の後へ、歩み寄つたのに心づいた。そこで箸を持つた儘、そつと後を振り返つて見た。すると其處にはどう云ふ譯か、あると思つた窓がなくて、緞子の蒲團を敷いた紫檀の椅子に、見慣れない一人の外國人が、眞鍮の水煙管を啣へながら、悠悠と腰を下してゐた。

金花はその男を一目見ると、それが今夜彼女の部屋へ、泊りに來た男だと云ふ事がわかつた。が、唯一つ彼と違ふ事には、丁度三日月のやうな光の環が、この外國人の頭の上、一尺ばかりの空に懸つてゐた。

その時又金花の眼の前には、何だか湯氣の立つ大皿が一つ、まるで卓から湧いたやうに、突然旨さうな料理を運んで來た。彼女はすぐに箸を擧げて、皿の中の珍味を挾まうとしたが、ふと彼

女の後にゐる外國人の事を思ひ出して、肩越しに彼を見返りながら、
「あなたも此處へいらつしやいませんか。」と、遠慮がましい聲をかけた。
「まあ、お前だけお食べ。それを食べるとお前の病氣が、今夜の内によくなるから。」
圓光を頂いた外國人は、やはり水煙管を啣へた儘、無限の愛を含んだ微笑を洩らした。
「ではあなたは召上らないのでございますか。」
「私かい。私は支那料理は嫌ひだよ。お前はまだ私を知らないのかい。耶蘇基督はまだ一度も、支那料理を食べた事はないのだよ。」
南京の基督はかう云つたと思ふと、徐に紫檀の椅子を離れて、呆氣にとられた金花の頬へ、後から優しい接吻を與へた。

× × × × ×

天國の夢がさめたのは、既に秋の明け方の光が、狭い部屋中にうすら寒く擴がり出した頃であつた。が、埃臭い帷を垂れた、小舸のやうな寝臺の中には、さすがにまだ生暖い仄かな闇が残つ

てゐた。そのうす暗がりに浮んでゐる、半ば仰向いた金花の顏は、色もわからない古毛布に、圓い括り顋を隱した儘、未に眠い眼を開かなかつた。しかし血色の惡い頰には、昨夜の汗にくつついたのか、べつたり油じみた髮が亂れて、心もち明いた脣の隙にも、糯米のやうに細い齒が、かすかに白々と覗いてゐた。

金花は眠りがさめた今でも、菊の花や、水の音や、雉の丸燒や、耶蘇基督や、その外いろいろな夢の記憶に、うとうと心をさまよはせてゐた。が、その内に寢臺の中が、だんだん明くなつて來ると、彼女の快い夢見心にも、傍若無人な現實が、昨夜不思議な外國人と一しよに、この籐の寢臺へ上つた事が、はつきりと意識に踏みこんで來た。

「もしあの人に病氣でも移したら、――」

金花はさう考へると、急に心が暗くなつて、今朝は再彼の顏を見るに堪へないやうな心もちがした。が、一度眼がさめた以上、なつかしい彼の日に燒けた顏を何時までも見ずにゐる事は、猶更彼女には堪へられなかつた。そこで暫くためらつた後、彼女は怯づ怯づ眼を開いて、今はもう明くなつた寢臺の中を見まはした。しかし其處には思ひもよらず、毛布に蔽はれた彼女の外は、

十字架の耶蘇に似た彼は勿論、人の影さへも見えなかつた。
「ではあれも夢だつたかしら。」
垢じみた毛布を剝ねのけるが早いか、金花は寢臺の上に起き直つた。さうして兩手に眼を擦つてから、重さうに下つた帷を掲げて、まだ澁い視線を部屋の中へ投げた。
部屋は冷かな朝の空氣に、殘酷な位歷々と、あらゆる物の輪廓を描いてゐた。古びた卓、火の消えたランプ、それから一脚は床に倒れ、一脚は壁に向つてゐる椅子、――すべてが昨夜の儘であつた。そればかりか現に卓の上には、西瓜の種が散らばつた中に、小さな眞鍮の十字架さへ、鈍い光を放つてゐた。金花は眩い眼をしばたたいて、茫然とあたりを見まはしながら、暫くは取り亂した寢臺の上に、寒さうな横坐りを改めなかつた。
「やつぱり夢ではなかつたのだ。」
金花はから呟きながら、さまざまにあの外國人の不可解な行く方を思ひやつた。勿論考へるまでもなく、彼は彼女が眠つてゐる暇に、そつと部屋を拔け出して、歸つたかも知れないと云ふ氣はあつた。しかしあれ程彼女を愛撫した彼が、一言も別れを惜まずに、行つてしまつたと云ふ事

は、信じられないと云ふよりも、寧ろ信じるに忍びなかつた。その上彼女はあの怪しい外國人から、まだ約束の十弗の金さへ、貰ふ事を忘れてゐたのであつた。

「それとも本當に歸つたのかしら。」

彼女は重い胸を抱きながら、毛布の上に脫ぎ捨てた、黑繻子の上衣をひつかけようとした。が、突然その手を止めると、彼女の顏には見る見る內に、生き生きした血の色が擴がり始めた。それはペンキ塗りの戶の向うに、あの怪しい外國人の足音でも聞えた爲であらうか。或は又枕や毛布にしみた、酒臭い彼の移り香が、偶然恥しい昨夜の記憶を喚びさました爲であらうか。いや、金花はこの瞬間、彼女の體に起つた奇蹟が、一夜の中に跡方もなく、惡性を極めた楊梅瘡を癒した事に氣づいたのであつた。

「ではあの人が基督樣だつたのだ。」

彼女は思はず襯衣の儘、轉ぶやうに寢臺を這ひ下りると、冷たい敷き石の上に跪いて、再生の主と言葉を交はした、美しいマグダラのマリアのやうに、熱心な祈禱を捧げ出した。………

三

翌年の春の或夜、宋金花を訪れた、若い日本の旅行家は、再うす暗いランプの下に、彼女と卓を挾んでゐた。

「まだ十字架がかけてあるぢやないか。」

その夜彼が何かの拍子に、ひやかすやうにかういふと、金花は急に眞面目になつて、一夜南京に降つた基督が、彼女の病を癒したと云ふ、不思議な話を聞かせ始めた。

その話を聞きながら、若い日本の旅行家は、こんな事を獨り考へてゐた。——

「おれはその外國人を知つてゐる。あいつは日本人と亞米利加人との混血兒だ。名前は確かGeorge Murry とか云つたつけ。あいつはおれの知り合ひの路透電報局の通信員に、基督教を信じてゐる、南京の私窩子を一晩買つて、その女がすやすや眠つてゐる間に、そつと逃げて來たと云ふ話を得意らしく話したさうだ。おれがこの前に來た時には、丁度あいつもおれと同じ上海のホテルに泊つてゐたから、顏だけは今でも覺えてゐる。何でもやはり英字新聞の通信員だと稱し

てゐたが、男振りに似合はない、人の悪るさうな人間だつた。あいつがその後悪性な梅毒から、とうとう發狂してしまつたのは、事によるとこの女の病氣が傳染したのかも知れない。しかしこの女は今になつても、ああ云ふ無頼な混血兒を耶蘇基督だと思つてゐる。おれは一體この女の爲に、蒙を啓いてやるべきであらうか。それとも默つて永久に、昔の西洋の傳説のやうな夢を見させて置くべきだらうか……」

金花の話が終つた時、彼は思ひ出したやうに燐寸を擦つて、匂の高い葉卷をふかし出した。さうしてわざと熱心さうに、こんな窮した質問をした。

「さうかい。それは不思議だな。だが、――だがお前は、その後一度も煩はないかい。」

「ええ、一度も。」

金花は西瓜の種を噛りながら、晴れ晴れと顔を輝かせて、少しもためらはずに返事をした。

本篇を草するに當り、谷崎潤一郎氏作「秦淮の一夜」に負ふ所尠からず。附記して感謝の意を表す。

（大正九年六月二十二日）

杜子春

一

或春の日暮です。

唐の都洛陽の西の門の下に、ぼんやり空を仰いでゐる、一人の若者がありました。

若者は名は杜子春といつて、元は金持の息子でしたが、今は財産を費ひ盡して、その日の暮しにも困る位、憐な身分になつてゐるのです。

何しろその頃洛陽といへば、天下に並ぶもののない、繁昌を極めた都ですから、往來にはまだしつきりなく、人や車が通つてゐました。門一ぱいに當つてゐる、油のやうな夕日の光の中に、老人のかぶつた紗の帽子や、土耳古の女の金の耳環や、白馬に飾つた色糸の手綱が、絶えず流れて行く容子は、まるで畫のやうな美しさです。

しかし杜子春は相變らず、門の壁に身を凭せて、ぼんやり空ばかり眺めてゐました。空には、

もう細い月が、うらうらと靡いた霞の中に、まるで爪の痕かと思ふ程、かすかに白く浮んでゐるのです。

「日は暮れるし、腹は減るし、その上もうどこへ行つても、泊めてくれる所はなささうだし――こんな思ひをして生きてゐる位なら、一そ川へでも身を投げて、死んでしまつた方がましかも知れない。」

杜子春はひとりさつきから、こんな取りとめもないことを思ひめぐらしてゐたのです。

するとどこからやつて來たか、突然彼の前へ足を止めた、片目眇の老人があります。それが夕日の光を浴びて、大きな影を門へ落すと、じつと杜子春の顔を見ながら、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、横柄に言葉をかけました。

「私ですか。私は今夜寢る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」

老人の尋ね方が急でしたから、杜子春はさすがに眼を伏せて、思はず正直な答をしました。

「さうか。それは可哀さうだな。」

老人は暫く何事か考へてゐるやうでしたが、やがて、往來にさしてゐる夕日の光を指さしなが

ら、

「ではおれが好いことを一つ教へてやらう。今この夕日の中に立つて、お前の影が地に映つたら、その頭に當る所を夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

「ほんたうですか。」

杜子春は驚いて、伏せてゐた眼を擧げました。所が更に不思議なことには、あの老人はどこへ行つたか、もうあたりにはそれらしい、影も形も見當りません。その代り空の月の色は前よりも猶白くなつて、休みない往來の人通りの上には、もう氣の早い蝙蝠が二三匹ひらひら舞つてゐました。

二

杜子春は一日の內に、洛陽の都でも唯一人といふ大金持になりました。あの老人の言葉通り、夕日に影を映して見て、その頭に當る所を、夜中にそつと掘つて見たら、大きな車にも餘る位、黄金が一山出て來たのです。

大金持になつた杜子春は、すぐに立派な家を買つて、玄宗皇帝にも負けない位、贅澤な暮しをし始めました。蘭陵の酒を買はせるやら、桂州の龍眼肉をとりよせるやら、日に四度色の變る牡丹を庭に植ゑさせるやら、白孔雀を何羽も放し飼ひにするやら、玉を集めるやら、錦を縫はせるやら、香木の車を造らせるやら、象牙の椅子を誂へるやら、その贅澤を一々書いてゐては、いつになつてもこの話がおしまひにならない位です。

するとかういふ噂を聞いて、今までは路で行き合つても、挨拶さへしなかつた友だちなどが、朝夕遊びにやつて來ました。それも一日毎に數が增して、半年ばかり經つ內には、洛陽の都に名を知られた才子や美人が多い中で、杜子春の家へ來ないものは、一人もない位になつてしまつたのです。杜子春はこの御客たちを相手に、毎日酒盛りを開きました。その酒盛りの又盛なことは、中々口には盡されません。極かいつまんだだけをお話しても、杜子春が金の杯に西洋から來た葡萄酒を汲んで、天竺生れの魔法使が刀を呑んで見せる藝に見とれてゐると、そのまはりには二十人の女たちが、十人は翡翠の蓮の花を、十人は瑪瑙の牡丹の花を、いづれも髮に飾りながら、笛や琴を節面白く奏してゐるといふ景色なのです。

しかしいくら大金持でも、御金には際限がありますから、さすがに贅澤家の杜子春も、一年二年と經つ内には、だんだん貧乏になり出しました。さうすると人間は薄情なもので、昨日までは毎日來た友だちも、今日は門の前を通つてさへ、挨拶一つして行きません。ましてとうとう三年目の春、又杜子春が以前の通り、一文無しになつて見ると、廣い洛陽の都の中にも、彼に宿を貸さうといふ家は、一軒もなくなつてしまひました。いや、宿を貸す所か、今では椀に一杯の水も、惠んでくれるものはないのです。

そこで彼は或日の夕方、もう一度あの洛陽の西の門の下へ行つて、ぼんやり空を眺めながら、途方に暮れて立つてゐました。するとやはり昔のやうに、片目眇の老人が、どこからか姿を現して、

「お前は何を考へてゐるのだ。」と、聲をかけるではありませんか。

杜子春は老人の顏を見ると、恥しさうに下を向いた儘、暫くは返事もしませんでした。が、老人はその日も親切さうに、同じ言葉を繰返しますから、こちらも前と同じやうに、

「私は今夜寢る所もないので、どうしたものかと考へてゐるのです。」と、恐る恐る返事をしまし

た。

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを一つ敎へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その胸に當る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの黄金が埋まつてゐる筈だから。」

老人はかう言つたと思ふと、今度も亦人ごみの中へ、搔き消すやうに隱れてしまひました。

杜子春はその翌日から、忽ち天下第一の大金持に返りました。と同時に相變らず、仕放題な贅澤をし始めました。庭に咲いてゐる牡丹の花、その中に眠つてゐる白孔雀、それから刀を呑んで見せる、天竺から來た魔法使——すべてが昔の通りなのです。

ですから車に一ぱいあつた、あの夥しい黄金も、又三年ばかり經つ内には、すつかりなくなつてしまひました。

三

「お前は何を考へてゐるのだ。」

片目眇の老人は、三度杜子春の前へ來て、同じことを問ひかけました。勿論彼はその時も、洛陽の西の門の下に、ほそぼそと霞を破つてゐる三日月の光を眺めながら、ぼんやり佇んでゐたのです。

「私ですか。私は今夜寢る所もないので、どうしようかと思つてゐるのです。」

「さうか。それは可哀さうだな。ではおれが好いことを敎へてやらう。今この夕日の中へ立つて、お前の影が地に映つたら、その腹に當る所を、夜中に掘つて見るが好い。きつと車に一ぱいの――」

老人がここまで言ひかけると、杜子春は急に手を擧げて、その言葉を遮りました。

「いや、お金はもう入らないのです。」

「金はもう入らない？　ははあ、では贅澤をするにはとうとう飽きてしまつたと見えるな。」

老人は審しさうな眼つきをしながら、じつと杜子春の顏を見つめました。

「何、贅澤に飽きたのぢやありません。人間といふものに愛想がつきたのです。」

杜子春は不平さうな顏をしながら、突慳貪にかう言ひました。

「それは面白いな。どうして又人間に愛想が盡きたのだ？」

「人間は皆薄情です。私が大金持になつた時には、世辭も追從もしますけれど、一旦貧乏になつて御覽なさい。柔しい顏さへもして見せはしません。そんなことを考へると、たとひもう一度大金持になつた所が、何にもならないやうな氣がするのです。」

老人は杜子春の言葉を聞くと、急ににやにや笑ひ出しました。

「さうか。いや、お前は若い者に似合はず、感心に物のわかる男だ。ではこれからは貧乏をしても、安らかに暮して行くつもりか。」

杜子春はちよいとためらひました。が、すぐに思ひ切つた眼を擧げると、訴へるやうに老人の顏を見ながら、

「それも今の私には出來ません。ですから私はあなたの弟子になつて、仙術の修業をしたいと思ふのです。いいえ、隱してはいけません。あなたは道徳の高い仙人でせう。仙人でなければ、一夜の內に私を天下第一の大金持にすることは出來ない筈です。どうか私の先生になつて、不思議な仙術を教へて下さい。」

老人は眉をひそめた儘、暫くは默つて、何事か考へてゐるやうでしたが、やがて又につこり笑ひながら、

「いかにもおれは峨眉山に棲んでゐる、鐵冠子といふ仙人だ。始めお前の顏を見た時、どこか物わかりが好ささうだつたから、二度まで大金持にしてやつたのだが、それ程仙人になりたければ、おれの弟子にとり立ててやらう。」と、快く願を容れてくれました。

杜子春は喜んだの、喜ばないのではありません。老人の言葉がまだ終らない内に、彼は大地に額をつけて、何度も鐵冠子に御時宜をしました。

「いや、さう御禮などは言つて貰ふまい。いくらおれの弟子にした所で、立派な仙人になれるかなれないかは、お前次第できまることだからな。――が、兎も角もまづおれと一しよに、峨眉山の奥へ來て見るが好い。おお、幸、こゝに竹杖が一本落ちてゐる。では早速これへ乘つて、一飛びに空を渡るとしよう。」

鐵冠子はそこにあつた青竹を一本拾ひ上げると、口の中に咒文を唱へながら、杜子春と一しよにその竹へ、馬にでも乘るやうに跨りました。すると不思議ではありませんか。竹杖は忽ち龍の

やうに、勢よく大空へ舞ひ上つて、晴れ渡つた春の夕空を峨眉山の方角へ飛んで行きました。
杜子春は膽をつぶしながら、恐る恐る下を見下しました。が、下には唯青い山々が夕明りの底に見えるばかりで、あの洛陽の都の西の門は、（とうに霞に紛れたのでせう。）どこを探しても見當りません。その內に鐵冠子は、白い鬢の毛を風に吹かせて、高らかに歌を唱ひ出しました。

朝に北海に遊び、暮には蒼梧。
袖裏の青蛇、膽氣粗なり。
三たび嶽陽に入れども、人識らず。
朗吟して、飛過す洞庭湖。

四

二人を乘せた青竹は、間もなく峨眉山へ舞ひ下りました。
そこは深い谷に臨んだ、幅の廣い一枚岩の上でしたが、よくよく高い所だと見えて、中空に垂れた北斗の星が、茶碗程の大きさに光つてゐました。元より人跡の絶えた山ですから、あたりは

しんと靜まり返つて、やつと耳にはひるものは、後の絶壁に生えてゐる、曲りくねつた一株の松が、こうこうと夜風に鳴る音だけです。

二人がこの岩の上に來ると、鐵冠子は杜子春を絶壁の下に坐らせて、

「おれはこれから天上へ行つて、西王母に御眼にかかつて來るから、お前はその間ここに坐つて、おれの歸るのを待つてゐるが好い。多分おれがゐなくなると、いろいろな魔性が現れて、お前をたぶらかさうとするだらうが、たとひどんなことが起らうとも、決して聲を出すのではないぞ。もし一言でも口を利いたら、お前は到底仙人にはなれないものだと覺悟をしろ。好いか。天地が裂けても、默つてゐるのだぞ。」と言ひました。

「大丈夫です。決して聲なぞは出しはしません。命がなくなつても、默つてゐます。」

「さうか。それを聞いて、おれも安心した。ではおれは行つて來るから。」

老人は杜子春に別れを告げると、又あの竹杖に跨つて、夜目にも削つたやうな山々の空へ、一文字に消えてしまひました。

杜子春はたつた一人、岩の上に坐つた儘、靜に星を眺めてゐました。すると彼是半時ばかり經

つて、深山の夜氣が肌寒く薄い着物に透り出した頃、突然空中に聲があつて、
「そこにゐるのは何者だ。」と、叱りつけるではありませんか。
しかし杜子春は仙人の敎通り、何とも返事をしずにゐました。
所が又暫くすると、やはり同じ聲が響いて、
「返事をしないと立ち所に、命はないものと覺悟しろ。」と、いかめしく嚇しつけるのです。
杜子春は勿論默つてゐました。
と、どこから登つて來たか、爛々と眼を光らせた虎が一匹、忽然と岩の上に躍り上つて、杜子春の姿を睨みながら、一聲高く哮りました。のみならずそれと同時に、頭の上の松の枝が、烈しくざわざわ搖れたと思ふと、後の絶壁の頂からは、四斗樽程の白蛇が一匹、炎のやうな舌を吐いて、見る見る近くへ下りて來るのです。
杜子春はしかし平然と、眉毛も動かさずに坐つてゐました。
虎と蛇とは、一つ餌食を狙つて、互に隙でも窺ふのか、暫くは睨合ひの體でしたが、やがてどちらが先ともなく、一時に杜子春に飛びかかりました。が虎の牙に噛まれるか、蛇の舌に呑まれ

るか、杜子春の命は瞬く内に、なくなつてしまふと思つた時、虎と蛇とは霧の如く、夜風と共に消え失せて、後には唯、絶壁の松が、さつきの通りこうこうと枝を鳴らしてゐるばかりなのです。杜子春はほつと一息しながら、今度はどんなことが起るかと、心待ちに待つてゐました。

すると一陣の風が吹き起つて、墨のやうな黒雲が一面にあたりをとざすや否や、うす紫の稻妻がやにはに闇を二つに裂いて、凄じく雷が鳴り出しました。いや、雷ばかりではありません。それと一しよに瀑のやうな雨も、いきなりどうどうと降り出したのです。杜子春はこの天變の中に、恐れ氣もなく坐つてゐました。風の音、雨のしぶき、それから絶え間ない稻妻の光、――暫くはさすがの峨眉山も、覆るかと思ふ位でしたが、その内に耳をもつんざく程、大きな雷鳴が轟いたと思ふと、空に渦巻いた黒雲の中から、まつ赤な一本の火柱が、杜子春の頭へ落ちかかりました。

杜子春は思はず耳を抑へて、一枚岩の上へひれ伏しました。が、すぐに眼を開いて見ると、空は以前の通り晴れ渡つて、向うに聳えた山々の上にも、茶碗程の北斗の星が、やはりきらきら輝いてゐます。して見れば今の大あらしも、あの虎や白蛇と同じやうに、鐵冠子の留守をつけこんだ、魔性の惡戲に違ひありません。杜子春は漸く安心して、額の冷汗を拭ひながら、又岩の上に

坐り直しました。
が、そのため息がまだ消えない内に、今度は彼の坐つてゐる前へ、金の鎧を着下した、身の丈三丈もあらうといふ、厳かな神將が現れました。神將は手に三叉の戟を持つてゐましたが、いきなりその戟の切先を杜子春の胸もとへ向けながら、眼を嗔らせて叱りつけるのを聞けば、
「こら、その方は一體何物だ。この峨眉山といふ山は、天地開闢の昔から、おれが住居をしてゐる所だぞ。それも憚らずたつた一人、こゝへ足を踏み入れるとは、よもや唯の人間ではあるまい。さあ命が惜しかつたら、一刻も早く返答しろ。」と言ふのです。
しかし杜子春は老人の言葉通り、默然と口を噤んでゐました。
「返事をしないか。――しないな。好し。しなければ、しないで勝手にしろ。その代りおれの眷屬たちが、その方をずたずたに斬つてしまふぞ。」
神將は戟を高く擧げて、向うの山の空を招きました。その途端に闇がさつと裂けると、驚いたことには無數の神兵が、雲の如く空に充滿ちて、それが皆槍や刀をきらめかせながら、今にもここへ一なだれに攻め寄せようとしてゐるのです。

この景色を見た杜子春は、思はずあつと叫びさうにしましたが、すぐに又鐵冠子の言葉を思ひ出して、一生懸命に默つてゐました。神將は彼が恐れないのを見ると、怒つたの怒らないのではありません。

「この剛情者め。どうしても返事をしなければ、約束通り命はとつてやるぞ。」

神將はから喚くが早いか、三叉の戟を閃かせて、一突きに杜子春を突き殺しました。さうして峨眉山もどよむ程、からからと高く笑ひながら、どこともなく消えてしまひました。勿論この時はもう無數の神兵も、吹き渡る夜風の音と一しよに、夢のやうに消え失せた後だつたのです。

北斗の星は又寒さうに、一枚岩の上を照らし始めました。絶壁の松も前に變らず、こうこうと枝を鳴らせてゐます。が、杜子春はとうに息が絶えて、仰向けにそこへ倒れてゐました。

五

杜子春の體は岩の上へ、仰向けに倒れてゐましたが、杜子春の魂は、靜に體から抜け出して、地獄の底へ下りて行きました。

この世と地獄との間には、闇穴道といふ道があつて、そこは年中暗い空に、氷のやうな冷たい風がぴゆうぴゆう吹き荒んでゐるのです。杜子春はその風に吹かれながら、暫くは唯木の葉のやうに、空を漂つて行きましたが、やがて森羅殿といふ額の懸つた立派な御殿の前へ出ました。

御殿の前にゐた大勢の鬼は、杜子春の姿を見るや否や、すぐにそのまはりを取り捲いて、階の前へ引き据ゑました。階の上には一人の王様が、まつ黒な袍に金の冠をかぶつて、いかめしくあたりを睨んでゐます。これは兼ねて噂に聞いた、閻魔大王に違ひありません。杜子春はどうなることかと思ひながら、恐る恐るそこへ跪いてゐました。

「こら、その方は何の爲に、峨眉山の上へ坐つてゐた？」

閻魔大王の聲は雷のやうに、階の上から響きました。杜子春は早速その問に答へようとしましたが、ふと又思ひ出したのは、「決して口を利くな。」といふ鐵冠子の戒めの言葉です。そこで唯頭を垂れた儘、唖のやうに默つてゐました。すると閻魔大王は、持つてゐた鐵の笏を擧げて、顔中の鬚を逆立てながら、

「その方はここをどこだと思ふ？　速に返答をすれば好し、さもなければ時を移さず、地獄の呵

責に遇はせてくれるぞ。」と、威丈高に罵りました。

が、杜子春は相變らず脣一つ動かしません。それを見た閻魔大王は、すぐに鬼どもの方を向いて、荒々しく何か言ひつけると、鬼どもは一度に畏つて、忽ち杜子春を引き立てながら、森羅殿の空へ舞ひ上りました。

地獄には誰でも知つてゐる通り、劍の山や血の池の外にも、焦熱地獄といふ焰の谷や極寒地獄といふ氷の海が、眞暗な空の下に並んでゐます。鬼どもはさういふ地獄の中へ、代る代る杜子春を抛りこみました。ですから杜子春は無殘にも、劍に胸を貫かれるやら、焰に顏を燒かれるやら、舌を拔かれるやら、皮を剝がれるやら、鐵の杵に撞かれるやら、油の鍋に煮られるやら、毒蛇に腦味噌を吸はれるやら、熊鷹に眼を食はれるやら、――その苦しみを數へ立ててゐては、到底際限がない位、あらゆる責苦に遇はされたのです。それでも杜子春は我慢強く、じつと齒を食ひしばつた儘、一言も口を利きませんでした。

これにはさすがの鬼どもも、呆れ返つてしまつたのでせう。もう一度夜のやうな空を飛んで、森羅殿の前へ歸つて來ると、さつきの通り杜子春を階の下に引き据ゑながら、御殿の上の閻魔大

王に、

「この罪人はどうしても、ものを言ふ氣色がございません。」と、口を揃へて言上しました。

閻魔大王は眉をひそめて、暫く思案に暮れてゐましたが、やがて何か思ひついたと見えて、

「この男の父母は、畜生道に落ちてゐる筈だから、早速ここへ引き立てて來い。」と、一匹の鬼に言ひつけました。

鬼は忽ち風に乘つて、地獄の空へ舞ひ上りました。と思ふと、又星が流れるやうに、二匹の獸を驅り立てながら、さつと森羅殿の前へ下りて來ました。その獸を見た杜子春は、驚いたの驚かないのではありません。なぜかといへばそれは二匹とも、形は見すぼらしい痩せ馬でしたが、顏は夢にも忘れない、死んだ父母の通りでしたから。

「こら、その方は何のために、峨眉山の上に坐つてゐたか、まつすぐに白狀しなければ、今度はその方の父母に痛い思ひをさせてやるぞ。」

杜子春はかう嚇されても、やはり返答をしずにゐました。

「この不孝者めが。その方は父母が苦しんでも、その方さへ都合が好ければ、好いと思つてゐる

のだな。」

閻魔大王は森羅殿も崩れる程、凄じい聲で喚きました。

「打て。鬼ども。その二匹の畜生を、肉も骨も打ち碎いてしまへ。」

鬼どもは一齊に「はつ」と答へながら、鐵の鞭をとつて立ち上ると、四方八方から二匹の馬を、未練未釋なく打ちのめしました。鞭はりうりうと風を切つて、所嫌はず雨のやうに、馬の皮肉を打ち破るのです。馬は、——畜生になつた父母は、苦しさうに身を悶えて、眼には血の涙を浮べた儘、見てもゐられない程嘶き立てました。

「どうだ。まだその方は白狀しないか。」

閻魔大王は鬼どもに、暫く鞭の手をやめさせて、もう一度杜子春の答を促しました。もうその時には二匹の馬も、肉は裂け骨は碎けて、息も絶え絶えに階の前へ、倒れ伏してゐたのです。

杜子春は必死になつて、鐵冠子の言葉を思ひ出しながら、緊く眼をつぶつてゐました。するとその時彼の耳には、殆聲とはいへない位、かすかな聲が傳はつて來ました。

「心配をおしでない。私たちはどうなつても、お前さへ仕合せになれるのなら、それより結構な

ことはないのだからね。大王が何と仰つても、言ひたくないことは默つて御出で。」
　それは確に懷しい、母親の聲に違ひありません。杜子春は思はず、眼をあきました。さうして馬の一匹が、力なく地上に倒れた儘、悲しさうに彼の顏へ、ぢつと眼をやつてゐるのを見ました。母親はこんな苦しみの中にも、息子の心を思ひやつて、鬼どもの鞭に打たれたことを、怨む氣色さへも見せないのです。大金持になれば御世辭を言ひ、貧乏人になれば口も利かない世間の人たちに比べると、何といふ有難い志でせう。何といふ健氣な決心でせう。杜子春は老人の戒めも忘れて、轉ぶやうにその側へ走りよると、兩手に半死の馬の頸を抱いて、はらはらと淚を落しながら、「お母さん。」と一聲を叫びました。……

六

　その聲に氣がついて見ると、杜子春はやはり夕日を浴びて、洛陽の西の門の下に、ぼんやり佇んでゐるのでした。霞んだ空、白い三日月、絶え間ない人や車の波、——すべてがまだ峨眉山へ、行かない前と同じことです。

「どうだな。おれの弟子になつた所が、とても仙人にはなれはすまい。」
片目眇の老人は微笑を含みながら言ひました。
「なれません。なれませんが、しかし私はなれなかつたことも、反つて嬉しい氣がするのです。」
杜子春はまだ眼に涙を浮べた儘、思はず老人の手を握りました。
「いくら仙人になれた所が、私はあの地獄の森羅殿の前に、鞭を受けてゐる父母を見ては、默つてゐる譯には行きません。」
「もしお前が默つてゐたら――」と鐵冠子は急に嚴な顔になつて、ぢつと杜子春を見つめました。
「もしお前が默つてゐたら、おれは即座にお前の命を絶つてしまはうと思つてゐたのだ。――お前はもう仙人になりたいといふ望も持つてゐまい。大金持になることは、元より愛想がつきた筈だ。ではお前はこれから後、何になつたら好いと思ふな。」
「何になつても、人間らしい、正直な暮しをするつもりです。」
杜子春の聲には今までにない晴れ晴れした調子が罩つてゐました。
「その言葉を忘れるなよ。ではおれは今日限り、二度とお前には遇はないから。」

鐵冠子はかう言ふ内に、もう歩き出してゐましたが、急に又足を止めて、杜子春の方を振り返ると、

「おゝ、幸、今思ひ出したが、おれは泰山の南の麓に一軒の家を持つてゐる。その家を畑ごとお前にやるから、早速行つて住まふが好い。今頃は丁度家のまはりに、桃の花が一面に咲いてゐるだらう。」と、さも愉快さうにつけ加へました。

（大正九年六月）

捨兒

「淺草の永住町に、信行寺と云ふ寺がありますが、――いえ、大きな寺ぢやありません。唯日朗上人の御木像があるとか云ふ、相應に由緒のある寺ださうです。その寺の門前に、明治二十二年の秋、男の子が一人捨ててありました。それが又生れ年は勿論、名前を書いた紙もついてゐない。――何でも古い黄八丈の一つ身にくるんだ儘、緒の切れた女の草履を枕に、捨ててあつたと云ふ事です。

「當時信行寺の住職は、田村日錚と云ふ老人でしたが、丁度朝の御勤めをしてゐると、これも好い年をした門番が、捨兒のあつた事を知らせに來たさうです。すると佛前に向つてゐた和尙は、殆門番の方も振り返らずに、「さうか。ではこちらへ抱いて來るが好い」と、さも事もなげに答へました。のみならず門番が、怖は怖はその子を抱いて來ると、すぐに自分が受け取りながら、「おお、これは可愛い子だ。泣くな。泣くな。今日からおれが養つてやるわ。」と、氣輕さうにあ

やし始めるのです。――この時の事は後になつても、和尚最屓の門番が、樒や線香を賣る片手間に、よく參詣人へ話しました。御承知かも知れませんが、日錚和尚と云ふ人は、もと深川の左官だつたのが、十九の年に足場から落ちて、一時正氣を失つた後、急に菩提心を起したとか云ふ、いゝいゝ
でんぼふ肌の畸人だつたのです。

「それから和尚はこの捨兒に、勇之助と云ふ名をつけて、わが子のやうに育て始めました。が、何しろ御維新以來、女氣のない寺ですから、育てると云つたにした所が、容易な事ぢやありません。守りをするのから牛乳の世話まで、和尚自身が看經の暇には、面倒を見ると云ふ始末なのです。何でも一度なぞは勇之助が、風か何か引いてゐた時、折惡く河岸の西辰と云ふ大檀家の法事があつたさうですが、日錚和尚は法衣の胸に、熱の高い子供を抱いた儘、水晶の念珠を片手にかけて、何時もの通り平然と、讀經をすませたとか云ふ事でした。

「しかしその間も出來る事なら、生みの親に會はせてやりたいと云ふのが、豪傑じみてゐても情に脆い日錚和尚の腹だつたのでせう。和尚は說教の座へ登る事があると、――今でも行つて御覽になれば、信行寺の門の柱には「說敎、毎月十六日」と云ふ、古びた札が下つてゐますが、――時

時和漢の故事を引いて、親子の恩愛を忘れぬ事が、卽ち佛恩をも報ずる所以だ、と懇に話して聞かせたさうです。が、說教日は度々めぐつて來ても、誰一人進んで捨兒の親だと名乘つて出るものは見當りません。――いや勇之助が三歲の時、たつた一遍、親だと云ふ白粉燒けのした女が、尋ねて來た事がありました。しかしこれは捨兒を種に、惡事でもたくらむ心算だつたのでせう。よくよく問ひ質して見ると、疑はしい事ばかりでしたから、癇癖の强い日錚和尙は、殆腕力を振はないばかりに、さんざん毒舌を加へた揚句、卽座に追ひ拂つてしまひました。

「すると明治二十七年の冬、世間は日淸戰爭の噂に湧き返つてゐる時でしたが、やはり十六日の說教日に、和尙が庫裡へ歸つて來ると、品の好い三十四五の女が、しとやかに後を追つて來ました。庫裡には釜をかけた圍爐裡の側に、勇之助が蜜柑を剝いてゐる。――その姿を一目見るが早いか、女は何の取付きもなく、和尙の前へ手をついて、震へる聲を抑へながら、「私はこの子の母親でございますが、」と、思ひ切つたやうに云つたさうです。これにはさすがの日錚和尙も、暫くは呆氣にとられた儘、挨拶の言葉さへ出ませんでした。が、女は和尙に頓着なく、ぢつと疊を見つめながら、殆諳誦でもしてゐるやうに――と云つて心の激動は、體中に露はれてゐるのです

が――今日までの養育の禮を一々叮嚀に述べ出すのです。

「それが稍暫く續いた後、和尙は朱骨の中啓を擧げて、女の言葉を遮りながら、まづこの子を捨てた譯を話して聞かすやうに促しました。すると女は不相變疊へ眼を落した儘、かう云ふ話を始めたさうです――

「丁度今から五年以前、女の夫は淺草田原町に米屋の店を開いてゐましたが、株に手を出したばつかりに、とうとう家產を蕩盡して、夜逃げ同樣橫濱へ落ちて行く事になりました。が、かうなると足手まといなのは、生まれたばかりの男の子です。しかも生憎女には乳がまるでなかつたものですから、愈東京を立ち退かうと云ふ晚、夫婦は信行寺の門前へ、泣く泣くその赤子を捨てて行きました。

「それから僅の知るべを便りに、汽車にも乘らず橫濱へ行くと、夫は或運送屋へ奉公をし、女は或絲屋の下女になつて、二年ばかり二人とも一生懸命に働いたさうです。その內に運が向いて來たのか、三年目の夏には運送屋の主人が、夫の正直に働くのを見こんで、その頃漸く開け出した本牧邊の表通りへ、小さな支店を出させてくれました。同時に女も奉公をやめて、夫と一しよに

なつた事は元より云ふまでもありますまい。

「支店は相當に繁昌しました。その上又年が變ると、今度も丈夫さうな男の子が、夫婦の間に生まれました。勿論悲慘な捨子の記憶は、この間も夫婦の心の底に、蟠つてゐたのに違ひありません。殊に女は赤子の口へ乏しい乳を注ぐ度に、必ず東京を立ち退いた晩がはつきりと思ひ出されたさうです。しかし店は忙しい。子供も日に增し大きくなる。銀行にも多少は預金が出來た。——と云ふやうな始末でしたから、兎も角も夫婦は久しぶりに、幸福な家庭の生活を送る事だけは出來たのです。

「が、さう云ふ幸運が續いたのも、長い間の事ぢやありません。やつと笑ふ事もあるやうになつたと思ふと、二十七年の春匆々、夫はチブスに罹つたなり、一週間とは床に就かず、ころりと死んでしまひました。それだけならばまだ女も、諦めやうがあつたのでせうが、どうしても思ひ切れない事には、折角生まれた子供までが、夫の百ケ日も明けない内に、突然疫痢で歿くなつた事です。女はその當座晝も夜も氣違ひのやうに泣き續けました。いや、當座ばかりぢやありません。それ以來彼是半年ばかりは、殆放心同樣な月日さへ送らなければならなかつたのです。

「その悲しみが薄らいだ時、まづ女の心に浮んだのは、捨てた長男に會ふ事です。「もしあの子が達者だつたら、どんなに苦しい事があつても、手もとへ引き取つて養育したい。」――さう思ふと矢も楯もたまらないやうな氣がしたのでせう。女はすぐさま汽車に乘つて、懷しい東京へ着くが早いか、懷しい信行寺の門前へやつて來ました。それが又丁度十六日の說教日の午前だつたのです。

「女は早速庫裡へ行つて、誰かに子供の消息を尋ねたいと思ひました。しかし說教がすまない內は、勿論和尚にも會はれますまい。そこで女はいら立たしいながらも、本堂一ぱいにつめかけた大勢の善男善女に交つて、日錚和尚の說教に上の空の耳を貸してゐました。――と云ふよりも實際は、その說教が終るを待つてゐたのに過ぎないのです。

「所が和尚はその日も亦、蓮華夫人が五百人の子とめぐり遇つた話を引いて、親子の恩愛が尊い事を親切に說いて聞かせました。蓮華夫人が五百の卵を生む。その卵が川に流されて、隣國の王に育てられる。卵から生れた五百人の力士は、母とも知らない蓮華夫人の城を攻めに向つて來る。蓮華夫人はそれを聞くと、城の上の樓に登つて、「私はお前たち五百人の母だ。その證據は此處に

ある。」と云ふ。さうして乳を出しながら、美しい手に絞つて見せる。乳は五百條の泉のやうに、高い樓上の夫人の胸から、五百人の力士の口へ一人も洩れず注がれる。——さう云ふ天竺の寓意譚は、聞くともなく說教を聞いてゐた、この不幸な女の心に異常な感動を與へました。だからこそ女は說教がすむと、眼に涙をためた儘、廊下傳ひに本堂から、すぐに庫裡へ急いで來たのです。

「委細を聞き終つた日錚和尙は、圍爐裡の側にゐた勇之助を招いで、顏も知らない母親に五年ぶりの對面をさせました。女の言葉が噓でない事は、自然と和尙にもわかつたのでせう。女が勇之助を抱き上げて、暫く泣き聲を堪へてゐた時には、豪放濶達な和尙の眼にも、何時か微笑を作つた涙が、睫毛の下に輝いてゐました。

「その後の事は云はずとも、大抵御察しがつくでせう。勇之助は母親につれられて、横濱の家へ歸りました。女は夫や子供の死後、情深い運送屋主人夫婦の勸め通り、達者な針仕事を人に敎へて、つつましいながらも苦しくない生計を立ててゐたのです。」

客は長い話を終ると、膝の前の茶碗をとり上げた。が、それに脣は當てず、私の顏へ眼をやつて、靜にかうつけ加へた。

「その捨兒が私です。」

私は默つて頷きながら、湯ざましの湯を急須に注いだ。この可憐な捨兒の話が、客松原勇之助君の幼年時代の身の上話だと云ふ事は、初對面の私にもとうに推測がついてゐたのであつた。

暫く沈默が續いた後、私は客に言葉をかけた。

「阿母さんは今でも丈夫ですか。」

すると意外な答があつた。

「いえ、一昨年歿くなりました。しかし――今御話した女は、私の母ぢやなかつたのです。」

客は私の驚きを見ると、眼だけにちらりと微笑を浮べた。

「夫が淺草田原町に米屋を出してゐたと云ふ事や、横濱へ行つて苦勞したと云ふ事は勿論噓ぢやありません。が、捨兒をしたと云ふ事は、噓だつた事が後に知れました。丁度母が歿くなる前年、店の商用を抱へた私は、――御承知の通り私の店は綿絲の方をやつてゐますから、――新潟界隈を廻つて歩きましたが、その時田原町の母の家の隣に住んでゐた袋物屋と、一つ汽車に乘り合せたのです。それが問はず語りに話した所では、母は當時女の子を生んで、その子が又店をしまふ

前に、死んでしまつたとか云ふ事でした。それから横濱へ歸つて後、早速母に知れないやうに戸籍謄本をとつて見ると、成程袋物屋の言葉通り、田原町にゐた時に生まれたのは、女の子に違ひありません。しかも生後三月目に死んでしまつてゐるのです。母はどう云ふ量見か、子でもない私を養ふ爲に、捨兒の嘘をついたのでした。さうしてその後二十年あまりは、殆寢食さへ忘れる位、私に盡してくれたのでした。

「どう云ふ量見か、――それは私も今日までには、何度考へて見たかわかりません。が、事實は知れないまでも、一番尤もらしく思はれる理由は、日錚和尚の說教が、夫や子に遲れた母の心へ異常な感動を與へた事です。母はその說教を聞いてゐる內に、私の知らない母の役を勸める氣になつたのぢやありますまいか。私が寺に拾はれてゐる事は、當時說教を聞きに來てゐた參詣人からでも敎はつたのでせう。或は寺の門番が、話して聞かせたかも知れません。」

客はちよいと口を噤むと、考深さうな眼をしながら、思ひ出したやうに茶を啜つた。

「さうしてあなたが子でないと云ふ事は、――子でない事を知つたと云ふ事は、阿母さんにも話したのですか。」

私は尋ねずにはゐられなかつた。

「いえ、それは話しません。私の方から云ひ出すのは、餘り母に殘酷ですから。母も死ぬまでその事は一言も私に話しませんでした。やはり話す事は私にも、殘酷だと思つてゐたのでせう。實際私の母に對する情も、子でない事を知つた後、一轉化を來したのは事實です。」

「と云ふのはどう云ふ意味ですか。」

私はぢつと客の目を見た。

「前よりも一層なつかしく思ふやうになつたのです。その祕密を知つて以來、母は捨兒の私には、母以上の人間になりましたから。」

客はしんみりと返事をした。恰も彼自身子以上の人間だつた事も知らないやうに。

（大正九年七月）

影

横濱。

日華洋行の主人陳彩は、机に背廣の兩肘を凭せて、火の消えた葉卷を啣へた儘、今日も堆い商用書類に、繁忙な眼を曝してゐた。

更紗の窓掛けを垂れた部屋の內には、不相變殘暑の寂寞が、息苦しい位支配してゐた。その寂寞を破るものは、ニスの匂のする戸の向ふから、時々此處へ聞えて來る、かすかなタイプライタアの音だけであつた。

書類が一山片づいた後、陳はふと何か思ひ出したやうに、卓上電話の受話器を耳へ當てた。

「私の家へかけてくれ給へ。」

陳の脣を洩れる言葉は、妙に底力のある日本語であつた。

「誰？――婆や？――奥さんにちよいと出て貰つてくれ。――房子かい？――私は今夜東京へ行

くからね、――ああ、向うへ泊つて來る。――歸れないか？――とても汽車に間に合ふまい。――ぢや賴むよ。――何？　醫者に來て貰つた？――それは神經衰弱に違ひないさ。よろしい。さやうなら。」

陳は受話器を元の位置に戻すと、何故か顏を曇らせながら、肥つた指に燐寸を摺つて、啣へてゐた葉卷を吸ひ始めた。

……煙草の煙、草花の匂、ナイフやフオクの皿に觸れる音、部屋の隅から湧き上る調子外れのカルメンの音樂、――陳はさう云ふ騷ぎの中に、一杯の麥酒を前にしながら、たつた一人茫然と、卓に肘をついてゐる。彼の周圍にあるものは、客も、給仕も、煽風機も、何一つ目まぐるしく動いてゐないものはない。が、唯、彼の視線だけは、帳場机の後の女の顏へ、さつきからぢつと注がれてゐる。

女はまだ見た所、二十を越えてもゐないらしい。それが壁へ貼つた鏡を後に、絶えず鉛筆を動かしながら、忙しさうにビルを書いてゐる。額の捲き毛、かすかな頰紅、それから地味な靑磁色の半襟。――

陳は麥酒を飲み干すと、徐に大きな體を起して、帳場机の前へ歩み寄つた。

「陳さん。何時私に指環を買つて下すつて？」

女はかう云ふ間にも、依然として鉛筆を動かしてゐる。

「その指環がなくなつたら。」

陳は小錢を探りながら、女の指へ顋を向けた。其處には旣に二年前から、延べの金の兩端を抱かせた、約婚の指環が嵌つてゐる。

「ぢや今夜買つて頂戴。」

女は咄嗟に指環を拔くと、ビルと一しよに彼の前へ投げた。

「これは護身用の指環なのよ。」

カツフエの外のアスフアルトには、涼しい夏の夜風が流れてゐる。陳は人通りに交りながら、何度も町の空の星を仰いで見た。その星も皆今夜だけは、……

誰かの戸を叩く音が、一年後の現實へ陳彩の心を喚び返した。

「おはひり。」

その聲がまだ消えない内に、ニスの匂のする戸がそつと明くと、顏色の蒼白い書記の今西が、無氣味な程靜にはひつて來た。

「手紙が參りました。」

默つて頷いた陳の顏には、その上今西に一言も、口を開かせない不機嫌さがあつた。今西は冷かに目禮すると、一通の封書を殘した儘、又前のやうに音もなく、戸の向うの部屋へ歸つて行つた。

戸が今西の後にしまつた後、陳は灰皿に葉卷を捨てて、机の上の封書を取上げた。それは白い西洋封筒に、タイプライタアで宛名を打つた、格別普通の商用書簡と、變る所のない手紙であつた。しかしその手紙を手にすると同時に、陳の顏には云ひやうのない嫌惡の情が浮んで來た。

「又か。」

陳は太い眉を顰めながら、忌々しさうに舌打ちをした。が、それにも關らず、靴の踵を机の緣へ當てると、殆ど輪轉椅子の上に仰向けになつて、紙切小刀も使はずに封を切つた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、再三御忠告……貴下が今日に至るまで、何等斷乎た

る處置に出でられざるは……されば夫人は舊日の情夫と共に、日夜……日本人にして且珈琲店の給仕女たりし房子夫人が、……支那人たる貴下の爲に、萬斛の同情無き能はず候。……今後もし夫人を離婚せられずんば、……貴下は萬人の嗤笑する所となるも……微衷不惡御推察……敬白。貴下の忠實なる友より。」

手紙は力なく陳の手から落ちた。

……陳は卓子に倚りかかりながら、レエスの窓掛けを洩れる夕明りに、女持ちの金時計を眺めてゐる。が、蓋の裏に彫つた文字は、房子のイニシアルではないらしい。

「これは？」

新婚後まだ何日も經たない房子は、西洋簞笥の前に佇んだ儘、卓子越しに夫へ笑顔を送つた。

「田中さんが下すつたの。御存知ぢやなくつて？　倉庫會社の――」

卓子の上にはその次に、指環の箱が二つ出て來た。白天鵞絨の蓋を明けると、一つには眞珠の、他の一つには土耳古玉の指環がはひつてゐる。

「久米さんに野村さん。」

今度は珊瑚珠の根懸けが出た。

「古風だわね。久保田さんに頂いたのよ。」

その後から――何が出て來ても知らないやうに、陳は唯ぢつと妻の顏を見ながら、考へ深さうにこんな事を云つた。

「これは皆お前の戰利品だね。大事にしなくちや濟まないよ。」

すると房子は夕明りの中に、もう一度あでやかに笑つて見せた。

「ですからあなたの戰利品もね。」

その時は彼も嬉しかつた。しかし今は……

陳は身ぶるひを一つすると、机にかけてゐた兩足を下した。それは卓上電話のベルが、突然彼の耳を驚かしたからであつた。

「私。――よろしい。――繫いでくれ給へ。」

彼は電話に向ひながら、苛立たしさうに額の汗を拭つた。

「誰？――里見探偵事務所はわかつてゐる。事務所の誰？――吉井君？――よろしい。報告は？

——何が來てゐた？——醫者？——それから？——さうかも知れない。——ぢや停車場へ來てゐてくれ給へ。——いや、終列車にはきつと歸るから。——間違はないやうに。さやうなら。」

受話器を置いた陳彩は、まるで放心したやうに、少時は默然と坐つてゐた。が、やがて置き時計の針を見ると、半ば機械的にベルの鈕を押した。

書記の今西はその響に應じて、心もち明けた戸の後から、痩せた半身をさし延ばした。

「今西君。鄭君にさう云つてくれ給へ。今夜はどうか私の代りに、東京へ御出でを願ひますと。」

陳の聲は何時の間にか、力のある調子を失つてゐた。今西はしかし例の通り、冷然と目禮を送つた儘、すぐに戸の向うへ隱れてしまつた。

その内に更紗の窓掛けへ、おひおひ當つて來た薄曇りの西日が、この部屋の中の光線に、どんよりした赤味を加へ始めた。と同時に大きな蠅が一匹、何處から此處へ紛れこんだか、鈍い羽音を立てながら、ぼんやり頬杖をついた陳のまはりに、不規則な圓を描き始めた。…………

鎌倉。

陳彩の家の客間にも、レエスの窓掛けを垂れた窓の内には、晩夏の日の暮が近づいて來た。しかし日の光は消えたものの、窓掛けの向うに煙つてゐる、まだ花盛りの夾竹桃は、この涼しさうな部屋の空氣に、快い明るさを漂はしてゐた。

壁際の籐椅子に倚つた房子は、膝の三毛猫をさすりながら、その窓の外の夾竹桃へ、物憂さうな視線を遊ばせてゐた。

「旦那様は今晩も御歸りにならないのでございますか？」

これはその側の卓子の上に、紅茶の道具を片づけてゐる召使ひの老女の言葉であつた。

「ああ、今夜も亦寂しいわね。」

「せめて奥様が御病氣でないと、心丈夫でございますけれども――」

「それでも私の病氣はね、唯神經が疲れてゐるのだつて、今日も山内先生がさう仰有つたわ。二三日よく眠りさへすれば、――あら。」

老女は驚いた眼を主人へ擧げた。すると子供らしい房子の顔には、何故か今までにない恐怖の色が、ありありと瞳に漲つてゐた。

「どう遊ばしました？　奥様。」

「いいえ、何でもないのよ。何でもないのだけれど、――」

房子は無理に微笑しようとした。

「誰か今あすこの窓から、そつとこの部屋の中を、――」

しかし老女が一瞬の後に、その窓から外を覗いた時には、唯微風に戰いでゐる夾竹桃の植込みが、人氣のない庭の芝原を透かして見せただけであつた。

「まあ、氣味の惡い。きつと又御隣の別莊の坊ちやんが、惡戲をなすつたのでございますよ。」

「いいえ、御隣の坊ちやんなんぞぢやなくつてよ。何だか見た事があるやうな――さうさう、何時か婆やと長谷へ行つた時に、私たちの後をついて來た、あの鳥打帽をかぶつてゐる、若い人のやうな氣がするわ。それとも――私の氣のせゐだつたかしら。」

房子は何か考へるやうに、ゆつくり最後の言葉を云つた。

「もしあの男でしたら、どう致しませう。旦那樣は御歸りになりませんし、――何なら爺やでも警察へ、さう申しにやつて見ませうか。」

「まあ、婆やは臆病ね。あの人なんぞ何人來たつて、私はちつとも怖くないわ。けれどももし——

——もし私の氣のせゐだつたら——」

老女は不審さうに瞬きをした。

「もし私の氣のせゐだつたら、私はこの儘氣違になるかも知れないわね。」

「奥樣はまあ、御冗談ばつかり。」

老女は安心したやうに微笑しながら、又紅茶の道具を始末し始めた。

「いいえ、婆やは知らないからだわ。私はこの頃一人でゐるとね、きつと誰かが私の後に立つてゐるやうな氣がするのよ。立つて、さうして私の方をぢつと見つめてゐるやうな——」

房子はかう云ひかけた儘、彼女自身の言葉に引き入れられたのか、急に憂鬱な眼つきになつた。

……………………

電燈を消した二階の寢室には、かすかな香水の匂のする薄暗がりが擴がつてゐる。唯窓掛けを引かない窓だけが、ぼんやり明るんで見えるのは、月が出てゐるからに違ひない。現にその光を浴びた房子は、獨り窓の側に佇みながら、眼の下の松林を眺めてゐる。

夫は今夜も歸つて來ない。召使ひたちは既に寢靜まつた。窓の外に見える庭の月夜も、ひつそ

りと風を落してゐる。その中に鈍い物音が、間遠に低く聞えるのは、今でも海が鳴つてゐるらしい。

房子は少時立ち續けてゐた。すると次第に不思議な感覺が、彼女の心に目ざめて來た。それは誰かが後にゐて、ぢつとその視線を彼女の上に集注してゐるやうな心もちである。が、寢室の中には彼女の外に、誰も人のゐる理由はない。もしゐるとすれば、——いや、戶には寢る前に、ちやんと錠が下してある。ではこんな氣がするのは、——さうだ。きつと神經が疲れてゐるからに相違ない。彼女は薄明い松林を見下しながら、何度もかう考へ直さうとした。しかし誰かが見守つてゐると云ふ感じは、いくら一生懸命に打ち消して見ても、だんだん强くなるばかりである。

房子はとうとう思ひ切つて、怖は怖は後を振り返つて見た。が、果して寢室の中には、飼ひ馴れた三毛猫の姿さへ見えない。やはり人がゐるやうな氣がしたのは、病的な神經の仕業であつた。——と思つたのはしかし言葉通り、ほんの一瞬の間だけである。房子はすぐに又前の通り、何か眼に見えない物が、この部屋を滿たした薄暗がりの何處かに、潛んでゐるやうな心もちがした。

しかし以前より更に堪へられない事には、今度はその何物かの眼が、窓を後にした房子の顏へ、まともに視線を燒きつけてゐる。

房子は全身の戰慄と鬪ひながら、手近の壁へ手をのばすと、咄嗟に電燈のスウィッチを捻つた。と同時に見慣れた寢室は、月明りに交つた薄暗がりを拂つて、頼もしい現實へ飛び移つた。寢臺、西洋蠊、洗面臺、——今はすべてが晝のやうな光の中に、嬉しい程はつきり浮き上つてゐる。その上それが何一つ、彼女が陳と結婚した一年以前と變つてゐない。かう云ふ幸福な周圍を見れば、どんなに氣味の惡い幻も、——いや、しかし怪しい何物かは、眩しい電燈の光にも恐れず、寸刻もたゆまない凝視の眼を房子の顏に注いでゐる。彼女は兩手に顏を隱すが早いか、無我夢中に叫ばうとした。が、何故か聲が立たない。その時彼女の心の上には、あらゆる經驗を超越した恐怖が、……

房子は一週間以前の記憶から、吐息と一しよに解放された。その拍子に膝の三毛猫は、彼女の膝を飛び下りると、毛並みの美しい背を高くして、快さうに欠伸をした。

「そんな氣は誰でも致すものでございますよ。爺やなどは何時ぞや御庭の松へ、鋏をかけて居り

ましたら、まつ晝間空に大勢の子供の笑ひ聲が致したとか、さう申して居りました。それでもあの通り氣が違ふ所か、御用の暇には私へ小言ばかり申して居るぢやございませんか。」

　老女は紅茶の盆を擡げながら、子供を慰めるやうにかう云つた。それを聞くと房子の頬には、始めて微笑らしい影がさした。

「それこそ御隣の坊ちやんが、おいたをなすつたのに違ひないわ。そんな事にびつくりするやうぢや、爺やもやつぱり臆病なのね。――あら、おしやべりをしてゐる内に、とうとう日が暮れてしまつた。今夜は旦那様が御歸りにならないから、好いやうなものだけれど、――御湯は？ 婆や。」

「もうよろしうございますとも。何ならちよいと私が御加減を見て參りませうか。」

「好いわ。すぐにはひるから。」

　房子は漸く氣輕さうに、壁側の籐椅子から身を起した。

「又今夜も御隣の坊ちやんたちは、花火を御揚げなさるかしら。」

　老女が房子の後から、靜に出て行つてしまつた跡には、もう夾竹桃も見えなくなつた、薄暗い

空虛の客間が殘つた。すると二人に忘れられた、あの小さな三毛猫は、急に何か見つけたやうに、一飛びに戸口へ飛んで行つた。さうしてまるで誰かの足に、體を摺りつけるやうな身ぶりをした。が、部屋に擴がつた暮色の中には、その三毛猫の二つの眼が、無氣味な燐光を放つ外に、何もゐるやうなけはひは見えなかつた。…………

横濱。

日華洋行の宿直室には、長椅子に寢ころんだ書記の今西が、餘り明くない電燈の下に、新刊の雜誌を擴げてゐた。が、やがて手近の卓子の上へ、その雜誌をばたりと拋ると、大事さうに上衣の隱しから、一枚の寫眞をとり出した。さうしてそれを眺めながら、蒼白い頰に何時までも、幸福らしい微笑を浮べてゐた。

寫眞は陳彩の妻の房子が、桃割れに結つた半身であつた。

鎌倉。

下り終列車の笛が、星月夜の空に上つた時、改札口を出た陳彩は、たつた一人跡に殘つて、二つ折の鞄を抱へた儘、寂しい構内を眺めまはした。すると電燈の薄暗い壁側のベンチに坐つてゐた、背の高い背廣の男が一人、太い籐の杖を引きずりながら、のそのそ陳の側へ歩み寄つた。さうして濶達に鳥打帽を脱ぐと、聲だけは低く挨拶をした。

「陳さんですか？　私は吉井です。」

陳は殆無表情に、じろりと相手の顏を眺めた。

「今日は御苦勞でした。」

「先程電話をかけましたが、――」

「その後何もなかつたですか？」

陳の語氣には、相手の言葉を彈き除けるやうな力があつた。

「何もありません。奥さんは醫者が歸つてしまふと、日暮までは婆やを相手に、何か話して御出でした。それから御湯や御食事をすませて、十時頃までは蓄音機を御聞きになつてゐたやうです。」

「客は一人も來なかつたですか？」

「ええ、一人も。」

「君が監視をやめたのは？」

「十一時二十分です。」

吉井の返答もてきぱきしてゐた。

「その後終列車まで汽車はないですね。」

「ありません。上りも、下りも。」

「いや、難有う。歸つたら里見君に、よろしく云つてくれ給へ。」

陳は麥藁帽の庇へ手をやると、吉井が鳥打帽を脫ぐのには眼もかけず、砂利を敷いた構外へ大股に歩み出した。その容子が餘り無遠慮すぎたせゐか、吉井は陳の後姿を見送つたなり、ちよいと兩肩を聳やかせた。が、すぐ又氣にも止めないやうに、輕快な口笛を鳴らしながら、停車場前の宿屋の方へ、太い籐の杖を引きずつて行つた。

鎌倉。

一時間の後陳彩は、彼等夫婦の寢室の戶へ、盜賊のやうに耳を當てながら、ぢつと容子を窺つてゐる彼自身を發見した。寢室の外の廊下には、息のつまるやうな暗闇が、一面にあたりを封じてゐた。その中に唯一點、かすかな明りが見えるのは、戶の向うの電燈の光が、鍵穴を洩れるそれであつた。

陳は殆破裂しさうな心臟の鼓動を抑へながら、ぴつたり戶へ當てた耳に、全身の注意を集めてゐた。が、寢室の中からは何の話し聲も聞えなかつた。その沈默が又陳にとつては、一層堪へ難い呵責であつた。彼は目の前の暗闇の底に、停車場から此處へ來る途中の、思ひがけない出來事が、もう一度はつきり見えるやうな氣がした。

……枝を交した松の下には、しつとり砂に露の下りた、細い路が續いてゐる。大空に澄んだ無數の星も、その松の枝の重なつた此處へは、滅多に光を落して來ない。が、海の近い事は、疎な芒に流れて來る潮風が明かに語つてゐる。陳はさつきからたつた一人、夜と共に強くなつた松脂の匂を嗅ぎながら、かう云ふ寂しい闇の中に、注意深い歩みを運んでゐた。

その内に彼はふと足を止めると、不審さうに行く手を透かして見た。それは彼の家の煉瓦塀が、何歩か先に黒々と、現はれて來たからばかりではない、その常春藤に蔽はれた、古風な塀の見えるあたりに、忍びやかな靴の音が、突然聞え出したからである。

が、いくら透して見ても、松や芒の闇が深いせゐか、肝腎の姿は見る事が出來ない。唯、咄嗟に感づいたのは、その足音がこちらへ來ずに、向うへ行くらしいと云ふ事である。

「莫迦な、この路を歩く資格は、おればかりにある譯ぢやあるまいし。」

陳はかう心の中に、早くも疑惑を抱き出した彼自身を叱らうとした。が、この路は彼の家の裏門の前へ出る外には、何處へも通じてゐない筈である。して見れば、――と思ふ刹那に陳の耳には、その裏門の戸の開く音が、折から流れて來た潮風と一しよに、かすかながらも傳はつて來た。

「可笑しいぞ。あの裏門には今朝見た時も、錠がかゝつてゐた筈だが。」

さう思ふと共に陳彩は、獲物を見つけた獵犬のやうに、油斷なくあたりへ氣を配りながら、そつとその裏門の前へ歩み寄つた。が、裏門の戸はしまつてゐる。力一ぱい押して見ても、動きさうな氣色も見えないのは、何時の間にか元の通り、錠が下りてしまつたらしい。陳はその戸に倚

りかかりながら、膝を埋めた芒の中に、少時は茫然と佇んでゐた。

「門が明くやうな音がしたのは、おれの耳の迷だつたかしら。」

が、さつきの足音は、もう何處からも聞えて來ない。常春藤の簇つた塀の上には、火の光もささない彼の家が、ひつそりと星空に聳えてゐる。すると陳の心には、急に悲しさがこみ上げて來た。何がそんなに悲しかつたか、それは彼自身にもはつきりしない。唯其處に佇んだ儘、乏しい蟲の音に聞き入つてゐると、自然と涙が彼の頰へ、冷やかに流れ始めたのである。

「房子。」

陳は殆 呻くやうに、なつかしい妻の名前を呼んだ。

するとその途端である。高い二階の室の一つには、意外にも眩しい電燈がともつた。

「あの窓は、――あれは、――」

陳は際どい息を呑んで、手近の松の幹を捉へながら、延び上るやうに二階の窓を見上げた。窓は、――二階の寢室の窓は、硝子戸をすつかり明け放つた向うに、明るい室内を覗かせてゐる。さうして其處から流れる光が、塀の内に茂つた松の梢を、ぼんやり暗い空に漂はせてゐる。

しかし不思議はそればかりではない。やがてその二階の窓際には、こちらへ向いたらしい人影が一つ、朧げな輪廓を浮き上らせた。生憎電燈の光が後にあるから、顔かたちは誰だか判然しない。が、兎も角もその姿が、女でない事だけは確である。陳は思はず塀の常春藤を掴んで、倒れかかる體を支へながら、苦しさうに切れ切れな聲を洩らした。

「あの手紙は、――まさか、――房子だけは――」

一瞬間の後陳彩は、安々塀を乘り越えると、庭の松の間をくぐりくぐり、首尾よく二階の眞下にある、客間の窓際へ忍び寄つた。其處には花も葉も露に濡れた、水々しい夾竹桃の一むらが、……

陳はまつ暗な外の廊下に、乾いた脣を噛みながら、一層嫉妬深い聞き耳を立てた。それはこの時戸の向うに、さつき彼が聞いたやうな、用心深い靴の音が、二三度床に響いたからであつた。足響はすぐに消えてしまつた。が、興奮した陳の神經には、程なく窓をしめる音が、鼓膜を刺すやうに聞えて來た。その後には、――又長い沈默があつた。

その沈默は忽ち絞め木のやうに、色を失つた陳の額へ、冷たい脂汗を絞り出した。彼はわなわ

な震へる手に、戸のノツブを探り當てた。が、戸に錠の下りてゐる事は、すぐにそのノツブが教へてくれた。

すると今度は櫛かピンかが、突然ばたりと落ちる音が聞えた。しかしそれを拾ひ上げる音は、いくら耳を澄ましてゐても、何故か陳には聞えなかつた。

から云ふ物音は一つ一つ、文字通り陳の心臟を打つた。陳はその度に身を震はせながら、それでも耳だけは剛情にも、ぢつと寢室の戸へ押しつけてゐた。しかし彼の興奮が極度に達してゐる事は、時々彼があたりへ投げる、氣違ひじみた視線にも明かであつた。

苦しい何秒かが過ぎた後、戸の向うからはかすかながら、ため息をつく聲が聞えて來た。と思ふとすぐに寢臺の上へも、誰かが靜に上つたやうであつた。

もしこんな狀態が、もう一分續いたなら、陳は戸の前に立ちすくんだ儘、失心してしまつたかも知れなかつた。が、この時戸から洩れる、蜘蛛の糸程の朧げな光が、天啓のやうに彼の眼を捉へた。陳は咄嗟に床へ這ふと、ノツブの下にある鍵穴から、食ひ入るやうな視線を室内へ送つた。

その刹那に陳の眼の前には、永久に呪はしい光景が開けた。…………

横濱。

書記の今西は內隱しへ、房子の寫眞を還してしまふと、靜に長椅子から立ち上つた。さうして例の通り音もなく、まつ暗な次の間へはひつて行つた。

スウイツチを捻る音と共に、次の間はすぐに明くなつた。その部屋の卓上電燈の光は、何時の間に其處へ坐つたか、タイプライタアに向つてゐる今西の姿を照し出した。

今西の指は忽ちの內に、目まぐるしい運動を續け出した。と同時にタイプライタアは、休みない響を刻みながら、何行かの文字が斷續した一枚の紙を吐き始めた。

「拜啓、貴下の夫人が貞操を守られざるは、この上猶も申上ぐべき必要無き事と存じ候。されど貴下は溺愛の餘り……」

今西の顏はこの瞬間、憎惡そのもののマスクであつた。

鎌倉。

陳の寢室の戶は破れてゐた。が、その外は寢臺も、西洋𥶡も、洗面臺も、それから明るい電燈の光も、悉一瞬間以前と同じであつた。

陳彩は部屋の隅に佇んだ儘、寢臺の前に伏し重なつた、二人の姿を眺めてゐた。その一人は房子であつた。――と云ふよりも寧ろさつきまでは、房子だつた「物」であつた。この顏中紫に腫れ上つた「物」は、半ば舌を吐いた儘、薄眼に天井を見つめてゐた。もう一人は陳彩であつた。部屋の隅にゐる陳彩と、寸分も變らない陳彩であつた。これは房子だつた「物」に重なりながら、爪も見えない程相手の喉に、兩手の指を埋めてゐた。さうしてその露はな乳房の上に、生死もわからない頭を凭せてゐた。

何分かの沈默が過ぎた後、床の上の陳彩は、まだ苦しさうに喘ぎながら、徐に肥つた體を起した。が、やつと體を起したと思ふと、すぐ又側にある椅子の上へ、倒れるやうに腰を下してしまつた。

その時部屋の隅にゐる陳彩は、靜に壁際を離れながら、房子だつた「物」の側に步み寄つた。さうしてその紫に腫上つた顏へ、限りなく悲しさうな眼を落した。

椅子の上の陳彩は、彼以外の存在に氣がつくが早いか、氣違ひのやうに椅子から立ち上つた。彼の顏には、――血走つた眼の中には、凄まじい殺意が閃いてゐた。が、相手の姿を一目見るとその殺意は見る見る内に、云ひやうのない恐怖に變つて行つた。

「誰だ、お前は?」

彼は椅子の前に立ちすくんだ儘、息のつまりさうな聲を出した。

「さつき松林の中を歩いてゐたのも、――裏門からそつと忍びこんだのも、――この窓際に立つて外を見てゐたのも、――おれの妻を、――房子を――」

彼の言葉は一度途絶えてから、又荒々しい嗄れ聲になつた。

「お前だらう。誰だ、お前は?」

もう一人の陳彩は、しかし何とも答へなかつた。その代りに眼を擧げて、悲しさうに相手の陳彩を眺めた。すると椅子の前の陳彩は、この視線に射すくまされたやうに、無氣味な程大きな眼をしながら、だんだん壁際の方へすさり始めた。が、その間も彼の脣は、「誰だ、お前は?」を繰返すやうに、時々聲もなく動いてゐた。

その内にもう一人の陳彩は、房子だつた「物」の側に跪くと、そつとその細い頸へ手を廻した。それから頸に殘つてゐる、無殘な指の痕に脣を當てた。

明い電燈の光に滿ちた、墓窖よりも靜な寢室の中には、やがてかすかな泣き聲が、途切れ途切れに聞え出した。見ると此處にゐる二人の陳彩は、壁際に立つた陳彩も、床に跪いた陳彩のやうに、兩手に顏を埋めながら………

東京。

突然『影』の映畫が消えた時、私は一人の女と一しよに、或活動寫眞館のボックスの椅子に坐つてゐた。

「今の寫眞はもうすんだのかしら。」

女は憂鬱な眼を私に向けた。それが私には『影』の中の房子の眼を思ひ出させた。

「どの寫眞?」

「今のさ。『影』と云ふのだらう。」

女は無言の儘、膝の上のプログラムを私に渡してくれた。が、それには何處を探しても、『影』と云ふ標題は見當らなかつた。

「するとおれは夢を見てゐたのかな。それにしても眠つた覺えのないのは妙ぢやないか。おまけにその『影』と云ふのが妙な寫眞でね。――」

私は手短かに『影』の梗概を話した。

「その寫眞なら、私も見た事があるわ。」

私が話し終つた時、女は寂しい眼の底に微笑の色を動かしながら、殆聞えないやうにかう返事をした。

「お互に『影』なんぞは、氣にしないやうにしませうね。」

（大正九年七月十四日）

お律と子等と

雨降りの午後、今年中學を卒業した洋一は、二階の机に背を圓くしながら、北原白秋風の歌を作つてゐた。すると「おい」と云ふ父の聲が、突然彼の耳を驚かした。彼は倉皇と振り返る暇にも、丁度其處にあつた辭書の下に、歌稿を隱す事を忘れなかつた。が、幸ひ父の賢造は、夏外套をひつかけた儘、うす暗い梯子の上り口へ胸まで覗かせてゐるだけだつた。

「どうもお律の容態が思はしくないから、愼太郎の所へ電報を打つてくれ。」

「そんなに惡いの？」

洋一は思はず大きな聲を出した。

「まあ、ふだんが達者だから、急にどうと云ふ事もあるまいがね、——愼太郎へだけ知らせた方が——」

洋一は父の言葉を奪つた。
「戸澤さんは何だつて云ふんです？」
「やつぱり十二指腸の潰瘍ださうだ。――心配はなからうつて云ふんだが。」
賢造は妙に洋一と、視線の合ふ事を避けたいらしかつた。
「しかしあしたは谷村博士に來て貰ふやうに頼んで置いた。戸澤さんもさう云ふから、――ぢや愼太郎の所を頼んだよ。宿所はお前が知つてゐるね。」
「ええ、知つてゐます。――お父さんは何處かへ行くの？」
「ちよいと銀行へ行つて來る。――ああ、下に淺川の叔母さんが來てゐるぜ。」
賢造の姿が隱れると、洋一には外の雨の音が、急に高くなつたやうな心もちがした。愚圖愚圖してゐる場合ぢやない――そんな事もはつきり感じられた。彼はすぐに立ち上ると、眞鍮の手すりに手を觸れながら、どしどし梯子を下りて行つた。

　まつすぐに梯子を下りた所が、ぎつしり右左の棚の上に、メリヤス類のボオル箱を並べた、手廣い店になつてゐる。――その店先の雨明りの中に、パナマ帽をかぶつた賢造は、こちらへ後を

向けた儘、もう入口に直した足駄へ、片足下してゐる所だつた。
「旦那。工場から電話です。今日あちらへ御見えになりますか、伺つてくれろと申すんですが……」
洋一が店へ來ると同時に、電話に向つてゐた店員が、から賢造の方へ聲をかけた。店員は外にも四五人、金庫の前や神棚の下に、主人を送り出すと云ふよりは、寧ろ主人の出て行くのを待ちでもするやうな顏をしてゐた。
「けふは行けない。あした行きますつてさう云つてくれ。」
電話の切れるのが合圖だつたやうに、賢造は大きな洋傘を開くと、さつさと往來へ歩き出した。その姿がちよいとの間、淺く泥を刷いたアスフアルトの上に、かすかな影を落して行くのが見えた。
「神山さんはゐないのかい？」
洋一は帳場机に坐りながら、店員の一人の顏を見上げた。
「さつき、何だか奧の使ひに行きました。——良さん。何處だか知らないかい？」

「神山さんか? I don't know ですな。」

さう答へた店員は、上り框にしやがんだ儘、あとは口笛を鳴らし始めた。

その間に洋一は、其處にあつた頼信紙へ、せつせと萬年筆を動かしてゐた。或地方の高等學校へ、去年の秋入學した兄、――彼よりも色の黑い、彼よりも肥つた兄の顏が、彼には今も頭の何處かに、ありあり浮んで見えるやうな氣がした。「ハハワルシ、スグカヘレ」――彼は始から書いたが、すぐに又紙を裂いて、「ハハビヨウキ、スグカヘレ」と書き直した。それでも「ワルシ」と書いた事が、何か不吉な前兆のやうに、頭にこびりついて離れなかつた。

「おい、ちよいとこれを打つて來てくれないか?」

やつと書き上げた電報を店員の一人に渡した後、洋一は書き損じた紙を噛み噛み、店の後にある臺所へ拔けて、晴れた日も薄暗い茶の間へ行つた。茶の間には長火鉢の上の柱に、或毛絲屋の廣告を兼ねた、大きな日曆が懸つてゐる。――其處に髮を切つた淺川の叔母が、頻と耳搔きを使ひながら、忘れられたやうに坐つてゐた。それが洋一の足音を聞くと、やはり耳搔きを當てがつた儘、始終爛れてゐる眼を擡げた。

「今日は。お父さんはもうお出かけかえ？」
「ええ、今し方。——お母さんにも困りましたね。」
「困つたねえ、私は何も名のつくやうな病氣ぢやないと思つてゐたんだよ。」
洋一は長火鉢の向うに、いやいや落着かない膝を据ゑた。襖一つ隔てた向うには、大病の母が横になつてゐる。——さう云ふ意識が何時もよりも、一層この昔風な老人の相手を苛立たしいものにさせるのだつた。叔母は少時默つてゐたが、やがて額で彼を見ながら、
「お絹ちやんが今來るとさ。」と云つた。
「姉さんはまだ病氣ぢやないの？」
「もう今日は好いんだとさ。何、又何時もの鼻つ風邪だつたんだよ。」
淺川の叔母の言葉には、輕い侮蔑を帶びた中に、反つて親しさうな調子があつた。三人きやうだいがある内でも、お律の腹を痛めないお絹が、一番叔母には氣に入りらしい。それには賢造の先妻が、叔母の身内だと云ふ理由もある。——洋一は誰かに聞かされた、そんな話を思ひ出しながら、少時の間は不承不承に、一昨年或呉服屋へ緣づいた、病氣勝ちな姉の噂をしてゐた。

ど。」

「愼ちやんの所はどうおしだえ？　お父さんは知らせた方が好いとか云つておいでだつたけれ

その噂が一段落着いた時、叔母は耳搔きの手をやめると、思ひ出したやうにかう云つた。

「今、電報を打たせました。今日中にやまさか屆くでせう。」

「さうだねえ。何も京大阪と云ふんぢやあるまいし、――」

地理に通じない叔母の返事は、心細い位曖昧だつた。それが何故か唐突と、洋一の内に潛んでゐた或不安を呼び醒ました。兄は歸つて來るだらうか？――さう思ふと彼は電報に、もつと大仰な文句を書いても、好かつたやうな氣がし出した。母は兄に會ひたがつてゐる。が、兄は歸つて來ない。その內に母は死んでしまふ。すると姉や淺川の叔母が、親不孝だと云つて兄を責める。――こんな光景も一瞬間、はつきり眼の前に見えるやうな氣がした。

「今日屆けば、あしたは歸りますよ。」

洋一は何時か叔母よりも、彼自身に氣休めを云ひ聞かせてゐた。

其處へ丁度店の神山が、汗ばんだ額を光らせながら、足音を偸むやうにはひつて來た。成程何

處かへ行つた事は、袖に雨じみの殘つてゐる縞絽の羽織にも明らかだつた。
「行つて參りました。どうも案外待たされましてな。」
神山は淺川の叔母に一禮してから、懷に入れて來た封書を出した。
「御病人の方は、少しも御心配には及ばないとか申して居りました。追つていろいろ詳しい事は、その中に書いてありますさうで――」
叔母はその封書を開く前に、まづ度の强さうな眼鏡をかけた。封筒の中には手紙の外にも、半紙に一の字を引いたのが、四つ折の儘はひつてゐた。
「何處？　神山さん、この太極堂と云ふのは。」
洋一はそれでも珍しさうに、叔母の讀んでゐる手紙を覗きこんだ。
「二町目の角に洋食屋がありませう。あの露路をはひつた左側です。」
「ぢや君の淸元の御師匠さんの近所ぢやないか？」
「ええ、まあそんな見當です。」
神山はにやにや笑ひながら、時計の紐をぶら下げた瑪瑙の印形をいぢつてゐた。

「あんな所に占ひ者なんぞがあつたかしら。――御病人は南枕にせらるべく候か。」
「お母さんはどつち枕だえ？」
叔母は半ばたしなめるやうに、老眼鏡の眼を洋一へ擧げた。
「東枕でせう。この方角が南だから。」
多少心もちの明くなつた洋一は、顏は叔母の方へ近づけた儘、手は袂の底にある卷煙草の箱を探つてゐた。
「そら、其處に東枕にてもよろしいと書いてありますよ。――神山さん。一本上げようか？ 抛るよ。失敬。」
「こりやどうも。E・C・Cですな。ぢや一本頂きます。――もう外に御用はございませんか？ もし又ございましたら、御遠慮なく――」
神山は金口を耳に挾みながら、急に夏羽織の腰を擡げて、匆匆店の方へ退かうとした。その途端に障子が明くと、頸に濕布を卷いた姉のお絹が、まだセルのコオトも脱がず、果物の籠を下げてはひつて來た。

「おや、お出でなさい。」
「降りますのによく又、――」
さう云ふ言葉が殆同時に、叔母と神山との口から出た。お絹は二人に會釋をしながら、手早くコオトを脱ぎ捨てると、がつかりしたやうに横坐りになつた。その間に神山は、彼女の手から受け取つた果物の籠を其處へ殘して、氣忙しさうに茶の間を出て行つた。果物の籠には青林檎やバナナが綺麗につやつやと並んでゐた。
「どう？　お母さんは。――御免なさいよ。電車がそりやこむもんだから。」
お絹はやはり横坐りの儘、器用に泥だらけの白足袋を脱いだ。洋一はその足袋を見ると、丸髷に結つた姉の身のまはりに、まだ往來の雨のしぶきが、感ぜられるやうな心もちがした。
「やつぱりお肚が痛むんでねえ。――熱もまだ九度からあるんだとさ。」
叔母は易者の手紙をひろげたなり、神山と入れ違ひに來た女中の美津と、茶を入れる仕度に忙しかつた。
「あら、だつて電話ぢや、昨日より大變好ささうだつたぢやありませんか？　尤も私は出なかつ

たんですけれど、――誰？　今日電話をかけたのは。――洋ちやん？」
「いいえ、僕ぢやない。神山さんぢやないか？」
「さやうでございます。」
これは美津が茶を勸めながら、そつとつけ加へた言葉だつた。
「神山さん？」
お絹ははすはに顏をしかめて、長火鉢の側へすり寄つた。
「何だねえ。そんな顏をして。――お前さんの所はみんな御達者かえ？」
「ええ、おかげ樣で、――叔母さんの所でも皆さん御丈夫ですか？」
そんな對話を聞きながら、卷煙草を啣へた洋一は、ぼんやり柱暦を眺めてゐた。中學を卒業して以來、彼には何日と云ふ記憶はあつても、何曜日かは始終忘れてゐる。――それがふと彼の心に、寂しい氣もちを與へたのだつた。その上もう一月すると、殆受ける氣のしない入學試驗がやつて來る。入學試驗に及第しなかつたら、……………
「美津がこの頃は、大へん女ぶりを上げたわね。」

姉の言葉が洋一には、急にはつきり聞えたやうな氣がした。が、彼は何も云はずに、金口をふかしてゐるばかりだつた。尤も美津はその時にはとうにもう臺所へ下つてゐた。

「それにあの人は何と云つても、男好きのする顏だから、――」

叔母はやつと膝の上の手紙や老眼鏡を片づけながら、蔑むらしい笑ひかたをした。するとお絹も妙な眼をしたが、これはすぐに氣を變へて、

「何？　叔母さん、それは。」と云つた。

「今神山さんに墨色を見て來て貰つたんだよ。――洋ちやん、ちよいとお母さんを見て來ておくれ。さつきよく休んでお出でだつたけれど、――」

ひどく厭な氣がしてゐた彼は金口を灰に突き刺すが早いか、叔母や姉の視線を逃れるやうに、早速長火鉢の前から立ち上つた。さうして襖一つ向うの座敷へ、わざと氣輕さうにはひつて行つた。

其處は突き當りの硝子障子の外に、狹い中庭を透かせてゐた。中庭には太い冬青の樹が一本、手水鉢に臨んでゐるだけだつた。麻の掻卷をかけたお律は氷嚢を頭に載せた儘、あちら向きにち

つと横になつてゐた。その又枕もとには看護婦が一人、膝の上にひろげた病床日誌へ近眼の顔をすりつけるやうに、せつせと萬年筆を動かしてゐた。

看護婦は洋一の姿を見ると、ちよいと媚のある目禮をした。洋一はその看護婦にも、はつきり異性を感じながら、妙に無愛想な會釋を返した。それから蒲團の裾をまはつて、母の顔がよく見える方へ坐つた。

お律は眼をつぶつてゐた。生來薄手に出來た顔が一層今日は窶れたやうだつた。が、洋一の差し覗いた顔へそつと熱のある眼をあけると、ふだんの通りかすかに頬笑んで見せた。洋一は何だか叔母や姉と、何時までも茶の間に話してゐた事がすまないやうな心もちになつた。お律は少時默つてゐてから、

「あのね」とさも大儀さうに云つた。

洋一は唯領いて見せた。その間も母の熱臭いのがやはり彼には不快だつた。しかしお律はさう云つたぎり、何とも後を續けなかつた。洋一はそろそろ不安になつた。遺言、――と云ふ考へも頭へ來た。

「淺川の叔母さんはまだゐるでせう？」
やつと母は口を開いた。
「叔母さんもゐるし、——今し方姉さんも來た。」
「叔母さんにね、——」
「叔母さんに用があるの？」
「いいえ、叔母さんに梅川の鰻をとつて上げるの。」
今度は洋一が微笑した。
「美津にさう云つてね。好いかい？——それでおしまひ。」
お律はかう云ひ終ると、頭の位置を變へようとした。その拍子に氷嚢が辷り落ちた。洋一は看護婦の手を借りずに、元通りそれを置き直した。すると何故か瞼の裏が突然熱くなるやうな氣がした。「泣いちやいけない。」——彼は咄嗟にさう思つた。が、もうその時は小鼻の上に淚のたまるのを感じてゐた。
「莫迦だね。」

母はかすかに呟いた儘、疲れたやうに又眼をつぶつた。

顏を赤くした洋一は、看護婦の見る眼を恥ぢながら、すごすご茶の間へ歸つて來た。歸つて來ると淺川の叔母が、肩越しに彼の顏を見上げて、

「どうだえ？　お母さんは。」と聲をかけた。

「目がさめてゐます。」

「目はさめてゐるけれどさ。」

叔母はお絹と長火鉢越しに、顏を見合せたらしかつた。姉は上眼を使ひながら、笄で髷の根を搔いてゐたが、やがてその手を火鉢へやると、

「神山さんが歸つて來た事は云はなかつたの？」と云つた。

「云はない。姉さんが行つて云ふと好いや。」

洋一は襖側に立つたなり、緩んだ帶をしめ直してゐた。どんな事があつてもお母さんを死なせてはならない。どんな事があつても――さう一心に思ひつめながら、…………

二

翌日の朝洋一は父と茶の間の食卓に向つた。食卓の上には、昨夜泊つた叔母の茶碗も伏せてあつた。が、叔母は看護婦が、長い身じまひをすませる間、母の側へその代りに行つてゐるとか云ふ事だつた。

親子は箸を動かしながら、時々短い口を利いた。この一週間ばかりと云ふものは、毎日かう云ふ二人きりの、寂しい食事が續いてゐる。しかし今日は何時もよりは、一層二人とも口が重かつた。給仕の美津も無言の儘、盆をさし出すばかりだつた。

「今日は愼太郎が歸つて來るかな。」

賢造は返事を豫期するやうに、ちらりと洋一の顏を眺めた。が、洋一は默つてゐた。兄が今日歸るか歸らないか、――と云ふより一體歸るかどうか、彼には今も兄の意志が、どうも不確でならないのだつた。

「それとも明日の朝になるか？」

今度は洋一も父の言葉に、答へない譯には行かなかつた。
「しかし今は學校が丁度、試驗ぢやないかと思ふんですがね。」
「さうか。」
賢造は何か考へるやうに、ちよいと言葉を途切らせたが、やがて美津に茶をつがせながら、
「お前も勉強しなくつちやいけないぜ。愼太郎はもうこの秋は、大學生になるんだから。」と云つた。
洋一は飯を代へながら、何とも返事をしなかつた。やりたい文學もやらせずに、勉強ばかり強ひるこの頃の父が、急に面憎くなつたのだつた。その上兄が大學生になると云ふ事は、弟が勉強すると云ふ事と、何も關係などはありはしない。――さう又父の論理の矛盾を嘲笑ふ氣もちもないではなかつた。
「お絹は今日は來ないのかい?」
賢造はすぐに氣を變へて云つた。
「來るさうです。が、兎に角戸澤さんが來たら、電話をかけてくれつて云つてゐました。」

「お絹の所でも大變だらう。今度はあすこも買つた方だから。」

「やつぱりちつとはすつたかしら。」

洋一ももう茶を飲んでゐた。この四月以來市場には、前代未聞だと云ふ恐慌が來てゐる。現に賢造の店などでも、可成手廣くやつてゐた、或大阪の同業者が突然破産した爲に、最近も代排ひの厄に遇つた。その外まだ何だ彼だといろいろな打撃を通算したら、少くとも三萬圓内外は損失を蒙つてゐるのに相違ない。——そんな事も洋一は、小耳に挾んでゐたのだつた。

「ちつとやそつとでゐてくれりや好いが、——何しろから云ふ景氣ぢや、いつ何時うちなんぞも、どんな事になるか知れないんだから、——」

賢造は半ば冗談のやうに、心細い事を云ひながら、大儀さうに食卓の前を離れた。それから隔ての襖を明けると、隣の病室へはひつて行つた。

「ソツプも牛乳もをさまつた？　そりや今日は大出來だね。まあ精々食べるやうにならなくつちやいけない。」

「これで藥さへ通ると好いんですが、藥はすぐに吐いてしまふんでね。」

から云ふ會話も耳へはひつた。今朝は食事前に彼が行つて見ると、母は昨日一昨日よりも、ずつと熱が低くなつてゐた。口を利くのもはきはきしてゐれば、寢返りをするのも樂さうだつた。「お肚はまだ痛むけれど、氣分は大へん好くなつたよ。」——母自身もさう云つてゐた。その上あんなに食氣までついたやうでは、今まで心配してゐたよりも、存外恢復は容易かも知れない。——洋一は隣を覗きながら、さう云ふ嬉しさにそやされてゐた。が、餘り蟲の好い希望を抱き過ぎると、反つてその爲に母の病氣が惡くなつて來はしないかと云ふ、迷信じみた惧れも多少はあつた。

……

「若旦那樣、御電話でございます。」

洋一はやはり手をついた儘、聲のする方を振り返つた。美津は袂を啣へながら、食卓に布巾をかけてゐた。電話を知らせたのはもう一人の、松と云ふ年上の女中だつた。松は濡れ手を下げたなり、銅壺の見える臺所の口に、襷がけの姿を現してゐた。

「何處だい?」

「どちらでございますか、——」

「しやうがないな、何時でもどちらでございますかだ。」

洋一は不服さうに呟きながら、すぐに茶の間を出て行つた。おとなしい美津に負け嫌ひの松の惡口を聞かせるのが、彼には何となく愉快なやうな心もちも働いてゐたのだつた。

店の電話に向つて見ると、さきは一しよに中學を出た、田村と云ふ藥屋の息子だつた。

「今日ね。一しよに明治座を覗かないか？　井上だよ。井上なら行くだらう？」

「僕は駄目だよ。お袋が病氣なんだから――」

「さうか。それや失敬した。だが殘念だね。昨日堀や何かは行つて見たんだつて。――」

そんな事を話し合つた後、電話を切つた洋一は、其處からすぐに梯子を上つて、例の通り二階の勉强部屋へ行つた。が、机に向つて見ても、受驗の準備は云ふまでもなく、小說を讀む氣さへ起らなかつた。机の前には格子窓がある、――その窓から外を見ると、向うの玩具問屋の前に、半天着の男が自轉車のタイアへ、ポンプの空氣を押しこんでゐた。何だかそれが洋一には、氣忙しさうな氣がして不快だつた。と云つて又下へ下りて行くのも、やはり氣が進まなかつた。彼はとうとう机の下の漢和辭書を枕にしながら、ごろりと疊に寢ころんでしまつた。

すると彼の心には、この春以來顏を見ない、彼には父が違つてゐる、兄の事が浮んで來た。彼には父が違つてゐる、――しかしその爲に洋一は、一度でも兄に對する情が、世間普通の兄弟に變つてゐると思つた事はなかつた。いや、母が兄をつれて再縁したと云ふ事さへ、彼が知るやうになつたのは、割合に新しい事だつた。唯父が違つてゐると云へば、彼には可成はつきりと、こんな思ひ出が殘つてゐる。――

それはまだ兄や彼が、小學校にゐる時分だつた。洋一は或日愼太郎と、トランプの勝敗から口論をした。その時分から冷靜な兄は、彼がいくらいきり立つても、殆語氣さへも荒立てなかつた。が、時々蔑むやうにじろじろ彼の顏を見ながら、一々彼をきめつけて行つた。洋一はとうとうかつとなつて、其處にあつたトランプを掴むが早いか、いきなり兄の顏へ叩きつけた。トランプは兄の横顏に中つて、一面にあたりへ散亂した。――と思ふと兄の手が、ぴしやりと彼の頰を撲つた。

「生意氣な事をするな。」

さう云ふ兄の聲の下から、洋一は兄にかぶりついた。兄は彼に比べると、遙に體も大きかつた。

しかし彼は兄よりもがむしやらな所に强味があつた。二人は少時獸のやうに、撲つたり撲られたりし合つてゐた。

その騷ぎを聞いた母は、慌てその座敷へはひつて來た。

「何をするんです？　お前たちは。」

母の聲を聞くか聞かない内に、洋一はもう泣き出してゐた。が、兄は眼を伏せた儘、むつつり佇んでゐるだけだつた。

「愼太郞。お前は兄さんぢやないか？　弟を相手に喧嘩なんぞして、何がお前は面白いんだえ？」

母にかう叱られると、兄はさすがに震へ聲だつたが、それでも突かかるやうに返事をした。

「洋一が惡いんです。さきに僕の顏へトランプを叩きつけたんだもの。」

「嘘つき。兄さんがさきに撲つたんだい。」

洋一は一生懸命に泣き聲で兄に反對した。

「ずるをしたのも兄さんだい。」

「何。」

兄は又擬勢を見せて、一足彼の方へ進まうとした。

「それだから喧嘩になるんぢやないか？　一體お前が年嵩な癖に勘辨してやらないのが惡いんです。」

母は洋一をかばひながら、小突くやうに兄を引き離した。すると兄の眼の色が、急に無氣味な程險しくなつた。

「好いやい。」

兄はさう云ふより早く、氣違ひのやうに母を撲たうとした。が、その手がまだ振り下されない内に、洋一よりも大聲に泣き出してしまつた。――

母がその時どんな顔をしてゐたか、それは洋一の記憶になかつた。しかし兄の口惜しさうな眼つきは、今でもまざまざと見えるやうな氣がする。兄は唯母に叱られたのが、癇癪に障つただけかも知れない。もう一歩臆測を逞くするのは、善くない事だと云ふ心もちもある。が、兄が地方へ行つて以來、ふとあの眼つきを思ひ出すと、洋一は兄の見てゐる母が、どうも彼の見てゐる母とは、違つてゐさうに思はれるのだつた。しかもさう云ふ氣がし出したのには、もう一つ別な記

憶もある。――

三年前の九月、兄が地方の高等學校へ、明日立たうと云ふ前日だつた。洋一は兄と買物をしに、わざわざ銀座まで出かけて行つた。

「當分大時計とも絶縁だな。」

兄は尾張町の角へ出ると、半ば獨り言のやうにかう云つた。

「だから一高へはひりや好いのに。」

「一高へなんぞちつともはひりたくはない。」

「負惜しみばかり云つてゐらあ。田舍へ行けば不便だぜ。アイスクリイムはなし、活動寫眞はなし、――」

洋一は顏を汗ばませながら、まだ冗談のやうな調子で話し續けた。

「それから誰か病氣になつても、急には歸つて來られないし、――」

「そんな事は當り前だ。」

「ぢやお母さんでも死んだら、どうする？」

歩道の端を歩いてゐた兄は、彼の言葉に答へる前に、手を伸ばして柳の葉をむしつた。
「僕はお母さんが死んでも悲しくない。」
「噓つき。」
洋一は少し昂奮して云つた。
「悲しくなかつたら、どうかしてゐらあ。」
「噓ぢやない。」
兄の聲には意外な位、感情の罩つた調子があつた。
「お前は何時でも小説なんぞ讀んでゐるぢやないか？　それなら、僕のやうな人間のある事も、すぐに理解出來さうなもんだ。——可笑しな奴だな。」
洋一は内心ぎよつとした。と同時にあの眼つきが、——母を撲たうとした兄の眼つきが、はつきり記憶に浮ぶのを感じた。が、そつと兄の容子を見ると、兄は遠くへ眼をやりながら、何事もないやうに歩いてゐた。——
そんな事を考へると、兄がすぐに歸つて來るかどうか、愈〻怪しい心もちがする。殊に試驗で

も始まつてゐれば、二日や三日遲れる事は、何とも思つてゐないかも知れない。遲れても兎に角歸つて來れば好いが、――彼の考が其處まで來た時、誰かの梯子を上つて來る音が、みしりみしり耳へはひり出した。洋一はすぐに飛び起きた。

すると梯子の上り口には、もう眼の惡い淺川の叔母が、前屈みの上半身を現はしてゐた。

「おや、晝寢かえ。」

洋一はさう云ふ叔母の言葉に、かすかな皮肉を感じながら、自分の座蒲團を向うへ直したが、叔母はそれは敷かずに、机の側へ腰を据ゑると、さも大事件でも起つたやうに、小さな聲で話し出した。

「私は少しお前に相談があるんだがね。」

洋一は胸がどきりとした。

「お母さんがどうかしたの？」

「いいえ、お母さんの事ぢやないんだよ。實はあの看護婦だがね、ありやお前、仕方がないよ。
――」

叔母はそれからねちねちと、こんな話をし始めた。――昨日あの看護婦は、戸澤さんが診察に來た時、わざわざ醫者を茶の間へ呼んで、「先生、一體この患者は何時頃まで持つ御見込みなんでせう？　もし長く持つやうでしたら、私はお暇を頂きたいんですが」と云つた。看護婦は勿論醫者の外には、誰もゐない心算に違ひなかつた。が、生憎臺所にゐた松がみんなそれを聞いてしまつた。さうしてぷりぷり怒りながら、淺川の叔母に話して聞かせた。のみならず叔母が氣をつけてゐると、その後も看護婦の所置ぶりには、不親切な所がいろいろある。現に今朝なぞも病人にはかまはず、一時間もお化粧にかかつてゐた。………

「いくら商賣柄だつて、それぢやお前、あんまりぢやないか。だから私の量見ぢや、取り換へた方が好いだらうと思ふのさ。」

「ええ、そりやその方が好いでせう。お父さんにさう云つて、――」

洋一はあんな看護婦なぞに、母の死期を數へられたと思ふと、腹が立つて來るよりも、反つて氣がふさいでならないのだつた。

「それがさ。お父さんは今し方、工場の方へ行つてしまつたんだよ。私が又どうしたんだか、話

し忘れてゐる内にさ。」
叔母はややもどかしさうに、爛れてゐる眼を大きくした。
「私はどうせ取り換へるんなら、早い方が好いと思ふんだがね、――」
「それぢあ神山さんにさう云つて、今すぐに看護婦會へ電話をかけて貰ひませうよ。――お父さんにや歸つて來てから話しさへすれば好いんだから、――」
「さうだね。ぢやさうして貰はうかね。」
洋一は叔母のさきに立つて、勢好く梯子を走り下りた。
「神山さん。ちよいと看護婦會へ電話をかけてくれ給へ。」
彼の聲を聞いた五六人の店員たちは、店先に散らばつた商品の中から、驚いたやうな視線を洋一に集めた。と同時に神山は、派手なセルの前掛けに毛糸屑をくつけた儘、早速帳場机から飛び出して來た。
「看護婦會は何番でしたかな?」
「僕は君が知つてゐると思つた。」

梯子の下に立つた洋一は、神山と一しよに電話帳を見ながら、彼や叔母とは沒交渉な、平日と變らない店の空氣に、輕い反感のやうなものを感じない譯には行かなかつた。

三

午過ぎになつてから、洋一が何氣なく茶の間へ來ると、其處には今し方歸つたらしい、夏羽織を着た父の賢造が、長火鉢の前に坐つてゐた。さうしてその前には姉のお絹が、火鉢の緣に肘をやりながら、今日は濕布を卷いてゐない、綺麗な丸髷の襟足をこちらへまともに露してゐた。

「そりやおれだつて忘れるもんかな。」

「ぢやさうして頂戴よ。」

お絹は昨日よりも又一倍、血色の惡い顏を擧げて、ちよいと洋一の挨拶に答へた。それから多少彼を憚るやうな、薄笑ひを含んだ調子で、怯づ怯づ話の後を續けた。

「その方がどうかなつてくれなくつちや、何かに私だつて氣がひけるわ。私があの時何した株なんぞも、みんな今度は下つてしまつたし、――」

「よし、よし、萬事呑みこんだよ。」

父は浮かない顏をしながら、その癖冗談のやうにこんな事を云つた。姉は去年縁づく時、父に分けて貰ふ筈だつた物が、未に一部は約束だけで、事實上お流れになつてゐるらしい。——さう云ふ消息に通じてゐる洋一は、わざと長火鉢には遠い所に、默然と新聞をひろげた儘、さつき田村に誘はれた明治座の廣告を眺めてゐた。

「それだからお父さんは嫌になつてしまふ。」

「お前よりおれの方が嫌になつてしまふ。お母さんはああやつて寢てゐるし、お前にや愚痴ばかりこぼされるし、——」

洋一は父の言葉を聞くと、我知らず襖一つ向うの、病室の動靜に耳を澄ませた。其處ではお律が何時もに似合はず、時時ながら苦しさうな唸り聲を洩らしてゐるらしかつた。

「お母さんも今日は樂ぢやないな。」

獨り言のやうな洋一の言葉は、一瞬間彼等親子の會話を途切らせるだけの力があつた。が、お絹はすぐに居ずまひを直すと、ちらりと賢造の顏を睨みながら、

「お母さんの病氣だつてさうぢやないの？　何時か私がさう云つた時に、御醫者樣を取り換へてゐさへすりや、きつとこんな事にやなりやしないわ。それをお父さんが又煮え切らないで、――」

と、感傷的に父を責め始めた。

「だからさ、だから今日は谷村博士に來て貰ふと云つてゐるんぢやないか？」

賢造はとうとう苦い顏をして、抛り出すやうにかう云つた。洋一も姉の剛情なのが、さすがに少し面憎くもなつた。

「谷村さんは何時頃來てくれるんでせう？」

「三時頃來るつて云つてゐた。さつき工場の方からも電話をかけて置いたんだが、――」

「もう三時過ぎ、――四時五分前だがな。」

洋一は立て膝を抱きながら、日暦の上に懸つてゐる、大きな柱時計へ眼を擧げた。

「もう一度電話でもかけさせませうか？」

「さつきも叔母さんがかけたつてさう云つてゐたがね。」

「さつきつて？」

「戸澤さんが歸るとすぐだとさ。」

彼等がそんな事を話してゐる内に、お絹はまだ顏を曇らせた儘、急に長火鉢の前から立上ると、さつさと次の間へはひつて行つた。

「やつと姉さんから御暇が出た。」

賢造は苦笑を洩らしながら、始めて腰の煙草入れを拔いた。が、洋一は父時計を見たぎり、何ともそれには答へなかつた。

病室からは相不變、お律の唸り聲が聞えて來た。それが氣のせいかさつきよりは、だんだん高くなるやうでもあつた。谷村博士はどうしたのだらう？　尤も向うの身になつて見れば、母一人が患者ではなし、今頃はまだ便便と、回診か何かをしてゐるかも知れない。いや、もう四時を打つ所だから、いくら遲くなつたにしても、病院はとうに出てゐる筈だ。事によると今にも店さきへ、——

「どうです？」

洋一は陰氣な想像から、父の聲と一しよに解放された。見ると襖の明いた所に、心配さうな淺

川の叔母が、何時か顔だけ覗かせてゐた。
「餘つ程苦しいやうですがね、——御醫者樣はまだ見えませんかしら。」
賢造は口を開く前に、まづさうに刻みの煙を吐いた。
「困つたな。——もう一度電話でもかけさせませうか？」
「さうですね、一時凌ぎさへつけて頂けりや、戸澤さんでも好いんですがね。」
「僕がかけて來ます。」
洋一はすぐに立ち上つた。
「さうか。ぢや先生はもう御出かけになりましたでせうかつてね。番號は小石川の×××番だから。——」
賢造の言葉が終らない内に、洋一はもう茶の間から、臺所の板の間へ飛び出してゐた。臺所には襷がけの松が鰹節の鉋を鳴らしてゐる。——その側を亂暴に通りぬけながら、いきなり店へ行かうとすると、出合ひ頭に向うからも、小走りに美津が走つて來た。二人はまともにぶつかる所を、やつと兩方へ身を躱した。

「御免下さいまし。」

結ひたての髪を匂はせた美津は、極り悪さうにかう云つた儘、ばたばた茶の間の方へ駈けて行つた

洋一は妙にてれながら、電話の受話器を耳へ當てた。するとまだ交換手が出ない内に、帳場机にゐた神山が、後から彼へ聲をかけた。

「洋一さん。谷村病院ですか？」

「ああ、谷村病院。」

彼は受話器を持つたなり、神山の方を振り返つた。神山は彼の方を見ずに、金格子で圍つた本立てへ、大きな簿記帳を戻してゐた。

「ぢや今向うからかかつて來ましたぜ。お美津さんが奥へさう云ひに行つた筈です。」

「何てかかつて來たの？」

「先生は唯今御出かけになつたつて云つてたやうですが、――唯今だね？　良さん。」

呼びかけられた店員の一人は、丁度踏臺の上にのりながら、高い棚に積んだ商品の箱を取り下

さうとしてゐる所だつた。
「唯今ぢやありませんよ。もうそちらへいらつしやる時分だつて云つてゐましたよ。」
「さうか。そんなら美津のやつ、さう云へば好いのに。」
洋一は電話を切つてから、もう一度茶の間へ引き返さうとした。が、ふと店の時計を見ると、不審さうに其處へ立ち止つた。
「おや、この時計は二十分過ぎだ。」
「何、こりや十分ばかり進んでゐますよ。まだ四時十分過ぎ位なもんでせう。」
神山は體を扭りながら、帶の金時計を覗いて見た。
「さうです。丁度十分過ぎ。」
「ぢやぢやつぱり奧の時計が遲れてゐるんだ。それにしちや、谷村さんは遲すぎるな。――」
洋一はちよいとためらつた後、大股に店さきへ出かけて行くと、もう薄日もささなくなつた、もの靜な往來を眺めまはした。
「來さうもないな。まさか家がわからないんでもなからうけれど、――ぢや神山さん、僕はちよ

いと其處いらへ行つて見て來らあ。」

彼は肩越しに神山へ、かう言葉をかけながら、店員の誰かが脫ぎ捨てた板草履の上へ飛び下りた。さうして殆走るやうに、市街自動車や電車が通る大通りの方へ步いて行つた。

大通りは彼の店の前から、半町も行かない所にあつた。其處の角にある店藏が、半分は小さな郵便局に、半分は唐物屋になつてゐる。――その唐物屋の飾り窓には、麥藁帽や籐の杖が奇拔な組合せを見せた間に、もう派手な海水着が人間のやうに突立つてゐた。

洋一は唐物屋の前まで來ると、飾り窓を後に佇みながら、大通りを通る人や車に、苛立たしい視線を配り始めた。が、少時さうしてゐても、この問屋ばかり並んだ橫町には、人力車一臺曲らなかつた。たまに自動車が來たと思へば、それは空車の札を出した、泥にまみれてゐるタクシイだつた。

その內に彼の店の方から、まだ十四五歲の店員が一人、自轉車に乘つて走つて來た。それが洋一の姿を見ると、電柱に片手をかけながら、器用に彼の側へ自轉車を止めた。さうしてペダルに足をかけた儘、

「今田村さんから電話がかかつて來ました。」と云つた。

「何か用だつたかい？」

洋一はさう云ふ間でも、絶えず賑な大通りへ眼をやる事を忘れなかつた。

「用は別にないんださうで、――」

「お前はそれを云ひに來たの？」

「いいえ、私はこれから工場まで行つて來るんです。――ああ、それから旦那が洋一さんに用があるつて云つてゐましたぜ。」

「お父さんが？」

洋一はかう云ひかけたが、ふと向うを眺めたと思ふと、突然相手も忘れたやうに、飾り窓の前を飛び出した。人通りも疎な往來には、丁度今一臺の人力車が、大通りをこちらへ切れようとしてゐる。――その梶棒の先へ立つが早いか、彼は兩手を擧げないばかりに、車上の青年へ聲をかけた。

「兄さん！」

車夫は體を後に反らせて、際どく車の走りを止めた。車の上には愼太郎が、高等學校の夏服に白い筋の制帽をかぶつた儘、膝に挾んだトランクを骨太な兩手に抑へてゐた。

「やあ。」

兄は眉一つ動かさずに、洋一の顏を見下した。

「お母さんはどうした？」

洋一は兄を見上げながら、體中の血が生き生きと、急に兩頰へ上るのを感じた。

「この二三日惡くつてね。——十二指腸の潰瘍なんださうだ。」

「さうか。そりや——」

愼太郎はやはり冷然と、それ以上何も云はなかつた。が、その母譲りの眼の中には、洋一が豫期してゐなかつた、とは云へ無意識に求めてゐた或表情が閃いてゐた。洋一は兄の表情に愉快な當惑を感じながら、口早に切れ切れな言葉を續けた。

「今日は一番苦しさうだけれど、——でも兄さんが歸つて來て好かつた。——まあ早く行くと好いや。」

車夫は愼太郎の合圖と一しよに、又勢よく走り始めた。愼太郎はその時まざまざと、今朝上りの三等客車に腰を落着けた彼自身が、頭の何處かに映るやうな氣がした。それは隣に腰をかけた、血色の好い田舍娘の肩を肩に感じながら、母の死目に會ふよりは、寧ろ死んだ後に行つた方が、悲しみが少いかも知れないなどと思ひ耽つてゐる彼だつた。しかも眼だけはその間も、レクラム版のゲエテの詩集へぼんやり落してゐる彼だつた。……

「兄さん。試驗はまだ始らなかつた？」

愼太郎は體を斜にして、驚いた視線を聲の方へ投げた。すると其處には洋一が、板草履を土に鳴らしながら、車とすれすれに走つてゐた。

「明日からだ。お前は、——あすこにお前は何をしてゐたんだ？」

「今日は谷村博士が來るんでね、あんまり來やうが遲いから、立つて待つてゐたんだけれど、——」

洋一はかう答へながら、かすかに息をはずませてゐた。愼太郎は弟を劬りたかつた。が、その心もちは口を出ると、何時か平凡な言葉に變つてゐた。

「餘つ程待つたかい？」

「十分も待つたかしら？」

「誰かあすこに店の者がゐたやうぢやないか？――おい、其處だ。」

車夫は五六歩行き過ぎてから、大廻しに梶棒を店の前へ下した。さすがに愼太郎にもなつかしい、分厚な硝子戸の立つた店の前へ。

四

一時間の後店の二階には、谷村博士を中心に、賢造、愼太郎、お絹の夫の三人が浮かない顏を揃へてゐた。彼等はお律の診察が終つてから、その診察の結果を聞く爲に、博士をこの二階に招じたのだつた。體格の逞しい谷村博士は、すすめられた茶を啜つた後、少時は胴衣の金鎖を太い指にからめてゐたが、やがて電燈に照らされた三人の顏を見廻すと、

「戸澤さんとか云ふ、――かかりつけの醫者は御呼び下すつたでせうな。」と云つた。

「唯今電話をかけさせました。――すぐに上ると仰有つたね。」

賢造は念を押すやうに、愼太郞の方を振り返つた。愼太郞はまだ制服を着た儘、博士と向ひ合つた父の隣りに、窮屈さうな膝を重ねてゐた。

「ええ、すぐに見えるさうです。」

「ぢやその方が見えてからにしませう。――どうもはつきりしない天氣ですな。」

谷村博士はかう云ひながら、マロツク革の卷煙草入れを出した。

「當年は梅雨が長いやうです。」

「兎角雲行きが惡いんで弱りますな。天候も財界も昨今のやうぢや、――」

お絹の夫も横合ひから、滑かな言葉をつけ加へた。丁度見舞ひに來合せてゐた、この若い呉服屋の主人は、短い口髭に緣無しの眼鏡と云ふ、寧ろ辯護士か會社員にふさはしい服裝の持ち主だつた。愼太郞はかう云ふ彼等の會話に、妙な齒痒さを感じながら、剛情に一人默つてゐた。

しかし戸澤と云ふ出入りの醫者が、彼等の間に交つたのは、それから間もない後の事だつた。黑絽の羽織をひつかけた、多少は酒氣もあるらしい彼は、谷村博士と慇懃な初對面の挨拶をすませてから、すぢかひに坐つた賢造へ、

「もう御診斷は御伺ひになつたんですか？」と、強い東北訛の聲をかけた。

「いや、あなたが御見えになつてから、申し上げようと思つてゐたんですが、――」

谷村博士は指の間に短い卷煙草を挾んだ儘、賢造の代りに返事をした。

「猶あなたの御話を承る必要もあるものですから、――」

戸澤は博士に問はれる通り、此處一週間ばかりのお律の容態を可成詳細に説明した。愼太郎には薄い博士の眉が、戸澤の處方を聞いた時、かすかに動いたのが氣がかりだつた。

しかしその話が一段落つくと、谷村博士は大様に、二三度獨り頷いて見せた。

「いや、よくわかりました。無論十二指腸の潰瘍です。が、唯今拜見した所ぢや、腹膜炎を起してゐますな。何しろかう下腹が押し上げられるやうに痛いと云ふんですから――」

「ははあ、下腹が押し上げられるやうに痛い？」

戸澤はセルの袴の上に威かつい肘を張りながら、ちよいと首を傾けた。

少時は誰も息を吞んだやうに、口を開かうとするものがなかつた。

「熱なぞはそれでも昨日よりは、ずつと低いやうですが、――」

その内にやつと賢造は、覺束ない反問の口を切つた。しかし博士は卷煙草を捨てると、無造作にその言葉を遮つた。

「それがいかんですな。熱はずんずん下りながら、脈搏は反つてふえて來る――と云ふのがこの病の癖なんですから。」

「成程、さう云ふものですかな。こりや我々若いものも、伺つて置いて好い事ですな。」

お絹の夫は腕組みをした手に、時々口髭をひつぱつてゐた。愼太郎は義兄の言葉の中に、他人らしい無關心の冷たさを感じた。

「しかし私が診察した時にや、まだ別に腹膜炎などの兆候も見えないやうでしたがな。――」

戸澤がかう云ひかけると、谷村博士は職業的に、透かさず愛想の好い返事をした。

「さうでせう。多分はあなたの御覽になつた後で發したかと思ふんです。第一まだ病狀が、それ程昂進してもゐないやうですから、――しかし兎も角も現在は、腹膜炎に違ひありませんな。」

「ぢやすぐに入院でも、させて見ちや如何でせう？」

愼太郎は險しい顏をした儘、始めて話に口を挾んだ。博士はそれが意外だつたやうに、ちらり

と重さうな瞼の下から、愼太郎の顏へ眼を注いだ。

「今はとても動かせないです。まづ差當りは出來る限り、腹を溫める一方ですな。それでも痛みが強いやうなら、戸澤さんにお願ひして、注射でもして頂くとか、――今夜はまだ中々痛むでせう。どの病氣でも樂ぢやないが、この病氣は殊に苦しいですから。」

谷村博士はさう云つたぎり、沈んだ眼を疊へやつてゐたが、ふと思ひ出したやうに、胴衣の時計を出して見ると、

「ぢや私はもう御暇します。」と、すぐに背廣の腰を擡げた。

愼太郎は父や義兄と一しよに、博士に來診の禮を述べた。が、その間も失望の色が彼自身の顏には歴々と現れてゐる事を意識してゐた。

「どうか博士も亦二三日中に、もう一度御診察を願ひたいもので、――」

戸澤は挨拶をすませてから、かう云つて又頭を下げた。

「ええ、上る事は何時でも上りますが、――」

これが博士の最後の言葉だつた。愼太郎は誰よりもずつと後に、暗い梯子を下りながら、しみじ

み萬事休すと云ふ心もちを抱かずにはゐられなかつた。………

五

戸澤やお絹の夫が歸つてから、和服に着換へた愼太郎は、淺川の叔母や洋一といつしよに、茶の間の長火鉢を圍んでゐた。襖の向うからは不相變、お律の唸り聲が聞えて來た。彼等三人は電燈の下に、はずまない會話を續けながら、ややもすると云ひ合せたやうに、その聲へ耳を傾けてゐる彼等自身を見出すのだつた。

「いけないねえ。ああ始終苦しくつちや、——」

叔母は火箸を握つた儘、ぼんやり何處かへ眼を据ゑてゐた。

「戸澤さんは大丈夫だつて云つたの？」

洋一は叔母には答へずに、Ｅ・Ｃ・Ｃを啣へてゐる兄の方へ言葉をかけた。

「二三日は間違ひあるまいつて云つた。」

「怪しいな。戸澤さんの云ふ事ぢや——」

今度は愼太郎が返事せずに、煙草の灰を火鉢へ落してゐた。

「愼ちやん。さつきお前が歸つて來た時、お母さんは何とか云つたかえ？」

「何とも云ひませんでした。」

「でも笑つたね。」

洋一は横から覗くやうに、靜な兄の顏を眺めた。

「うん、――それよりもお母さんの側へ行くと、莫迦に好い匂がするぢやありませんか？」

叔母は答を促すやうに、微笑した眼を洋一へ向けた。

「ありやさつきお絹ちやんが、持つて來た香水を撒いたんだよ。洋ちやん。何とか云つたね？あの香水は。」

「何ですか、――多分床撒き香水とか何んとか云ふんでせう。」

其處へお絹が襖の陰から、そつと病人のやうな顏を出した。

「お父さんはゐなくつて？」

「店に御出でだよ。何か用かえ？」

「ええ、お母さんが、ちよいと、――」
洋一はお絹がさう云ふと同時に、早速長火鉢の前から立ち上つた。
「僕がさう云つて來る。」
彼が茶の間から出て行くと、米噛みに卽效紙を貼つたお絹は、兩袖に胸を抱いた儘、忍び足にこちらへはひつて來た。さうして洋一の立つた跡へ、薄ら寒さうにちやんと坐つた。
「どうだえ？」
「やつぱり藥が通らなくつてね。――でも今度の看護婦になつてからは、年をとつてゐるだけでも氣丈夫ですわ。」
「熱は？」
愼太郎は口を挾みながら、まずさうに煙草の煙を吐いた。
「今計つたら七度二分――」
お絹は襟に頤を埋めたなり、考深さうに愼太郎を見た。
「戶澤さんがゐた時より、又一分下つたんだわね。」

三人は少時默つてゐた。するとそのひつそりした中に、板の間を踏む音がしたと思ふと、洋一をさきに賢造が、そはそは店から歸つて來た。

「今お前の家から電話がかかつたよ。後程どうかお上さんに御電話を願ひますつて。」

賢造はお絹にさう云つたぎり、すぐに隣りへはひつて行つた。

「しやうがないわね。家ぢや女中が二人ゐたつて、ちつとも役にや立たないんですよ。」

お絹はちよいと舌打ちをしながら、淺川の叔母と顏を見合せた。

「この節の女中はね。——私の所なんぞも女中はゐるだけ、反つて世話が燒ける位なんだよ。」

二人がこんな話をしてゐる間に、愼太郎は金口を啣へながら、寂しさうな洋一の相手をしてゐた。

「受驗準備はしてゐるかい？」

「してゐる。——だけど今年は投げてゐるんだ。」

「又歌ばかり作つてゐるんだらう。」

洋一はいやな顏をして、自分も卷煙草へ火を移した。

「僕は兄さんのやうに受驗向きな人間ぢやないんだからな。數學は大嫌ひだし、——」
「嫌だつてやらなけりや、——」
愼太郎がかう云ひかけると、何時か襖際へ來た看護婦と、小聲に話をしてゐた叔母が、
「愼ちやん。お母さんが呼んでゐるとさ。」と火鉢越しに彼へ聲をかけた。
彼は吸ひさしの煙草を捨てると、無言の儘立ち上つた。さうして看護婦を押しのけるやうに、づかづか隣の座敷へはひつて行つた。
「こつちへ御出で。何かお母さんが用があるつて云ふから。」
枕もとに獨り坐つてゐた父は顋で彼に差圖をした。彼はその差圖通り、すぐに母の鼻の先へ坐つた。
「何か用？」
母は括り枕の上へ、櫛巻きの頭を横にしてゐた。その顏が巾をかけた電燈の光に、さつきよりも一層窶れて見えた。
「ああ、洋一がね、どうも勉強をしないやうだからね、——お前からもよくさう云つてね、——

お前の云ふ事は聞く子だから、――」

「ええ、よく云つて置きます。實は今もその話をしてゐたんです。」

愼太郎は何時もよりも大きい聲で返事をした。

「さうかい。ぢや忘れないでね、――私も昨日あたりまでは、死ぬのかと思つてゐたけれど、――」

母は腹痛をこらへながら、齒齦の見える微笑をした。

「帝釋樣の御符を頂いたせいか、今日は熱も下つたしね、この分で行けば癒りさうだから、――美津の叔父さんとか云ふ人も、やつぱり十二指腸の潰瘍だつたけれど、半月ばかりで癒つたと云ふしね、さう難病でもなささうだからね。――」

愼太郎は今になつてさへ、そんな事を賴みにしてゐる母が、淺間しい氣がしてならなかつた。

「癒りますとも。大丈夫癒りますからね、よく藥を飮むんですよ。」

母はかすかに頷いた。

「ぢや唯今一つ召し上つて御覽なさいまし。」

枕もとに來てゐた看護婦は器用にお律の脣へ水藥の硝子管を當てがつた。母は眼をつぶつたな

り、二吸程管の藥を飮んだ。それが刹那の間ながら、愼太郎の心を明くした。
「好い鹽梅ですね。」
「今度はをさまつたやうでございます。」
看護婦と愼太郎とは、親しみのある視線を交換した。
「藥がをさまるやうになれば、もうしめたものだ。だがちつとは長びくだらうし、床上げの時分は暑からうな。こいつは一つ赤飯の代りに、氷あづきでも配る事にするか。」
賢造の冗談をきつかけに、愼太郎は膝をついた儘、そつと母の側を引き下らうとした。すると母は彼の顏へ、突然不審さうな眼をやりながら、
「演說？　何處に今夜演說があるの？」と云つた。
彼はさすがにぎよつとして、救ひを請ふやうに父の方を見た。
「演說なんぞありやしないよ。何處にもそんな物はないんだからね、今夜はゆつくり寢た方が好いよ。」
賢造はお律をなだめると同時に、ちらりと愼太郎の方へ眼くばせをした。愼太郎は早速膝を擡

げて、明るい電燈に照らされた、隣の茶の間へ歸つて來た。

　茶の間にはやはり姉や洋一が、叔母とひそひそ話してゐた。それが彼の姿を見ると、皆一度に顔を擧げながら、何か病室の消息を尋ねるやうな表情をした。が、愼太郎は口を噤んだなり、不相變冷やかな眼つきをして、もとの座蒲團の上にあぐらをかいた。

「何の用だつて？」

　まつさきに沈默を破つたのは、今も襟に顋を埋めた、顔色の好くないお絹だつた。

「何でもなかつた。」

「ぢやきつとお母さんは、愼ちやんの顔が唯見たかつたのよ。」

　愼太郎は姉の言葉の中に、意地の惡い調子を感じた。が、ちよいと苦笑したぎり、何ともそれには答へなかつた。

「洋ちやん。お前今夜夜伽をおしかえ？」

　少時無言が續いた後、淺川の叔母は欠伸まじりに、かう洋一へ聲をかけた。

「ええ、――姉さんも今夜はするつて云ふから、――」

「愼ちやんは？」

お絹は薄い瞼を擧げて、じろりと愼太郎の顏を眺めた。

「僕はどうでも好い。」

「不相變愼ちやんは煮え切らないのね。高等學校へでもはひつたら、もつとはきはきするかと思つたけれど。――」

「この人はお前、疲れてゐるぢやないか？」

叔母は半ばたしなめるやうに、癇高いお絹の言葉を制した。

「今夜は一番さきへ寢かした方が好いやね。何も夜伽ぎをするからつて、今夜に限つた事ぢやあるまいし、――」

「ぢや一番さきに寢るかな。」

愼太郎は又弟のE・C・Cに火をつけた。垂死の母を見て來た癖に、もう内心ははしやいでゐる彼自身の輕薄を憎みながら、………

六

それでも店の二階の蒲團に、愼太郎が體を横たへたのは、その夜の十二時近くだつた。彼は叔母の言葉通り、實際旅疲れを感じてゐた。が、愈〻電燈を消して見ると、何度か寢反りを繰り返しても、容易に睡氣を催さなかつた。

彼の隣には父の賢造が、靜かな寐息を洩らしてゐた。父と一つ部屋に眠るのは、少くともこの三四年以來、今夜が彼には始めてだつた。父は鼾きをかかなかつたかしら、――愼太郎は時々眼を明いては、父の寢姿を透かして見ながら、そんな事さへ不審に思ひなぞした。

しかし彼の瞼の裏には、やはりさまざまな母の記憶が、亂雜に漂つて來勝ちだつた。その中には嬉しい記憶もあれば、寧ろ忌はしい記憶もあつた。が、どの記憶も今となつて見れば、同じやうに寂しかつた。「みんなもう過ぎ去つた事だ。善くつても惡くつても仕方がない。」――愼太郎はさう思ひながら、糊の匂のする括り枕に、ぼんやり五分刈の頭を落着けてゐた。

――まだ小學校にゐた時分、父が或日愼太郎に、新しい帽子を買つて來た事があつた。それは

兼ね兼ね彼が欲しがつてゐた、庇の長い大黒帽だつた。するとそれを見た姉のお絹が、來月は長唄のお浚ひがあるから、今度は自分にも着物を一つ、拵へてくれろと云ひ出した。父はにやにや笑つたぎり、全然その言葉に取り合はなかつた。姉はすぐに怒り出した。さうして父に背を向けた儘、口惜しさうに毒口を利いた。

「たんと愼ちやんばかり御可愛がりなさいよ。」

父は多少持て餘しながらも、まだ薄笑ひを止めなかつた。

「着物と帽子とが一つになるものかな。」

「ぢやお母さんはどうしたんです？　お母さんだつてこの間は、羽織を一つ拵へたぢやありませんか？」

姉は父の方へ向き直ると、突然險しい目つきを見せた。

「あの時はお前も簪だの櫛だの買つて貰つたぢやないか？」

「ええ、買つて貰ひました。買つて貰つちやいけないんですか？」

姉は頭へ手をやつたと思ふと、白い菊の花簪をいきなり疊の上へ拋り出した。

「何だ、こんな簪位。」

父もさすがに苦い顏をした。

「莫迦な事をするな。」

「どうせ私は莫迦ですよ。愼ちやんのやうな利口ぢやありません。私のお母さんは莫迦だつたんですから、――」

愼太郎は蒼い顏をした儘、このいさかひを眺めてゐた。が、姉がかう泣き聲を張り上げると、彼は默つて疊の上の花簪を摑むが早いか、びりびりその花びらをむしり始めた。

「何をするのよ。愼ちやん。」

姉は殆氣違ひのやうに、彼の手もとへむしやぶりついた。

「こんな簪なんぞ入らないつて云つたぢやないか？　入らなけりやどうしたつてかまはないぢやないか？　何だい、女の癖に、――喧嘩なら何時でも向つて來い。――」

何時か泣いてゐた愼太郎は、菊の花びらが皆なくなるまで、剛情に姉と一本の花簪を奪ひ合つた。しかし頭の何處かには、實母のない姉の心もちが不思議な位鮮に映つてゐるやうな氣がし

ながら。――
愼太郎はふと耳を澄せた。誰かが音のしないやうに、暗い梯子を上つて來る。――と思ふと美津が上り口から、そつとこちらへ聲をかけた。
「旦那樣。」
眠つてゐると思つた賢造は、すぐに枕から頭を擡げた。
「何だい？」
「お上さんが何か御用でございます。」
美津の聲は震へてゐた。
「よし、今行く。」
父が二階を下りて行つた後、愼太郎は大きな眼を明いた儘、家中の物音にでも聞き入るやうに、ぢつと體を硬ばらせてゐた。すると何故かその間に、現在の氣もちとは緣の遠い、かう云ふ平和な思ひ出が、はつきり頭へ浮んで來た。
――これもまだ小學校にゐた時分、彼は一人母につれられて、谷中の墓地へ墓參りに行つた。

墓地の松や生垣の中には、辛夷の花が白らんでゐる、天氣の好い日曜の午過ぎだつた。母は小さな墓の前に來ると、これがお父さんの御墓だと敎へた。が、彼はその前に立つて、ちよいと御時宜をしただけだつた。

「それでもう好いの？」

母は水を手向けながら、彼の方へ微笑を送つた。

「うん。」

彼は顏を知らない父に、漠然とした親しみを感じてゐた。が、この憐な石塔には、何の感情も起らないのだつた。

母はそれから墓の前に、少時手を合せてゐた。すると何處かその近所に、空氣銃を打つたらしい音が聞えた。愼太郎は母を後に殘して、音のした方へ出かけて行つた。生垣を一つ大廻りに廻ると、路幅の狹い往來へ出る、――其處に彼よりも大きな子供が弟らしい二人と一しよに、空氣銃を片手に下げたなり、何の木か木の芽の煙つた梢を殘惜しさうに見上げてゐた。――

その時又彼の耳には、誰かの梯子を上つて來る音がみしりみしり聞え出した。急に不安になつ

た彼は半ば床から身を起すと、
「誰？」と上り口へ聲をかけた。
「起きてゐたのか？」
聲の持ち主は賢造だつた。
「どうかしたんですか？」
「今お母さんが用だつて云ふからね、ちよいと下へ行つて來たんだ。」
父は沈んだ聲を出しながら、もとの蒲團の上へ横になつた。
「用つて、惡いんぢやないんですか？」
「何、用つて云つた所が、唯明日工場へ行くんなら、簞笥の上の抽斗に單衣物があるつて云ふだけなんだ。」
愼太郎は母を憐んだ。それは母と云ふよりも母の中の妻を憐んだのだつた。
「しかしどうもむづかしいね。今なんぞも行つて見ると、やつぱり隨分苦しいらしいよ。おまけに頭も痛いとか云つてね、始終首を動かしてゐるんだ。」

「戸澤さんに又注射でもして貰つちやどうでせう?」
「注射はさう度々は出來ないんださうだから、――どうせいけなけりやいけないまでも、苦しみだけはもう少し樂にしてやりたいと思ふがね。」
賢造はぢつと暗い中に、愼太郎の顔を眺めるらしかつた。
「お前のお母さんなんぞは後生も好い方だし、――どうしてああ苦しむかね。」
二人は少時默つてゐた。
「みんなまだ起きてゐますか?」
愼太郎は父と向き合つた儘、默つてゐるのが苦しくなつた。
「叔母さんは寢てゐる。が、寢られるかどうだか、――」
父はかう云ひかけると、急に又枕から頭を擡げて、耳を澄ますやうなけはひをさせた。
「お父さん。お母さんがちよいと、――」
今度は梯子の中段から、お絹が忍びやかに聲をかけた。
「今行くよ。」

「僕も起きます。」

愼太郎は搔卷きを刎ねのけた。

「お前は起きなくつても好いよ。何かありやすぐに呼びに來るから。」

父はさつさとお絹の後から、もう一度梯子を下りて行つた。

愼太郎は床の上に、少時あぐらをかいてゐたが、やがて立ち上つて電燈をともした。それから又坐つた儘、電燈の眩しい光の中に、茫然とあたりを眺め廻した。母が父を呼びによこすのは、用があるなしに關らず、實は唯父に床の側へ來てゐて貰ひたいせいかも知れない。――そんな事もふと思はれるのだつた。

すると字を書いた罫紙が一枚、机の下に落ちてゐるのが偶然彼の眼を捉へた。彼は何氣なくそれを取り上げた。

「M子に獻ず。……」

後は洋一の歌になつてゐた。

愼太郎はその罫紙を抛り出すと、兩手を頭の後に廻しながら、蒲團の上へ仰向けになつた。さ

うして一瞬間、眼の涼しい美津の顔をありあり思ひ浮べた。………

七

愼太郎がふと眼をさますと、もう窓の戸の隙間も薄白くなつた二階には、姉のお絹と賢造とが何か小聲に話してゐた。彼はすぐに飛び起きた。

「よし、よし、ぢやお前は寢た方が好いよ。」

賢造はお絹にかう云つたなり、忙しさうに梯子を下りて行つた。

窓の外では屋根瓦に、瀧の落ちるやうな音がしてゐた。大降りだな、――愼太郎はさう思ひながら、早速寢間着を着換へにかかつた。すると帶を解いてゐたお絹が、やや皮肉に彼へ聲をかけた。

「愼ちやん。お早う。」

「お早う、お母さんは？」

「昨夜はずつと苦しみ通し。――」

「寝られないの？」

「自分ぢやよく寢たつて云ふんだけれど、何だか側で見てゐたんぢや、五分もほんたうに寢なかつたやうだわ。さうしちや妙な事を云つて、――私夜中に氣味が惡くなつてしまつた。」

もう着換へのすんだ愼太郎は、梯子の上り口に佇んでゐた。其處から見える臺所のさきには、美津が裾を端折つた儘、雜巾か何かかけてゐる。――それが彼等の話し聲がすると、急に端折つてゐた裾を下した。彼は眞鍮の手すりへ手をやつたなり、何だか其處へ下りて行くのが憚られるやうな心もちがした。

「妙な事つてどんな事を？」

「半ダアス？　半ダアスは六枚ぢやないかなんて。」

「頭が少しどうかしてゐるんだね。――今は？」

「今は戸澤さんが來てゐるわ。」

「早いな。」

愼太郎は美津がゐなくなつてから、ゆつくり梯子を下りて行つた。

五分の後、彼が病室へ來て見ると、戸澤は丁度ヂキタミンの注射をすませた所だつた。母は枕もとの看護婦に、後の手當をして貰ひながら、昨夜父が云つた通り、絶えず白い括り枕の上に、櫛巻きの頭を動かしてゐた。
「愼太郎が來たよ。」
戸澤の側に坐つてゐた父は聲高に母へさう云つてから、彼にちよいと目くばせをした。
彼は父とは反對に、戸澤の向う側へ腰を下した。其處には洋一が腕組みをした儘、ぼんやり母の顏を見守つてゐた。
「手を握つておやり。」
愼太郎は父の云ひつけ通り、兩手の掌に母の手を抑へた。母の手は冷たい脂汗に、氣味惡くじつとり沾つてゐた。
母は彼の顏を見ると、頷くやうな眼を見せたが、すぐにその眼を戸澤へやつて、
「先生。もういけないんでせう。手がしびれて來たやうですから。」と云つた。
「いや、そんな事はありません。もう二三日の辛棒です。」

戸澤は手を洗つてゐた。

「ぢきに樂になりますよ。――おお、いろいろな物が並んでゐますな。」

母の枕もとの盆の上には、大神宮や氏神の御札が、柴又の帝釋の御影なぞと一しよに、並べ切れない程並べてある。――母は上眼にその盆を見ながら、喘ぐやうに切れ切れな返事をした。

「昨夜、あんまり、苦しかつたものですから、――それでも今朝は、お肚の痛みだけは、ずつと樂になりました。――」

父は小聲に看護婦へ云つた。

「少し舌がつれるやうですね。」

「口が御粘りになるんでせう。――これで水をさし上げて下さい。」

愼太郎は看護婦の手から、水に浸した筆を受け取つて、二三度母の口をしめした。母は筆に舌を搦んで、乏しい水を吸ふやうにした。

「ぢや又上りますからね、御心配な事はちつともありませんよ。」

戸澤は鞄の始末をすると、母の方へかう大聲に云つた。それから看護婦を見返りながら、

「ぢや十時頃にも一度、殘りを注射して上げて下さい。」と云つた。
看護婦は口の内で返事をしたぎり、何か不服さうな顏をしてゐた。
愼太郞と父とは病室の外へ、戶澤の歸るのを送つて行つた。次の間には今朝も叔母が一人氣抜けがしたやうに坐つてゐる、――戶澤はその前を通る時、叮嚀な叔母の挨拶に無造作な目禮を返しながら、後に從つた愼太郞へ、
「どうです？　受驗準備は。」と話しかけた。が、忽ち間違ひに氣がつくと、不快な程快活に笑ひ出した。
「こりやどうも、――弟さんだとばかり思つたもんですから、――」
愼太郞も苦笑した。
「この頃は弟さんに御眼にかかると、何時も試驗の話ばかりです。やはり宅の伜なんぞが受驗準備をしてゐるせいですな。――」
戶澤は臺所を通り抜ける時も、やはりにやにや笑つてゐた。
醫者が雨の中を歸つた後、愼太郞は父を店に殘して、急ぎ足に茶の間へ引き返した。茶の間に

は今度は叔母の側に、洋一が卷煙草を啣へてゐた。
「眠いだらう?」
愼太郎はしやがむやうに、長火鉢の縁へ膝を當てた。
「姉さんはもう寢てゐるぜ。お前も今の内に二階へ行つて、早く一寢入りして來いよ。」
「うん、――昨夜夜つぴて煙草ばかり呑んでゐたもんだから、すつかり舌が荒れてしまつた。」
洋一は陰氣な顔をして、まだ長い吸ひさしをやけに火鉢へ抛りこんだ。
「でもお母さんが唸らなくなつたから好いや。」
「ちつとは樂になつたと見えるねえ。」
叔母は母の懷爐に入れる懷爐灰を燒きつけてゐた。
「四時までは苦しかつたやうですがね。」
其處へ松が臺所から、銀杏返しのほつれた顔を出した。
「御隱居樣。旦那樣がちよいと御店へ、いらしつて下さいつて仰有つてゐます。」
「はい、はい、今行きます。」

叔母は懷爐を愼太郎へ渡した。

「ぢや愼ちやん、お前お母さんを氣をつけて上げておくれ。」

叔母がかう云つて出て行くと、洋一も欠伸を噛み殺しながら、やつと重い腰を擡げた。

「僕も一寢入りして來るかな。」

愼太郎は一人になつてから、懷爐を膝に載せた儘、ぢつと何かを考へようとした。が、何を考へるのだか、彼自身にもはつきりしなかつた。唯凄まじい雨の音が、見えない屋根の空を滿してゐる、――それだけが頭に擴がつてゐた。

すると突然次の間から、慌しく看護婦が驅けこんで來た。

「どなたかいらしつて下さいましよ。どなたか、――」

愼太郎は咄嗟に身を起すと、もう次の瞬間には、隣の座敷へ飛びこんでゐた。さうして逞しい兩腕に、しつかりお律を抱き上げてゐた。

「お母さん。お母さん。」

母は彼に抱かれた儘、二三度體を震はせた。それから靑黑い液體を吐いた。

「お母さん。」

誰もまだ其處へ來ない何秒かの間、愼太郎は大聲に名を呼びながら、もう息の絶えた母の顏に、食ひ入るやうな眼を注いでゐた。

（大正九年十月二十三日）

秋山圖

「――黄大癡と云へば、大癡の秋山圖を御覽になつた事がありますか？」

或秋の夜、甌香閣を訪ねた王石谷は、主人の惲南田と茶を啜りながら、話の次手にこんな問を發した。

「いや、見た事はありません。あなたは御覽になつたのですか？」

大癡老人黄公望は、梅道人や黄鶴山樵と共に、元朝の畫の神手である。惲南田はかう云ひながら、嘗見た沙磧圖や富春巻が、髣髴と眼底に浮ぶやうな氣がした。

「さあ、それが見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、不思議な事になつてゐるのですが、――」

「見たと云つて好いか、見ないと云つて好いか、――」

惲南田は訝しさうに、王石谷の顔へ眼をやつた。

「模本でも御覽になつたのですか？」
「いや、模本を見たのでもないのです。兎に角眞蹟は見たのですが、――それも私ばかりではありません。この秋山圖の事に就いては、煙客先生（王時敏）や廉州先生（王鑑）も、それぞれ因緣が御有りなのです。」
王石谷は又茶を啜つた後、考深さうに微笑した。
「御退屈でなければ話しませうか？」
「どうぞ。」
惲南田は銅檠の火を搔き立ててから、慇懃に客を促した。

×　×　×　×　×

元宰先生（董其昌）が在世中の事です。或年の秋先生は、煙客翁と畫論をしてゐる内に、ふと翁に、黃一峯の秋山圖を見たかと尋ねました。翁は御承知の通り畫事の上では、大癡を宗としてゐた人です。ですから大癡の畫と云ふ畫は苟くも人間にある限り、看盡したと云つてもかまひませ

ん。が、その秋山圖と云ふ畫ばかりは、終に見た事がないのです。

「いや、見る所か、名を聞いた事もない位です。」

煙客翁はさう答へながら、妙に恥しいやうな氣がしたさうです。

「では機會のあり次第、是非一度は見て御置きなさい。夏山圖や浮嵐圖に比べると、又一段と出色の作です。恐らくは大癡老人の諸本の中でも、白眉ではないかと思ひますよ。」

「そんな傑作ですか？ それは是非見たいものですが、一體誰が持つてゐるのです？」

「潤州の張氏の家にあるのです。金山寺へでも行つた時に、門を叩いて御覽なさい。私が紹介狀を書いて上げます。」

煙客翁は先生の手簡を貰ふと、すぐに潤州へ出かけて行きました。何しろさう云ふ妙畫を藏してゐる家ですから、其處へ行けば黃一峯の外にも、まだいろいろ歷代の墨妙を見る事が出來るに違ひない。——かう思つた煙客翁は、もう一刻も西園の書房に、ぢつとしてゐる事は出來ないやうな、落着かない氣もちになつてゐたのです。

所が潤州へ來て觀ると、樂みにしてゐた張氏の家と云ふのは、成程構へは廣さうですが、如何

にも荒れ果ててゐるのです。墻には蔦が絡んでゐるし、庭には草が茂つてゐる。その中に鷄や家鴨などが、客の來たのを珍しさうに眺めてゐると云ふ始末ですから、さすがの翁もこんな家に、大癡の名畫があるのだらうかと、一時は元宰先生の言葉が疑ひたくなつた位でした。しかしわざわざ訪ねて來ながら、刺も通ぜずに歸るのは、勿論本望ではありません。そこで取次ぎに出て來た小厮に、兎も角も黄一峯の秋山圖を拜見したいと云ふ、遠來の意を傳へた後、思白先生が書いてくれた紹介狀を渡しました。

すると間もなく煙客翁は、廳堂へ案內されました。此處も紫檀の椅子机が、淸らかに並べてありながら、冷たい埃の臭ひがする、——やはり荒廢の氣が鋪甎の上に、漂つてゐるとでも云ひさうなのです。しかし幸ひ出て來た主人は、病弱らしい顏はしてゐても、人がらの惡い人ではありません。いや、寧ろその蒼白い顏や華奢な手の恰好などに、貴族らしい品格が見えるやうな人物なのです。翁はこの主人と一通り、初對面の挨拶をすませると、早速名高い黄一峯を見せて頂きたいと云ひ出しました。何でも翁の話では、その名畫がどう云ふ譯か、今の內に急いで見て置かないと、霧のやうに消えてでもしまひさうな、迷信じみた氣もちがしたのださうです。

主人はすぐに快諾しました。さうしてその廳堂の素壁へ、一幀の畫幅を懸けさせました。

「これが御望みの秋山圖です。」

煙客翁はその畫を一目見ると、思はず驚嘆の聲を洩らしました。

畫は青綠の設色です。溪の水が委蛇と流れた處に、村落や小橋が散在してゐる、――その上に起した主峯の腹には、悠々とした秋の雲が、蛤粉の濃淡を重ねてゐます。山は高房山の横點を重ねた、新雨を經たやうな翠黛ですが、それが又硃を點じた、所々の叢林の紅葉と映發してゐる美しさは、殆何と形容して好いか、言葉の着けやうさへありません。かう云ふと唯華麗な畫のやうですが、布置も雄大を盡してゐれば、筆墨も渾厚を極めてゐる、――云はば爛然とした色彩の中に、空靈澹蕩の古趣が自ら漲つてゐるやうな畫なのです。

煙客翁はまるで放心したやうに、何時までもこの畫を見入つてゐました。が、畫は見てゐれば見てゐる程、益〻神妙を加へて行きます。

「如何です？　御氣に入りましたか？」

主人は微笑を含みながら、斜に翁の顏を眺めました。

「神品です。元宰先生の絶賞は、たとひ及ばない事があつても、過ぎてゐるとは云はれません。實際この圖に比べれば、私が今までに見た諸名本は、悉く下風にある位です。」

煙客翁はかう云ふ間でも、秋山圖から眼を放しませんでした。

「さうですか？　ほんたうにそんな傑作ですか？」

翁は思はず主人の方へ、驚いた眼を轉じました。

「何故又それが御不審なのです？」

「いや、別に不審と云ふ譯ではないのですが、實は、――」

主人は殆處子のやうに、當惑さうな顔を赤めました。が、やつと寂しい微笑を洩すと、怯づ怯づ壁上の名畫を見ながら、かう言葉を續けるのです。

「實はあの畫を眺める度に、私は何だか眼を明いた儘、夢でも見てゐるやうな氣がするのです。成程秋山は美しい。しかしその美しさは、私だけに見える美しさではないか？　私以外の人間には、平凡な畫圖に過ぎないのではないか？――何故かさう云ふ疑ひが、始終私を悩ませるのです。これは私の氣の迷ひか、或はあの畫が世の中にあるには、餘り美し過ぎるからか、どちらが原因

だかわかりません。が、兎に角妙な氣がしますから、ついあなたの御賞讃にも、念を押すやうな事になつたのです。」

　しかしその時の煙客翁は、かう云ふ主人の辯解にも、格別心は止めなかつたさうです。それは何も秋山圖に、見惚れてゐたばかりではありません。翁には主人が徹頭徹尾、鑑識に疎いのを隱したさに、胡亂の言を並べるとしか、受け取れなかつたからなのです。

　翁はそれから少時の後、この廢宅同樣な張氏の家を辭しました。

が、どうしても忘れられないのは、あの眼も覺めるやうな秋山圖です。實際大癡の法燈を繼いだ煙客翁の身になつて見れば、何を捨ててもあれだけは、手に入れたいと思つたでせう。のみならず翁は蒐集家です。しかし家藏の墨妙の中でも、黄金二十鎰に換へたと云ふ、李營丘の山陰泛雪圖でさへ、秋山圖の神趣に比べると、遜色のあるのを免れません。ですから翁は蒐集家としても、この稀代の黄一峯が欲しくてたまらなくなつたのです。

　そこで潤州にゐる間に、翁は人を張氏に遣はして、秋山圖を讓つて貰ひたいと、何度も交渉して見ました。が、張氏はどうしても、翁の相談に應じません。あの顏色の蒼白い主人は、使に立

つたものの話によると、「それ程この畫が御氣に入つたのなら、喜んで先生に御貸し申さう。しかし手離す事だけは、御免蒙りたい。」と云つたさうです。それが又氣を負つた煙客翁には、多少癇にも障りました。何、今貸して貰はなくても、何時かはきつと手に入れて見せる。——翁はさう心に期しながら、とうとう秋山圖を殘したなり、潤州を去る事になりました。

それから又一年ばかりの後、煙客翁は潤州へ來た次手に、張氏の家を訪れて見ました。すると墻に絡んだ蔦や庭に茂つた草の色は、以前と更に變りません。が、取次ぎの小厮に聞けば、主人は不在だと云ふ事です。翁は主人に會はないにしろ、もう一度あの秋山圖を見せて貰ふやうに頼みました。しかし何度頼んで見ても、小厮は主人の留守を楯に、頑として奥へ通しません。いや、しまひには門を鎖した儘、返事さへ碌にしないのです。そこで翁はやむを得ず、この荒れ果てた家の何處かに、藏してゐる名畫を想ひながら、惆悵と獨り歸つて來ました。

所がその後元宰先生に會ふと、先生は翁に張氏の家には、大癡の秋山圖があるばかりか、沈石田の雨夜止宿圖や自壽圖のやうな傑作も、殘つてゐると云ふ事を告げました。

「前に御話するのを忘れたが、この二つは秋山圖同樣、繪苑の奇觀とも云ふべき作です。もう一

度私が手紙を書くから、是非これも見て御置きなさい。」

　煙客翁はすぐに張氏の家へ、急の使を立てました。使は元宰先生の手札の外にも、それらの名畫を購ふべき橐金を授けられてゐたのです。しかし張氏は前の通り、どうしても黄一峯だけは、手離す事を肯じません。翁は終に秋山圖には意を絶つより外はなくなりました。

×　×　×　×　×

　王石谷はちよいと口を噤んだ。

「これまでは私が煙客先生から、聞かせられた話なのです。」

「では煙客先生だけは、確に秋山圖を見られたのですか？」

　惲南田は髯を撫しながら、念を押すやうに王石谷を見た。

「先生は見たと云はれるのです。が、確に見られたのかどうか、それは誰にもわかりません。」

「しかし御話の容子では、――」

「まあ先を御聽き下さい。しまひまで御聽き下されば、又自ら私とは違つた御考が出るかも知

れません。」

王石谷は今度は茶も啜らずに、娓々と話を續け出した。

× × × × × ×

煙客翁が私にこの話を聽かせたのは、始めて秋山圖を見た時から、既に五十年近い星霜を經過した後だつたのです。その時は元宰先生も、とうに物故してゐましたし、張氏の家でも何時の間にか、三度まで代が變つてゐました。ですからあの秋山圖も、今は誰の家に藏されてゐるか、いや、未に龜玉の毀れもないか、それさへ我々にはわかりません。煙客翁は手にとるやうに、秋山圖の靈妙を話してから、殘念さうにかう云つたものです。

「あの黃一峯は公孫大孃の劍器のやうなものでしたよ。筆墨はあつても、筆墨は見えない。唯何とも云へない神氣が、直ちに心に迫つて來るのです。——丁度龍翔の看はあつても、人や劍が我々に見えないのと同じ事ですよ。」

それから一月ばかりの後、そろそろ春風が動き出したのを潮に、私は獨り南方へ、旅をする事

になりました。そこで翁にその話をすると、

「では丁度好い機會だから、秋山を尋ねて御覧なさい。あれがもう一度世に出れば、畫苑の慶事ですよ。」と云ふのです。

私も勿論望む所ですから、早速翁を煩はせて、手紙を一本書いて貰ひました。が、さて遊歷の途に上つて見ると、何かと行く所も多いものですから、容易に潤州の張氏の家を訪れる暇がありません。私は翁の書を袖にしたなり、とうとう子規が啼くやうになるまで、秋山を尋ねずにしまひました。

その内にふと耳にはひつたのは、貴戚の王氏が秋山圖を手に入れたと云ふ噂です。さう云へば私が遊歷中、煙客翁の書を見せた人には、王氏を知つてゐるものも交つてゐました。王氏はさう云ふ人からでも、あの秋山圖が、張氏の家に藏してある事を知つたのでせう。何でも坊間の說によれば、張氏の孫は王氏の使を受けると、傳家の彝鼎や法書と共に、すぐさま大癡の秋山圖を獻じに來たとか云ふ事です。さうして王氏は喜びの餘り、張氏の孫を上座に招じて、家姬を出したり、音樂を奏したり、盛な饗宴を催した揚句、千金を壽にしたとか云ふ事です。私は殆ど雀躍し

ました。滄桑五十載を閲した後でも、秋山圖はやはり無事だつたのです。のみならず私も面識がある、王氏の手中に入つたのです。昔は煙客翁がいくら苦心をしても、この圖を再び看る事は、鬼神が悪むのかと思ふ位、悉失敗に終りました。が、今は王氏の焦慮も待たず、自然とこの圖が我々の前へ、蜃樓のやうに現れたのです。これこそ實際天縁が、熟したと云ふ外はありません。私は取る物も取りあへず、金閶にある王氏の第宅へ、秋山を見に出かけて行きました。

今でもはつきり覺えてゐますが、それは王氏の庭の牡丹が、玉欄の外に咲き誇つた、風のない初夏の午過ぎです。私は王氏の顏を見ると、揖もすますかすまさない内に、思はず笑ひ出してしまひました。

「もう秋山圖はこちらの物です。煙客先生もあの圖では、隨分苦勞をされたものですが、今度こそは御安心なさるでせう。さう思ふだけでも愉快です。」

王氏も得意滿面でした。

「今日は煙客先生や廉州先生も來られる筈です。が、まあ、御出でになつた順に、あなたから見て貰ひませう。」

王氏は早速傍の壁に、あの秋山圖を懸けさせました。水に臨んだ紅葉の村、谷を埋めてゐる白雲の群、それから遠近に側立つた、屏風のやうな數峯の靑、――忽ち私の眼の前には、大癡老人が造り出した、天地よりも更に靈妙な小天地が浮び上つたのです。私は胸を躍らせながら、ぢつと壁上の畫を眺めました。

この雲煙邱壑は、紛れもない黄一峯です、癡翁を除いては何人も、これ程皴點を加へながら、しかも墨を活かす事は――これ程設色を重くしながら、しかも筆が隱れない事は、出來ないのに違ひありません。しかし――しかしこの秋山圖は、昔一たび煙客翁が張氏の家に見たと云ふ圖と、確に別な黄一峯です。さうしてその秋山圖よりも、恐らくは下位にある黄一峯です。

私の周圍には王氏を始め、座にゐ合せた食客たちが、私の顏色を窺つてゐました。ですから私は失望の色が、寸分も顏へ露はれないやうに、氣を使ふ必要があつたのです。が、いくら努めて見ても、何處か不服な表情が、我知らず外へ出たのでせう。王氏は少時たつてから、心配さうに私へ聲をかけました。

「どうです？」

私は言下に答へました。

「神品です。成程これでは煙客先生が、驚倒されたのも不思議はありません。」

王氏はやや顏色を直しました。が、それでもまだ眉の間には、幾分か私の賞讃に、不滿らしい氣色が見えたものです。

其處へ丁度來合せたのは、私に秋山の神趣を說いた、あの煙客先生です。翁は王氏に會釋をする間も、嬉しさうな微笑を浮べてゐました。

「五十年前に秋山圖を見たのは、荒れ果てた張氏の家でしたが、今日は又かう云ふ富貴の御宅に、再びこの圖とめぐり合ひました。眞に意外な因緣です。」

煙客翁はかう云ひながら、壁上の大癡を仰ぎ見ました。この秋山が嘗翁の見た秋山かどうか、それは勿論誰よりも翁自身が明らかに知つてゐる筈です。ですから私も王氏同樣、翁がこの圖を眺める容子に、注意深い眼を注いでゐました。すると果然翁の顏も、見る見る曇つたではありませんか。

少時沈默が續いた後、王氏は愈〻不安さうに、怯づ怯づ翁へ聲をかけました。

「如何です？　今も石谷先生は、大層褒めてくれましたが、――」

私は正直な煙客翁が、有體な返事をしはしないかと、内心冷や冷やしてゐました。しかし王氏を失望させるのは、さすがに翁も氣の毒だつたのでせう。翁は秋山を見終ると、叮嚀に王氏へ答へました。

「これが御手にはひつたのは、あなたの御運が好いのです。御家藏の諸寶もこの後は、一段と光彩を添へる事でせう。」

しかし王氏はこの言葉を聞いても、やはり顏の憂色が、益深くなるばかりです。

その時もし廉州先生が、遲れ馳せにでも來なかつたなら、我々は更に氣まづい思ひをさせられたに違ひありません。しかし先生は幸ひにも、煙客翁の賞讃が澁り勝ちになつた時、快活に一座へ加はりました。

「これが御話の秋山圖ですか？」

先生は無造作な挨拶をしてから、黃一峯の畫に對しました。さうして少時は默然と、口髭ばかり噛んでゐました。

「煙客先生は五十年前にも、一度この圖を御覽になつたさうです。」

王氏は一層氣づかはしさうに、かう説明を加へました。廉州先生はまだ翁から、一度も秋山の神逸を聞かされた事がなかつたのです。

「どうでせう？　あなたの御鑑裁は。」

先生は歎息を洩らしたぎり、不相變畫を眺めてゐました。

「御遠慮のない所を伺ひたいのですが、――」

王氏は無理に微笑しながら、再び先生を促しました。

「これですか？　これは――」

廉州先生は又口を噤みました。

「これは？」

「これは癡翁第一の名作でせう。――この雲煙の濃淡を御覽なさい。元氣淋漓ぢやありませんか。林木なぞの設色も、當に天造とも稱すべきものです。あすこに遠峯が一つ見えませう。全體の布局があの爲に、どの位活きてゐるかわかりません。」

今まで默つてゐた廉州先生は、王氏の方を顧みると、一々畫の佳所を指さしながら、盛に感歎の聲を擧げ始めました。その言葉と共に王氏の顏が、だんだん晴れやかになり出したのは、申し上げるまでもありますまい。

私はその間に煙客翁と、ひそかに顏を見合せました。

「先生、これがあの秋山圖ですか？」

私が小聲にかう云ふと、煙客翁は頭を振りながら、妙な瞬きを一つしました。

「まるで萬事が夢のやうです。事によるとあの張家の主人は、狐仙か何かだつたかも知れませんよ。」

× × × × ×

「秋山圖の話はこれだけです。」

王石谷は話り終ると、徐に一碗の茶を啜つた。

「成程、不思議な話です。」

惲南田は、さつきから銅檠の焰を眺めてゐた。

「その後王氏も熱心に、いろいろ尋ねて見たさうですが、やはり癡翁の秋山圖と云へば、あれ以外に張氏も知らなかつたさうです。ですから昔煙客先生が見られたと云ふ秋山圖は、今でも何處かに隱れてゐるか、或はそれが先生の記憶の間違ひに過ぎないのか、どちらとも私にはわかりません。まさか先生が張氏の家へ、秋山圖を見に行かれた事が、全體幻でもありますまいし、——」

「しかし煙客先生の心の中には、その怪しい秋山圖が、はつきり殘つてゐるのでせう。それからあなたの心の中にも、——」

「山石の靑綠だの紅葉の硃の色だのは、今でもありあり見えるやうです。」

「では秋山圖がないにしても、憾む所はないではありませんか？」

惲王の兩大家は、掌を拊つて一笑した。

（大正九年十二月）

山鴫

千八百八十年五月何日かの日暮れ方である。二年ぶりにヤスナヤ・ポリヤナを訪れた Ivan Turgenyef は、主の Tolstoi 伯爵と一しよに、ヴァロンカ川の向うの雜木林へ、山鴫を打ちに出かけて行つた。

鴫打ちの一行には、この二人の翁の外にも、まだ若々しさの失せないトルストイ夫人や、犬をつれた子供たちが加はつてゐた。

ヴァロンカ川へ出るまでの路は、大抵麥畑の中を通つてゐた。日沒と共に生じた微風は、その麥の葉を渡りながら、靜に土の匂を運んで來た。トルストイは銃を肩にしながら、誰よりも先に歩いて行つた。さうして時々後を向いては、トルストイ夫人と歩いてゐるトゥルゲネフに話しかけた。その度に「父と子と」の作家は、やや驚いたやうに眼を擧げながら、嬉しさうに滑らかな返事をした。時によると又幅の廣い肩を搖すつて、嗄れた笑ひ聲を洩す事もあつた。それは無骨な

トルストイに比べると、上品な趣があると同時に、何處か女らしい答ぶりだつた。

路がだらだら坂になつた時、兄弟らしい村の子供が、向うから二人走つて來た。彼等はトルストイの顏を見ると、一度に足を止めて目禮をした。それから又元のやうに、はだしの足の裏を見せながら、勢よく坂を駈け上つて行つた。トルストイの子供たちの中には、後から彼等へ何事か、大聲に呼びかけるものもあつた。が、二人はそれも聞えないやうに、見る見る麥畑の向うに隱れてしまつた。

「村の子供たちは面白いよ。」

トルストイは殘曛を顏に受けながら、トゥルゲネフの方を振返つた。

「ああ云ふ連中の言葉を聞いてゐると、我々には思ひもつかない、直截な云ひまはしを教へられる事がある。」

トゥルゲネフは微笑した。今の彼は昔の彼ではない。昔の彼はトルストイの言葉に、子供らしい感激を感じると、我知らず皮肉に出勝ちだつた。……

「この間もああ云ふ連中を教へてゐると、――」

トルストイは話し續けた。

「いきなり一人、教室を飛び出さうとする子供があるのだね。そこで何處へ行くのだと尋いて見たら、白墨を食ひ缺きに行くのですと云ふのだ。貰ひに行くとも云はなければ、折つて來るとも云ふのではない。食ひ缺きに行くと云ふのだね。かう云ふ言葉が使へるのは、現に白墨を噛じつてゐる露西亞の子供があるばかりだ。我々大人には到底出來ない。」

「成程、これは露西亞の子供に限りさうだ。その上僕なぞはそんな話を聞かされると、しみじみ露西亞へ歸つて來たと云ふ心持がする。」

トゥルゲネフは今更のやうに、麥畑へ眼を漂はせた。

「さうだらう。佛蘭西なぞでは子供までが、巻煙草位は吸ひ兼ねない。」

「さう云へばあなたもこの頃は、さつぱり煙草を召し上らないやうでございますね。」

トルストイ夫人は夫の惡謔から、巧妙に客を救ひ出した。

「ええ、すつかり煙草はやめにしました。巴里に二人美人がゐましてね、その人たちは私が煙草臭いと、接吻させないと云ふものですから。」

今度はトルストイが苦笑した。

その内に一行はヴァロンカ川を渡つて、鴫打ちの場所へ辿り着いた。其處は川から遠くない、雜木林が疎になつた、濕氣の多い草地だつた。

トルストイはトゥルゲネフに、最も好い打ち場を讓つた。そして彼自身はその打ち場から、百五十歩ばかり遠のいた、草地の一隅に位置を定めた。それからトルストイ夫人はトゥルゲネフの側に、子供たちは彼等のずつと後に、各々分れてゐる事になつた。

空はまだ赤らんでゐた。その空を絡つた木々の梢が、一面にぼんやり煙つてゐるのは、もう匂の高い若芽が、簇つてゐるのに違ひなかつた。トゥルゲネフは銃を提げたなり、透かすやうに木の間を眺めた。薄明い林の中からは、時々風とは云へぬ程の風が、氣輕さうな囀りを漂はせて來た。

「駒鳥や鶸が啼いて居ります。」

トルストイ夫人は首を傾けながら、獨り語のやうにかう云つた。

徐に沈默の半時間が過ぎた。

その間に空は水のやうになつた。同時に遠近の樺の幹が、それだけ白白と見えるやうになつた。駒鳥や鶸の聲の代りに、今は唯五十雀が、稀に鳴き聲を送つて來る、――トゥルゲネフはもう一度、疎な木々の中を透かして見た。が、今度は林の奥も、あら方夕暗みに沈んでゐた。

この時一發の銃聲が、突然林間に響き渡つた。後に待つてゐた子供たちは、その反響がまだ消えない内に、犬と先を爭ひながら、獲物を拾ひに駈けて行つた。

「御主人に先を越されました。」

トゥルゲネフは微笑しながら、トルストイ夫人を振り返つた。

やがて二男のイリアが母の所へ、草の中を走つて來た。さうしてトルストイの射止めたのは、山鴫だと云ふ報告をした。

トゥルゲネフは口を挾んだ。

「誰が見つけました?」

「ドオラ(犬の名)が見つけたのです。――見つけた時は、まだ生きてゐましたよ。」

イリアは又母の方を向くと、健康さうな頰を火照らせたがら、その山鴫が見つかつた時の一部

始終を話して聞かせた。
トゥルゲネフの空想には、「獵人日記」の一章のやうた、小品の光景がちらりと浮んだ。
イリアが歸つて行つた後は、又元の通り靜かになつた。薄暗い林の奥からは、春らしい若芽の匂だの濕つた土の匂だのが、しつとりとあたりへ溢れて來た。その中に何か眠さうな鳥が、時たま遠くに啼く聲がした。
「あれは、――?」
「縞蒿雀です。」
トゥルゲネフはすぐに返事をした。
縞蒿雀は忽ち啼きやんだ。それぎり少時は夕影の木々に、ぱつたり囀りが途絶えてしまつた。空は、――微風さへ全然落ちた空は、その生氣のない林の上に、だんだん蒼い色を沈めて來る、――と思ふと梟が一羽、寂しい聲を飛ばせながら、頭の上を翔けて通つた。
再び一發の銃聲が、林間の寂寞を破つたのは、それから一時間も後の事だつた。
「リヨフ・ニコラエヰツチは鴫打ちでも、やはり私を負かしさうです。」

トゥルゲネフは眼だけ笑ひながら、ちよいと肩を聳かせた。

子供たちが皆駈けだした音、ドオラが時々吠え立てる聲、——それがもう一度靜まつた時には、既に冷かな星の光が、點々と空に散らばつてゐた。林も今は見廻す限り、ひつそりと夜を封じた儘、枝一つ動かす氣色もなかつた。二十分、三十分、——退屈な時が過ぎると共に、この暮れ盡した濕地の上には、何處か薄明い春の靄が、ぼんやり足もとへ這ひ寄り始めた。が、彼等のまはりへは、未に一羽も鴫らしい鳥は、現れるけはひが見えなかつた。

「今日はどう致しましたかしら。」

トルストイ夫人の呟きには、氣の毒さうな調子も交つてゐた。

「こんなことは滅多にないのでございますけれども、——」

「奥さん、御聞きなさい。夜鶯が啼いてゐます。」

トゥルゲネフは殊更に、緣のない方面へ話題を移した。

暗い林の奥からは、實際もう夜鶯が、朗かな聲を漂はせて來た。二人は少時默然と、別々の事を考へながら、ぢつとその聲に聞き入つてゐた。……

すると急に、――トゥルゲネフ自身の言葉を借りれば、「しかしこの『急に』がわかるものは、唯獵人ばかりである。」――急に向うの草の中から、紛れやうのない啼き聲と共に、一羽の山鴫が舞上つた。山鴫は枝垂れた木々の間に、薄白い羽裏を閃かせながら、すぐに宵暗へ消えようとする、――トゥルゲネフはその瞬間、銃を肩に當てるが早いか、器用にぐいと引き金を引いた。

一抹の煙と短い火と、――銃聲は靜な林の奥へ、長い反響を轟かせた。

「中つたかね?」

トルストイはこちらへ歩み寄りながら、聲高に彼へ問ひかけた。

「中つたとも。石のやうに落ちて來た。」

子供たちはもう犬と一しよに、トゥルゲネフの周圍へ集まつてゐた。

「探して御出で。」

トルストイは彼等に云ひつけた。

子供たちはドオラを先に、其處此處と獲物を探し歩いた。が、いくら探して見ても、山鴫の屍骸は見つからなかつた。ドオラも遮二無二駈け廻つては、時々草の中へ佇んだ儘、不足さうに唸

るばかりだつた。

　しまひには、トルストイやトゥルゲネフも、子供たちへ助力を與へに來た。しかし山鴫は何處へ行つたか、やはり羽根さへも見當らなかつた。

「ゐないやうだね。」

　二十分の後トルストイは、暗い木々の間に佇みながら、トゥルゲネフの方へ言葉をかけた。

「ゐない譯があるものか？　石のやうに落ちるのを見たのだから、――」

　トゥルゲネフはかう云ひながらも、あたりの草むらを見廻してゐた。

「中つた事は中つても、羽根へ中つただけだつたかも知れない。それなら落ちてからも逃げられる筈だ。」

「いや、羽根へ中つただけではない。確に僕は仕止めたのだ。」

　トルストイは當惑さうに、ちよいと太い眉をひそめた。

「では犬が見つけさうなものだ。ドオラは仕止めた鳥と云へば、きつと啣へて來るのだから、――」

「しかし實際仕止めたのだから仕方がない。」
トゥルゲネフは銃を抱へた儘、苛立たしさうな手眞似をした。
「仕止めたか、仕止めないか、その位な區別は子供にもわかる。僕はちやんと見てゐたのだ。」
トルストイは嘲笑ふやうに、じろりと相手の顏を眺めた。
「それでは犬はどうしたのだ？」
「犬なぞは僕の知つた事ではない。僕は唯見た通りを云ふのだ。何しろ石のやうに落ちて來たのだから、――」
トゥルゲネフはトルストイの眼に、挑戰的な光を見ると、思はずかつ金切聲を出した。
「Il est tombé comme pierre, je t'assure !」
「しか　ドオラが見つけない筈はない。」
この時幸ひトルストイ夫人が、二人の翁に笑顏を見せながら、さりげない仲裁を試みに來た。夫人は明朝もう一度、子供たちを探しによこすから、今夜はこの儘トルストイの屋敷へ、引き上げた方が好からうと云つた。トゥルゲネフはすぐに贊成した。

「ではさう願ふ事にしませう、明日になればきつとわかります。」

「さうだね、明日になればきつとわかるだらう。」

トルストイはまだ不服さうに、意地の悪い反語を投げつけると、突然トゥルゲネフへ背を見せながら、さつさと林の外へ歩き出した。……

トゥルゲネフが寝室へ退いたのは、その夜の十一時前後だつた。彼はやつと獨りになると、どつかり椅子へ坐つた儘、茫然とあたりを眺め廻した。

寝室は平生トルストイが、書齋に定めてゐる一室だつた。大きな書架、龕の中の半身像、三四枚の肖像の額、壁にとりつけた牡鹿の頭、――彼の周圍にはそれらの物が、蠟燭の光に照らされながら、少しも派手な色彩のない、冷かな空氣をつくつてゐた。が、それにも關らず、單に獨りになつたと云ふ事が、兎に角今夜のトゥルゲネフには、不思議な程嬉しい氣がするのだつた。――彼が寝室へ退く前、主客は一家の男女と共に、茶の卓子を圍みながら、雑談に夜を更かしてゐた。トゥルゲネフは出來得る限り、快活に笑つたり話したりした。しかしトルストイはその

間でも、不相變浮かない顔をしたなり、滅多に口も開かなかつた。それが始終トゥルゲネフには、面憎くもあれば無氣味でもあつた。だから彼は一家の男女に、ふだんよりも愛嬌を振り撒いては、わざと主人の沈默を無視するやうに振舞はうとした。

一家の男女はトゥルゲネフが、輕妙な諧謔を弄する度に、何れも愉快さうな笑ひ聲を立てた。殊に彼が子供たちに、ハムブルグの動物園の象の聲だの、巴里のガルソンの身ぶりだのを巧みに眞似て見せる時は、一層その笑ひ聲が高くなつた。が、一座が陽氣になればなる程、トゥルゲネフ自身の心もちは、愈〻妙にぎごちない息苦しさを感ずるばかりだつた。

「君はこの頃有望な新進作家が出たのを知つてゐるか？」

話題が佛蘭西の文藝に移つた時、とうとう不自然な社交家ぶりに、堪へられなくなつたトゥルゲネフは、突然トルストイを顧みながら、わざと氣輕さうに聲をかけた。

「知らない。何と云ふ作家だ？」

「ド・モウパスサン。――ギイ・ド・モオパスサンと云ふ作家だがね。少くとも外に眞似手のない、犀利な觀察眼を具へた作家だ。――丁度今僕の鞄の中には、La Maison Tellier と云ふ小

說集がはひつてゐる。暇があつたら讀んで見給へ。」

「ド・モオパスサン?」

トルストイは疑はしさうに、ちよいと相手の顏を眺めた。が、それぎり小說の事は、讀むとも讀まないとも答へずにしまつた。トゥルゲネフは幼い時分、意地の惡い年上の子供にいぢめられた覺えがある、——丁度そんな情無さが、この時も胸へこみ上げて來た。

「新進作家と云へばこちらへも、珍しい方が一人御見えになりましたよ。」

彼の當惑を察したトルストイ夫人は、早速或風變りな訪問客の話をし始めた。——一月ばかり前の或暮れ方、餘り身なりの好くない靑年が、是非主人に會ひたいと云ふから、兎に角奧へ通して見ると、初對面の主人に向つて、「取りあへずあなたに頂きたいのは、火酒と鯡の尻尾です。」と云ふ。そればかりでも旣に驚かされたが、この又異樣な靑年が、旣に多少は名聲のある、新しい作家の一人だつたのには、愈驚かずにはゐられなかつた。……

「それがガルシンと云ふ方でした。」

トゥルゲネフはこの名を聞くと、もう一度雜談の圈內へ、トルストイを誘つて見る氣になつた。

と云ふのは相手の打ち融けないのが、益不快になつた外にも、嘗て彼はトルストイに、始めてガルシンの作物を紹介した緣故があるからだつた。

「ガルシンでしたか？――あの男の小說も惡くはあるまい。君はその後、何を讀んだか知らないが、――」

「惡くはないやうだ。」

それでもトルストイは冷然と、好い加減な返事をしただけだつた。――

トゥルゲネフはやつと身を起すと、白髮の頭を振りながら、靜に書齋の中を步き出した。小さな卓の上の蠟燭の火は、彼が行つたり來たりする度に、壁へ映つた彼の影を大小さまざまに變化させた。が、彼は默然と、兩手を後に組んだ儘、懶さうな眼は何時までも、裸の床を離れたかつた。

トゥルゲネフの心の中には、彼がトルストイと親しくしてゐた、二十餘年以前の追憶が、一つ一つ鮮に浮んで來た。放蕩に放蕩を重ねては、ペテルブルグの彼の家へ、屢眠りに歸つて來た、將校時代のトルストイ、――ネクラゾフの客間の一つに、傲然と彼を眺めながら、ヂオルヂュ・

サンドの攻撃に一切を忘れてゐたトルストイ、――スパスコイエの林間に、彼と散歩の足を止めては、夏の雲の美しさに感歎の聲を洩らしてゐた、「三人の輕騎兵」時代のトルストイ、――それから最後にはフェットの家で、二人とも拳を握つた儘、一生の惡罵を相手の顔へ投げつけた時のトルストイ、――それらの追憶のどれを見ても、我執の強いトルストイは、徹頭徹尾他人の中に、眞實を認めない人間だつた。常に他人のする事には、虚僞を感ずる人間だつた。これは他人のする事が、何も彼のする事と矛盾してゐる時のみではない。たとひ彼と同じやうに、放蕩をしてゐたものがあつても、彼は彼自身を恕すやうに他人を恕す事が出來なかつた。彼には他人が彼のやうに、夏の雲の美しさを感じてゐると云ふ事すら、すぐに信用は出來ないのである。彼がサンドを憎んだのも、やはり彼女の眞實に疑を抱いたからだつた。一時彼がトゥルゲネフと、絶交するやうになつたのも、――いや、現に彼はトゥルゲネフが、山鴫を射落したと云ふ事にも、不相變嘘を嗅ぎつけてゐる。……

トゥルゲネフは大きな息をしながら、ふと龕の前に足を止めた。龕の中には大理石の像が、遠い蠟燭の光を受けた、覺束ない影に浮き出してゐる、――それはリヨフには長兄に當る、ニコラ

イ・トルストイの半身像だつた。思へば彼とも親しかつた、この情愛の厚いニコライが、故人の數にはひつて以來、二十年あまりの日月は、何時の間にか過ぎてしまつた。もしニコライの半分でも、リヨフに他人の感情を思ひやる事が出來たなら、――トゥルゲネフは長い間、春の夜の更けるのも知らないやうに、この仄暗い龕の中の像へ、寂しさうな眼を注いでゐた。……

翌朝トゥルゲネフはやや早めに、特にこの家では食堂に定められた、二階の客間へ出かけて行つた。客間の壁には先祖の肖像畫が、何枚も壁に並んでゐる、――その肖像畫の一つの下に、トルストイは卓へ向ひながら、郵便物に眼を通してゐた。が、彼の外にはまだ子供たちも、誰一人姿は見せなかつた。

二人の翁は挨拶をした。

その間もトゥルゲネフは、相手の顏色を窺ひながら、少しでも其處に好意が見えれば、すぐに和睦する心算だつた。がトルストイはまだ氣むづかしさうに、二言三言話した後は、又前のやうに默々と、郵便物の調べにとりかかつた。トゥルゲネフはやむを得ず、手近の椅子を一つ引き寄

せると、これもやはり無言の儘、卓の上の新聞を讀み始めた。

陰氣な客間は少時の間、湯沸のたぎる音の外には、何の物音も聞えなかつた。

「昨夜はよく眠られたかね？」

郵便物に眼を通してしまふと、トルストイは何と思つたか、かうトゥルゲネフへ聲をかけた。

「よく眠られた。」

トゥルゲネフは新聞を下した。さうしてもう一度トルストイが、話しかける時を待つてゐた。が、主人は銀の手のついたコップへ、湯沸の茶を落しながら、それぎり何とも口を利かなかつた。

かう云ふ事が一二度續いた後、トゥルゲネフは丁度昨夜のやうに、不機嫌なトルストイの顏を見てゐるのが、だんだん苦しくなり始めた。殊に今朝は餘人がゐないだけ、一層彼には心のやり場が、何處にもないやうな氣がするのだつた。せめてトルストイ夫人でもゐてくれたら、——彼は苛立たしい肚の中に、何度となくかう思つた。が、この客間へはどうしたものか、未に人のはひつて來るけはひさへも見えなかつた。

五分、十分、——トゥルゲネフはとうとうたまり兼ねたやうに、新聞を其處へ拋り出すと、蹌

蹌と椅子から立ち上つた。
その時客間の戸の外には、突然大勢の話し聲や靴の音が聞え出した。それが皆先を爭ふやうに、どやどや階段を駈け上つて來る――と思ふと次の瞬間には、亂暴に戸が開かれるが早いか、五六人の男女の子供たちが、口々に何かしやべりながら、一度に部屋の中へ飛びこんで來た。
「お父樣、ありましたよ。」
先に立つたイリヤは得意さうに、手に下げた物を振つて見せた。
「私が始見つけたのよ。」
母によく似たタティアナも、弟に負けない聲を擧げた。
「落ちる時にひつかかつたのでせう。白楊の枝にぶら下つてゐました。」
最後にかう說明したのは、一番年嵩のセルゲイだつた。
トルストイは呆氣にとられたやうに、子供たちの顏を見廻してゐた。が、昨日の山鴫が無事に見つかつた事を知ると、忽ち彼の髯深い顏には、晴れ晴れした微笑が浮んで來た。
「さうか？　木の枝にひつかかつてゐたのか？　それでは犬にも見つからなかつた筈だ。」

彼は椅子を離れながら、子供たちにまじつたトゥルゲネフの前へ、逞しい右手をさし出した。
「イヴァン・セルゲエヰッチ。これで僕も安心が出來る。僕は嘘をつくやうな人間ではない。この鳥も下に落ちてゐれば、きつとドオラが拾つて來たのだ。」
トゥルゲネフは殆恥しさうに、しつかりトルストイの手を握つた。見つかつたのは山鴫か、それとも「アンナ・カレニナ」の作家か、――「父と子と」の作家の胸には、その判斷にも迷ふ位、泣きたいやうな喜ばしさが、何時か一ぱいになつてゐたのだつた。
「僕だつて嘘をつくやうな人間ではない。見給へ。あの通りちやんと仕止めてあるではないか？何しろ銃が鳴ると同時に、石のやうに落ちて來たのだから、――」
二人の翁は顔を見合せると、云ひ合せたやうに哄笑した。

（大正九年十二月）

奇怪な再會

一

お蓮が本所の横網に囲はれたのは、明治二十八年の初冬だつた。

妾宅は御藏橋の川に臨んだ、極く手狭な平家だつた。唯庭先から川向うを見ると、今は兩國停車場になつてゐる御竹倉一帶の藪や林が、時雨勝な空を遮つてゐたから、比較的町中らしくない、閑靜な眺めには乏しくなかつた。が、それだけに又旦那が來ない夜なぞは寂し過ぎる事も度々あつた。

「婆や、あれは何の聲だらう？」

「あれでございますか？　あれは五位鷺でございますよ。」

お蓮は眼の惡い傭ひ婆さんとランプの火を守りながら、氣味惡さうにこんな會話を交換する事もないではなかつた。

旦那の牧野は三日にあげず、晝間でも役所の歸り途に、陸軍一等主計の軍服を着た、逞しい姿を運んで來た。勿論日が暮れてから、廐橋向うの本宅を拔けて來る事も稀ではなかつた。牧野はもう女房ばかりか、男女二人の子持ちでもあつた。

この頃丸髷に結つたお蓮は、殆ど宵毎に長火鉢を隔てながら、牧野の酒の相手をした。二人の間の茶ぶ臺には、大抵からすみや海鼠腸が、小綺麗な皿小鉢を並べてゐた。

さう云ふ時には過去の生活が、兎角お蓮の頭の中に、はつきり浮んで來勝ちだつた。彼女はあの賑な家や朋輩たちの顏を思ひ出すと、遠い他國へ流れて來た彼女自身の便りなさが、一層心に沁みるやうな氣がした。それから又以前よりも、益々肥つて來た牧野の體が、不意に妙な憎惡の念を燃え立たせる事も時々あつた。

牧野は始終愉快さうに、ちびちび杯を嘗めてゐた。さうして何か冗談を云つては、お蓮の顏を覗きこむと、突然大聲に笑ひ出すのが、この男の酒癖の一つだつた。

「如何ですな。お蓮の方、東京も滿更ぢやありますまい。」

お蓮は牧野にかう云はれても、大抵は微笑を洩らした儘、酒の燗などに氣をつけてゐた。

役所の勤めを抱へてゐた牧野は、滅多に泊つて行かなかつた。枕もとに置いた時計の針が、十二時近くなつたのを見ると、彼はすぐにメリヤスの襯衣へ、太い腕を通し始めた。お蓮は自墮落な立て膝をしたなり、何時も唯ぼんやりと、せはしなさうな牧野の歸り仕度へ、懶い流し眼を送つてゐた。

「おい、羽織をとつてくれ。」

牧野は夜中のランプの光に、脂の浮いた顏を照させながら、もどかしさうな聲を出す事もあつた。

お蓮は彼を送り出すと、殆ど毎夜の事ながら、氣疲れを感ぜずにはゐられなかつた。と同時に又獨りになつた事が、多少は寂しくも思はれるのだつた。

雨が降つても、風が吹いても、川一つ隔てた藪や林は、心細い響を立て易かつた。お蓮は酒臭い夜着の襟に、冷たい頰を埋めながら、ぢつとその響に聞き入つてゐた。かうしてゐる内に彼女の眼には、何時か淚が一ぱいに漂つて來る事があつた。しかしふだんは重苦しい眠が、それ自身惡夢のやうな眠が、間もなく彼女の心の上へ、昏々と下つて來るのだつた。……

二

「どうしたんですよ？　その傷は。」

或靜かな雨降りの夜、お蓮は牧野の酌をしながら、彼の右の頬へ眼をやつた。其處には青い剃痕の中に、大きな蚯蚓脹が出來てゐた。

「これか？　これは嚊に引つ掻かれたのさ。」

牧野は冗談かと思ふ程、顏色も聲もけろりとしてゐた。

「まあ、嫌な御新造だ。どうして又そんな事をしたんです？」

「どうしてもかうしてもあるものか。御定りの角をはやしたのさ。おれでさへこの位だから、お前なぞが遇つて見ろ。忽ち喉笛へ噛みつかれるぜ。まづ早い話が滿洲犬さ。」

お蓮はくすくす笑ひ出した。

「笑ひ事ぢやないぜ。此處にゐる事が知れた日にや、明日にも押しかけて來ないものぢやない。」

牧野の言葉には思ひの外、眞面目さうな調子も交つてゐた。

「さうしたら、その時の事ですわ。」

「へえゝ、ひどく又度胸が好いな。」

「度胸が好い譯ぢやないんです。私の國の人間は、――」

お蓮は考へ深さうに、長火鉢の炭火へ眼を落した。

「私の國の人間は、みんな諦めが好いんです。」

「ぢやお前は燒かないと云ふ譯か?」

牧野の眼にはちよいとの間、狡猾さうな表情が浮んだ。

「おれの國の人間は、みんな燒くよ。就中おれなんぞは、――」

共處へ婆さんが勝手から、あつらへ物の蒲燒を運んで來た。

その晩牧野は久しぶりに、妾宅へ泊つて行く事になつた。

雨は彼等が床へはひつてから、霙の音に變り出した。お蓮は牧野が寢入つた後、何故か何時までも眠られなかつた。彼女の冴えた眼の底には、見た事のない牧野の妻が、いろいろな姿を浮べたりした。が、彼女は同情は勿論、憎惡も嫉妬も感じなかつた。唯その想像に伴ふのは、多少の

好奇心ばかりだつた。どう云ふ夫婦喧嘩をするのかしら。——お蓮は戸の外の藪や林が、霙にざわめくのを氣にしながら、眞面目にそんな事も考へて見た。

それでも二時を聞いてしまふと、漸く眠氣がきざして來た。——お蓮は何時か大勢の旅客と、薄暗い船室に乘り合つてゐる。圓い窓から外を見ると、黑い波の重なつた向うに、月だか太陽だか判然しない、妙に赤光のする球があつた。乘合ひの連中はどうした譯か、皆影の中に坐つた儘、一人も口を開くものがない。お蓮はだんだんこの沈默が、恐しいやうな氣がし出した。その內に誰かが彼女の後へ、歩み寄つたらしいけはひがする。彼女は思はず振り向いた。すると後には別れた男が、悲しさうな微笑を浮べながら、ぢつと彼女を見下してゐる。……

「金さん。」

お蓮は彼女自身の聲に、明け方の眠から覺まされた。牧野はやはり彼女の隣に、靜かな呼吸を續けてゐた。が、こちらへ背中を向けた彼が、實際寢入つてゐたのかどうか、それはお蓮にはわからなかつた。

三

お蓮に男のあつた事は、牧野も氣がついてはゐたらしかつた。が、彼はさう云ふ事には、頓着する氣色も見せなかつた。又實際男の方でも、牧野が彼女にのぼせ出すと同時に、ぱつたり遠のいてしまつたから、彼が嫉妬を感じなかつたのも、自然と云へば自然だつた。

しかしお蓮の頭の中には、始終男の事があつた。それは戀しいと云ふよりも、もつと殘酷な感情だつた。何故男が彼女の所へ、突然足踏みもしなくなつたか、――その譯が彼女には呑みこめなかつた。勿論お蓮は何度となく、變り易い世間の男心に、一切の原因を見出さうとした。が、男の來なくなつた前後の事情を考へると、あながちさうばかりも、思はれなかつた。と云つて何か男の方に、已むを得ない事情が起つたとしても、それも知らさずに別れるには、彼等二人の間柄は、餘りに深い馴染みだつた。では男の身の上に、不慮の大變でも襲つて來たのか、――お蓮はかう想像するのが、恐しくもあれば望ましくもあつた。……

男の夢を見た二三日後、お蓮は錢湯に行つた歸りに、ふと「身上判斷、玄象道人」と云ふ旗が、

或格子戸造りの家に出してあるのが眼に止まつた。その旗は算木を染め出す代りに、赤い穴錢の形を描いた、餘り見慣れない代物だつた。が、お蓮は其處を通りかゝると、急にこの玄象道人に、男が昨今どうしてゐるか、占つて貰はうと云ふ氣になつた。

案内に應じて通されたのは、日當りの好い座敷だつた。その上主人が風流なのか、支那の書棚だの蘭の鉢だの、煎茶家めいた裝飾があるのも、居心の好い空氣をつくつてゐた。

玄象道人は頭を剃つた、恰幅の好い老人だつた。が、金齒を嵌めてゐたり、卷煙草をすぱすぱやる所は、一向道人らしくもない、下品な風采を具へてゐた。お蓮はこの老人の前に、彼女には去年行方知れずになつた親戚のものが一人ある、その行方を占つて頂きたいと云つた。

すると老人は座敷の隅から、早速二人のまん中へ、紫檀の小机を持ち出した。さうしてその机の上へ、恭しさうに青磁の香爐や金襴の袋を並べ立てた。

「その御親戚は御幾つですな？」

お蓮は男の年を答へた。

「ははあ、まだ御若いな。御若い内は兎角間違ひが起りたがる。手前のやうな老爺になつては、

――

玄象道人はじろりとお蓮を見ると、二三度下びた笑ひ聲を出した。
「御生れ年も御存知かな？　いや、よろしい。卯の一白になります。」
老人は金襴の袋から、穴錢を三枚取り出した。穴錢は皆一枚づつ、薄赤い絹に包んであつた。
「私の占ひは擲錢卜と云ひます。擲錢卜は昔漢の京房が、始めて筮に代へて行つたとある。御承知でもあらうが、筮と云ふ物は、一爻に三變の次第があり、一卦に十八變の法があるから、容易に吉凶を判じ難い。其處はこの擲錢卜の長所でな、……」
さう云ふ内に香爐からは、道人の燻べた香の煙が、明い座敷の中に上り始めた。

四

道人は薄赤い絹を解いて、香爐の煙に一枚づつ、中の穴錢を燻じた後、今度は床に懸けた軸の前へ、丁寧に圓い頭を下げた。軸は狩野派が描いたらしい、伏羲文王周公孔子の四大聖人の畫像だつた。

「惟皇たる上帝、宇宙の神聖、この寶香を聞いて、願くは降臨を賜へ。——猶豫未だ決せず、疑ふ所は神靈に質す。請ふ、皐愍を垂れて、速に吉凶を示し給へ。」

そんな祭文が終つてから、道人は紫檀の小机の上へ、ぱらりと三枚の穴錢を撒いた。穴錢は一枚は文字が出たが、跡の二枚は波の方だつた。道人はすぐに筆を執つて、巻紙にその順序を寫した。

錢を擲げては陰陽を定める、——それが丁度六度續いた。お蓮はその穴錢の順序へ、心配さうな眼を注いでゐた。

「さて——と。」

擲錢が終つた時、老人は巻紙を眺めた儘、少時は唯考へてゐた。

「これは雷水解と云ふ卦でな、諸事思ふやうにはならぬとあります。——」

お蓮は怯づ怯づ三枚の錢から、老人の顏へ視線を移した。

「まづその御親戚とかの若い方にも、二度と御遇ひにはなれさうもないな。」

玄象道人はかう云ひながら、又穴錢を一枚づつ、薄赤い絹に包み始めた。

「では生きては居りませんのでせうか？」

お蓮は聲が震へるのを感じた。「やはりさうか」と云ふ氣もちが、「そんな筈はない」と云ふ氣もちと一しよに、思はず聲へ出たのだつた。

「生きてゐられるか、死んでゐられるかそれはちと判じ惡いが、――兎に角御遇ひにはなれぬものと御思ひなさい。」

「どうしても遇へないでございませうか？」

お蓮に駄目を押された道人は、金襴の袋の口をしめると、脂ぎつた頬のあたりに、ちらりと皮肉らしい表情が浮んだ。

「滄桑の變と云ふ事もある。この東京が森や林にでもなつたら、御遇ひになれぬ事もありますまい。――とまづ、卦にはな、卦にはちやんと出てゐます。」

お蓮は此處へ來た時よりも、一層心細い氣になりながら、高い見料を拂つた後、匆匆家へ歸つて來た。

その晩彼女は長火鉢の前に、ぼんやり頬杖をついたなり、鐵瓶の鳴る音に聞き入つてゐた。玄

象道人の占ひは、結局何の解釋をも與へてくれないのと同樣だつた。いや、寧ろ積極的に、彼女が密かに抱いてゐた希望、――たとひ如何にはかなくとも、やはり希望には違ひない、萬一を期する心もちを打ち碎いたのも同樣だつた。男は道人がほのめかせたやうに、實際生きてゐないのであらうか？　さう云へば彼女が住んでゐた町も、當時は物騷な最中だつた。男はお蓮のゐる家へ、不相變通つて來る途中、何か間違ひに遇つたのかも知れない。さもなければ忘れたやうに、ふつつり來なくなつてしまつたのは、――お蓮は白粉を刷いた片頰に、炭火の火照りを感じながら、何時か火箸を弄んでゐる彼女自身を見出した。

「金、金、金、――」

灰の上にはさう云ふ字が、何度も書かれたり消されたりした。

五

「金、金、金、」

さうお蓮が書き續けてゐると、臺所にゐた雇婆さんが、突然かすかな叫び聲を洩らした。この

家では臺所と云つても、障子一重開けさへすれば、すぐに其處が板の間だつた。

「何？　婆や。」

「まあ御新さん。いらしつて御覽なさい。ほんたうに何だと思つたら、――」

お蓮は臺所へ出て行つて見た。

竈が幅をとつた板の間には、障子に映るランプの光が、物靜かな薄暗をつくつてゐた。婆さんはその薄暗の中に、半天の腰を屈めながら、丁度今何か白い獸を抱き上げてゐる所だつた。

「猫かい？」

「いえ、犬でございますよ。」

兩袖を胸に合せたお蓮は、ぢつとその犬を覗きこんだ。犬は婆さんに抱かれた儘、水々しい眼を動かしては、頻に鼻を鳴らしてゐる。

「これは今朝程五味溜めの所に、啼いてゐた犬でございますよ。――どうしてはひつて參りましたかしら。」

「お前はちつとも知らなかつたの？」

「はい、その癖此處にさつきから、御茶碗を洗つて居りましたんですが――やつぱり人間眼の惡いと申す事は、仕方のないもんでございますね。」

婆さんは水口の腰障子を開けると、暗い外へ小犬を捨てようとした。

「まあ御待ち、ちよいと私も抱いて見たいから、――」

「御止しなさいましよ。御召しでもよごれるといけません。」

お蓮は婆さんの止めるのも聞かず、兩手にその犬を抱きとつた。犬は彼女の手の內に、ぶるぶる體を震はせてゐた。それが一瞬間過去の世界へ、彼女の心をつれて行つた。お蓮はあの賑かな家にゐた時、客の來ない夜は一しよに寢る、白い小犬を飼つてゐたのだつた。

「可哀さうに、――飼つてやらうかしら。」

婆さんは妙な瞬きをした。

「ねえ、婆や。飼つてやらうよ。お前に面倒はかけないから、――」

お蓮は犬を板の間へ下すと、無邪氣な笑顏を見せながら、もう肴でも探してやる氣か、臺所の戶棚に手をかけてゐた。

その翌日から妾宅には、赤い頸環に飾られた犬が、疊の上にゐるやうになつた。

綺麗好きな婆さんは、勿論この變化を悦ばなかつた。殊に庭へ下りた犬が、泥足の儘上つて來なぞすると、一日腹を立ててゐる事もあつた。が、外に仕事のないお蓮は、子供のやうに犬を可愛がつた。食事の時にも膳の側には、必ず犬が控へてゐた。夜は又彼女の夜着の裾に、まろまろ寢てゐる犬を見るのが、文字通り毎夜の事だつた。

「その時分から私は、嫌だ嫌だと思つてゐましたよ。何しろ薄暗いランプの光に、あの白犬が御新造の寢顏をしげしげ見てゐた事もあつたんですから、――」

婆さんが彼是一年の後、私の友人のKと云ふ醫者に、こんな事も話して聞かせたさうである。

六

この小犬に惱まされたものは、雇婆さん一人ではなかつた。牧野も犬が疊の上に、寢そべつてゐるのを見た時には、不快さうに太い眉をひそめた。

「何だい、こいつは？――畜生。あつちへ行け。」

陸軍主計の軍服を着た牧野は、邪慳に犬を足蹴にした。犬は彼が座敷へ通ると、白い背中の毛を逆立てながら、無性に吠え立て始めたのだつた。

「お前の犬好きにも呆れるぜ。」

晩酌の膳に就いてからも、牧野はまだ忌々しさうに、じろじろ犬を眺めてゐた。

「前にもこの位なやつを飼つてゐたぢやないか？」

「えゝ、あれもやつぱり白犬でしたわ。」

「さう云へばお前があの犬と、何でも別れないと云ひ出したのにや、隨分手こずらされたものだつたけ。」

お蓮は膝の小犬を撫でながら、仕方なささうな微笑を洩らした。汽船や汽車の旅を續けるのに、犬を連れて行く事が面倒なのは、彼女にもよくわかつてゐた。が、男とも別れた今、その白犬を後に殘して、見ず知らずの他國へ行くのは、どう考へて見ても寂しかつた。だから愈立つと云ふ前夜、彼女は犬を抱き上げては、その鼻に頰をすりつけながら、何度も止めどない啜り泣きを呑みこみ呑みこみしたものだつた。……………

「あの犬は中々利巧だつたが、こいつはどうも莫迦らしいな。第一人相が、——人相ぢやない。犬相だが、——犬相が甚だ平凡だよ。」

もう醉のまはつた牧野は、初めの不快も忘れたやうに、刺身なぞを犬に投げてやつた。

「あら、あの犬によく似てゐるぢやありませんか？　違ふのは鼻の色だけですわ。」

「何、鼻の色が違ふ？　妙な所が又違つたものだな。」

「この犬は鼻が黒いでせう。あの犬は鼻が赭うござんしたよ。」

お蓮は牧野の酌をしながら、前に飼つてゐた犬の鼻が、はつきり眼の前に見えるやうな氣がした。それは始終涎に濡れた、丁度子持ちの乳房のやうに、鳶色の斑がある鼻づらだつた。

「へええ、して見ると鼻の赭い方が、犬では美人の相なのかも知れない。」

「美男ですよ、あの犬は。これは黒いから、醜男ですわね。」

「男かい、二匹とも。此處の家へ來る男は、おればかりかと思つたが、——こりやちと怪しからんな。」

牧野はお蓮の手を突つきながら、彼一人上機嫌に笑ひ崩れた。

しかし牧野は何時までも、その景氣を保つてゐられなかつた。犬は彼等が床へはひると、古襖一重隔てた向ふに、何度も悲しさうな聲を立てた。のみならずしまひには其襖へ、がりがり前足の爪をかけた。牧野は深夜のランプの光に、妙な苦笑を浮べながら、とうとうお蓮へ聲をかけた。

「おい、其處を開けてやれよ。」

が、彼女が襖を開けると、犬は存外ゆつくりと、二人の枕もとへはひつて來た。さうして白い影のやうに、其處へ腹を落着けたなり、ぢつと彼等を眺め出した。

お蓮は何だかその眼つきが、人のやうな氣がしてならなかつた。

七

それから二三日經つた或夜、お蓮は本宅を抜けて來た牧野と、近所の寄席へ出かけて行つた。手品、劍舞、幻燈、大神樂――さう云ふ物ばかりかゝつてゐた寄席は、身動きも出來ない程大入りだつた。二人は少時待たされた後、やつと高座には遠い所へ、窮屈な腰を下す事が出來た。彼等が其處へ坐つた時、あたりの客は云ひ合はせたやうに、丸髷に結つたお蓮の姿へ、物珍しさ

うな視線を送つた。彼女にはそれが晴がましくもあれば、同時に又何故か寂しくもあつた。

高座には明るい吊ランプの下に、白い鉢卷をした男が、長い拔き身を振りまはしてゐた。さうして樂屋からは朗々と、「踏み破る千山萬岳の煙」とか云ふ、詩をうたふ聲が起つてゐた。お蓮にはその劍舞は勿論、詩吟も退屈なばかりだつた。が、牧野は卷煙草へ火をつけながら、面白さうにそれを眺めてゐた。

劍舞の次は幻燈だつた。高座に下した幕の上には、日淸戰爭の光景が、いろいろ映つたり消えたりした。大きな水柱を揚げながら、「定遠」の沈沒する所もあつた。敵の赤兒を抱いた樋口大尉が、突擊を指揮する所もあつた。大勢の客はその畫の中に、たまたま日章旗が現れなぞすると、必ず盛な喝采を送つた。中には「帝國萬歲」と、頓狂な聲を出すものもあつた。しかし實戰に臨んで來た牧野は、さう云ふ連中とは沒交涉に、唯にやにやと笑つてゐた。

「戰爭もあの通りだと、樂なもんだが、――」

彼は牛莊の激戰の畫を見ながら、半ば近所へも聞かせるやうに、かうお蓮へ話しかけた。が、彼女は不相變、熱心に幕へ眼をやつた儘、かすかに頷いたばかりだつた。それは勿論どんな畫で

も、幻燈が珍しい彼女にとつては、興味があつたのに違ひなかつた。しかしその外にも畫面の景色は、——雪の積つた城樓の屋根だの、枯柳に繋いだ兎馬だの、辮髮を垂れた支那兵だのは、特に彼女を動かすべき理由も持つてゐたのだつた。

寄席がはねたのは十時だつた。二人は肩を並べながら、しいしいまうた家ばかり續いてゐる、人氣のない町を歩いて來た。町の上には半輪の月が、霜の下りた家々の屋根へ、寒い光を流してゐた。牧野はその光の中へ、時々卷煙草の煙を吹いては、さつきの劍舞でも頭にあるのか、

「鞭聲肅々夜河を渡る」なぞと、古臭い詩の句を微吟したりした。

所が横町を一つ曲ると、突然お蓮は慴えたやうに、牧野の外套の袖を引いた。

「びつくりさせるぜ。何だ？」

彼はまだ足を止めずに、お蓮の方を振り返つた。

「誰か呼んでゐるやうですもの。」

お蓮は彼に寄り添ひながら、氣味の惡さうな眼つきをしてゐた。

「呼んでゐる？」

牧野は思はず足を止めると、ちよいと耳を澄ませて見た。が、寂しい往來には、犬の吠える聲さへ聞えなかつた。

「空耳だよ。何が呼んでなんぞゐるものか。」

「氣のせゐですかしら。」

「あんな幻燈を見たからぢやないか？」

八

寄席へ行つた翌朝だつた。お蓮は房楊枝を啣へながら、顏を洗ひに縁側へ行つた。縁側にはもう何時もの通り、銅の耳盥に湯を汲んだのが、鉢前の前に置いてあつた。

冬枯の庭は寂しかつた。庭の向うに續いた景色も、曇天を映した川の水と一しよに、荒涼を極めたものだつた。が、その景色が眼にはひると　お蓮は嗽ひを使ひながら、今までは全然忘れてゐた昨夜の夢を思ひ出した。

それは彼女がたつた一人、暗い藪だか林だかの中を歩き廻つてゐる夢だつた。彼女は細い路を

辿りながら、「とうとう私の念力が屆いた。東京はもう見渡す限り、人氣のない森に變つてゐる。きつと今に金さんにも、遇ふ事が出來るのに違ひない。」――そんな事を思ひ續けてゐた。すると少時歩いてゐる内に、大砲の音や小銃の音が、何處とも知らず聞え出した。と同時に木々の空が、まるで火事でも映すやうに、だんだん赤濁りを帶び始めた。「戰爭だ。戰爭だ。」――彼女はさう思ひながら、一生懸命に走らうとした。が、いくら氣負つて見ても、何故か一向走れなかつた。……

……お蓮は顏を洗つてしまふと、手水を使ふ爲に肌を脱いだ。その時何か冷たい物が、べたりと彼女の背中に觸れた。

「しつ！」

彼女は格別驚きもせず、艶いた眼を後へ投げた。其處には小犬が尾を振りながら、頻に黑い鼻を舐め廻してゐた。

九

牧野はその後二三日すると、何時もより早めに妾宅へ、田宮と云ふ男と遊びに來た。或有名な御用商人の店へ、番頭格に通つてゐる田宮は、お蓮が牧野に圍はれるのに就いても、いろいろ世話をしてくれた人物だつた。

「妙なもんぢやないか？　かうやつて丸髷に結つてゐると、どうしても昔のお蓮さんとは見えない。」

田宮は明いランプの光に、薄痘痕のある顏を火照らせながら、向ひ合つた牧野へ盃をさした。

「ねえ、牧野さん。これが島田に結つてゐたとか、赤熊に結つてゐたとか云ふんなら、かうも違つちや見えまいがね、何しろ以前が以前だから、――」

「おい、おい、此處の婆さんは眼は少し惡いやうだが、耳は遠くもないんだからね。」

牧野はさう注意はしても、嬉しさうににやにや笑つてゐた。

「大丈夫。聞えた所がわかるもんか。――ねえ、お蓮さん。あの時分の事を考へると、まるで夢のやうぢやありませんか。」

お蓮は眼を外らせた儘、膝の上の小犬にからかつてゐた。

「私も牧野さんに賴まれたから、一度は引き受けて見たやうなものの、萬一ばれた日にや大事だと、無事に神戸へ上がるまでにや、隨分これでも氣を揉みましたぜ。」
「へん、さう云ふ危い橋なら、渡りつけてゐるだらうに、――」
「冗談云つちやいけない。人間の密輸入はまだ一度ぎりだ。」
田宮は一盃ぐいとやりながら、わざとらしい澁面をつくつて見せた。
「だがお蓮の今日あるを得たのは、實際君のおかげだよ。」
牧野は太い腕を伸ばして、田宮へ猪口をさしつけた。
「さう云はれると恐れ入るが、兎に角あの時は弱つたよ。おまけに又乘つた船が、丁度玄海へかかつたとなると、恐ろしいしけを食つてね。――ねえ、お蓮さん。」
「えゝ、私はもう船も何も、沈んでしまふかと思ひましたよ。」
お蓮は田宮の酌をしながら、やつと話に調子を合はせた。が、あの船が沈んでゐたら、今よりは反つて益しかも知れない。――そんな事もふと考へられた。
「それがまあかうしてゐられるんだから、御互様に仕合せでさあ。――だがね、牧野さん。お蓮

さんに丸髷が似合ふやうになると、もう一度又昔のなりに、返らせて見たい氣もしやしないか？」
「返らせたかつた所が、仕方がないぢやないか？」
「ないがさ、――ないと云へば昔の着物は、一つもこつちへは持つて來なかつたかい？」
「着物所か櫛簪までも、ちやんと御持參になつてゐる。いくら僕が止せと云つても、一向御取上げにならなかつたんだから、――」
牧野はちらりと長火鉢越しに、お蓮の顔へ眼を送つた。お蓮はその言葉も聞えないやうに、鐵瓶のぬるんだのを氣にしてゐた。
「そいつは猶更好都合だ。――どうです？　お蓮さん。その内に一つなりを變へて、御酌を願はうぢやありませんか？」
「さうして君も序ながら、昔馴染を一人思ひ出すか。」
「さあ、その昔馴染みと云ふやつがね、お蓮さんのやうに好縹緻だと、思ひ出し甲斐もあると云ふものだが、……」
田宮は薄痘痕のある顔に、擽つたさうな笑ひを浮べながら、すり芋を箸に搦んでゐた。……

その晩田宮が歸つてから、牧野は何も知らなかつたお蓮に、近々陸軍を止め次第、商人になると云ふ話をした。辭職の許可が出さへすれば、田宮が今使はれてゐる、或名高い御用商人が、すぐに高給で抱へてくれる、――何でもさう云ふ話だつた。

「さうすりや此處にゐなくとも好いから、何處か手廣い家へ引つ越さうぢやないか？」

牧野はさも疲れたやうに、火鉢の前へ寢ころんだ儘、田宮が土産に持つて來たマニラの葉卷を吹かしてゐた。

「この家だつて澤山ですよ。婆やと私と二人ぎりですもの。」

お蓮は意地のきたない犬へ、殘り物を當てがふのに忙しかつた。

「さうなつたら、おれも一しよにゐるさ。」

「だつて御新造がゐるぢやありませんか？」

「嚊かい？　嚊とも近々別れる筈だよ。」

牧野の口調や顏色では、この意外な消息も、滿更冗談とは思はれなかつた。

「あんまり罪な事をするのは御止しなさいよ。」

「かまふものか。己に出て己に返るさ。おれの方ばかり惡いんぢやない。」

牧野は險しい眼をしながら、やけに葉卷をすぱすぱやつた。お蓮は寂しい顏をしたなり、少時は何とも答へなかつた。

十

「あの白犬が病みついたのは、――さうさう、田宮の旦那が御見えになつた、丁度その明くる日ですよ。」

お蓮に使はれてゐた婆さんは、私の友人のKと云ふ醫者に、かう當時の容子を話した。

「大方食中りか何かだつたんでせう。始は毎日長火鉢の前に、ぼんやり寢てゐるばかりでしたが、その内に時々どうかすると、疊をよごすやうになつたんです。御新造は何しろ子供のやうに、可愛がつていらしつた犬ですから、わざわざ牛乳を取つてやつたり、寶丹を口へ啣ませてやつたり、隨分大事になさいました。それに不思議はないんです。ないんですが、嫌ぢやありませんか？犬の病氣が惡くなると、御新造が犬と話をなさるのも、だんだん珍しくなくなつたんです。

「そりや話をなさると云つても、つまりは御新造が犬を相手に、長々と獨り語を仰有るんですが、夜更けにでもその聲が聞えて御覽なさい。何だか犬も人間のやうに、口を利いてゐさうな氣がして、あんまり好い氣はしないもんですよ。それでなくつても一度なぞは、或かう、風のひどかつた日に、御使ひに行つて歸つて來ると、――その御使ひも近所の占ひ者の所へ、犬の病氣を見て貰ひに行つたんですが、――御使ひに行つて歸つて來ると、障子のがたがた云ふ御座敷に、御新造の話し聲が聞えるんでせう。こりや旦那樣でもいらしつたかと思つて、障子の隙間から覗いて見ると、やつぱり其處にはたつた一人、御新造がいらつしやるだけなんです。おまけに風に吹かれた雲が、御日樣の前を飛ぶからですが、膝へ犬をのせた御新造の姿が、しつきりなしに明るくなつたり暗くなつたりするぢやありませんか？　あんなに氣味の惡かつた事は、この年になつてもまだ二度とは、出つくはした覺えがない位ですよ。

「ですから犬が死んだ時には、そりや御新造には御氣の毒でしたが、こちらは内々ほつとしたもんです。尤もそれが嬉しかつたのは、犬が粗匆をする度に、掃除をしなければならなかつた私ばかりぢやありません。旦那樣もその事を御聞きになると、厄介拂ひをしたと云ふやうに、にやに

や笑つて御出でになりました。犬ですか？　犬は何でも、御新造はもとより、私もまだ起きない内に、鏡臺の前へ仆れた儘、青い物を吐いて死んでゐたんです。氣がなささうに長火鉢の前に、寢てばかりゐるやうになつてから、彼是半月にもなりましたかしら。……」

丁度藥研堀の市の立つ日、お蓮は大きな鏡臺の前に、息の絕えた犬を見出した。犬は婆さんが話した通り、靑い吐物の流れた中に、冷たい體を橫たへてゐた。これは彼女もとうの昔に、覺悟をきめてゐた事だつた。前の犬には生別れをしたが、今度の犬には死別れをした。所詮犬は飼へないのが、持つて生まれた因緣かも知れない。——そんな事が唯彼女の心へ、絕望的な靜かさをのしかゝらせたばかりだつた。

お蓮は其處へ坐つたなり、茫然と犬の屍骸を眺めた。それから懶い眼を擧げて、寒い鏡の面を眺めた。鏡には疊に仆れた犬が、彼女と一しよに映つてゐた。その犬の影をぢつと見ると、お蓮は目まひでも起つたやうに、突然兩手に顏を掩つた。さうしてかすかな叫び聲を洩らした。

鏡の中の犬の屍骸は、何時か黑かるべき鼻の先が、赭い色に變つてゐたのだつた。

十一

妾宅の新年は寂しかつた。門には竹が立てられたり、座敷には蓬萊が飾られたりしても、お蓮は獨り長火鉢の前に、屈托らしい頰杖をついては、障子の日影が薄くなるのに、懶い眼ばかり注いでゐた。

暮に犬に死なれて以來、唯でさへ浮かない彼女の心は、ややともすると發作的な憂鬱に襲はれ易かつた。彼女は犬の事ばかりか、未にわからない男の在りかや、どうかすると顏さへ知らない、牧野の妻の身の上までも、いろいろ思ひ惱んだりした。と同時に又その頃から、折々妙な幻覺にも、惱まされるやうになり始めた。――

或時は床へはひつた彼女が、やつと眠に就かうとすると、突然何かがのつたやうに、夜着の裾がじはりと重くなつた。小犬はまだ生きてゐた時分、彼女の蒲團の上へ來ては、よくごろりと横になつた。――丁度それと同じやうに、柔かな重みがかかつたのだつた。お蓮はすぐに枕から、そつと頭を浮かせて見た。が、其處には搔卷の格子模樣が、ランプの光に浮んでゐる外には、何物

もゐるとは思はれなかつた。……

又或時は鏡臺の前に、お蓮が髪を直してゐると、鏡へ映つた彼女の後を、ちらりと白い物が通つた。彼女はそれでも氣をとめずに、水々しい鬢を掻き上げてゐた。すると其白い物は、前とは反對の方向へ、もう一度咄嗟に通り過ぎた。お蓮は櫛を持つた儘、とうとう後を振り返つた。しかし明い座敷の中には、何も生き物のけはひはなかつた。やつぱり眼のせゐだつたかしら、――さう思ひながら、鏡へ向ふと、少時の後白い物は、三度彼女の後を通つた。……

又或時は長火鉢の前に、お蓮が獨り坐つてゐると、遠い外の往來に、彼女の名を呼ぶ聲が聞えた。それは門の竹の葉が、ざはめく音に交りながら、たつた一度聞えたのだつた。が、その聲は東京へ來ても、始終心にかかつてゐた男の聲に違ひなかつた。お蓮は息をひそめるやうに、ぢつと注意深い耳を澄ませた。その時又往來に、今度は前よりも近々と、なつかしい男の聲が聞えた。と思ふと何時の間にか、それは風に吹き散らされる犬の聲に變つてゐた。……

又或時はふと眼がさめると、彼女と一つ床の中に、ゐない筈の男が眠つてゐた。迫つた額、長い睫毛、――すべてが夜半のランプの光に、寸分も以前と變らなかつた。左の眼尻に黒子があつ

たが、――そんな事さへ檢べて見ても、やはり確に男だつた。お蓮は不思議に思ふよりは、嬉しさに心を躍らせながら、その儘體も消え入るやうに、男の頸へすがりついた。しかし眠を破られた男が、うるささうに何か呟いた聲は、意外にも牧野に違ひなかつた。のみならずお蓮はその刹那に、實際酒臭い牧野の頸へ、しつかり兩手をからんでゐる彼女自身を見出したのだつた。

しかしさう云ふ幻覺の外にも、お蓮の心を擾すやうな事件は、現實の世界からも起つて來た。と云ふのは松もとれない内に、噂に聞いてゐた牧野の妻が、突然訪ねて來た事だつた。

十二

牧野の妻が訪れたのは、生憎例の雇婆さんが、使ひに行つてゐる留守だつた。案内を請ふ聲に驚かされたお蓮は、やむを得ず氣のない體を起して、薄暗い玄關へ出かけて行つた。すると北向きの格子戸が、軒さきの御飾りを透せてゐる、――其處にひどく顏色の惡い、眼鏡をかけた女が一人、餘り新しくない肩掛をした儘、俯向き勝に佇んでゐた。

「どなた樣でございますか？」

お蓮はさう尋ねながら、相手の正體を直覺してゐた。さうしてこの根の拔けた丸髷に、小紋の羽織の袖を合せた、何處か影の薄い女の顏へ、ぢつと眼を注いでゐた。

「私は――」

女はちよいとためらつた後、やはり俯向き勝に話し續けた。

「私は牧野の家内でございます。瀧と云ふものでございます。」

今度はお蓮が口ごもつた。

「さやうでございますか。私は――」

「いえ、それはもう存じて居ります。牧野が始終御世話になりますさうで、私からも御禮を申し上げます。」

女の言葉は穩だつた。皮肉らしい調子なぞは、不思議な程罩つてゐなかつた。それだけ又お蓮は何と云つて好いか、挨拶のしやうに困るのだつた。

「就きましては今日は御年始かたがた、ちと御願ひがあつて參りましたんですが、――」

「何でございますか、私に出來る事でございましたら――」

まだ油斷をしなかつたお蓮は、略その「御願ひ」もわかりさうな氣がした。と同時にそれを切り出された場合、答ふべき文句も多さうな氣がした。しかし伏目勝ちな牧野の妻が、靜に述べ始めた言葉を聞くと、彼女の豫想は根本から、間違つてゐた事が明かになつた。

「いえ、御願ひと申しました所が、大した事でもございませんが、——實は近々に東京中が、森になるさうでございますから、その節はどうか牧野同樣、私も御宅へ御置き下さいまし。御願ひと云ふのはこれだけでございます。」

相手はゆつくりこんな事を云つた。その容子はまるで彼女の言葉が、如何に氣違ひじみてゐるかも、全然氣づいてゐないやうだつた。お蓮は呆氣にとられたなり、少時は唯外光に背いた、この陰氣な女の姿を見つめてゐるより外はなかつた。

「如何でございませう？　置いて頂けませうか？」

お蓮は舌が剛ばつたやうに、何とも返事が出來なかつた。何時か顏を擡げた相手は、細々と冷たい眼を開きながら、眼鏡越しに彼女を見つめてゐる、——それが猶更お蓮には、すべてが一場の惡夢のやうな、氣味の惡い心地を起させるのだつた。

「私はもとよりどうなつても、かまはない體でございますが、萬一路頭に迷ふやうな事がありましては、二人の子供が可哀さうでございます。どうか御面倒でもあなたの御宅へ、お置きなすつて下さいまし。」

牧野の妻はかう云ふと、古びた肩掛に顔を隠しながら、突然しくしく泣き始めた。すると何故か默つてゐたお蓮も、急に悲しい氣がして來た。やつと金さんにも遇へる時が來たのだ、嬉しい。嬉しい。――彼女はさう思ひながら、それでも春着の膝の上へ、やはり涙を落してゐる彼女自身を見出したのだつた。

が、何分か過ぎ去つた後、お蓮がふと氣がついて見ると、薄暗い北向きの玄關には、何時の間に相手は歸つたのか、誰も人影が見えなかつた。

十三

七草の夜、牧野が妾宅へやつて來ると、お蓮は早速彼の妻が、訪ねて來たいきさつを話して聞かせた。が、牧野は案外平然と、彼女に耳を借した儘、マニラの葉卷ばかり燻らせてゐた。

「御新造はどうかしてゐるんですよ。」

何時か興奮し出したお蓮は、苛立たしい眉をひそめながら、剛情に猶も云ひ續けた。

「今の内に何とかして上げないと、取り返しのつかない事になりますよ。」

「まあ、なつたらなつた時の事さ。」

牧野は葉巻の煙の中から、薄眼に彼女を眺めてゐた。

「嗅の事なんぞを案じるよりや、お前こそ體に氣をつけるが好い。何だかこの頃は何時來て見ても、ふさいでばかりゐるぢやないか？」

「私はどうなつても好いんですけれど、――」

「好くはないよ。」

お蓮は顏を曇らせたなり、少時は口を噤んでゐた。が、突然涙ぐんだ眼を擧げると、

「あなた、後生ですから、御新造を捨てないで下さい。」と云つた。

牧野は呆氣にとられたのか、何とも答を返さなかつた。

「後生ですから、ねえ、あなた――」

お蓮は涙を隠すやうに、黒繻子の襟へ顎を埋めた。
「御新造は世の中にあなた一人が、何よりも大事なんですもの。それを考へて上げなくつちや、薄情すぎると云ふもんですよ。私の國でも女と云ふものは、――」
「好いよ。好いよ。お前の云ふ事はよくわかつたから、そんな心配なんぞはしない方が好いよ。」
葉巻を吸ふのも忘れた牧野は、子供を欺すやうにかう云つた。
「一體この家が陰氣だからね、――さうさう、この間は又犬が死んだりしてゐる。だからお前も氣がふさぐんだ。その内に何處か好い所があつたら、早速引越してしまはうぢやないか？　さうして陽氣に暮すんだね、――何、もう十日も經ちさへすりや、おれは役人をやめてしまふんだから、――」
お蓮は殆その晩中、いくら牧野が慰めても、浮かない顔色を改めなかつた。……
「御新造の事では旦那様も、隨分御心配なすつたもんですが、――」
Kにいろいろ尋かれた時、婆さんは又當時の容子をかう話したとか云ふ事だつた。
「何しろ今度の御病氣は、あの時分にもうきざしてゐたんですから、やつぱりまあ旦那様始め、

御諦めになる外はありますまい。現に本宅の御新造が、不意に横網へ御出でなすつた時でも、私が御使ひから歸つて見ると、こちらの御新造は御玄關先へ、ぼんやりと唯坐つていらつしやる、――それを眼鏡越しに睨みながら、あちらの御新造は又上らうともなさらず、惡丁寧な嫌味のありつたけを並べて御出でなさる始末なんです。

「そりや御主人が毒づかれるのは、蔭で聞いてゐる私にも、好い氣のするもんぢやありません。けれども私が其處へ出ると、餘計事がむづかしいんです。――と云ふのは私も四五年前には、御本宅に使はれてゐたもんですから、あちらの御新造に見つかつたが最後、反つて先樣の御腹立ちを煽る事になるかも知れますまい。そんな事があつては大變ですから、私は御本宅の御新造が、さんざん惡態を御つきになつた揚句、御歸りになつてしまふまでは、とうとう御玄關の襖の陰から、顏を出さずにしまひました。

「所がこちらの御新造は、私の顏を御覽になると、『婆や、今し方御新造が御見えなすつたよ。私なんぞの所へ來ても、嫌味一つ云はないんだから、あれがほんたうの結構人だらうね。』と、から仰有るぢやありませんか？　さうかと思ふと笑ひながら、『何でも近々に東京中が、森になるつて

云つてゐたつけ。可哀さうにあの人は、氣が少し變なんだよ。』と、そんな事さへ仰有るんですよ。

……」

十四

しかしお蓮の憂鬱は、二月にはひつて間もない頃、やはり本所の松井町にある、手廣い二階家へ住むやうになつても、不相變晴れさうな氣色はなかつた。彼女は婆さんとも口を利かず、大抵は茶の間にたつた一人、鐵瓶のたぎりを聞き暮してゐた。

すると其處へ移つてから、まだ一週間も經たない或夜、もう何處かで飲んだ田宮が、ふらりと妾宅へ遊びに來た。丁度一杯始めてゐた牧野は、この飲み仲間の顏を見ると、早速手にあつた猪口をさした。田宮はその猪口を貰ふ前に、襯衣を覗かせた懷から、赤い罐詰を一つ出した。さうしてお蓮の酌を受けながら、

「これは御土産です。お蓮夫人。これはあなたへ御土産です。」と云つた。

「何だい、これは？」

牧野はお蓮が禮を云ふ間に、その罐詰を取り上げて見た。

「貼紙を見給へ。膃肭獸だよ。膃肭獸の罐詰さ。――あなたは氣のふさぐのが病だつて云ふから、これを一つ獻上します。産前、産後、婦人病一切によろしい。――これは僕の友だちに聞いた能書きだがね、そいつがやり始めた罐詰だよ。」

田宮は脣を嘗めまはしては、彼等二人を見比べてゐた。

「食へるかい、お前、膃肭獸なんぞが？」

お蓮は牧野にかう云はれても、無理にちよいと口元へ、微笑を見せたばかりだつた。が、田宮は手を振りながら、すぐにその答へを引き受けた。

「大丈夫。大丈夫だとも。――ねえ、お蓮さん。この膃肭獸と云ふやつは、牡が一匹ゐる所には、牝が百匹もくつついてゐる。まあ人間にすると、牧野さんと云ふ所です。さう云へば顏も似てゐますな。だからです。だから一つ牧野さんだと思つて、――可愛い牧野さんだと思つて御上んなさい。」

「何を云つてゐるんだ。」

牧野はやむを得ず苦笑した。
「牡が一匹ゐる所に、――ねえ、牧野さん、君によく似てゐるだらう。」
田宮は薄痘痕のある顔に、一ぱいの笑ひを浮べたなり、委細かまはずしやべり續けた。
「今日僕の友だちに、――この罐詰屋に聞いたんだが、膃肭獸と云ふやつは、牡同志が牝を取り合ふと、――さうさう、膃肭獸の話よりや、今夜は一つお蓮さんに、昔のなりを見せて貰ふんだつた。どうです？　お蓮さん。今こそお蓮さんなんぞと云つてゐるが、お蓮さんとは世を忍ぶ假の名さ。此處は一番音羽屋で行きたいね。お蓮さんとは――」
「おい、おい、牝を取り合ふとどうするんだ？　その方をまづ伺ひたいね。」
迷惑らしい顔をした牧野は、やつともう一度膃肭獸の話へ、危險な話題を一轉させた。が、その結果は必ずしも、彼が希望してゐたやうな、都合の好いものではなささうだつた。
「牝を取り合ふとか？　牝を取り合ふと、大喧嘩をするんださうだ。その代りだね、その代り正正堂々とやる。君のやうに暗打ちなんぞは食はせない。いや、こりや失禮。禁句禁句金看板の甚九郎だつけ。――お蓮さん。一つ、獻じませう。」

田宮は色を變へた牧野に、ちらりと顏を睨まれると、てれ隱しにお蓮へ盃をさした。しかしお蓮は無氣味な程、ぢつと彼を見つめたぎり、手も出さうとはしなかつた。

十五

お蓮が床を拔け出したのは、その夜の三時過ぎだつた。彼女は二階の寢間を後に、そつと暗い梯子を下りると、手さぐりに鏡臺の前へ行つた。さうしてその抽斗から、剃刀の箱を取り出した。

「牧野め。牧野の畜生め。」

お蓮はさう呟きながら、靜に箱の中の物を拔いた。その拍子に剃刀の匂が、磨ぎ澄ました鋼の匂が、かすかに彼女の鼻を打つた。

何時か彼女の心の中には、狂暴な野性が動いてゐた。それは彼女が身を賣るまでに、邪慳な繼母との爭ひから、荒む儘に任せた野性だつた。白粉が地肌を隱したやうに、この數年間の生活が押し隱してゐた野性だつた。………

「牧野め。鬼め。二度の日の目は見せないから、――」

お蓮は派手な長襦袢の袖に、一挺の剃刀を蔽つたなり、鏡臺の前に立ち上つた。

すると突然かすかな聲が、何處からか彼女の耳へはいつた。

「御止し。御止し。」

彼女は思はず息を呑んだ。が、聲だと思つたのは、時計の振子が暗い中に、秒を刻んでゐる音らしかつた。

「御止し。御止し。御止し。」

しかし梯子を上りかけると、聲はもう一度お蓮を捉へた。彼女は其處へ立ち止りながら、茶の間の暗闇を透かして見た。

「誰だい？」

「私。私だ。私。」

聲は彼女と仲が好かつた、朋輩の一人に違ひなかつた。

「一枝さんかい？」

「ああ、私。」

「久しぶりだねえ。お前さんは今何處にゐるの？」
お蓮は何時か長火鉢の前へ、晝間のやうに坐つてゐた。
「御止し。御止しよ。」
聲は彼女の問に答へず、何度も同じ事を繰返すのだつた。
「何故又お前さんまでが止めるのさ？　殺したつて好いぢやないか？」
「お止し。生きてゐるもの。生きてゐるよ。」
「生きてゐる？　誰が？」
其處に長い沈默があつた。時計はその沈默の中にも、休みない振子を鳴らしてゐた。
「誰が生きてゐるのさ？」
少時無言が續いた後、お蓮がかう問ひ直すと、聲はやつと彼女の耳に、懷しい名前を囁いてくれた。
「金――金さん。金さん。」
「ほんたうかい？　ほんたうなら嬉しいけれど、――」

お蓮は頬杖をついた儘、物思はしさうな眼つきになつた。

「だつて金さんが生きてゐるんなら、私に會ひに來さうなもんぢやないか？」

「來るよ。來るとさ。」

「來るつて？　何時？」

「明日。彌勒寺へ會ひに來るとさ。彌勒寺へ。明日の晩。」

「彌勒寺つて、彌勒寺橋だらうねえ。」

「彌勒寺橋へね。夜來る。來るとさ。」

それぎり聲は聞えなくなつた。が、長襦袢一つのお蓮は、夜明前の寒さも知らないやうに、長い間ぢつと坐つてゐた。

十六

お蓮は翌日の午過ぎまでも、二階の寢室を離れなかつた。が、四時頃やつと床を出ると、何時もより念入りに化粧をした。それから芝居でも見に行くやうに、上着も下着も悉く一番好い着物

を着始めた。
「おい、おい、何だつて又そんなにめかすんだい？」
その日は一日店へも行かず、妾宅にごろごろしてゐた牧野は、風俗畫報を擴げながら、不審さうに彼女へ聲をかけた。
「ちよいと行く所がありますから、――」
お蓮は冷然と鏡臺の前に、鹿の子の帶上げを結んでゐた。
「何處へ？」
「彌勒寺橋まで行けば好いんです。」
「彌勒寺橋？」
牧野はそろそろ訝るよりも、不安になつて來たらしかつた。それがお蓮には何とも云へない、愉快な心もちを唆るのだつた。
「彌勒寺橋に何の用があるんだい？」
「何の用ですか、――」

彼女はちらりと牧野の顏へ、侮蔑の眼の色を送りながら、靜に帶止めの金物を合せた。

「それでも安心して下さい。身なんぞ投げはしませんから、――」

「莫迦な事を云ふな。」

牧野はばたりと疊の上へ、風俗畫報を抛り出すと、忌々しさうに舌打ちをした。……

「彼是その晩の七時頃ださうだ。――」

今までの事情を話した後、私の友人のKと云ふ醫者は、徐にかう言葉を續けた。

「お蓮は牧野が止めるのも聞かず、たつた一人家を出て行つた。何しろ婆さんなぞが心配して、いくら一しよに行きたいと云つても、當人がまるで子供のやうに、一人にしなければ死んでしまふと、駄々をこねるんだから仕方がない。が、勿論お蓮一人、出してやれたもんぢやないから、其處は牧野が見え隱れに、ついて行く事にしたんださうだ。

「所が外へ出て見ると、その晩は丁度彌勒寺橋の近くに、藥師の緣日が立つてゐる。だから二つ目の往來は、いくら寒い時分でも、押し合はないばかりの人通りだ。これはお蓮の跡をつけるには、都合が好かつたのに違ひない。牧野がすぐ後を歩きながら、とうとう相手に氣づかれなかつ

たのも、畢竟は緣日の御蔭なんだ。
「往來にはずつと兩側に、緣日商人が並んでゐる。そのカンテラやランプの明りに、飴屋の渦卷の看板だの豆屋の赤い日傘だのが、右にも左にもちらつくんだ。が、お蓮はそんな物には、全然側目もふらないらしい。唯心もち俯向いたなり、さつさと人ごみを縫つて行くんだ。何でも遲れずに歩くのは、牧野にも骨が折れたさうだから、餘程先を急いでゐたんだらう。
「その内に彌勒寺橋の袂へ來ると、お蓮はやつと足を止めて、茫然とあたりを見廻したさうだ。あすこには河岸へ曲つた所に、植木屋ばかりが續いてゐる。どうせ緣日物だから、大した植木がある譯ぢやないが、兎も角も松とか檜とかが、此處だけは人足の疎らな通りに、水々しい枝葉を茂らしてゐるんだ。
「こんな所へ來たは好いが、一體どうする氣なんだらう？――牧野はさう疑ひながら、少時は橋づめの電柱の蔭に、妾の容子を窺つてゐた。が、お蓮は不相變、ぼんやり其處に佇んだ儘、植木の並んだのを眺めてゐる。そこで牧野は相手の後へ、忍び足にそつと近よつて見た。するとお蓮は嬉しさうに、何度もかう云ふ獨り語を呟いてたと云ふぢやないか？――『森になつたんだねえ。

とうとう東京も森になつたんだねえ。』……」

十七

「それだけならばまだ好いが、――」

Ｋは更に話し續けた。

「其處へ雪のやうな小犬が一匹、偶然人ごみを拔けて來ると、お蓮はいきなり兩手を伸ばして、その白犬を抱き上げたさうだ。さうして何を云ふかと思へば、『お前も來てくれたのかい？　隨分此處までは遠かつたらう。何しろ途中には山もあれば、大きな海もあるんだからね。ほんたうにお前に別れてから、一日も泣かずにゐた事はないよ。お前の代りに飼つた犬には、この間死なれてしまふしさ。』なぞと、夢のやうな事をしやべり出すんだ。が、小犬は人懷つこいのか、啼きもしなければ噛みつきもしない。唯鼻だけ鳴らしては、お蓮の手や頰を舐め廻すんだ。

「かうなると見てはゐられないから、牧野はとうとう顏を出した。が、お蓮は何と云つても、金さんが此處へ來るまでは、決して家へは歸らないと云ふ。その内に緣日の事だから、すぐにまは

りへは人だかりが出來る。中には『やあ、別嬪の氣違ひだ』と、大きな聲を出すやつさへあるんだ。しかし犬好きなお蓮には、久しぶりに犬を抱いたのが、少しは氣休めになつたんだらう。やや少時押し問答をした後、兎も角も牧野の云ふ通り一應は家へ歸る事に、やつと話が片附いたんだ。が、愈〻歸るとなつても、野次馬は容易に退くもんぢやない。お蓮も亦どうかすると、彌勒寺橋の方へ引つ返さうとする。それを宥めたり賺したりしながら、松井町の家へつれて來た時には、さすがに牧野も外套の下が、すつかり汗になつてゐたさうだ。……」

お蓮は家へ歸つて來ると、白い子犬を抱いたなり、二階の寢室へ上つて行つた。さうして眞暗な座敷の中へ、そつとこの憐れな動物を放した。犬は小さな尾を振りながら、嬉しさうに其處らを歩き廻つた。それは以前飼つてゐた時、彼女の寢臺から石疊の上へ、飛び出したのと同じ歩きぶりだつた。

「おや、――」

座敷の暗いのを思ひ出したお蓮は、不思議さうにあたりを見廻した。すると何時か天井からは、火をともした瑠璃燈が一つ、彼女の眞上に吊下つてゐた。

「まあ、綺麗だ事。まるで昔に返つたやうだねえ。」

彼女は少時はうつとりと、燦びやかな燈火を眺めてゐた。が、やがてその光に、彼女自身の姿を見ると、悲しさうに二三度頭を振つた。

「私は昔の蕙蓮ぢやない。今はお蓮と云ふ日本人だもの。金さんも會ひに來ない筈だ。けれども金さんさへ來てくれれば、——」

ふと頭を擡げたお蓮は、もう一度驚きの聲を洩らした。見ると小犬のゐた所には、横になつた支那人が一人、四角な枕へ肘をのせながら、悠々と鴉片を燻らせてゐる! 迫つた額、長い睫毛、それから左の目尻の黒子。——すべてが金に違ひなかつた。のみならず彼はお蓮を見ると、やはり煙管を啣へた儘、昔の通り涼しい眼に、ちらりと微笑を浮べたではないか?

「御覽。東京はもうあの通り、何處を見ても森ばかりだよ。」

成程二階の亞字欄の外には、見慣ない樹木が枝を張つた上に、刺繍の模様にありさうな鳥が、何羽も氣輕さうに囀つてゐる、——そんな景色を眺めながら、お蓮は懷しい金の側に、一夜中恍惚と坐つてゐた。………

「それから一日か二日すると、お蓮——本名は孟蕙蓮は、もうこのK腦病院の患者の一人になつてゐたんだ。何でも日清戰爭中は、威海衞の或妓館とかに、客を取つてゐた女ださうだが、——何、どんな女だつた？ 待ち給へ。此處に寫眞があるから。」

Kが見せた古寫眞には、寂しい支那服の女が一人、白犬と一しよに映つてゐた。

「この病院へ來た當座は、誰が何と云つた所が、決して支那服を脱がなかつたもんだ。おまけにその犬が側にゐないと、金さん金さんと喚き立てるぢやないか？ 考へれば牧野も可哀さうな男さ。蕙蓮を妾にしたと云つても、帝國軍人の片破れたるものが、戰爭後すぐに敵國人を内地へつれこまうと云ふんだから、人知れない苦勞が多かつたらう。——え、金はどうした？ そんな事は尋くだけ野暮だよ。僕は犬が死んだのさへ、病氣かどうかと疑つてゐるんだ。」

（大正九年十二月）

アグニの神

一

支那の上海の或町です。晝でも薄暗い或家の二階に、人相の惡い印度人の婆さんが一人、商人らしい一人の亞米利加人と何か頻に話し合つてゐました。

「實は今度もお婆さんに、占ひを頼みに來たのだがね、――」

亞米利加人はさう言ひながら、新しい卷煙草へ火をつけました。

「占ひですか？　占ひは當分見ないことにしましたよ。」

婆さんは嘲るやうに、じろりと相手の顏を見ました。

「この頃は折角見て上げても、御禮さへ碌にしない人が、多くなつて來ましたからね。」

「そりや勿論御禮をするよ。」

亞米利加人は惜しげもなく、三百弗の小切手を一枚、婆さんの前へ投げてやりました。

「差當りこれだけ取つて置くさ。もしお婆さんの占ひが當れば、その時は別に御禮をするから、──」

婆さんは三百弗の小切手を見ると、急に愛想がよくなりました。

「こんなに澤山頂いては、反つて御氣の毒ですね。──さうして一體又あなたは、何を占つてくれろとおつしやるんです？」

「私が見て貰ひたいのは、──」

亞米利加人は煙草を啣へたなり、狡猾さうな微笑を浮べました。

「一體日米戰爭はいつあるかといふことなんだ。それさへちやんとわかつてゐれば、我々商人は忽ちの内に、大金儲けが出來るからね。」

「ぢや明日いらつしやい。それまでに占つて置いて上げますから。」

「さうか。ぢや間違ひのないやうに、──」

印度人の婆さんは、得意さうに胸を反らせました。

「私の占ひは五十年來、一度も外れたことはないのですよ。何しろ私のはアグニの神が、御自身

御告げをなさるのですからね。」

亞米利加人が歸つてしまふと、婆さんは次の間の戸口へ行つて、

「惠蓮。惠蓮。」と呼び立てました。

その聲に應じて出て來たのは、美しい支那人の女の子です。が、何か苦勞でもあるのか、この女の子の下ぶくれの頰は、まるで蠟のやうな色をしてゐました。

「何を愚圖愚圖してゐるんだえ？　ほんたうにお前位、づうづうしい女はありやしないよ。きつと又臺所で居睡りか何かしてゐたんだらう？」

惠蓮はいくら叱られても、ぢつと俯向いた儘默つてゐました。

「よくお聞きよ。今夜は久しぶりにアグニの神へ、御伺ひを立てるんだからね、そのつもりでゐるんだよ。」

女の子はまつ黑な婆さんの顏へ、悲しさうな眼を擧げました。

「今夜ですか？」

「今夜の十二時。好いかえ？　忘れちやいけないよ。」

印度人の婆さんは、脅すやうに指を擧げました。

「又お前がこの間のやうに、私に世話ばかり燒かせると、今度こそお前の命はないよ。お前なんぞは殺さうと思へば、雛つ仔の頸を絞めるより――」

かう言ひかけた婆さんは、急に顏をしかめました。ふと相手に氣がついて見ると、惠蓮はいつか窓側に行つて、丁度明いてゐた硝子窓から、寂しい往來を眺めてゐるのです。

「何を見てゐるんだえ？」

惠蓮は愈〻色を失つて、もう一度婆さんの顏を見上げました。

「よし、よし、さう私を莫迦にするんなら、まだお前は痛い目に會ひ足りないんだらう。」

婆さんは眼を怒らせながら、そこにあつた箒をふり上げました。

丁度その途端です。誰か外へ來たと見えて、戸を叩く音が、突然荒々しく聞え始めました。

二

その日のかれこれ同じ時刻に、この家の外を通りかかつた、年の若い一人の日本人があります。

それがどう思つたのか、二階の窓から顔を出した支那人の女の子を一目見ると、しばらくは呆氣にとられたやうに、ぼんやり立ちすくんでしまひました。

そこへ又通りかかつたのは、年をとつた支那人の人力車夫です。

「おい。おい。あの二階に誰が住んでゐるか、お前は知つてゐないかね？」

日本人はその人力車夫へ、いきなりかう問ひかけました。支那人は梶棒を握つた儘、高い二階を見上げましたが、「あすこですか？　あすこには、何とかいふ印度人の婆さんが住んでゐます。」と、氣味悪さうに返事をすると、匆々行きさうにするのです。

「まあ、待つてくれ。さうしてその婆さんは、何を商賣にしてゐるんだ？」

「占ひ者です。が、この近所の噂ぢや、何でも魔法さへ使ふさうです。まあ、命が大事だつたら、あの婆さんの所なぞへは行かない方が好いやうですよ。」

支那人の車夫が行つてしまつてから、日本人は腕を組んで、何か考へてゐるやうでしたが、やがて決心でもついたのか、さつさとその家の中へはひつて行きました。すると突然聞えて來たのは、婆さんの罵る聲に交つた、支那人の女の子の泣き聲です。日本人はその聲を聞くが早いか、

一股に二三段づつ、薄暗い梯子を駈け上りました。さうして婆さんの部屋の戸を力一ぱい叩き出しました。

戸は直ぐに開きました。が、日本人が中へはひつて見ると、そこには印度人の婆さんがたつた一人立つてゐるばかり、もう支那人の女の子は、次の間へでも隠れたのか、影も形も見當りません。

「何か御用ですか？」

婆さんはさも疑はしさうに、じろじろ相手の顔を見ました。

「お前さんは占ひ者だらう？」

日本人は腕を組んだ儘、婆さんの顔を睨み返しました。

「さうです。」

「ぢや私の用なぞは、聞かなくてもわかつてゐるぢやないか？　私も一つお前さんの占ひを見て貰ひにやつて來たんだ。」

「何を見て上げるんですえ？」

婆さんは益々疑はしさうに、日本人の容子を窺つてゐました。

「私の主人の御孃さんが、去年の春行方知れずになつた。それを一つ見て貰ひたいんだが、――」

日本人は一句一句、力を入れて言ふのです。

「私の主人は香港の日本領事だ。御孃さんの名は妙子さんとおつしやる。私は遠藤といふ書生だが――どうだね？　その御孃さんはどこにいらつしやる。」

遠藤はかう言ひながら、上衣の隱しに手を入れると、一挺のピストルを引き出しました。

「この近所にいらつしやりはしないか？　香港の警察署の調べた所ぢや、御孃さんを攫つたのは、印度人らしいといふことだつたが、――隱し立てをすると爲にならんぞ。」

　しかし印度人の婆さんは、少しも怖がる氣色が見えません。見えない所か唇には、反つて人を莫迦にしたやうな微笑さへ浮べてゐるのです。

「お前さんは何を言ふんだえ？　私はそんな御孃さんなんぞは、顏を見たこともありやしないよ。」

「噓をつけ。今その窓から外を見てゐたのは、確に御孃さんの妙子さんだ。」

遠藤は片手にピストルを握つた儘、片手に次の間の戸口を指さしました。

「それでもまだ剛情を張るんなら、あすこにゐる支那人をつれて來い。」

「あれは私の貰ひ子だよ。」

婆さんはやはり嘲るやうに、にやにや獨り笑つてゐるのです。

「貰ひ子か貰ひ子でないか、一目見りやわかることだ。貴樣がつれて來なければ、おれがあすこへ行つて見る。」

遠藤が次の間へ踏みこまうとすると、咄嗟に印度人の婆さんは、その戸口に立ち塞がりました。

「ここは私の家だよ。見ず知らずのお前さんなんぞに、奧へはひられてたまるものか。」

「退け。退かないと射殺すぞ。」

遠藤はピストルを擧げました。いや、擧げようとしたのです。が、その拍子に婆さんが、鴉の啼くやうな聲を立てたかと思ふと、まるで電氣に打たれたやうに、ピストルは手から落ちてしまひました。これには勇み立つた遠藤も、さすがに膽をひしがれたのでせう、ちよいとの間は不思議さうに、あたりを見廻してゐましたが、忽ち又勇氣をとり直すと、

「魔法使め。」と罵りながら、虎のやうに婆さんへ飛びかかりました。

が、婆さんもさるものです。ひらりと身を躱すが早いか、そこにあつた箒をとつて、又掴みかからうとする遠藤の顔へ、床の上の五味を掃きかけました。すると、その五味が皆火花になつて、眼といはず、口といはず、ばらばらと遠藤の顔へ焼きつくのです。

遠藤はとうとうたまり兼ねて、火花の旋風に追はれながら、轉げるやうに外へ逃げ出しました。

三

その夜の十二時に近い時分、遠藤は獨り婆さんの家の前にたたずみながら、二階の硝子窓に映る火影を口惜しさうに見つめてゐました。

「折角御孃さんの在りかをつきとめながら、とり戻すことが出來ないのは殘念だな。一そ警察へ訴へようか？　いや、いや、支那の警察が手ぬるいことは、香港でもう懲り懲りしてゐる。萬一今度も逃げられたら、又探すのが一苦勞だ。といつてあの魔法使には、ピストルさへ役に立たないし、——」

遠藤がそんなことを考へてゐると、突然高い二階の窓から、ひらひら落ちて來た紙切れがあります。

「おや、紙切れが落ちて來たが、――もしや御孃さんの手紙ぢやないか？」

から呟いた遠藤は、その紙切れを、拾ひ上げながらそつと隱した懷中電燈を出して、まん圓な光に照らして見ました。すると果して紙切れの上には、妙子が書いたのに違ひない、消えさうな鉛筆の跡があります。

「遠藤サン。コノ家ノオ婆サンハ、恐シイ魔法使デス。時々眞夜中ニ私ノ體ヘ、『アグニ』トイフ印度ノ神ヲ乘リ移ラセマス。私ハソノ神ガ乘リ移ツテヰル間中、死ンダヤウニナツテヰルノデス。デスカラドンナ事ガ起ルカ知リマセンガ、何デモオ婆サンノ話デハ、『アグニ』ノ神ガ私ノ口ヲ借リテ、イロイロ豫言ヲスルノダサウデス。今夜モ十二時ニハオ婆サンガ又『アグニ』ノ神ヲ乘リ移ラセマス。イツモダト私ハ知ラズ知ラズ、氣ガ遠クナツテシマフノデスガ、今夜ハサウナラナイ内ニ、ワザト魔法ニカカツタ眞似ヲシマス。サウシテ私ヲオ父樣ノ所ヘ返サナイト『アグニ』ノ神

ガオ婆サンノ命ヲトルト言ツテヤリマス。オ婆サンハ何ヨリモ『アグニ』ノ神ガ怖イノデスカラ、ソレヲ聞ケバキツト私ヲ返スダラウト思ヒマス。ドウカ明日ノ朝モウ一度、オ婆サンノ所ヘ來テ下サイ。コノ計略ノ外ニハオ婆サンノ手カラ、逃ゲ出スミチハアリマセン。サヤウナラ。」

遠藤は手紙を讀み終ると、懐中時計を出して見ました。時計は十二時五分前です。

「もうそろそろ時刻になるな、相手はあんな魔法使だし、御嬢さんはまだ子供だから、餘程運が好くないと、――」

遠藤の言葉が終らない内に、もう魔法が始まるのでせう。今まで明るかつた二階の窓は、急にまつ暗になつてしまひました。と同時に不思議な香の匂が、町の敷石にも滲みる程、どこからか靜に漂つて來ました。

四

その時あの印度人の婆さんは、ランプを消した二階の部屋の机に、魔法の書物を擴げながら、

頻に呪文を唱へてゐました。書物は香爐の火の光に、暗い中でも文字だけは、ぼんやり浮き上らせてゐるのです。

婆さんの前には心配さうな惠蓮が、――いや、支那服を着せられた妙子が、ぢつと椅子に坐つてゐました。さつき窓から落した手紙は、無事に遠藤さんの手へはひつたであらうか？あの時往來にゐた人影は、確に遠藤さんだと思つたが、もしや人違ひではなかつたであらうか？――さう思ふと妙子は、ゐても立つてもゐられないやうな氣がして來ます。しかし今うつかりそんな氣ぶりが、婆さんの眼にでも止まつたが最後、この恐しい魔法使ひの家から、逃げ出さうといふ計略は、すぐに見破られてしまふでせう。ですから妙子は一生懸命に、震へる兩手を組み合せながら、かねてたくんで置いた通り、アグニの神が乘り移つたやうに、見せかける時の近づくのを今か今かと待つてゐました。

婆さんは呪文を唱へてしまふと、今度は妙子をめぐりながら、いろいろな手ぶりをし始めました。或時は前へ立つた儘、兩手を左右に擧げて見せたり、又或時は後へ來て、まるで眼かくしでもするやうに、そつと妙子の額の上へ手をかざしたりするのです。もしこの時部屋の外から、誰

か婆さんの容子を見てゐたとすれば、それはきつと大きな蝙蝠か何かが、蒼白い香爐の火の光の中に、飛びまはつてでもゐるやうに見えたでせう。

その内に妙子はいつものやうに、だんだん睡氣がきざして來ました。が、ここで睡つてしまつては、折角の計略にかけることも、出來なくなつてしまふ道理です。さうしてこれが出來なければ、勿論二度とお父さんの所へも、歸れなくなるのに違ひありません。

「日本の神々樣、どうか私が睡らないやうに、御守りなすつて下さいまし。その代り私はもう一度、たとひ一目でもお父さんの御顏を見ることが出來たなら、すぐに死んでもよろしうございます。日本の神々樣、どうかお婆さんを欺せるやうに、御力を御貸し下さいまし。」

妙子は何度も心の中に、熱心に祈りを續けました。しかし睡氣はおひおひと、強くなつて來るばかりです。と同時に妙子の耳には、丁度銅鑼でも鳴らすやうな、得體の知れない音樂の聲が、かすかに傳はり始めました。これはいつでもアグニの神が、空から降りて來る時に、きつと聞える聲なのです。

もうかうなつてはいくら我慢しても、睡らずにゐることは出來ません。現に目の前の香爐の火

や、印度人の婆さんの姿でさへ、氣味の惡い夢が薄れるやうに、見る見る消え失せてしまふのです。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

やがてあの魔法使ひが、床の上にひれ伏した儘、嗄れた聲を擧げた時には、妙子は椅子に坐りながら、殆ど生死も知らないやうに、いつかもうぐつすり寢入つてゐました。

五

妙子は勿論婆さんも、この魔法を使ふ所は、誰の眼にも觸れないと、思つてゐたのに違ひありません。しかし實際は部屋の外に、もう一人戸の鍵穴から、覗いてゐる男があつたのです。それは一體誰でせうか？――言ふまでもなく、書生の遠藤です。

遠藤は妙子の手紙を見てから、一時は往來に立つたなり、夜明けを待たうかとも思ひました。が、お孃さんの身の上を思ふと、どうしてもぢつとしてはゐられません。そこでとうとう盜人のやうに、そつと家の中へ忍びこむと、早速この二階の戸口へ來て、さつきから透き見をしてゐた

のです。

しかし透き見をすると言つても、何しろ鍵穴を覗くのですから、蒼白い香爐の火の光を浴びた、死人のやうな妙子の顔が、やつと正面に見えるだけです。その外は机も、魔法の書物も、床にひれ伏した婆さんの姿も、まるで遠藤の眼にははひりません。しかし嗄れた婆さんの聲は、手にとるやうにはつきり聞えました。

「アグニの神、アグニの神、どうか私の申すことを御聞き入れ下さいまし。」

婆さんがかう言つたと思ふと、息もしないやうに坐つてゐた妙子は、やはり眼をつぶつた儘、突然口を利き始めました。しかもその聲がどうしても、妙子のやうな少女とは思はれない、荒々しい男の聲なのです。

「いや、おれはお前の願ひなぞは聞かない。お前はおれの言ひつけに背いて、いつも惡事ばかり働いて來た。おれはもう今夜限り、お前を見捨てようと思つてゐる。いや、その上に惡事の罰を下してやらうと思つてゐる。」

婆さんは呆氣にとられたのでせう。暫くは何とも答へずに、喘ぐやうな聲ばかり立ててゐまし

た。が、妙子は婆さんに頓着せず、おごそかに話し續けるのです。
「お前は憐れな父親の手から、この女の子を盗んで來た。もし命が惜しかつたら、明日とも言はず今夜の内に、早速この女の子を返すが好い。」
遠藤は鍵穴に眼を當てた儘、婆さんの答を待つてゐました。すると婆さんは驚きでもするかと思ひの外、憎々しい笑ひ聲を洩らしながら、急に妙子の前へ突つ立ちました。
「人を莫迦にするのも、好い加減におし。お前は私を何だと思つてゐるのだえ。私はまだお前に欺される程、耄碌はしてゐない心算だよ。早速お前を父親へ返せ――警察の御役人ぢやあるまいし、アグニの神がそんなことを御言ひつけになつてたまるものか。」
婆さんはどこからとり出したか、眼をつぶつた妙子の顔の先へ、一挺のナイフを突きつけました。
「さあ、正直に白狀おし。お前は勿體なくもアグニの神の、聲色を使つてゐるのだらう。」
さつきから容子を窺つてゐても、妙子が實際睡つてゐることは、勿論遠藤にはわかりません。ですから遠藤はこれを見ると、さては計略が露顯したかと思はず胸を躍らせました。が、妙子は

相變らず目蓋一つ動かさず、嘲笑ふやうに答へるのです。

「お前も死に時が近づいたな。おれの聲がお前には人間の聲に聞えるのか。おれの聲は低くとも、天上に燃える炎の聲だ。それがお前にはわからないのか。わからなければ、勝手にするが好い。おれは唯お前に尋ねるのだ。すぐにこの女の子を送り返すか、それともおれの言ひつけに背くか

――」

婆さんはちよいとためらつたやうです。が、忽ち勇氣をとり直すと、片手にナイフを握りながら、片手に妙子の襟髮を掴んで、ずるずる手もとへ引き寄せました。

「この阿魔め。まだ剛情を張る氣だな。よし、よし、それなら約束通り、一思ひに命をとつてやるぞ。」

婆さんはナイフを振り上げました。もう一分間遲れても、妙子の命はなくなります。遠藤は咄嗟に身を起すと、錠のかかつた入口の戸を無理無體に明けようとしました。が、戸は容易に破れません。いくら押しても、叩いても、手の皮が擦り剝けるばかりです。

六

その内に部屋の中からは、誰かのわつと叫ぶ聲が、突然暗やみに響きました。それから人が床の上へ、倒れる音も聞えたやうです。遠藤は殆ど氣違ひのやうに、妙子の名前を呼びかけながら、全身の力を肩に集めて、何度も入口の戸へぶつかりました。

板の裂ける音、錠のはね飛ぶ音、――戸はとうとう破れました。しかし肝腎の部屋の中は、まだ香爐に蒼白い火がめらめら燃えてゐるばかり、人氣のないやうにしんとしてゐます。

遠藤はその光を便りに、怯づ怯づあたりを見廻しました。

するとすぐに眼にはひつたのは、やはりぢつと椅子にかけた、死人のやうな妙子です。それが何故か遠藤には、頭に毫光でもかかつてゐるやうに、嚴かな感じを起させました。

「御孃さん、御孃さん。」

遠藤は椅子の側へ行くと、妙子の耳もとへ口をつけて、一生懸命に叫び立てました。が、妙子は眼をつぶつたなり、何とも口を開きません。

「御嬢さん。しつかりおしなさい。遠藤です。」

妙子はやつと夢がさめたやうに、かすかな眼を開きました。

「遠藤さん？」

「さうです。遠藤です。もう大丈夫ですから、御安心なさい。さあ、早く逃げませう。」

妙子はまだ夢現のやうに、弱々しい聲を出しました。

「計略は駄目だつたわ。つい私が眠つてしまつたものだから、――堪忍して頂戴よ。」

「計略が露顯したのは、あなたのせゐぢやありませんよ。あなたは私と約束した通り、アグニの神の憑つた眞似をやり了せたぢやありませんか？――そんなことはどうでも好いことです。さあ、早く御逃げなさい。」

遠藤はもどかしさうに、椅子から妙子を抱き起しました。

「あら、嘘。私は眠つてしまつたのですもの。どんなことを言つたか、知りはしないわ。」

妙子は遠藤の胸に凭れながら、呟くやうにかう言ひました。

「計略は駄目だつたわ。とても私は逃げられなくてよ。」

「そんなことがあるものですか。私と一しよにいらつしやい。今度しくじつたら大變です。」

「だつてお婆さんがゐるでせう?」

「お婆さん。」

遠藤はもう一度、部屋の中を見廻しました。机の上にはさつきの通り、魔法の書物が開いてある、——その下へ仰向きに倒れてゐるのは、あの印度人の婆さんです。婆さんは意外にも自分の胸へ、自分のナイフを突き立てた儘、血だまりの中に死んでゐました。

「お婆さんはどうして?」

「死んでゐます。」

妙子は遠藤を見上げながら、美しい眉をひそめました。

「私、ちつとも知らなかつたわ。お婆さんは遠藤さんが——あなたが殺してしまつたの?」

遠藤は婆さんの屍骸から、妙子の顔へ眼をやりました。今夜の計略が失敗したことが、——しかしその爲に婆さんも死ねば、妙子も無事に取り返せたことが、——運命の力の不思議なことが、やつと遠藤にもわかつたのは、この瞬間だつたのです。

「私が殺したのぢやありません。あの婆さんを殺したのは今夜こゝへ來たアグニの神です。」
遠藤は妙子を抱へた儘、おごそかにかう囁きました。

（大正九年十二月）

妙な話

或冬の夜、私は舊友の村上と一しよに、銀座通りを歩いてゐた。

「この間千枝子から手紙が來たつけ。君にもよろしくと云ふ事だつた。」

村上はふと思ひ出したやうに、今は佐世保に住んでゐる妹の消息を話題にした。

「千枝子さんも健在だらうね。」

「ああ、この頃はずつと達者のやうだ。あいつも東京にゐる時分は、隨分神經衰弱もひどかつたのだが、――あの時分は君も知つてゐるね。」

「知つてゐる。が、神經衰弱だつたかどうか、――」

「知らなかつたかね。あの時分の千枝子と來た日には、まるで氣違ひも同樣さ。泣くかと思ふと笑つてゐる。笑つてゐるかと思ふと、――妙な話をし出すのだ。」

「妙な話?」

つて腰を下した。

村上は返事をする前に、或珈琲店の硝子扉を押した。さうして往來の見える卓子に私と向ひ合つて腰を下した。

「妙な話さ。君にはまだ話さなかつたかしら。これはあいつが佐世保へ行く前に、僕が話して聞かせたのだが。――」

君も知つてゐる通り、千枝子の夫は歐洲戰役中、地中海方面へ派遣された「A――」の乘組將校だつた。あいつはその留守の間、僕の所へ來てゐたのだが、愈〻戰爭も片がつくと云ふ頃から、急に神經衰弱がひどくなり出したのだ。その主な原因は、今まで一週間に一度づつはきつと來てゐた夫の手紙が、ぱつたり來なくなつたせゐかも知れない。何しろ千枝子は結婚後まだ半年と經たない內に、夫と別れてしまつたのだから、その手紙を樂しみにしてゐた事は、遠慮のない僕さへひやかすのは、殘酷な氣がする位だつた。

丁度その時分の事だつた。或日、――さうさう、あの日は紀元節だつけ。何でも朝から雨の降り出した、寒さの嚴しい午後だつたが、千枝子は久しぶりに鎌倉へ、遊びに行つて來ると云ひ出

した。鎌倉には或實業家の細君になつた、あいつの學校友だちが住んでゐる。――其處へ遊びに行くと云ふのだが、何もこの雨の降るのに、わざわざ鎌倉くんだりまで遊びに行く必要もないと思つたから、僕は勿論僕の妻も、再三明日にした方が好くはないかと云つて見た。しかし千枝子は剛情に、どうしても今日行きたいと云ふ。さうしてしまひには腹を立てながら、さつさと支度して出て行つてしまつた。

事によると今日は泊つて來るから、歸りは明日の朝になるかも知れない。――さう云つてあいつは出て行つたのだが、少時すると、どうしたのだかぐつしより雨に濡れた儘、まつ蒼な顔をして歸つて來た。聞けば中央停車場から濠端の電車の停留場まで、傘もささずに歩いたのださうだ。では何故又そんな事をしたのだと云ふと、――それが妙な話なのだ。

千枝子が中央停車場へはひると、――いや、その前にまだかう云ふ事があつた。あいつが電車へ乘つた所が、生憎客席が皆塞がつてゐる。そこで吊り革にぶら下つてゐると、すぐ眼の前の硝子窓に、ぼんやり海の景色が映るのださうだ。電車はその時神保町の通りを走つてゐたのだから、無論海の景色なぞが映る道理はない。が、外の往來の透いて見える上に、浪の動くのが浮き上つ

てゐる。殊に窓へ雨がしぶくと、水平線さへかすかに煙つて見える。――と云ふ所から察すると、千枝子はもうその時に、神經がどうかしてゐたのだらう。

それから、中央停車場へはひると、入口にゐた赤帽の一人が、突然千枝子に挨拶をした。さうして「旦那樣は御變りもございませんか。」と云つた。これも妙だつたには違ひない。が、更に妙だつた事は、千枝子がさう云ふ赤帽の問を、別に妙とも思はなかつた事だ。「難有う。唯この頃はどうなすつたのだか、さつぱり御便りが來ないのでね。」――さう千枝子は赤帽に、返事さへもしたと云ふのだ。すると赤帽はもう一度「では私が旦那樣にお目にかかつて參りませう。」と云つた。御目にかかつて來ると云つても、夫は遠い地中海にゐる。――と思つた時、始めて千枝子は、この見慣れない赤帽の言葉が、氣違ひじみてゐるのに氣がついたのださうだ。が、問ひ返さうと思ふ内に、赤帽はちよいと會釋をすると、こそこそ人ごみの中に隱れてしまつた。それきり千枝子はいくら探して見ても、二度とその赤帽の姿が見當らない。――いや、見當らないと云ふよりも、今まで向ひ合つてゐた赤帽の顏が、不思議な程思ひ出せないのださうだ。だから、あの赤帽の姿が見當らないと同時に、どの赤帽も皆その男に見える。さうして千枝子にはわからなくても、あ

の怪しい赤帽が、絶えずこちらの身のまはりを監視してゐさうな心もちがする。かうなるともう鎌倉所か、其處にゐるのさへ何だか氣味が惡い。千枝子はとうとう傘もささずに、大降りの雨を浴びながら、夢のやうに停車場を逃げ出して來た。——勿論かう云ふ千枝子の話は、あいつの神經のせゐに違ひないが、その時風邪を引いたのだらう。翌日から彼是三日ばかりは、ずつと高い熱が續いて、「あなた、堪忍して下さい。」だの、「何故歸つていらつしやらないんです。」だの、何か夫と話してゐるらしい譫言ばかり云つてゐた。が、鎌倉行きの祟りはそればかりではない。風邪がすつかり癒つた後でも、赤帽と云ふ言葉を聞くと、千枝子はその日中ふさぎこんで、口さへ碌に利かなかつたものだ。さう云へば一度なぞは、何處かの回漕店の看板に、赤帽の畫があるのを見たものだから、あいつは又出先まで行かない内に、歸つて來たと云ふ滑稽もあつた。

しかし彼是一月ばかりすると、あいつの赤帽を怖がるのも、大分下火になつて來た。「姉さん。何とか云ふ鏡花の小說に、猫のやうな顏をした赤帽が出るのがあつたでせう。私が妙な目に遇つたのは、あれを讀んでゐたせゐかも知れないわね。」——千枝子はその頃僕の妻に、そんな事も笑つて云つたさうだ。所が三月の幾日だかには、もう一度赤帽に脅かされた。それ以來夫が歸つて

來るまで、千枝子はどんな用があつても、決して停車場へは行つた事がない。君が朝鮮へ立つ時にも、あいつが見送りに來なかつたのは、やはり赤帽が怖かつたのださうだ。

その三月の幾日だかには、夫の同僚が亞米利加から、二年ぶりに歸つて來る。——千枝子はそれを出迎へる爲に、朝から家を出て行つたが、君も知つてゐる通り、あの界隈は場所がらだけに、晝でも滅多に人通りがない。その淋しい路ばたに、風車賣りの荷が一臺、忘れられたやうに置いてあつた。丁度風の強い曇天だつたから、荷に插した色紙の風車が、皆目まぐるしく廻つてゐる。——千枝子はさう云ふ景色だけでも、何故か心細い氣がしたさうだが、通りがかりにふと眼をやると、赤帽をかぶつた男が一人、後向きに其處へしやがんでゐた。勿論これは風車賣が、煙草か何かのんでゐたのだらう。しかしその帽子の赤い色を見たら、千枝子は何だか停車場へ行くと、又不思議でも起りさうな、豫感めいた心もちがして、一度は引き返してしまはうかとも、考へた位だつたさうだ。

が、停車場へ行つてからも、出迎へをすませてしまふまでは、仕合せと何事も起らなかつた。唯、夫の同僚を先に、一同がぞろぞろ薄暗い改札口を出ようとすると、誰かあいつの後から、「旦

那様は右の腕に、御怪我をなすつていらつしやるさうです。御手紙が來ないのはその爲ですよ。」と、聲をかけるものがあつた。千枝子は咄嗟にふり返つて見たが、後には赤帽も何もゐない。ゐるのはこれも見知り越しの、海軍將校の夫妻だけだつた。無論この夫妻が唐突とそんな事をしやべる道理もないから、聲がした事は妙と云へば、確に妙に違ひなかつた。が、兎も角、赤帽の見えないのが、千枝子には嬉しい氣がしたのだらう。あいつはその儘改札口を出ると、やはり外の連中と一しよに、夫の同僚が車寄せから、自動車に乘るのを送りに行つた。するともう一度後から、「奧樣、旦那樣は來月中に、御歸りになるさうですよ。」と、はつきり誰かが聲をかけた。その時も千枝子はふり向いて見たが、後には出迎への男女の外に、一人も赤帽は見えなかつた。しかし後にはゐないにしても、前には赤帽が二人ばかり、自動車に荷物を移してゐる。――その一人がどう思つたか、途端にこちらを見返りながら、にやりと妙に笑つて見せた。千枝子はそれを見た時には、あたりの人目にも止まつた程、顏色が變つてしまつたさうだ。が、あいつが心を落ち着けて見ると、二人だと思つた赤帽は、一人しか荷物を扱つてゐない。しかもその一人は今笑つたのと、全然別人に違ひないのだ。では今笑つた赤帽の顏は、今度こそ見覺えが出來たかと云ふ

と、不相變記憶がぼんやりしてゐる。いくら一生懸命に思ひ出さうとしても、あいつの頭には赤帽をかぶつた、眼鼻のない顔より浮んで來ない。――これが千枝子の口から聞いた、二度目の妙な話なのだ。

その後一月ばかりすると、――君が朝鮮へ行つたのと、確前後してゐたと思ふが、實際夫が歸つて來た。右の腕を負傷して居た爲に、少時手紙が書けなかつたと云ふ事も、不思議にやはり事實だつた。「千枝子さんは旦那樣思ひだから、自然とそんな事がわかつたのでせう。」――僕の妻なぞはその當座、かう云つてはあいつをひやかしたものだ。それから又半月ばかりの後、千枝子夫婦は夫の任地の佐世保へ行つてしまつたが、向うへ着くか着かないのに、あいつのよこした手紙を見ると、驚いた事には三度目の妙な話が書いてある。と云ふのは千枝子夫婦が、中央停車場を立つた時に、夫婦の荷を運んだ赤帽が、もう動き出した汽車の窓へ、挨拶の心算か顔を出した。その顔を一目見ると、夫は急に變な顔をしたが、やがて半ば恥かしさうに、かう云ふ話をし出したさうだ。――夫がマルセイユに上陸中、何人かの同僚と一しよに、或カツフエへ行つてゐると、突然日本人の赤帽が一人、卓子の側へ歩み寄つて、馴々しく近狀を尋ねかけた。勿論マルセイユ

の往來に、日本人の赤帽なぞが、徘徊してゐるべき理窟はない。が、夫はどう云ふ譯か格別不思議とも思はずに、右の腕を負傷した事や歸期の近い事なぞを話してやつた。その內に醉つてゐる同僚の一人が、コニヤツクの杯をひつくり返した。それに驚いてあたりを見ると、何時の間にか日本人の赤帽は、カツフエから姿を隱してゐた。一體あいつは何だつたらう。――さう今になつて考へると、眼は確に明いてゐたにしても、夢だか實際だか差別がつかない。のみならず亦同僚たちも、全然赤帽の來た事なぞには、氣がつかないやうな顏をしてゐる。そこでとうとうその事に就いては、誰にも打ち明けて話さずにしまつた。所が日本へ歸つて來ると、現に千枝子は、二度までも怪しい赤帽に遇つたと云ふ。ではマルセイユで見かけたのは、その赤帽かと思ひもしたが、餘り怪談じみてゐるし、一つには名譽の遠征中も、細君の事ばかり思つてゐるかと、嘲られさうな氣がしたから、今日まではやはり默つてゐた。が、今顏を出した赤帽を見たら、マルセイユのカツフエにはひつて來た男と、眉毛一つ違つてゐない。――夫はさう話し終つてから、少時は口を噤んでゐたが、やがて不安さうに聲を低くすると、「しかし妙ぢやないか？　眉毛一つ違はないと云ふものの、おれはどうしてもその赤帽の顏が、はつきり思ひ出せないんだ。唯、窓越し

に顔を見た瞬間、あいつだなと……」

村上が此處まで話して來た時、新にカツフエへはひつて來た、友人らしい三四人が、私たちの卓子へ近づきながら、口々に彼へ挨拶した。私は立ち上つた。

「では僕は失敬しよう。いづれ朝鮮へ歸る前には、もう一度君を訪ねるから。」

私はカツフエの外へ出ると、思はず長い息を吐いた。それは丁度三年以前、千枝子が二度までも私と、中央停車場に落ち合ふべき密會の約を破つた上、永久に貞淑な妻でありたいと云ふ、簡單な手紙をよこした譯が、今夜始めてわかつたからであつた。……………

（大正九年十二月）

奇遇

編輯者　支那へ旅行するさうですね。南ですか？　北ですか？
小說家　南から北へ周るつもりです。
編輯者　準備はもう出來たのですか？
小說家　大抵出來ました。唯讀む筈だつた紀行や地誌なぞが、未だに讀み切れないのに弱つてゐます。
編輯者　（氣がなささうに）そんな本が何册もあるのですか？
小說家　存外ありますよ。日本人が書いたのでは、七十八日遊記、支那文明記、支那漫遊記、支那佛教遺物、支那風俗、支那人氣質、燕山楚水、蘇浙小觀、北淸見聞錄、長江十年、觀光紀游、征塵錄、滿洲、巴蜀、湖南、漢口、支那風韻記、支那――
編輯者　それをみんな讀んだのですか？

小說家　何、まだ一册も讀まないのです。それから支那人が書いた本では、大清一統志、燕都遊覽志、長安客話、帝京――

編輯者　いや、もう本の名は澤山です。

小說家　まだ西洋人が書いた本は、一册も云はなかつたと思ひますが、――

編輯者　西洋人の書いた支那の本なぞには、どうせ碌な物はないでせう。それより小說は出發前に、きつと書いて貰へるでせうね。

小說家　(急に悄氣る)さあ、兎に角その前には、書き上げるつもりでゐるのですが、――

編輯者　一體何時出發する豫定ですか?

小說家　實は今日出發する豫定なのです。

編輯者　(驚いたやうに)今日ですか?

小說家　ええ、五時の急行に乘る筈なのです。

編輯者　するともう出發前には、半時間しかないぢやありませんか?

小說家　まあさう云ふ勘定です。

編輯者　(腹を立てたやうに)では小說はどうなるのですか？

小說家　(愈悄氣る)僕もどうなるかと思つてゐるのです。

編輯者　どうもさう無責任では困りますなあ。しかし何しろ半時間ばかりでは、急に書いても貰へないでせうし、……

小說家　さうですね。ウエデキンドの芝居だと、この半時間ばかりの間にも、不遇の音樂家が飛びこんで來たり、何處かの奥さんが自殺したり、いろいろな事件が起るのですが、——御待ちなさいよ。事によると机の抽斗に、まだ何か發表しない原稿があるかも知れません。

編輯者　さうすると非常に好都合ですが——

小說家　(机の抽斗を探しながら)論文ではいけないでせうね。

編輯者　何と云ふ論文ですか？

小說家　「文藝に及ぼすジヤアナリズムの害毒」と云ふのです。

編輯者　そんな論文はいけません。

小說家　これはどうですか？　まあ、體裁の上では小品ですが、——

編輯者　「奇遇」と云ふ題ですね。どんな事を書いたのですか？

小說家　ちよいと讀んで見ませうか？　二十分ばかりかかれば讀めますから、——

× × × × × ×

至順年間の事である。長江に臨んだ古金陵の地に、王生と云ふ青年があつた。生れつき才力が豐な上に、容貌も亦美しい。何でも奇俊王家郎と稱されたと云ふから、その風采想ふべしである。しかも年は二十になつたが、妻はまだ娶つてゐない。家は門地も正しいし、親讓りの資產も相當にある。詩酒の風流を恣にするには、こんな都合の好い身分はない。

實際又王生は、仲の好い友人の趙生と一しよに、自由な生活を送つてゐた。戲を聽きに行く事もある。博を打つて暮らす事もある。或は又一晚中、秦淮あたりの酒家の卓子に、酒を飲み明かすことなぞもある。さう云ふ時には落着いた王生が、花磁盞を前にうつとりと、何處かの歌の聲に聞き入つてゐると、陽氣な趙生は酢蟹を肴に、金華酒の滿を引きながら、盛んに妓品なぞを論じ立てるのである。

その王生がどう云ふ譯か、去年の秋以來忘れたやうに、ばつたり痛飮を試みなくなつた。いや、痛飮ばかりではない。吃喝嫖賭の道樂にも、全然遠のいてしまつたのである。趙生を始め大勢の友人たちは、勿論この變化を不思議に思つた。王生ももう道樂には、飽きたのかも知れないと云ふものがある。いや、何處かに可愛い女が、出來たのだらうと云ふものもある。が、肝腎の王生自身は、何度その譯を尋ねられても、唯微笑を洩らすばかりで、何がどうしたとも返事をしない。

そんな事が一年程續いた後、或日趙生が久しぶりに、王生の家を訪れると、彼は昨夜作つたと云つて、元稹體の會眞詩三十韻を出して見せた。詩は花やかな對句の中に、絶えず嗟嘆の意が洩らしてある。戀をしてゐる青年でもなければ、かう云ふ詩はたとひ一行でも、書く事が出來ないに違ひない。趙生は詩稿を王生に返すと、狡猾さうにちらりと相手を見ながら、

「君の鶯鶯は何處にゐるのだ。」と云つた。

「僕の鶯鶯？　そんなものがあるものか。」

「嘘をつき給へ。論より證據はその指環ぢやないか。」

成程趙生が指さした几の上には、紫金碧甸の指環が一つ、讀みさした本の上に轉がつてゐる。

指環の主は勿論男ではない。が、王生はそれを取り上げると、ちよいと顏を暗くしたが、しかし存外平然と、徐ろにこんな話をし出した。

「僕の鶯鶯なぞと云ふものはない。が、僕の戀をしてゐる女はある。僕が去年の秋以來、君たちと太白を擧げなくなつたのは、確かにその女が出來たからだ。しかしその女と僕との關係は、君たちが想像してゐるやうな、ありふれた才子の情事ではない。かう云つたばかりでは何の事だか、勿論君にはのみこめないだらう。いや、のみこめないばかりなら好いが、或は萬事が嘘のやうな疑ひを抱きたくなるかも知れない。それでは僕も不本意だから、この際君に一切の事情をすつかり打ち明けてしまはうと思ふ。退屈でもどうか一通り、その女の話を聞いてくれ給へ。

「僕は君が知つてゐる通り、松江に田を持つてゐる。さうして每年秋になると、一年の年貢を取り立てる爲に、僕自身あそこへ下つて行く。所が丁度去年の秋、やはり松江へ下つた歸りに、舟が渭塘のほとりまで來ると、柳や槐に圍まれながら、酒旗を出した家が一軒見える。朱塗りの欄干が畫いたやうに、折れ曲つてゐる容子なぞでは、中中大きな構へらしい。その又欄干の續いた外には、紅い芙蓉が何十株も、川の水に影を落してゐる。僕は喉が渴いてゐたから、早速その酒

旗の出てゐる家へ、舟をつけろと云ひつけたものだ。

「さて其處へ上つて見ると、案の定家も手廣ければ、主の翁も卑しくない。その上酒は竹葉靑、肴は鱸に蟹と云ふのだから、僕の滿足は察してくれ給へ。實際僕は久しぶりに、旅愁も何も忘れながら、陶然と盃を口にしてゐた。その內にふと氣がつくと、唯か一人幕の陰から、時時こちらを覗くものがある。が、僕がそちらを見るが早いか、すぐに幕の後へ隱れてしまふ。さうして僕が眼を外らせば、ぢつと又こちらを見つめてゐる。何だか翡翠の簪や金の耳環が幕の間に、ちらめくやうな氣がするが、確かにさうかどうか判然しない。現に一度なぞは玉のやうな顏が、ちらりと其處に見えたやうに思ふ。が、急にふり返ると、やはり唯幕ばかりが、懶さうにだらりと下つてゐる。そんな事を繰り返してゐる內に、僕はだんだん酒を飮むのが、妙につまらなくなつて來たから、何枚かの錢を抛り出すと、匆匆又舟へ歸つて來た。

「所がその晚舟の中に、獨りうとうとと眠つてゐると、僕は夢にもう一度、あの酒旗の出てゐる家へ行つた。晝來た時には知らなかつたが、家には門が何重もある、その門を皆通り拔けた、一番奧まつた家の後に、小さな綉閣が一軒見える。その前には見事な葡萄棚があり、葡萄棚の下に

は石を疊んだ、一丈ばかりの泉水がある。僕はその池のほとりへ來た時、水の中の金魚が月の光に、はつきり數へられたのも覺えてゐる。池の左右に植わつてゐるのは、二株とも垂絲檜に違ひない。それから又墻に寄せては、翠柏の屏が結んである。その下にあるのは天工のやうに、石を積んだ築山である。築山の草は悉金絲線綉墩の屬ばかりだから、この頃のうそ寒にも凋れてゐない。窓の間には彫花の籠に、綠色の鸚鵡が飼つてある。その鸚鵡が僕を見ると、「今晩は」と云つたのも忘れられない。軒の下には宙に吊つた、小さな木鶴の一雙ひが、煙の立つ線香を啣へてゐる。窓の中を覗いて見ると、几の上の古銅瓶に、孔雀の尾が何本も插してある。その側にある筆硯類は、いづれも淸楚と云ふ外はない。と思ふと又人を待つやうに、碧玉の簫などもかかつてゐる。壁には四幅の金花箋を貼つて、その上に詩が題してある。詩體はどうも蘇東坡の四時の詞に倣つたものらしい。書は確に趙松雪を學んだと思ふ筆法である。その詩も一一覺えてゐるが、今は披露する必要もあるまい。それより君に聞いて貰ひたいのは、さう云ふ月明りの部屋の中に、たつた一人坐つてゐた、玉人のやうな女の事だ。僕はその女を見た時程、女の美しさを感じた事はない。」

「有美閨房秀　天人謫降來かね。」
趙生は微笑しながら、さつき王生が見せた會眞詩の冒頭の二句を口ずさんだ。
「まあ、そんなものだ。」
話したいと云つた癖に、王生はさう答へたぎり、何時までも口を噤んでゐる。趙生はとうとう待兼ねたやうに、そつと王生の膝を突いた。
「それからどうしたのだ？」
「それから一しよに話をした。」
「話をしてから？」
「女が玉簫を吹いて聞かせた。曲は落梅風だつたと思ふが、――」
「それぎりかい？」
「それがすむと又話をした。」
「それから？」
「それから急に眼がさめた。眼がさめて見るとさつきの通り、僕は舟の中に眠つてゐる。艙の外

は見渡す限り、茫茫とした月夜の水ばかりだ。その時の寂しさは話した所が、天下にわかるものは一人もあるまい。

「それ以來僕は心の中では、始終あの女の事を思つてゐる。すると又金陵へ歸つてからも、不思議に毎晩眠りさへすれば、必あの家が夢に見える。しかも一昨日の晩なぞは、僕が女に水晶の雙魚の扇墜を贈つたら、女は僕に紫金碧甸の指環を拔いて渡してくれた。と思つて眼がさめると、扇墜が見えなくなつた代りに、何時か僕の枕もとには、この指環が一つ拔き捨ててある。してみれば女に遇つてゐるのは、全然夢とばかりも思はれない。が、夢でなければ何だと云ふと、――僕も答を失してしまふ。

「もし假に夢だとすれば、僕は夢に見るより外に、あの家の娘を見たことはない。いや、娘がゐるかどうか、それさへはつきりとは知らずにゐる。が、たとひその娘が、實際はこの世にゐないのにしても、僕が彼女を思ふ心は、變る時があるとは考へられない。僕は僕の生きてゐる限り、あの池だの葡萄棚だの綠色の鸚鵡だのと一しよに、やはり夢に見る娘の姿を懷しがらずにはゐられまいと思ふ。僕の話と云ふのは、これだけなのだ。」

「成程、ありふれた才子の情事ではない。」
趙生は半ば憐むやうに、王生の顏へ眼をやつた。
「それでは君はそれ以來、一度もその家へは行かないのかい。」
「うん。一度も行つた事はない。が、もう十日ばかりすると、又松江へ下る事になつてゐる。その時渭塘を通つたら、是非あの酒旗の出てゐる家へ、もう一度舟を寄せて見るつもりだ。」
それから實際十日ばかりすると、王生は例の通り舟を艤して、川下の松江へ下つて行つた。さうして彼が歸つて來た時には、——趙生を始め大勢の友人たちは、彼と一しよに舟を上つた少女の美しいのに驚かされた。少女は實際部屋の窓に、綠色の鸚鵡を飼ひながら、これも去年の秋暮の陰から、そつと隙見をした王生の姿を、絶えず夢に見てゐたさうである。
「不思議な事もあればあるものだ。何しろ先方でも何時の間にか、水晶の雙魚の扇墜が、枕もとにあつたと云ふのだから、——」
趙生はかう遇ふ人毎に、王生の話を吹聽した。最後にその話が傳はつたのは、錢塘の文人瞿祐である。瞿祐はすぐにこの話から、美しい渭塘奇遇記を書いた。……

小說家　どうです、こんな調子では？
編輯者　ロマンテイクな所は好いやうです。
小說家　待つて下さい。まだ後が少し殘つてゐるのです。ええと、美しい渭塘奇遇記を書いた。
——此處までですね。

×　×　×　×　×　×

しかし錢塘の瞿祐は勿論、趙生なぞの友人たちも、王生夫婦を載せた舟が、渭塘の酒家を離れた時、彼が少女と交換した、下のやうな會話を知らなかつた。
「やつと芝居が無事にすんだね。おれはお前の阿父さんに、毎晩お前の夢を見ると云ふ、小說じみた嘘をつきながら、何度冷冷したかわからないぜ。」
「私もそれは心配でしたわ。あなたは金陵の御友だちにも、やつぱり嘘をおつきなすつたの。」

「ああ、やつぱり嘘をついたよ。始は何とも云はなかつたのだが、ふと友達にこの指環を見つけられたものだから、やむを得ず阿父さんに話す筈の、夢の話をしてしまつたのさ。」

「ではほんとうの事を知つてゐるのは、一人も外にはない譯ですわね。去年の秋あなたが私の部屋へ、忍んでいらしつた事を知つてゐるのは、――」

「私。私。」

二人は聲のした方へ、同時に驚いた眼をやつた。さうしてすぐに笑ひ出した。帆檣に吊つた彫花の籠には、綠色の鸚鵡が賢さうに、王生と少女とを見下してゐる。………

× × × × × ×

編輯者　それは蛇足です。折角の讀者の感興をぶち壞すやうなものぢやありませんか？　この小品が雜誌に載るのだつたら、是非とも末段だけは削つて貰ひます。

小說家　まだ最後ではないのです。もう少し後があるのですから、まあ、我慢して聞いて下さい。

× × × × × ×

しかし錢塘の瞿祐は勿論、幸福に滿ちた王生夫婦も、舟が渭塘を離れた時、少女の父母が交換した、下のやうな會話を知らなかつた。父母は二人とも目かげをしながら、水際の柳や槐の陰に、その舟を見送つてゐたのである。

「お婆さん。」

「お爺さん。」

「まづまづ無事に芝居もすむし、こんな目出たい事はないね。」

「ほんたうにこんな目出たい事には、もう二度とは遇へませんね。唯私は娘や壻の、苦しさうな噓を聞いてゐるのが、それはそれは苦勞でしたよ。お爺さんは何も知らないやうに、默つてゐろと御云ひなすつたから、一生懸命にすましてゐましたが、今更あんな噓をつかなくつても、すぐに一しよにはなれるでせうに、——」

「まあ、さうやかましく云はずにやれ。娘も壻も極り惡さに、智慧袋を絞つてついた噓だ。その

上壻の身になれば、ああでも云はぬと、一人娘は、容易にくれまいと思つたかも知れぬ。お婆さん、お前はどうしたと云ふのだ。こんな目出たい婚禮に、泣いてばかりゐてはすまないぢやないか？」

「お爺さん。お前さんこそ泣いてゐる癖に……」

× × × × × ×

小說家　もう五六枚でおしまひです。次手に殘りも讀んで見ませう。

編輯者　いや、もうその先は澤山です。ちよいとその原稿を貸して下さい。あなたに默つて置くと、だんだん作品が惡くなりさうです。今までも中途で切つた方が、遙に好かつたと思ひますが、――兎に角この小品は貰ひますから、そのつもりでゐて下さい。

小說家　其處で切られては困るのですが、――

編輯者　おや、もう餘程急がないと、五時の急行には間に合ひませんよ。原稿の事なぞはかまつてゐずに、早く自動車でも御呼びなさい。

小說家　さうですか。それは大變だ。ではさやうなら。何分よろしく。
編輯者　さやうなら、御機嫌好う。

（大正十年三月）

往生繪卷

童　やあ、あそこへ妙な法師が來た。みんな見ろ。みんな見ろ。

鮓賣の女　ほんたうに妙な法師ぢやないか？　あんなに金鼓をたたきながら、何だか大聲に喚いてゐる。……

薪賣の翁　わしは耳が遠いせゐか、何を喚くのやら、さつぱりわからぬ。もしもし、あれは何と云うて居りますな？

箔打の男　あれは「阿彌陀佛よや。おおい。おおい」と云つてゐるのさ。

薪賣の翁　ははあ、――では氣違ひだな。

箔打の男　まあ、そんな事だらうよ。

菜賣の媼　いやいや、難有い御上人かも知れぬ。私は今の間に拜んで置かう。

鮓賣の女　それでも憎憎しい顏ぢやないか？　あんな顏をした御上人が何處の國にゐるものかね。

奈良の媼　勿體ない事を御云ひでない。罰でも當つたら、どうおしだえ？

童　氣違ひやい。氣違ひやい。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

犬　わんわん。わんわん。

物詣の女房　御覽なさいまし。可笑しい法師が參りました。

その伴　ああ云ふ莫迦者は女と見ると、惡戯をせぬとも限りません。幸ひ近くならぬ内に、こちらの路へ切れてしまひませう。

鑄物師　おや、あれは多度の五位殿ぢやないか？

水銀を商ふ旅人　五位殿だか何だか知らないが、あの人が急に弓矢を捨てて、出家してしまつたものだから、多度では大變な騒ぎだつたよ。

青侍　成程五位殿に違ひない。北の方や御子様たちは、さぞかし御歎きなすつたらう。

水銀を商ふ旅人　何でも奥方や御子供衆は、泣いてばかり御出でだとか云ふ事でした。

鑄物師　しかし妻子を捨ててまでも、佛門に入らうとなすつたのは、近頃健氣な御志だ。

干魚を賣る女　何の健氣な事がありますものか？　捨てられた妻子の身になれば、彌陀佛でも女でも、男を取つたものには怨みがありますわね。

靑侍　いや、大きにこれも一理窟だ。はははは。

犬　わんわん。わんわん。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

馬上の武者　ええ、馬が驚くわ。どうどう。

櫃をおへる從者　氣違ひには手がつけられませぬ。

老いたる尼　あの法師は御存知の通り、殺生好きな惡人でしたが、よく發心したものですね。

若き尼　ほんたうに恐しい人でございました。山狩や川狩をするばかりか、乞食なぞも遠矢にかけましたつけ。

手に足駄を穿ける乞食　好い時に遇つたものだ。もう二三日早かつたら、胴中に矢の穴が明いたかも知れぬ。

栗胡桃などを商ふ主　どうして又ああ云ふ殺伐な人が、頭を剃る氣になつたのでせう？

老いたる尼　さあ、それは不思議ですが、やはり御佛の御計らひでせう。
油を商ふ主　私はきつと天狗か何かが、憑いてゐると思ふのだがね。
栗胡桃などを商ふ主　いや、私は狐だと思つてるのさ。
油を商ふ主　それでも天狗はどうかすると、佛に化けると云ふぢやないか？
栗胡桃などを商ふ主　何、佛に化けるものは、天狗ばかりに限つた事ぢやない。狐もやつぱり化けるさうだ。
手に足駄を穿ける乞食　どれ、この暇に頸の袋へ、栗でも一ぱい盜んで行かうか。
若き尼　あれあれ、あの金鼓の音に驚いたのか、鷄が皆屋根へ上りました。
五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。
釣をする下衆　これは騷騷しい法師が來たものだ。
その伴　どうだ、あれは？　跛の乞食が駈けて行くぜ。
牟子をしたる旅の女　私はちと足が痛うなつた。あの乞食の足でも借りたいものぢや。
皮子を負へる下人　もうこの橋を越えさへすれば、すぐに町でございます。

釣をする下衆　牟子の中が一目見てやりたい。

その伴　おや、側見をしてゐる内に、何時か餌をとられてしまつた。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

鴉　かあかあ。

田を植うる女「時鳥よ。おれよ。かやつよ。おれ泣きてぞわれは田に立つ。」

その伴　御覽よ。可笑しい法師ぢやないか？

鴉　かあかあ。かあかあ。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

暫時人聲なし。松風の音　こうこう。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

再び松風の音　こうこう。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

老いたる法師　御坊。御坊。

五位の入道　身共を御呼びとめなすつたかな？
老いたる法師　如何にも。御坊は何處へ御行きなさる？
五位の入道　西へ參る。
老いたる法師　西は海ぢや。
五位の入道　海でもとんと大事ござらぬ。身共は阿彌陀佛を見奉るまでは、何處までも西へ參る所存ぢや。
老いたる法師　これは面妖な事を承るものぢや。では御坊は阿彌陀佛が、今にもありありと目のあたりに、拜ませられると御思ひかな？
五位の入道　思はねば何も大聲に、御佛の名なぞを呼びは致さぬ。身共の出家もその爲でござるよ。
老いたる法師　それには何か仔細でもござるかな？
五位の入道　いや、別段仔細なぞはござらぬ。唯一昨日狩の歸りに、或講師の說法を聽聞したと御思ひなされい。その講師の申されるのを聞けば、どのやうな破戒の罪人でも、阿彌陀佛に知

遇し奉れば、淨土に往かれると申す事ぢや。身共はその時體中の血が、一度に燃え立つたかと思ふ程、急に阿彌陀佛が戀しうなつた。…………

老いたる法師　それから御坊はどうたされたな？

五位の入道　身共は講師をとつて伏せた。

老いたる法師　何、とつて伏せられた？

五位の入道　それから刀を引き拔くと、講師の胸さきへつきつけながら、阿彌陀佛の在處を責め問うたよ。

老いたる法師　これは又滅相な尋ね方ぢや。さぞ講師は驚いたでござらう。

五位の入道　苦しさうに眼を吊り上げた儘、西、西と申された。――や、とかうするうちに、もう日暮ぢや。途中に暇を費してゐては、阿彌陀佛の御前も畏れ多い。では御免を蒙らうか。――阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

老いたる法師　いや、飛んだ物狂ひに出合うた。どれわしも歸るとしよう。

三度松風の音　こうこう。更に又浪の音　どぶりどぶり。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

浪の音　時に千鳥の聲　ちりりりちりちり。

五位の入道　阿彌陀佛よや。おおい。おおい。——この海邊には舟も見えぬ。見えるのは唯浪ばかりぢや。阿彌陀佛の住まれる國は、あの浪の向ふにあるかも知れぬ。もし身共が鵜の鳥ならば、すぐに其處へ渡るのぢやが、……しかしあの講師も阿彌陀佛には、廣大無邊の慈悲があると云うた。して見れば身共が大聲に、御佛の名前を呼び續けたら、答位はなされぬ事もあるまい。されずば呼び死に、死ぬるまでぢや。幸ひ此處に松の枯木が、二股に枝を伸ばしてゐる。まづこの梢に登るとしようか。——阿彌陀佛よや。おおい。おおい。

再び浪の音　どぶりどぶん。

老いたる法師　あの物狂ひに出合つてから、もう今日は七日目ぢや。何でも生身の阿彌陀佛に、御眼にかかるなぞと云うてゐたが。その後は何處へ行き居つたか、——おお、この枯木の梢の上に、たつた一人登つてゐるのは、紛れもない法師ぢや。御坊。御坊。……返事をせぬのも不思議はない。何時か息が絶えてゐるわ。餌袋も持たぬ所を見れば、可哀さうに餓死んだと見え

る。

三度波の音　どぶんどぶん。

老いたる法師　この儘梢に捨てて置いては、鴉の餌食にならうも知れぬ。何事も前世の因縁ぢや。どれわしが葬うてやらう。――や、これはどうぢや。この法師の屍骸の口には、まつ白な蓮華が開いてゐるぞ。さう云へば此處へ來た時から、異香も漂うてはゐた容子ぢや。では物狂ひと思うたのは、尊い上人でゐらせられたのか。それとも知らずに、御無禮を申したのは、反へす反へすもわしの落度ぢや。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。南無阿彌陀佛。

（大正十年三月）

母

部屋の隅に据ゑた姿見には、西洋風に壁を塗つた、しかも日本風の疊がある、――上海特有の旅館の二階が、一部分はつきり映つてゐる。まづつきあたりに空色の壁、それから眞新しい何疊かの疊、最後にこちらへ後を見せた、西洋髪の女が一人、――それが皆冷やかな光の中に、切ない程はつきり映つてゐる。女は其處にさつきから、縫物か何かしてゐるらしい。

尤も後は向いたと云ふ條、地味な銘仙の羽織の肩には、崩れかかつた前髪のはづれに、蒼白い横顔が少し見える。勿論肉の薄い耳に、ほんのり光が透いたのも見える。やや長めた揉み上げの毛が、かすかに耳の根をぼかしたのも見える。

この姿見のある部屋には、隣室の赤兒の啼き聲の外に、何一つ沈默を破るものはない。未に降り止まない雨の音さへ、此處では一層その沈默に、單調な氣もちを添へるだけである。

「あなた。」

さう云ふ何分かが過ぎ去つた後、女は仕事を續けながら、突然、しかし覺束なさそうに、かう誰かへ聲をかけた。

誰か、——部屋の中には女の外にも、丹前を羽織つた男が一人、ずつと離れた疊の上に、英字新聞をひろげた儘、長長と腹這ひになつてゐる。が、その聲が聞えないのか、男は手近の灰皿へ、卷煙草の灰を落したきり、新聞から眼さへ擧げようとしない。

「あなた。」

女はもう一度聲をかけた。その癖女自身の眼もぢつと針の上に止まつてゐる。

「何だい。」

男は幾分うるささうに、丸丸と肥つた、口髭の短い、活動家らしい頭を擡げた。

「この部屋ね、——この部屋は變へちやいけなくつて？」

「部屋を變へる？　だつて此處へはやつと昨夜、引つ越して來たばかりぢやないか？」

男の顏はけげんさうだつた。

「引つ越して來たばかりでも。――前の部屋ならば明いてゐるでせう？」

男は彼是二週間ばかり、彼等が窮屈な思ひをして來た、日當りの惡い三階の部屋が、一瞬間眼の前に見えるやうな氣がした。――塗りの剝げた窓側の壁には、色の變つた疊の上に更紗の窓掛けが垂れ下つてゐる。その窓には何時水をやつたか、花の乏しい天竺葵が、薄い埃をかぶつてゐる。おまけに窓の外を見ると、始終ごみごみした橫町に、麥藁帽をかぶつた支那の車夫が、所在なさうにうろついてゐる。……

「だがお前はあの部屋にゐるのは、嫌だ嫌だと云つてゐたぢやないか？」

「ええ。それでも此處へ來て見たら、急に又この部屋が嫌になつたんですもの。」

女は針の手をやめると、もの憂さうに顏を擧げて見せた。眉の迫つた、眼の切れの長い、感じの銳さうな顏だちである。が、眼のまはりの暈を見ても、何か苦勞を堪へてゐる事は、多少想像が出來ないでもない。さう云へば病的な氣がする位、米嚙みにも靜脈が浮き出してゐる。

「ね、好いでせう。……いけなくて？」

「しかし前の部屋よりは、廣くもあるし居心も好いし、不足を云ふ理由はないんだから、――そ

れとも何か嫌な事があるのかい？」

「何つて事はないんですけれど。……」

女はちよいとためらつたものの、それ以上立ち入つては答へなかつた。が、もう一度念を押すやうに、同じ言葉を繰り返した。

「いけなくつて、どうしても？」

今度は男が新聞の上へ煙草の煙を吹きかけたぎり、好いとも悪いとも答へなかつた。部屋の中は又ひつそりになつた。唯外では不相變、休みのない雨の音がしてゐる。

「春雨やか、――」

男は少時たつた後、ごろりと仰向きに寝轉ぶと、獨り言のやうにかう云つた。

「蕪湖住みをするやうになつたら、發句でも一つ始めるかな。」

女は何とも返事をせずに、縫物の手を動かしてゐる。

「蕪湖もそんなに悪い所ぢやないぜ。第一社宅は大きいし、庭も相當に廣いしするから、草花なぞ作るには持つて來いだ。何でも元は雍家花園とか云つてね、――」

男は突然口を噤んだ。何時か森とした部屋の中には、かすかに人の泣くけはひがしてゐる。

「おい。」

泣き聲は忿に聞えなくなつた。と思ふとすぐに又、途切れ途切れに續き出した。

「おい。敏子。」

半ば體を起した男は、疊に片肘靠せた儘、當惑らしい眼つきを見せた。

「お前は己と約束したぢやないか？　もう愚痴はこぼすまい。もう涙は見せない事にしよう。もう、――」

男はちよいと瞼を擧げた。

「それとも何かあの事以外に、悲しい事でもあるのかい？　たとへば日本へ歸りたいとか、支那でも田舍へは行きたくないとか、――」

「いいえ。――いいえ。そんな事ぢやなくつてよ。」

敏子は涙を落し落し、意外な程烈しい打消し方をした。

「私はあなたのいらつしやる所なら、何處へでも行く氣でゐるんです。ですけれども、――」

敏子は伏眼になつたなり、溢れて來る涙を抑へようとするのか、ぢつと薄い下脣を嚙んだ。見れば蒼白い頰の底にも、眼に見えない炎のやうな、切迫した何物かが燃え立つてゐる。震へる肩、濡れた睫毛、——男はそれらを見守りながら、現在の氣もちとは沒交渉に、一瞬間妻の美しさを感じた。

「ですけれども、——この部屋は嫌なんですもの。」

「だからさ、だからさつきもさう云つたぢやないか？　何故この部屋がそんなに嫌だか、それさへはつきり云つてくれれば、——」

男は此處まで云ひかけると、敏子の眼がぢつと彼の顏へ、注がれてゐるのに氣がついた。その眼には涙の漂つた底に、殆ど敵意にも紛ひ兼ねない、悲しさうな光が閃いてゐる。何故この部屋が嫌になつたか？——それは獨り男自身の疑問だつたばかりではない。同時に又敏子が無言の内に、男へ突きつけた反問である。男は敏子と眼を合せながら、二の句を次ぐのに躊躇した。

しかし言葉が途切れたのは、ほんの數秒の間である。男の顏には見る見る内に、了解の色が漲つて來た。

「あれか？」

男は感動を蔽ふやうに、妙に素つ氣のない聲を出した。

「あれは己も氣になつてゐたんだ。」

敏子は男にかう云はれると、ぽろぽろ膝の上へ涙を落した。

窓の外には何時の間にか、日の暮が雨を煙らせてゐる。その雨の音を撥ねのけるやうに、空色の壁の向うでは、今も亦赤兒が泣き續けてゐる。……

二

二階の出窓には鮮かに朝日の光が當つてゐる。その向うには三階建の、赤煉瓦にかすかな苔の生えた、逆光線の家が聳えてゐる。薄暗いこちらの廊下にゐると、出窓はこの家を背景にした、大きい一枚の畫のやうに見える。嚴乘な樫の窓枠が、丁度額縁を嵌めたやうに見える。その畫のまん中には一人の女が、こちらへ横顏を向けながら、小さな靴足袋を編んでゐる。

女は敏子よりも若いらしい。雨に洗はれた朝日の光は、その肉附きの豊かな肩へ、――派手な

大島の羽織の肩へ、はつきり大幅に流れてゐる。それがやや俯向きになつた、血色の好い頬に反射してゐる。心もち厚い唇の上の、かすかな生ぶ毛にも反射してゐる。

午前十時と十一時との間、――旅館では今が一日中でも、一番靜かな時刻である。商賣に來たのも、見物に來たのも、泊り客は大抵外出してしまふ。下宿してゐる勤め人たちも勿論午後までは歸つて來ない。その跡には唯長い廊下に、時時上草履を響かせる、女中の足音だけが殘つてゐる。

この時もそれが遠くから、だんだんこちらへ近づいて來ると、出窓に面した廊下には、四十恰好の女中が一人、紅茶の道具を運びながら、影畫のやうに通りかかつた。女中は何とも云はれなかつたら、女のゐる事も氣がつかずに、その儘通りすぎてしまつたかも知れない。が、女は女中の姿を見ると、心安さうに聲をかけた。

「お清さん。」

女中はちよいと會釋してから、出窓の方へ歩み寄つた。

「まあ、御精が出ますこと。――坊ちやんはどうなさいました？」

「うちの若様？　若様は今お休み中。」
女は編針を休めた儘、子供のやうに微笑した。
「時にね、お清さん。」
「何でございます？　眞面目さうに。」
女中も出窓の日の光に、前掛だけくつきり照らさせながら、淺黒い眼もとに微笑を見せた。
「御隣の野村さん、——野村さんでせう、あの奥さんは？」
「ええ、野村敏子さん。」
「敏子さん？　ぢや私と同じ名だわね。あの方はもう御立ちになつたの？」
「いいえ、まだ五六日は御滯在でございませう。それから何でも蕪湖とかへ、——」
「だつてさつき前を通つたら、御隣にはどなたもいらつしやらなかつたわよ。」
「ええ、昨晩急に又、三階へ御部屋が變りましたから、」
「さう。」
女は何か考へるやうに、丸丸した顏を傾けて見せた。

「あの方でせう?　此處へ御出でになると、その日に御子さんをなくなしたのは?」
「ええ。御氣の毒でございますわね。すぐに病院へも御入れになつたんですけれど。」
「ぢや病院で御なくなりなすつたの?　道理で何にも知らなかつた。」
女は前髪を割つた額に、かすかな憂鬱の色を浮べた。が、すぐに又元の通り、快活な微笑を取り戻すと、悪戯さうな眼つきになつた。
「もうそれで御用ずみ。どうかあちらへいらしつて下さい。」
「まあ、隨分でございますね。」
女中は思はず笑ひ出した。
「そんな邪慳な事を仰有ると、蔦の家から電話がかかつて來ても、内證で旦那樣へ取次ぎますよ。」
「好いわよ。早くいらつしやいつてば。紅茶がさめてしまふぢやないの?」
女中が出窓にゐなくなると、女は又編物を取り上げながら、小聲に歌をうたひ出した。
午前十時と十一時との間、――旅館では今が一日中でも、一番靜かな時刻である。部屋毎の花瓶に素枯れた花は、この間に女中が取り捨ててしまふ。二階三階の眞鍮の手すりも、この間に下

男が磨くらしい。さう云ふ沈默が擴がつた中に、唯往來のざわめきだけが、硝子戸を開け放した諸方の窓から、日の光と一しよにはひつて來る。

その内にふと女の膝から、毛糸の球が轉げ落ちた。球はとんと彈むが早いか、一筋の赤を引きずりながら、ころころ廊下へ出ようとする、――と思ふと誰か一人、丁度其處へ來かかつたのが、靜かにそれを拾ひ上げた。

「どうも有難うございました。」

女は籐椅子を離れながら、恥しさうに會釋をした。見れば球を拾つたのは、今し方女中と噂をした、瘦せぎすな隣室の夫人である。

「いいえ。」

毛糸の球は細い指から、脂よりも白い括り指へ移つた。

「此處は暖かでございますね。」

敏子は出窓へ歩み出ると、眩しさうにやや眼を細めた。

「ええ、かうやつて居りましても、居睡りが出る位でございますわ。」

二人の母は佇んだ儘、幸福さうに微笑し合つた。
「まあ、御可愛いたあたですこと。」
敏子の聲はさりげなかつた。が、女はその言葉に、思はずそつと眼を外らせた。
「二年ぶりに編針を持つて見ましたの。――あんまり暇なもんですから。」
「私などはいくら暇でも、怠けてばかり居りますわ。」
女は籐椅子へ編物を捨てると、仕方がなささうに微笑した。敏子の言葉は無心の内に、もう一度女を打つたのである。
「お宅の坊ちやんは、――坊ちやんでございましたわね？ 何時御生れになりましたの？」
敏子は髪へ手をやりながら、ちらりと女の顔を眺めた。昨日は泣き聲を聞いてゐるのも堪へられない氣がした隣室の赤兒、――それが今では何物よりも、敏子の興味を動かすのである。しかもその興味を滿足させれば、反つて苦しみを新たにするのも、はつきりわかつてはゐるのである。これは小さな動物が、コブラの前では動けないやうに、敏子の心も何時の間にか、苦しみそのものの催眠作用に捉はれてしまつた結果であらうか？ それとも又手傷を負つた兵士が、わざわざ

傷口を開いてまでも、一時の快を貪るやうに、いやが上にも苦しまねばやまない、病的な心理の一例であらうか？

「この御正月でございました。」

女はかう答へてから、ちよいとためらふ氣色を見せた。しかしすぐ眼を擧げると、氣の毒さうにつけ加へた。

「御宅ではとんだ事でございましたつてねえ。」

敏子は沾んだ眼の中に、無理な微笑を漂はせた。

「ええ、肺炎になりましたものですから、――ほんたうに夢のやうでございました。」

「それも御出て匆匆にねえ。何と申し上げて好いかわかりませんわ。」

女の眼には何時の間にか、かすかに涙が光つてゐる。

「私なぞはそんな目にあつたら、まあ、どうするでございませう？」

「一時は隨分悲しうございましたけれども、――もうあきらめてしまひましたわ。」

二人の母は佇んだ儘、寂しさうな朝日の光を眺めた。

「こちらは惡い風が流行りますの。」

女は考へ深さうに、途切れてゐた話を續け出した。

「內地はよろしうございますわね。氣候もこちら程不順ではなし、――」

「參りたてでよくはわかりませんけれども、大へん雨の多い所でございますね。」

「今年は餘計――あら、泣いて居りますわ。」

女は耳を傾けた儘、別人のやうな微笑を浮べた。

「ちよいと御免下さいまし。」

しかしその言葉が終らない內に、もう其處へはさつきの女中が、ばたばた上草履を鳴らせながら、泣き立てる赤兒を抱きそやして來た。赤兒を、――美しいメリンスの着物の中に、しかめた顏ばかり出した赤兒を、――敏子が內心見まいとしてゐた、丈夫さうに顋の括れた赤兒を！

「私が窓を拭きに參りますとね、すぐにもう眼を御覺ましなすつて。」

「どうも憚り樣。」

女はまだ慣れなさうに、そつと赤兒を胸に取つた。

「まあ、御可愛い。」

敏子は顔を寄せながら、鋭い乳の臭ひを感じた。

「おお、おお、よく肥つていらつしやる。」

やや上氣した女の顔には、絶え間ない微笑が滿ち渡つた。女は敏子の心もちに、同情が出來ない譯ではない。しかし、——しかしその乳房の下から、——張り切つた母の乳房の下から、汪然と湧いて來る得意の情は、どうする事も出來なかつたのである。

三

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戰ぎながら、庭の草や土の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。いや、草や土ばかりではない。その槐に張り渡した、この庭には似合はない、水色のハムモツクにもふり撒いてゐる。ハムモツクの中に仰向けになつた、夏のズボンに胴衣しかつけない、小肥りの男にもふり撒いてゐる。

男は葉卷に火をつけた儘、槐の枝に吊り下げた、支那風の鳥籠を眺めてゐる。鳥は文鳥か何か

らしい。これも明暗の斑點の中に、止り木をあちこち傳はつては、時時さも不思議さうに籠の下の男を眺めてゐる。男はその度にほほ笑みながら、葉卷を口へ運ぶ事もある。或は又人と話すやうに、「こら」とか「どうした？」とか云ふ事もある。

あたりは庭木の戰ぎの中に、かすかな草の香を蒸らせてゐる。一度ずつと遠い空に汽船の笛の響いたぎり、今はもう人音も何もしない。あの汽船はとうに去つたであらう。赤濁りに濁つた長江の水に、眩い水脈を引いたなり、西か東かへ去つたであらう。その水の見える波止場には、裸も同樣な乞食が一人、西瓜の皮を嚙ぢつてゐる。其處には又仔豚の群も、長長と橫たはつた親豚の腹に、乳房を爭つてゐるかも知れない、――小鳥を見るのにも飽きた男は、そんな空想に浸つたなり、何時かうとうと眠りさうになつた。

「あなた。」

男は大きい眼を明いた。ハンモツクの側に立つてゐるのは、上海の旅館にゐた時より、やや血色の好い敏子である。髮にも、夏帶にも、中形の湯帷子にも、やはり明暗の斑點を浴びた、白粉をつけない敏子である。男は妻の顏を見た儘、無遠慮に大きい欠伸をした。それからさも大儀さ

うに、ハンモツクの上へ體を起した。

「郵便よ、あなた。」

敏子は眼だけ笑ひながら、何本か手紙を男へ渡した。と同時に湯帷子の胸から、桃色の封筒にはひつてゐる、小さい手紙を拔いて見せた。

「今日は私にも來てゐるのよ。」

男はハムモツクに腰かけたなり、もう短い葉卷を噛み噛み、無造作に手紙を讀み始めた。敏子も其處へ佇んだ儘、封筒と同じ桃色の紙へ、ぢつと眼を落してゐる。

雍家花園の槐や柳は、午過ぎの微風に戰ぎながら、この平和な二人の上へ、日の光と影とをふり撒いてゐる。文鳥は殆ど囀らない。何か唸る蟲が一匹、男の肩へ舞ひ下りたが、直にそれも飛び去つてしまつた。……………

かう云ふ少時の沈默の後、敏子は伏せた眼も擧げずに、突然かすかな叫び聲を出した。

「あら、お隣の赤さんも死んだんですつて。」

「お隣？」

男はちよいと聞き耳を立てた。

「お隣とは何處だい？」

「お隣よ。ほら、あの上海の××館の、――」

「ああ、あの子供か？　そりや氣の毒だな。」

「あんなに丈夫さうな赤さんがねえ。……」

「何だい、病氣は？」

「やつぱり風邪ですつて。始は寢冷え位の事と思ひ居り候ところ、――ですつて。」

敏子はやや興奮したやうに、口早に手紙を讀み續けた。

「病院に入れ候時には、もはや手遲れと相成り、――ね、よく似てゐるでせう？　注射を致すやら、酸素吸入を致すやら、いろいろ手を盡し候へども、――それから何と讀むのかしら？　泣き聲だわ。泣き聲も次第に細るばかり、その夜の十一時五分程前には、遂に息を引き取り候。その時の私の悲しさ、重重御察し下され度、……」

「氣の毒だな。」

男はもう一度ハムモツクに、ゆらりと仰向けになりながら、同じ言葉を繰返した。男の頭の何處かには、未に瀕死の赤兒が一人、小さい喘ぎを續けてゐる。と思ふとその喘ぎは、何時か又泣き聲に變つてしまふ。雨の音の間を縫つた、健康な赤兒の泣き聲に。——男はさう云ふ幻の中にも、妻の讀む手紙に聽き入つてゐた。

「重重御察し下され度、それにつけても何時ぞや御許樣に御眼にかかりし事など思ひ出され、あの頃はさぞかし御許樣にも、——ああ、いや、いや。ほんたうに世の中はいやになつてしまふ。」

敏子は憂鬱な眼を擧げると、神經的に濃い眉をひそめた。が、一瞬の無言の後、鳥籠の文鳥を見るが早いか、嬉しさうに華奢な兩手を拍つた。

「ああ、好い事を思ひついた！　あの文鳥を放してやれば好いわ。」

「放してやる？　あのお前の大事の鳥をか？」

「ええ、ええ、大事の鳥でもかまはなくつてよ。お隣の赤さんのお追善ですもの。ほら、放鳥つて云ふでせう。あの放鳥をして上げるんだわ。文鳥だつてきつと喜んでよ。——私には手がとどかないかしら？　とどかなかつたら、あなた取つて頂戴。」

槐の根もとに走り寄つた敏子は、空氣草履を爪立てながら、出來るだけ腕を伸ばして見た。しかし籠を吊した枝には、容易に指さへとどかうとしない。文鳥は氣でも違つたやうに、小さい翼をばたばたやる。その拍子に又餌壺の黍も、鳥籠の外に散亂する。が、男は面白さうに、唯敏子を眺めてゐた。反らせた喉、膨んだ胸、爪先に重みを支へた足、――さう云ふ妻の姿を眺めてゐた。

「取れないかしら？――取れないわ。」

敏子は足を爪立てた儘、くるりと夫の方へ向いた。

「取つて頂戴よ。よう。」

「取れるものか？　踏み臺でもすれば格別だが、――何も又放すにしても、今直には限らないぢやないか？」

「だつて今直に放したいんですもの、よう。取つて頂戴よう。取つて下さらなければいぢめるわよ。よくつて？　ハムモツクを解いてしまふわよ。――」

敏子は男を睨むやうにした。が、眼にも脣にも、漲つてゐるものは微笑である。しかも殆ど平

靜を失した、烈しい幸福の微笑である。男はこの時妻の微笑に、何か酷薄なものさへ感じた。日の光に煙つた草木の奥に、何時も人間を見守つてゐる、氣味の惡い力に似たものさへ。

「莫迦な事をするなよ。――」

男は葉卷を投げ捨てながら、冗談のやうに妻を叱つた。

「第一あの何とか云つた、お隣の奥さんにもすまないぢやないか？　あつちぢや子供が死んだと云ふのに、こつちぢや笑つたり騷いだり、……」

するとと敏子はどうしたのか、突然蒼白い顏になつた。その上拗ねた子供のやうに、睫毛の長い眼を伏せると、別に何と云ふ事もなしに、桃色の手紙を破り出した。男はちよいと苦い顏をした。が、氣まづさを押しのける爲か、急に又快活に話し續けた。

「だがまあ、かうしてゐられるのは、兎に角仕合せには違ひないね。上海にゐた時には弱つたからな。病院にゐれば氣ばかりあせるし、ゐなければ又心配するし、――」

男はふと口を噤んだ。敏子は足もとに眼をやつたなり、影になつた頰の上に、何時か淚を光らせてゐる。しかし男は當惑さうに、短い口髭を引張つたきり、何ともその事は云はなかつた。

「あなた。」

息苦しい沈默の續いた後、かう云ふ聲が聞えた時も、敏子はまだ夫の前に、色の惡い顏を背けてゐた。

「何だい？」

敏子は急に夫の顏へ、妙に熱のある眼を注いだ。

「私は、――私は惡いんでせうか！　あの赤さんのなくなつたのが、――」

「なくなつたのが嬉しいんです。御氣の毒だとは思ふんですけれども、――それでも私は嬉しいんです。嬉しくつては惡いんでせうか？　惡いんでせうか？　あなた。」

敏子の聲には今までにない、荒荒しい力がこもつてゐる。男はワイシヤツの肩や胴衣に今は一ぱいにさし始めた、眩い日の光を鍍金しながら、何ともその問に答へなかつた。何か人力に及ばないものが、嚴然と前へでも塞がつたやうに。

（大正十年八月）

好色

平中といふ色ごのみにて、宮仕人はさらなり、人の女など忍びて見ぬはなかりけり。

宇治拾遺物語

何でかこの人に不會では止まむと思ひ迷ける程に、平中病付にけり。然て惱ける程に死にけり。

今昔物語

色を好むといふは、かやうのふるまひなり。

十訓抄

一　畫姿

泰平の時代にふさはしい、優美なきらめき烏帽子の下には、下ぶくれの顔がこちらを見てゐる。そのふつくりと肥つた頬に、鮮かな赤みがさしてゐるのは、何も臙脂をぼかしたのではない。男には珍しい餅肌が、自然と血の色を透かせたのである。髭は品の好い鼻の下に、――と云ふより

も薄い脣の左右に、丁度薄墨を刷いたやうに、僅ばかりしか殘つてゐない。しかしつやゝかな鬢の上には、霞も立たない空の色さへ、ほんのりと青みを映してゐる。耳はその鬢のはづれに、ちよいと上つた耳たぶだけ見える。それが蛤の貝のやうな、暖かい色をしてゐるのは、かすかな光の加減らしい。眼は人よりも細い中に、絶えず微笑が漂つてゐる。殆その瞳の底には、何時でも咲き匂つた櫻の枝が、浮んでゐるのかと思ふ位、晴れ晴れした微笑が漂つてゐる。が、多少注意をすれば、其處には必しも幸福のみが住まつてゐない事がわかるかも知れない。これは遠い何物かに、憧憬を持つた微笑である。同時に又手近い一切に、輕蔑を抱いた微笑である。頸は顏に比べると、寧ろ華奢すぎると評しても好い。その頸には白い汗衫の襟が、かすかに香を焚きしめた、菜の花色の水干の襟と、細い一線を畫いてゐる。顏の後にほのめいてゐるのは、鶴を織り出した几帳であらうか？　それとものどかな山の裾に、女松を描いた障子であらうか？　兎に角曇つた銀のやうな、薄白い明みが擴がつてゐる。……………

　これが古い物語の中から、わたしの前に浮んで來た「天が下の色好み」平の貞文の似顏である。平の好風に子が三人ある、丁度その次男に生まれたから、平中と渾名を呼ばれたと云ふ、わたし

の Don Juan の似顔である。

二　櫻

平中は柱によりかかりながら、漫然と櫻を眺めてゐる。近近と軒に迫つた櫻は、もう盛りが過ぎたらしい。そのやや赤みの褪せた花には、永い晝過ぎの日の光が、さし交した枝の向き向きに、複雜な影を投げ合つてゐる。が、平中の眼は櫻にあつても、平中の心は櫻にない。彼はさつきから漫然と、侍從の事を考へてゐる。

「始めて侍從を見かけたのは、――」

平中はかう思ひ續けた。

「始めて侍從を見かけたのは、――あれは何時の事だつたかな？　さうさう、何でも稻荷詣でに出かけると云つてゐたのだから、初午の朝だつたのに違ひない。あの女が車へ乘らうとする、おれが其處へ通りかかる、――と云ふのが抑抑の起りだつた。顏は扇をかざした陰にちらりと見えただけだつたが、紅梅や萌黃を重ねた上へ、紫の袿をひつかけてゐる、――その容子が何とも云

へなかつた。おまけに輫へはひる所だから、片手に袴をつかんた儘、心もち腰をかがめ加減にした、――その又恰好もたまらなかつたつけ。本院の大臣の御屋形には、ずゐぶん女房も澤山ゐるが、まづあの位なのは一人もないな。あれなら平中が惚れたと云つても、――」

平中はちよいと眞顏になつた。

「だが本當に惚れてゐるかしら？　惚れてゐると云へば、惚れてゐるやうでもあるし、惚れてゐないと云へば、惚れて、――一體こんな事は考へてゐると、だんだんわからなくなるものだが、まあ一通りは惚れてゐるな。尤もおれの事だから、いくら侍従に惚れたと云つても、眼さきまで昏んでしまひはしない。何時かあの範實のやつと、侍従の噂をしてゐたら、憾むらくは髮が薄すぎると、聞いた風な事を云つたつけ、あんな事は一目見た時にもうちやんと氣がついてゐたのだ。範實などと云ふ男は、篳篥こそちつとは吹けるだらうが、好色の話となつた日には、――まあ、あいつはあいつとして置け。差向きおれが考へたいのは、侍従一人の事なのだから、――所でもう少し欲を云へば、顏もあれぢや寂しすぎるな。それも寂しすぎると云ふだけなら、何處か古い畫巻じみた、上品な所がある筈だが、寂しい癖に薄情らしい、妙に落着いた所があるのは、どう

考へても頼もしくない。女でもあゝ云ふ顔をしたのは、存外人を食つてゐるものだ。その上色も白い方ぢやない、淺黑いとまでは行かなくつても、琥珀色位な所はあるな。しかし何時見てもあの女は、何だかかう水際立つた、震ひつきたいやうな風をしてゐる。あれは確かにどの女も、眞似の出來ない藝當だらう。……」

平中は袴の膝を立てながら、うつとりと軒の空を見上げた。空は簇つた花の間に、薄靑い色をなごませてゐる。

「それにしてもこの間から、いくら文を持たせてやつても、返事一つよこさないのは、剛情にも程があるぢやないか？　まあおれが文をつけた女は、大抵は三度目に靡いてしまふ。たまに堅い女があつても、五度と文をやつた事はない。あの惠眼と云ふ佛師の娘なぞは、一首の歌だけに落ちたものだ。それもおれの作つた歌ぢやない。誰かが、さうさう、――義輔が作つた歌たつけ。義輔はその歌を書いてやつても、とんと先方の靑女房には相手にされなかつたとか云ふ話だが、同じ歌でもおれが書けば――尤も侍從はおれが書いても、やつぱり返事はくれなかつたから、あんまり自慢は出來ないかも知れない。しかし兎に角おれの文には必ず女の返事が來る、返事が來

れば逢ふ事になる。逢ふ事になれば大騒ぎをされる。大騒ぎをされれば――ぢきに又それが鼻についてしまふ。かうまあ相場がきまつてゐたものだ。所が侍從には一月ばかりに、ざつと二十通も文を書いたが、何とも便りがないのだからな。おれの艶書の文體にしても、さう無際限にある譯ぢやなし、そろそろもう跡が續かなくなつた。だが今日やつた文の中には、『せめては唯見つとばかりの、二文字だに見せ給へ』と書いてやつたから、何とか今度こそ返事があるだらう。ないかな？　もし今日も亦ないとすれば、――ああ、ああ、おれもついこの間までは、こんな事に氣骨を折る程、意氣地のない人間ぢやなかつたのだがな。何でも豐樂院の古狐は、女に化けると云ふ事だが、きつとあの狐に化かされたのは、こんな氣がするのに違ひない。同じ狐でも奈良坂の狐は、三抱へもあらうと云ふ杉の木に化ける。嵯峨の狐は牛車に化ける。高陽川の狐は女の童に化ける。桃薗の狐は大池に化け――狐の事なぞはどうでも好い。ええと、何を考へてゐたのだつけ？」

平中は空を見上げた儘、そつと欠伸を嚙殺した。花に埋まつた軒先からは、傾きかけた日の光の中に、時時白いものが飜つて來る。何處かに鳩も啼いてゐるらしい。

「兎に角あの女には根負けがする。たとひ逢ふと云はないまでも、おれと一度話さへすれば、きつと手に入れて見せるのだがな。まして一晩逢ひでもすれば、――あの攝津でも小中將でも、まだおれを知らない内は、男嫌ひで通してゐたものだ。それがおれの手にかかると、あの通り好きものになるぢやないか？　侍從にした所が金佛ぢやなし、有頂天にならない筈はあるまい。しかしあの女はいざとなつても、小中將のやうには恥しがるまいな。と云つて又攝津のやうに、妙にとりすます柄でもあるまい。きつと袖を口へやると、眼だけにつこり笑ひながら、――」

「殿樣。」

「どうせ夜の事だから、切り燈臺か何かがともつてゐる。その火の光があの女の髮へ、――」

「殿樣。」

平中はやや慌てたやうに、烏帽子の頭を後へ向けた。後には何時か童が一人、ぢつと伏し眼になりながら、一通の文をさし出してゐる。何でもこれは一心に、笑ふのをこらへてゐたものらしい。

「消息か？」

「はい、侍従様から、——」
童はかう云ひ終ると、匆匆主人の前を下つた。
「侍従様から？　本當かしら？」
平中は殆恐る恐る、青い薄葉の文を開いた。
「範實や義輔の悪戯ぢやないか？　あいつ等はみんなこんな事が、何よりも好きな閑人だから、——おや、これは侍従の文だ。侍従の文には違ひないが、——この文は、これは、何と云ふ文だい？」
平中は文を抛り出した。文には「唯見つとばかりの、二文字だに見せ給へ」と書いてやつた、その「見つ」と云ふ二文字だけが、——しかも平中の送つた文から、この二文字だけ切り抜いたのが、薄葉に貼りつけてあつたのである。
「ああ、ああ、天が下の色好みとか云はれるおれも、この位莫迦にされれば世話はないな。それにしても侍従と云ふやつは、小面の憎い女ぢやないか？　今にどうするか覺えてゐろよ。……」
平中は膝を抱へた儘、茫然と櫻の梢を見上げた。青い薄葉の飜つた上には、もう風に吹かれた

落花が、點點と幾ひらもこぼれてゐる。……

三　雨夜

それから二月程たつた後である。或長雨の續いた夜、平中は一人本院の侍從の局へ忍んで行つた。雨は夜空が溶け落ちるやうに、凄まじい響を立ててゐる。路は泥濘と云ふよりも、大水が出たのと變りはない。こんな晩にわざわざ出かけて行けば、いくらつれない侍從でも、憐れに思ふのは當然である、――かう考へた平中は、局の口へ窺ひよると、銀を張つた扇を鳴らしながら、案内を請ふやうに咳ばらひをした。

すると十五六の女の童が、すぐに其處へ姿を見せた。ませた顔に白粉をつけた、さすがに睡むさうな女の童である。平中は顔を近づけながら、小聲に侍從へ取次を頼んだ。

一度引きこんだ女の童は、局の口へ歸つて來ると、やはり小聲にこんな返事をした。

「どうかこちらに御待ち下さいまし。今に皆樣が御休みになれば、御逢ひになるさうでございますから。」

平中は思はず微笑した。さうして女の童の案内通り、侍從の居間の隣らしい、遣戸の側に腰を下した。

「やつぱりおれは智慧者だな。」

女の童が何處かへ退いた後、平中は獨りにやにやしてゐた。

「さすがの侍從も今度と云ふ今度は、とうとう心が折れたと見える。兎角女と云ふやつは、ものの哀れを感じ易いからな。其處へ親切氣を見せさへすれば、すぐにころりと落ちてしまふ。かう云ふ甲所を知らないから、義輔や範實は何と云つても、――待てよ。だが今夜逢へると云ふのは、何だか話が旨すぎるやうだぞ。――」

平中はそろそろ不安になつた。

「しかし逢ひもしないものが、逢ふと云ふ譯もなささうなものだ。するとおれのひがみかな？何しろざつと六十通ばかり、のべつに文を持たせてやつても、返事一つ貰へなかつたのだから、ひがみの起るのも尤もな話だ。が、ひがみではないとしたら、――又つくづく考へると、ひがみではない氣もしない事はない。いくら親切に絆されても、今までは見向きもしなかつた侍從が、

——と云つても相手はおれだからな。この位平中に思はれたとなれば、急に心も融けるかも知れない。」

平中は衣紋を直しながら、怯づ怯づあたりを透かして見た。が、彼のゐまはりには、くら闇の外に何も見えない。その中に唯雨の音が、檜肌葺の屋根をどよませてゐる。

「ひがみだと思へば、ひがみのやうだし、ひがみでないと、——いや、ひがみだと思つてゐれば、ひがみでも何でもなくなるし、ひがみでないと思つてゐれば、案外ひがみですみさうな氣がする。一體運なぞと云ふやつは、皮肉に出來てゐるものだからな。して見れば、何でも一心にひがみでないと思ふ事だ。さうすると今にもあの女が、——おや、もうみんな寢始めたらしいぞ。」

平中は耳を側立てた。成程ふと氣がついて見れば、不相變小止みない雨聲と一しよに、御前へ詰めてゐた女房たちが局局に歸るらしい、人ざわめきが聞えて來る。

「此處が辛抱のし所だな。もう半時もたちさへすれば、おれは何の造作もなく、日頃の思ひが晴らされるのだ。が、まだ何だか肚の底には、安心の出來ない氣もちもあるぞ。さうさう、これが好いのだつけ。逢はれないものだと思つてゐれば、不思議に逢ふ事が出來るものだ。しかし皮肉

な運のやつは、さう云ふおれの胸算用も見透かしてしまふかも知れないな。ぢや逢はれると考へようか？　それにしても勘定づくだから、やつぱりこちらの思ふやうには、――ああ、胸が痛んで來た。一そ何か侍從なぞとは、緣のない事を考へよう。大分どの局もひつそりしたな。聞えるのは雨の音ばかりだ。ぢや早速眼をつぶつて、雨の事でも考へるとしよう。春雨、五月雨、夕立、秋雨、……秋雨と云ふ言葉があるかしら？　秋の雨、冬の雨、雨だり、雨漏り、雨傘、雨乞ひ、雨龍、雨蛙、雨革、雨宿り、……」

こんな事を思つてゐる内に、思ひがけない物の音が、平中の耳を驚かせた。いや、驚かせたばかりではない、この音を聞いた平中の顏は、突然彌陀の來迎を拜した、信心深い法師よりも、もつと歡喜に溢れてゐた。何故と云へば遣戸の向うに、誰か懸け金を外した音が、はつきり耳に響いたのである。

平中は遣戸を引いて見た。戸は彼の思つた通り、するりと閾の上を辷つた。その向うには不思議な程、空焚の匂が立ち罩めた、一面の闇が擴がつてゐる。平中は靜かに戸をしめると、そろそろ膝で這ひながら、手探りに奧へ進み寄つた。が、この艶いた闇の中には、天井の雨の音の外に、

何一つ物のけはひもしない。たまたま手がさはつたと思へば、衣桁や鏡臺ばかりである。平中はだんだん胸の動悸が、高まるやうな氣がし出した。

「ゐないのかな？　ゐれば何とか云ひさうなものだ。」

かう彼が思つた時、平中の手は偶然にも柔かな女の手にさはつた。それからずつと探りまはすと、絹らしい打衣の袖にさはる。その衣の下の乳房にさはる。圓圓した頰や顋にさはる。氷よりも冷たい髮にさはる。――平中はとうとうくら闇の中に、ぢつと獨り横になつた、戀しい侍從を探り當てた。

これは夢でも幻でもない。侍從は平中の鼻の先に、打衣一つかけた儘、しどけない姿を横たへてゐる。彼は其處にゐすくんだなり、我知らずわなわな震へ出した。が、侍從は不相變、身動きをする氣色さへ見えない。こんな事は確か何かの草紙に、書いてあつたやうな心もちがする。それともあれは何年か以前、大殿油の火影に見た何かの畫卷にあつたのかも知れない。

「忝ない。忝ない。今まではつれないと思つてゐたが、もう向後は御佛よりも、お前に身命を捧げるつもりだ。」

平中は侍從を引き寄せながら、かうその耳に囁かうとした。が、いくら氣は急いても、舌は上顎に引ついた儘、聲らしいものは口へ出ない。その内に侍從の髮の匂や、妙に暖い肌の匂は、無遠慮に彼を包んで來る。——と思ふと彼の顏へは、かすかな侍從の息がかかつた。

一瞬間、——その一瞬間が過ぎてしまへば、彼等は必ず愛欲の嵐に、雨の音も、空焚きの匂も、本院の大臣も、女の童も忘却してしまつたに相違ない。しかしこの際どい刹那に侍從は半ば身を起すと、平中の顏に顏を寄せながら、恥しさうな聲を出した。

「お待ちなさいまし。まだあちらの障子には、懸金が下してございませんから、あれをかけて參ります。」

平中は唯頷いた。侍從は二人の褥の上に、匂の好い暖みを殘した儘、そつと其處を立つて行つた。

「春雨、侍從、彌陀如來、雨宿り、雨だれ、侍從、侍從、……………」

平中はちやんと眼を開いたなり、彼自身にも判然しない、いろいろな事を考へてゐる。すると向うのくら闇に、かちりと懸金を下す音がした。

「雨龍、香爐、雨夜のしなさだめ、ぬば玉の闇のうつつはさだかなる夢にいくらもまさらざりけり、夢にだに、――どうしたのだらう？　懸け金はもう下りたと思つたが、――」
平中は頭を擡げて見た。が、あたりにはさつきの通り、空焚きの匂が漂つた、床しい闇がある ばかりである。侍從は何處へ行つたものか、衣ずれの音も聞えて來ない。
「まさか、――いや、事によると、――」
平中は褥を這ひ出すと、又元のやうに手探りをしながら、向うの障子へ辿りついた。すると障子には部屋の外から、嚴重に懸け金が下してある。その上耳を澄ませて見ても、足音一つさせるものはない。局局が大雨の中に、いづれもひつそりと寢靜まつてゐる。
「平中、平中、お前はもう天が下の色好みでも何でもない。――」
平中は障子に寄りかかつた儘、失心したやうに呟いた。
「お前の容色も劣へた。お前の才も元のやうぢやない。お前は範實や義輔よりも、見下げ果てた意氣地なしだ。……………」

四　好色問答

これは平中の二人の友達——義輔と範實との間に交換された、或無駄話の一節である。

義輔「あの侍從と云ふ女には、さすがの平中もかなはないさうだね。」

範實「さう云ふ噂だね。」

義輔「あいつには好い見せしめだよ。あいつは女御更衣でなければ、どんな女にでも手を出す男だ。ちつとは懲らしてやる方が好い。」

範實「へええ、君も孔子の御弟子か？」

義輔「孔子の敎なぞは知らないがね。どの位女が平中の爲に、泣かされたか位は知つてゐるのだ。もう一言次手につけ加へれば、どの位苦しんだ夫があるか、どの位腹を立てた親があるか、どの位怨んだ家來があるか、それもまんざら知らないぢやない。さう云ふ迷惑をかける男は當然鼓を鳴らして責むべき者だ。君はさう考へないかね？」

範實「さうばかりも行かないからね。成程平中一人の爲に、世間は迷惑してゐるかも知れない。

しかしその罪は平中一人が、負ふべきものでもなからうぢやないか？」
義輔「ぢや又外に誰が負ふのだね？」
範實「それは女に負はせるのさ。」
義輔「女に負はせるのは可哀さうだよ。」
範實「平中に負はせるのも可哀さうぢやないか？」
義輔「しかし平中が口說いたのだからな。」
範實「男は戰場に太刀打ちをするが、女は寢首しか搔かないのだ。人殺しの罪は變るものか。」
義輔「妙に平中の肩を持つな。だがこれだけは確かだらう？ 我我は世間を苦しませないが、平中は世間を苦しませてゐる。」
範實「それもどうだかわからないね。一體我我人間は、如何なる因果か知らないが、互に傷け合はないでは、一刻も生きてはゐられないものだよ。唯平中は我我よりも、餘計に世間を苦しませてゐる。この點は、ああ云ふ天才には、やむを得ない運命だね。」
義輔「冗談ぢやないぜ。平中が天才と一しよになるなら、この池の鰌も龍になるだらう。」

範實「平中は確かに天才だよ。あの男の顏に氣をつけ給へ。あの男の聲を聞き給へ。あの男の文を讀んで見給へ。もし君が女だつたら、あの男と一晩逢つて見給へ。あの男は空海上人だとか小野道風だとかと同じやうに、母の胎内を離れた時から、非凡な能力を授かつて來たのだ。あれが天才でないと云へば、天下に天才は一人もゐない。その點では我我二人の如きも、到底平中の敵ぢやないよ。」

義輔「しかしだね。しかし天才は君の云ふやうに、罪ばかり作つてはゐないぢやないか？　たとへば道風の書を見れば、微妙な筆力に動かされるとか、空海上人の誦經を聞けば――」

範實「僕は何も天才は、罪ばかり作ると云ひはしない。罪も作ると云つてゐるのだ。」

義輔「ぢや平中とは違ふぢやないか？　あいつの作るのは罪ばかりだぜ。」

範實「それは我我にはわからない筈だ。假名も碌に書けないものには、道風の書もつまらないぢやないか？　信心氣のちつともないものには、空海上人の誦經よりも、傀儡の歌の方が面白いかも知れない。天才の功徳がわかる爲には、こちらにも相當の資格が入るさ。」

義輔「それは君の云ふ通りだがね、平中尊者の功徳なぞは、――」

範實「平中の場合も同じぢやないか？　ああ云ふ好色の天才の功德は、女だけが知つてゐる筈だ。君はさつきどの位女が平中の爲に泣かされたかと云つたが、僕は反對にかう云ひたいね。どの位女が平中の爲に、無上の歡喜を味はつたか、どの位女が平中の爲に、しみじみ生き甲斐を感じたか、どの位女が平中の爲に、犧牲の尊さを教へられたか、どの位女が平中の爲に、

——」

義輔「いや、もうその位で澤山だよ。君のやうに理窟をつければ、案山子も鎧武者になつてしまふ。」

範實「君のやうに嫉妬深いと、鎧武者も案山子と思つてしまふぜ。」

義輔「嫉妬深い？　へええ、これは意外だね。」

範實「君は平中を責める程、淫奔な女を責めないぢやないか？　たとひ口では責めてゐても、肚の底で責めてゐまい。それはお互に男だから、何時か嫉妬が加はるのだ。我我はみんな多少にしろ、もし平中になれるものなら、平中になつて見たいと云ふ、人知れない野心を持つてゐる。その爲に平中は謀叛人よりも、一層我我に憎まれるのだ。考へて見れば可哀さうだよ。」

義輔「ぢや君も平中になりたいかね？」

範實「僕か？　僕はあまりなりたくない。だから僕が平中を見るのは、君が見るのよりも公平なのだ。平中は女が一人出來ると、忽ちその女に飽きてしまふ。さうして誰か外の女に、可笑しい程夢中になつてしまふ。あれは平中の心の中には、何時も巫山の神女のやうな、人倫を絶した美人の姿が、髣髴と浮んでゐるからだよ。平中は何時も世間の女に、さう云ふ美しさを見ようとしてゐる。實際惚れてゐる時には、見る事が出來たと思つてゐるのだ。が、勿論二三度逢へば、さう云ふ蜃氣樓は壞れてしまふ。その爲にあいつは女から女へ、轉轉と憂き身をやつしに行くのだ。しかも末法の世の中に、そんな美人のゐる筈はないから、結局平中の一生は、不幸に終るより仕方がない。その點では君や僕の方が、遙かに仕合せだと云ふものさ。しかし平中の不幸なのは、云はば天才なればこそだね。あれは平中一人ぢやない。空海上人や小野道風も、きつとあいつと似てゐたらう。兎に角仕合になる爲には、御同樣凡人が一番だよ……。」

五　まりも美しとなげく男

平中は獨り寂しさうに、本院の侍從の局に近い、人氣のない廊下に佇んでゐる。その廊下の欄にさした、油のやうな日の色を見ても、又今日は暑さが加はるらしい。が、庇の外の空には、簇簇と綠を抽いた松が、靜かに涼しさを守つてゐる。

「侍從はおれを相手にしない。おれももう侍從は思ひ切つた。――」

平中は蒼白い顏をした儘、ぼんやりこんな事を思つてゐる。

「しかしいくら思ひ切つても、侍從の姿は幻のやうに、必ず眼前に浮んで來る。おれは何時かの雨夜以來、唯この姿を忘れたいばかりに、どの位四方の神佛へ、祈願を凝らしたかわからない。が、加茂の御社へ行けば、御鏡の中にありありと、侍從の顏が映つて見える。淸水の御寺の內陣にはひれば、觀世音菩薩の御姿さへ、その儘侍從に變つてしまふ。もしこの姿が何時までも、おれの心を立ち去らなければ、おれはきつと焦れ死に、死んでしまふのに相違ない。――」

平中は長い息をついた。

「だがその姿を忘れるには、――たつた一つしか手段はない。それは何でもあの女の淺間しい所を見つける事だ。侍從もまさか天人ではなし、不淨もいろいろ藏してゐるだらう。其處を一つ見つけさへすれば、丁度女房に化けた狐が、尾のある事を知られたやうに、侍從の幻も崩れてしまふ。おれの命はその刹那に、やつとおれのものになるのだ。が、何處が淺間しいか、何處が不淨を藏してゐるか、それは誰も教へてくれない。ああ、大慈大悲の觀世音菩薩、どうか其處を御示し下さい、侍從は河原の女乞食と、實は少しも變らない證據を。……」

平中はかう考へながら、ふと懶い視線を擧げた。

「おや、あすこへ來かかつたのは、侍從の局の女の童ではないか？」

あの利口さうな女の童は、撫子重ねの薄物の衵に、色の濃い袴を引きながら、丁度こちらへ歩いて來る。それが赤紙の畫扇の陰に、何か筥を隱してゐるのは、きつと侍從のした糞を捨てに行く所に相違ない。その姿を一目見ると、突然平中の心の中には、或大膽な決心が、稻妻のやうに閃き渡つた。

平中は眼の色を變へたなり、女の童の行く手に立ち塞がつた。そしてその筥をひつたくるや否

や、廊下の向ふに一つ見える、人のゐない部屋へ飛んで行つた。不意を打たれた女の童は、勿論泣き聲を出しながら、ばたばた彼を追ひかけて來る。が、その部屋へ躍りこむと、平中は、遣戸を立て切るが早いか、手早く懸け金を下してしまつた。

「さうだ。この中を見れば間違ひない。百年の戀も一瞬の間に、煙よりもはかなく消えてしまふ。……」

平中はわなわな震へる手に、ふはりと筥の上へかけた、香染の薄物を掲げて見た。筥は意外にも精巧を極めた、まだ眞新しい蒔繪である。

「この中に侍從の糞がある。同時におれの命もある。……」

平中は其處に佇んだ儘、ぢつと美しい筥を眺めた。局の外には忍び忍びに、女の童の泣き聲が續いてゐる。が、それは何時の間にか、重苦しい沈默に呑まれてしまふ。と思ふと遣戸や障子も、だんだん霧のやうに消え始める。いや、もう今では晝か夜か、それさへ平中には判然しない。唯彼の眼の前には、時鳥を描いた筥が一つ、はつきり空中に浮き出してゐる。……

「おれの命の助かるのも、侍從と一生の別れをするのも、皆この筥に懸つてゐる。この筥の蓋を

取りさへすれば、――いや、それは考へものだぞ。侍從を忘れてしまふのが好いか、甲斐のない命を長らへるのが好いか、おれにはどちらとも返答出來ない。たとひ焦がれ死をするにもせよ、この筐の蓋だけは取らずに置かうか？……」

平中は窶れた頬の上に、涙の痕を光らせながら、今更のやうに思ひ惑つた。しかし少時沈吟した後、急に眼を輝かせると、今度はかう心の中に一生懸命の叫聲を擧げた。

「平中！　平中！　お前は何と云ふ意氣地なしだ？　あの雨夜を忘れたのか？　侍從は今もお前の戀を嘲笑つてゐるかも知れないのだぞ。生きろ！　立派に生きて見せろ！　侍從の糞を見さへすれば、必お前は勝ち誇れるのだ。……」

平中は殆氣違ひのやうに、とうとう筐の蓋を取つた。筐には薄い香色の水が、たつぷり半分程はひつた中に、これは濃い香色の物が、二つ三つ底へ沈んでゐる。と思ふと夢のやうに、丁子の匂が鼻を打つた。これが侍從の糞であらうか？　いや、吉祥天女にしてもこんな糞はする筈がない。平中は眉をひそめながら、一番上に浮いてゐた、二寸程の物をつまみ上げた。さうして髭にも觸れる位、何度も匂を嗅ぎ直して見た。匂は確かに紛れもない、飛び切りの沈の匂である。

「これはどうだ！　この水もやはり匂ふやうだが、――」

平中は筺を傾けながら、そつと水を啜つて見た。水も丁子を煮返した、上澄みの汁に相違ない。

「するとこいつも香木かな？」

平中は今つまみ上げた、二寸程の物を噛みしめて見た。すると齒にも透る位、苦味の交つた甘さがある。それ上彼の口の中には、急ち橘の花よりも涼しい、微妙な匂が一ぱいになつた。侍從は何處から推量したか、平中のたくみを破る爲に、香細工の糞をつくつたのである。

「侍從！　お前は平中を殺したぞ！」

平中はかう呻きながら、ばたりと蒔繪の筺を落した。さうして其處の床の上へ、佛倒しに倒れてしまつた。その半死の瞳の中には、紫摩金の圓光にとりまかれた儘、嫣然と彼にほほ笑みかけた侍從の姿を浮べながら。……

（大正十年九月）

藪の中

さやうでございます。あの死骸を見つけたのは、わたしに違ひございません。わたしは今朝何時もの通り、裏山の杉を伐りに參りました。すると山陰の藪の中に、あの死骸があつたのでございます。あつた處でございますか？　それは山科の驛路からは、四五町程隔たつて居りませう。竹の中に痩せ杉の交つた、人氣のない所でございます。

死骸は縹の水干に、都風のさび烏帽子をかぶつた儘、仰向けに倒れて居りました。何しろ一刀とは申すものの、胸もとの突き傷でございますから、死骸のまはりの竹の落葉は、蘇芳に滲みたやうでございます。いえ、血はもう流れては居りません。傷口も乾いて居つたやうでございます。おまけに其處には、馬蠅が一匹、わたしの足音も聞えないやうに、べつたり食ひついて居りましたつけ。

太刀か何かは見えなかつたか？　いえ、何もございません。唯その側の杉の根がたに、繩が一筋落ちて居りました。それから、――さうさう、繩の外にも櫛が一つございました。死骸のまはりにあつたものは、この二つぎりでございます。が、草や竹の落葉は、一面に踏み荒されて居りましたから、きつとあの男は殺される前に、餘程手痛い働きでも致したのに違ひございません。何、馬はゐなかつたか？　あそこは一體馬なぞには、はひれない所でございます。何しろ馬の通ふ路とは、藪一つ隔たつて居りますから。

檢非違使に問はれたる旅法師の物語

あの死骸の男には、確かに昨日遇つて居ります。昨日の、――さあ、午頃でございませう。場所は關山から山科へ、參らうと云ふ途中でございます。あの男は馬に乘つた女と一しよに、關山の方へ歩いて參りました。女は牟子を垂れて居りましたから、顏はわたしにはわかりません。見えたのは唯萩重ねらしい、衣の色ばかりでございます。馬は月毛の、――確か法師髮の馬のやうでございました。丈でございますか？　丈は四寸もございましたか？――何しろ沙門の事でござ

いますから、その邊ははつきり存じません。男は、――いえ、太刀も帶びて居れば、弓矢も携へて居りました。殊に黒い塗り箙へ、二十あまり征矢をさしたのは、唯今でもはつきり覺えて居ります。

あの男がかやうにならうとは、夢にも思はずに居りましたが、眞に人間の命なぞは、如露亦如電に違ひございません。やれやれ、何とも申しやうのない、氣の毒な事を致しました。

檢非違使に問はれたる放免の物語

わたしが搦め取つた男でございますか？　これは確かに多襄丸と云ふ、名高い盜人でございます。尤もわたしが搦め取つた時には、馬から落ちたのでございませう、粟田口の石橋の上に、うんうん呻つて居りました。時刻でございますか？　時刻は昨夜の初更頃でございます。何時ぞやわたしが捉へ損じた時にも、やはりこの紺の水干に、打出しの太刀を佩いて居りました。唯今はその外にも御覽の通り、弓矢の類さへ携へて居ります。さやうでございますか？　あの死骸の男が持つてゐたのも、――では人殺しを働いたのは、この多襄丸に違ひございません。革を卷いた

弓、黒塗りの箙、鷹の羽の征矢が十七本、――これは皆、あの男が持つてゐたものでございませう。はい。馬も仰有る通り、法師髪の月毛でございます。その畜生に落されるとは、何かの因縁に違ひございません。それは石橋の少し先に、長い端綱を引いた儘、路ばたの青芒を食つて居りました。

この多襄丸と云ふやつは、洛中に徘徊する盗人の中でも、女好きのやつでございます。昨年の秋鳥部寺の賓頭盧の後の山に、物詣でに來たらしい女房が一人、女の童と一しよに殺されてゐたのは、こいつの仕業だとか申して居りました。その月毛に乘つてゐた女も、こいつがあの男を殺したとなれば、何處へどうしたかわかりません。差出がましうございますが、それも御詮議下さいまし。

檢非違使に問はれたる媼の物語

はい、あの死骸は手前の娘が、片附いた男でございます。が、都のものではございません。若狹の國府の侍でございます。名は金澤の武弘、年は二十六歳でございました。いえ、優しい氣立

でございますから、遺恨なぞ受ける筈はございません。

娘でございますか？　娘の名は眞砂、年は十九歳でございます。これは男にも劣らぬ位、勝氣の女でございますが、まだ一度も武弘の外には、男を持つた事はございません。顔は色の淺黑い、左の眼尻に黑子のある、小さい瓜實顔でございます。

武弘は昨日娘と一しよに、若狹へ立つたのでございますが、こんな事になりますとは、何と云ふ因果でございませう。しかし娘はどうなりましたやら、壻の事はあきらめましても、これだけは心配でなりません。どうかこの姥が一生のお願ひでございますから、たとひ草木を分けましても、娘の行方をお尋ね下さいまし。何に致せ憎いのは、その多襄丸とか何とか申す、盗人のやつでございます。壻ばかりか、娘までも……（跡は泣き入りて言葉なし）

×　×　×　×　×　×

多襄丸の白狀

あの男を殺したのはわたしです。しかし女は殺しはしません。では何處へ行つたのか？　それ

はわたしにもわからないのです。まあ、お待ちなさい。いくら拷問にかけられても、知らない事は申されますまい。その上わたしもかうなれば、卑怯な隱し立てはしないつもりです。

わたしは昨日の午少し過ぎ、あの夫婦に出會ひました。その時風の吹いた拍子に、牟子の垂絹が上つたものですから、ちらりと女の顏が見えたのです。ちらりと、——見えたと思ふ瞬間には、もう見えなくなつたのですが、一つにはその爲もあつたのでせう、わたしにはあの女の顏が、女菩薩のやうに見えたのです。わたしはその咄嗟の間に、たとひ男は殺しても、女は奪はうと決心しました。

何、男を殺すなぞは、あなた方の思つてゐるやうに、大した事ではありません。どうせ女を奪ふとなれば、必、男は殺されるのです。唯わたしは殺す時に、腰の太刀を使ふのですが、あなた方は太刀は使はない、唯權力で殺す、金で殺す、どうかするとお爲ごかしの言葉だけでも殺すでせう。成程血は流れない、男は立派に生きてゐる、——しかしそれでも殺したのです。罪の深さを考へて見れば、あなた方が惡いか、わたしが惡いか、どちらが惡いかわかりません。（皮肉なる微笑）

しかし男を殺さずとも、女を奪ふ事が出來れば、別に不足はない譯です。いや、その時の心もちでは、出來るだけ男を殺さずに、女を奪はうと決心したのです。が、あの山科の驛路では、とてもそんな事は出來ません。そこでわたしは山の中へ、あの夫婦をつれこむ工夫をしました。

これも造作はありません。わたしはあの夫婦と途づれになると、向うの山には古塚がある、この古塚を發いて見たら、鏡や太刀が澤山出た、わたしは誰も知らないやうに、山の陰の藪の中へ、さう云ふ物を埋めてある、もし望み手があるならば、どれでも安い値に賣り渡したい、——と云ふ話をしたのです。男は何時かわたしの話に、だんだん心を動かし始めました。それから、——どうです。慾と云ふものは恐しいではありませんか？　それから半時もたたない内に、あの夫婦はわたしと一しよに、山路へ馬を向けてゐたのです。

わたしは藪の前へ來ると、寶はこの中に埋めてある、見に來てくれと云ひました。男は慾に渇いてゐますから、異存のある筈はありません。が、女は馬も下りずに、待つてゐると云ふのです。又あの藪の茂つてゐるのを見ては、さう云ふのも無理はありますまい。わたしはこれも實を云へば、思ふ壺にはまつたのですから、女一人を殘した儘、男と藪の中へはひりました。

藪は少時の間は竹ばかりです。が、半町程行つた處に、やや開いた杉むらがある、――わたしの仕事を仕遂げるのには、これ程都合の好い場所はありません。わたしは藪を押し分けながら、寶は杉の下に埋めてあると、尤もらしい嘘をつきました。男はわたしにさう云はれると、もう痩せ杉が透いて見える方へ、一生懸命に進んで行きます。その内に竹が疎らになると、何本も杉が並んでゐる、――わたしは其處へ來るが早いか、いきなり相手を組み伏せました。男も太刀を佩いてゐるだけに、力は相當にあつたやうですが、不意を打たれてはたまりません。忽ち一本の杉の根がたへ、括りつけられてしまひました。繩ですか？　繩は盜人の有難さに、何時塀を越えるかわかりませんから、ちやんと腰につけてゐたのです。勿論聲を出させない爲にも、竹の落葉を頰張らせれば、外に面倒はありません。

　わたしは男を片附けてしまふと、今度は又女の所へ、男が急病を起したらしいから、見に來てくれと云ひに行きました。これも圖星に當つたのは、申し上げるまでもありますまい。女は市女笠を脫いだ儘、わたしに手をとられながら、藪の奧へはひつて來ました。所が其處へ來て見ると、男は杉の根に縛られてゐる、――女はそれを一目見るなり、何時の間に懷から出してゐたか、き

らりと小刀を引き拔きました。わたしはまだ今までに、あの位氣性の烈しい女は、一人も見た事がありません。もしその時でも油斷してゐたらば、一突きに脾腹を突かれたでせう。いや、それは身を躱した所が、無二無三に斬り立てられる内には、どんな怪我も仕兼ねなかつたのです。が、わたしも多襄丸ですから、どうにかかうにか太刀も拔かずに、とうとう小刀を打ち落しました。いくら氣の勝つた女でも、得物がなければ仕方がありません。わたしはとうとう思ひ通り、男の命は取らずとも、女を手に入れる事は出來たのです。

　男の命は取らずとも、――さうです。わたしはその上にも、男を殺すつもりはなかつたのです。所が泣き伏した女を後に、藪の外へ逃げようとすると、女は突然わたしの腕へ、氣違ひのやうに縋りつきました。しかも切れ切れに叫ぶのを聞けば、あなたが死ぬか夫が死ぬか、どちらか一人死んでくれ、二人の男に恥を見せるのは、死ぬよりもつらいと云ふのです。いや、その内どちらにしろ、生き殘つた男につれ添ひたい、――さうも喘ぎ喘ぎ云ふのです。わたしはその時猛然と、男を殺したい氣になりました。(陰鬱なる興奮)

　こんな事を申し上げると、きつとわたしはあなた方より、殘酷な人間に見えるでせう。しかし

それはあなた方が、あの女の顔を見ないからです。殊にその一瞬間の、燃えるやうな瞳を見ないからです。わたしは女と眼を合せた時、たとひ神鳴に打ち殺されても、この女を妻にしたいと思ひました。妻にしたい、――わたしの念頭にあつたのは、唯かう云ふ一事だけです。これはあなた方の思ふやうに、卑しい色慾ではありません。もしその時色慾の外に、何も望みがなかつたとすれば、わたしは女を蹴倒しても、きつと逃げてしまつたでせう。男もさうすればわたしの太刀に、血を塗る事にはならなかつたのです。が、薄暗い藪の中に、ぢつと女の顔を見た刹那、わたしは男を殺さない限り、此處は去るまいと覺悟しました。

　しかし男を殺すにしても、卑怯な殺し方はしたくありません。わたしは男の繩を解いた上、太刀打ちをしろと云ひました。(杉の根がたに落ちてゐたのは、その時捨て忘れた繩なのです。)男は血相を變へた儘、太い太刀を引き抜きました。と思ふと口も利かずに、憤然とわたしへ飛びかかりました。――その太刀打ちがどうなつたかは、申し上げるまでもありますまい。わたしの太刀は二十三合目に、相手の胸を貫きました。二十三合目に、――どうかそれを忘れずに下さい。わたしは今でもこの事だけは、感心だと思つてゐるのです。わたしと二十合斬り結んだものは、天

下にあの男一人だけですから。（快活なる微笑）

わたしは男が倒れると同時に、血に染まつた刀を下げたなり、女の方を振り返りました。すると、——どうです、あの女は何處にもゐないではありませんか？　わたしは女がどちらへ逃げたか、杉むらの間を探して見ました。が、竹の落葉の上には、それらしい跡も殘つてゐません。又耳を澄ませて見ても、聞えるのは唯男の喉に、斷末魔の音がするだけです。

事によるとあの女は、わたしが太刀打を始めるが早いか、人の助けでも呼ぶ爲に、藪をくぐつて逃げたのかも知れない。——わたしはさう考へると、今度はわたしの命ですから、太刀や弓矢を奪つたなり、すぐに又もとの山路へ出ました。其處にはまだ女の馬が、靜かに草を食つてゐます。その後の事は申し上げるだけ、無用の口數に過ぎますまい。唯、都へはひる前に、太刀だけはもう手放してゐました。——わたしの白狀はこれだけです。どうせ一度は樗の梢に、懸ける首と思つてゐますから、どうか極刑に遇はせて下さい。（昂然たる態度）

清水寺に來れる女の懺悔

――その紺の水干を着た男は、わたしを手ごめにしてしまふと、縛られた夫を眺めながら、嘲るやうに笑ひました。夫はどんなに無念だつたでせう。が、いくら身悶えをしても、體中にかかつた繩目は、一層ひしひしと食ひ入るだけです。わたしは思はず夫の側へ、轉ぶやうに走り寄りました。いえ、走り寄らうとしたのです。しかし男は咄嗟の間に、わたしを其處へ蹴倒しました。丁度その途端です。わたしは夫の眼の中に、何とも云ひやうのない輝きが、宿つてゐるのを覺りました。何とも云ひやうのない、――わたしはあの眼を思ひ出すと、今でも身震ひが出ずにはゐられません。口さへ一言も利けない夫は、その刹那の眼の中に、一切の心を傳へたのです。しかし其處に閃いてゐたのは、怒りでもなければ悲しみでもない、――唯わたしを蔑んだ、冷たい光だつたではありませんか？　わたしは男に蹴られたよりも、その眼の色に打たれたやうに、我知らず何か叫んだぎり、とうとう氣を失つてしまひました。

その内にやつと氣がついて見ると、あの紺の水干の男は、もう何處かへ行つてゐました。跡には唯杉の根がたに、夫が縛られてゐるだけです。わたしは竹の落葉の上に、やつと體を起したなり、夫の顏を見守りました。が、夫の眼の色は、少しもさつきと變りません。やはり冷たい蔑み

の底に、憎しみの色を見せてゐるのです。恥しさ、悲しさ、腹立たしさ、――その時のわたしの心の中は、何と云へば好いかわかりません。わたしはよろよろ立ち上りながら、夫の側へ近寄りました。

「あなた。もうかうなつた上は、あなたと御一しよには居られません。わたしは一思ひに死ぬ覺悟です。しかし、――しかしあなたもお死になすつて下さい。あなたはわたしの恥を御覽になりました。わたしはこの儘あなた一人、お殘し申す譯には參りません。」

わたしは一生懸命に、これだけの事を云ひました。それでも夫は忌はしさうに、わたしを見つめてゐるばかりなのです。わたしは裂けさうな胸を抑へながら、夫の太刀を探しました。が、あの盜人に奪はれたのでせう、太刀は勿論弓矢さへも、藪の中には見當りません。しかし幸ひ小刀だけは、わたしの足もとに落ちてゐるのです。わたしはその小刀を振り上げると、もう一度夫にかう云ひました。

「ではお命を頂かせて下さい。わたしもすぐにお供します。」

夫はこの言葉を聞いた時、やつと脣を動かしました。勿論口には笹の落葉が、一ぱいにつまつ

てゐますから、聲は少しも聞えません。が、わたしはそれを見ると、忽ちその言葉を覺りました。夫はわたしを蔑んだ儘、「殺せ。」と一言云つたのです。わたしは殆、夢うつつの内に、夫の縹の水干の胸へ、づぶりと小刀を刺し通しました。

わたしは又この時も、氣を失つてしまつたのでせう。やつとあたりを見まはした時には、夫はもう縛られた儘、とうに息が絶えてゐました。その蒼ざめた顏の上には、竹に交つた杉むらの空から、西日が一すぢ落ちてゐるのです。わたしは泣き聲を呑みながら、死骸の繩を解き捨てました。さうして、――さうしてわたしがどうなつたか？　それだけはもうわたしには、申し上げる力もありません。兎に角わたしはどうしても、死に切る力がなかつたのです。小刀を喉に突き立てたり、山の裾の池へ身を投げたり、いろいろな事もして見ましたが、死に切れずにかうしてゐる限り、これも自慢にはなりますまい。（寂しき微笑）わたしのやうに腑甲斐ないものは、大慈大悲の觀世音菩薩も、お見放しなすつたものかも知れません。しかし夫を殺したわたしは、盜人の手ごめに遇つたわたしは、一體どうすれば好いのでせう？　一體わたしは、――わたしは、――

（突然烈しき歔欷）

——盗人は妻を手ごめにすると、其處へ腰を下した儘、いろいろ妻を慰め出した。おれは勿論口は利けない。體も杉の根に縛られてゐる。が、おれはその間に、何度も妻へ目くばせをした。この男の云ふ事を眞に受けるな、何を云つても嘘と思へ、——おれはそんな意味を傳へたいと思つた。しかし妻は悄然と笹の落葉に坐つたなり、ぢつと膝へ目をやつてゐる。それがどうも盗人の言葉に、聞き入つてゐるやうに見えるではないか? おれは妬しさに身悶えをした。が、盗人はそれからそれへと、巧妙に話を進めてゐる。一度でも肌身を汚したとなれば、夫との仲も折り合ふまい。そんな夫に連れ添つてゐるより、自分の妻になる氣はないか? 自分はいとしいと思へばこそ、大それた眞似も働いたのだ、——盗人はとうとう大膽にも、さう云ふ話さへ持ち出した。

盗人にかう云はれると、妻はうつとりと顏を擡げた。おれはまだあの時程、美しい妻を見た事がない。しかしその美しい妻は、現在縛られたおれを前に、何と盗人に返事をしたか? おれは

中有に迷つてゐても、妻の返事を思ひ出す毎に、嗔恚に燃えなかつたためしはない。妻は確かにから云つた、——「では何處へでもつれて行つて下さい。」(長き沈默)

妻の罪はそれだけではない。それだけならばこの闇の中に、いま程おれも苦しみはしまい。しかし妻は夢のやうに、盜人に手をとられながら、藪の外へ行かうとすると、忽ち顏色を失つたなり、杉の根のおれを指さした。「あの人を殺して下さい。わたしはあの人が生きてゐては、あなたと一しよにはゐられません。」——妻は氣が狂つたやうに、何度もかう叫び立てた。「あの人を殺して下さい。」——この言葉は嵐のやうに、今でも遠い闇の底へ、まつ逆樣におれを吹き落さうとする。一度でもこの位憎むべき言葉が、人間の口を出た事があらうか？ 一度でもこの位呪はしい言葉が、人間の耳に觸れた事があらうか？ 一度でもこの位、——(突然迸る如き嘲笑)その言葉を聞いた時は、盜人さへ色を失つてしまつた。「あの人を殺して下さい。」——妻はさう叫びながら、盜人の腕に縋つてゐる。盜人はぢつと妻を見た儘、殺すとも殺さぬとも返事をしない。——と思ふか思はない内に、妻は竹の落葉の上へ、唯一蹴りに蹴倒された、(再迸る如き嘲笑)盜人は靜かに兩腕を組むと、おれの姿へ眼をやつた。「あの女はどうするつもりだ？ 殺すか、それと

も助けてやるか？　返事は唯頷けば好い。殺すか？」――おれはこの言葉だけでも、盗人の罪は赦してやりたい。(再、長き沈默)

　妻はおれがためらふ内に、何か一聲叫ぶが早いか、忽ち藪の奧へ走り出した。盗人も咄嗟に飛びかかつたが、これは袖さへ捉へなかつたらしい。おれは唯幻のやうに、さう云ふ景色を眺めてゐた。

　盗人は妻が逃げ去つた後、太刀や弓矢を取り上げると、一箇所だけおれの繩を切つた。「今度はおれの身の上だ。」――おれは盗人が藪の外へ、姿を隱してしまふ時に、かう呟いたのを覺えてゐる。その跡は何處も靜かだつた。いや、まだ誰かの泣く聲がする。おれは繩を解きながら、ぢつと耳を澄ませて見た。が、その聲も氣がついて見れば、おれ自身の泣いてゐる聲だつたではないか？(三度、長き沈默)

　おれはやつと杉の根から、疲れ果てた體を起した。おれの前には妻が落した、小刀が一つ光つてゐる。おれはそれを手にとると、一突きにおれの胸へ刺した。何か腥い塊がおれの口へこみ上げて來る。が、苦しみは少しもない。唯胸が冷たくなると、一層あたりがしんとしてしまつた。

ああ、何と云ふ靜かさだらう。この山陰の藪の空には、小鳥一羽囀りに來ない。唯杉や竹の杪に、寂しい日影が漂つてゐる。日影が、——それも次第に薄れて來る。もう杉や竹も見えない。おれは其處に倒れた儘、深い靜かさに包まれてゐる。

その時誰か忍び足に、おれの側へ來たものがある。おれはそちらを見ようとした。が、おれのまはりには、何時か薄闇が立ちこめてゐる。誰か、——その誰かは見えない手に、そつと胸の小刀を拔いた。同時におれの口の中には、もう一度血潮が溢れて來る。おれはそれぎり永久に、中有の闇へ沈んでしまつた。………

（大正十年十二月）

俊寛

俊寛云ひけるは……神明外になし。唯我等が一念なり。……唯佛法を修行して、今度生死を出で給ふべし。

源平盛衰記

（俊寛）いとど思ひの深くなれば、かくぞ思ひつづけける。「見せばやな我を思はぬ友もがな磯のとまやの柴の庵を。」

同　上

一

俊寛様の話ですか？　俊寛様の話位、世間に間違つて傳へられた事は、まづ外にはありますまい。いや、俊寛様の話ばかりではありません。このわたし、——有王自身の事さへ、飛でもない噓が傳はつてゐるのです。現についこの間も、或琵琶法師が語つたのを聞けば、俊寛様は御歎きの餘り、岩に頭を打ちつけて、狂ひ死をなすつてしまふし、わたしはその御死骸を肩に、

身を投げて死んでしまつたなどと、云つてゐるではありませんか？　又もう一人の琵琶法師は、俊寛様はあの島の女と、夫婦の談らひをなすつた上、子供も大勢御出來になり、都にいらしつた時よりも、樂しい生涯を御送りになつたとか、まことしやかに語つてゐました。前の琵琶法師の語つた事が、跡方もない嘘だと云ふ事は、この有王が生きてゐるのでも、おわかりになるかと思ひますが、後の琵琶法師の語つた事も、やはり好い加減の出たらめなのです。

一體琵琶法師などと云ふものは、どれもこれも我は顏に、嘘ばかりついてゐるものなのです。が、その嘘のうまい事は、わたしでも褒めずにはゐられません。わたしはあの笹葺の小屋に、俊寛様が子供たちと、御戯れになる所を聞けば、思はず微笑を浮べましたし、又あの浪音の高い月夜に、狂ひ死をなさる所を聞けば、つひ涙さへ落しました。たとひ嘘とは云ふものの、ああ云ふ琵琶法師の語つた嘘は、きつと琥珀の中の蟲のやうに、末代までも傳はるでせう。して見ればさう云ふ嘘があるだけ、わたしでも今の内ありの儘に、俊寛様の事を御話しないと、琵琶法師の嘘は何時の間にか、ほんたうに變つてしまふかも知れない――と、かうあなたは仰有るのですか？　成程それも御尤もです。では丁度夜長を幸ひ、わたしがはるばる鬼界が島へ、俊寛様を

御尋ね申した、その時の事を御話しませう。しかしわたしは琵琶法師のやうに、上手にはとても話されません。唯わたしの話の取り柄は、この有王が目のあたりに見た、飾りのない眞實と云ふ事だけです。ではどうか少時の間、御退屈でも御聞き下さい。

二

わたしが鬼界が島に渡つたのは、治承三年五月の末、或曇つた午過ぎです。これは琵琶法師も語る事ですが、その日も彼是暮れかけた時分、わたしはやつと俊寛樣に、めぐり遇ふ事が出來ました。しかもその場所は人氣のない海べ、――唯灰色の浪ばかりが、砂の上に寄せては倒れる、如何にも寂しい海べだつたのです。

俊寛樣のその時の御姿は、――さうです。世間に傳はつてゐるのには、「童かとすれば年老いてその貌にあらず、法師かと思へば又髮は空ざまに生ひ上りて白髮多し。よろづの塵や藻屑のつきたれども打ち拂はず。頸細くして腹大きに脹れ、色黑うして足手細し。人にして人に非ず。」と云ふのですが、これも大抵は作り事です。殊に頸が細かつたの、腹が脹れてゐたのと云ふのは、

地獄變の畫からでも思ひついたのでせう。つまり鬼界が島と云ふ所から、餓鬼の形容を使つたのです。成程その時の俊寛様は、髮も延びて御出でになれば、色も日に燒けていらつしやいましたが、その外は昔に變らない、——いや、變らない所ではありません。昔よりも一層丈夫さうな、頼もしい御姿だつたのです。それが靜かな潮風に、法衣の裾を吹かせながら、浪打際を獨り御出でになる、——見れば御手には何と云ふのか、笹の枝に貫いた、小さい魚を下げていらつしやいました。

「僧都の御房！　よく御無事でいらつしやいました。わたしです！　有王です！」

わたしは思はず駈け寄りながら、嬉しまぎれにかう叫びました。

「おお、有王か！」

俊寛様は驚いたやうに、わたしの顔を御覽になりました。が、もうわたしはその時には、御主人の膝を抱いた儘、嬉し泣きに泣いてゐたのです。

「よく來たな。有王！　おれはもう今生では、お前にも會へぬと思つてゐた。」

俊寛様も少時の間は、涙ぐんでいらつしやるやうでしたが、やがてわたしを御抱き起しにな

ると、

「泣くな。泣くな。せめては今日會つただけでも、佛菩薩の御慈悲と思ふが好い。」と、親のやうに慰めて下さいました。

「はい、もう泣きは致しません。御房は、――御房の御住居は、この界隈でございますか？」

「住居か？　住居はあの山の陰ぢや。」

俊寛様は魚を下げた御手に、間近い磯山を御指しになりました。

「住居と云つても、檜肌葺きではないぞ。」

「はい、それは承知して居ります。何しろこんな離れ島でございますから、――」

わたしはさう云ひかけたなり、又涙に咽びさうにしました。すると御主人は昔のやうに、優しい微笑を御見せになりながら、

「しかし居心は悪くない住居ぢや。寝所もお前には不自由はさせぬ。では一しよに來て見るが好い。」と、氣輕に案内をして下さいました。

少時の後わたしたちは、浪ばかり騒がしい海べから、寂しい漁村へはひりました。薄白い路の

左右には、梢から垂れた榕樹の枝に、肉の厚い葉が光つてゐる、――その木の間に點點と、笹葺きの屋根を並べたのが、この島の土人の家なのです。が、さう云ふ家の中に、赤赤と竈の火が見えたり、珍らしい人影が見えたりすると、兎に角村里へ來たと云ふ、懷しい氣もちだけはして來ました。

御主人は時時振り返りながら、この家にゐるのは琉球人だとか、あの檻には豕が飼つてあるとか、いろいろ教へて下さいました。しかしそれよりも嬉しかつたのは、烏帽子さへかぶらない土人の男女が、俊寛樣の御姿を見ると、必頭を下げた事です。殊に一度なぞは或家の前に、鷄を追つてゐた女の兒さへ、御時宜をしたではありませんか？　わたしは勿論嬉しいと同時に、不思議にも思つたものですから、何か譯のある事かと、そつと御主人に伺つて見ました。

「成經樣や康頼樣が、御話しになつた所では、この島の土人も鬼のやうに、情を知らぬ事かと存じましたが、――」

「成程、都にゐるものには、さう思はれるに相違あるまい。が、流人とは云ふものの、おれたちは皆都人ぢや。邊土の民は何時の世にも、都人と見れば頭を下げる。業平の朝臣、實方の朝臣、

――皆大同小異ではないか？　ああ云ふ都人もおれのやうに、東や陸奥へ下つた事は、思ひの外樂しい旅だつたかも知れぬ。」

「しかし實方の朝臣などは、御隱れになつた後でさへ、都戀しさの一念から、臺盤所の雀になつたと、云ひ傳へて居るではありませんか？」

「さう云ふ噂を立てたものは、お前と同じ都人ぢや。鬼界が島の土人と云へば、鬼のやうに思ふ都人ぢや。して見ればこれも當てにはならぬ。」

その時又一人御主人に、頭を下げた女がゐました。これは丁度榕樹の陰に、幼な兒を抱いてゐたのですが、その葉に後を遮られたせゐか、紅染めの單衣を着た姿が、夕明りに浮んで見えたものです。すると御主人はこの女に、優しい會釋を返されてから、

「あれが少將の北の方ぢやぞ。」と、小聲に敎へて下さいました。

わたしはさすがに驚きました。

「北の方と申しますと、――成經樣はあの女と、夫婦になつていらしつたのですか？」

俊寬樣は薄笑ひと一しよに、ちよいと頷いて御見せになりました。

「抱いてゐた兒も少將の胤ぢやよ。」

「成程、さう伺つて見れば、かう云ふ邊土にも似合はない、美しい顔をして居りました。」

「何、美しい顔をしてゐた？　美しい顔とはどう云ふ顔ぢや？」

「まあ、眼の細い、頰のふくらんだ、鼻の餘り高くない、おつとりした顔かと思ひますが、――」

「それもやはり都の好みぢや。この島ではまづ眼の大きい、頰の何處かほつそりした、鼻も人よりは心もち高い、きりりした顔が尊まれる。その爲に今の女なぞも、此處では誰も美しいとは云はぬ。」

　わたしは思はず笑ひ出しました。

「やはり土人の悲しさには、美しいと云ふ事を知らないのですね。さうするとこの島の土人たちは、都の上﨟を見せてやつても、皆醜いと笑ひますかしら？」

「いや、美しいと云ふ事は、この島の土人も知らぬではない。唯好みが違つてゐるのぢや。しかし好みと云ふものも、萬代不變とは請合はれぬ。その證據には御寺御寺の、御佛の御姿を拜むが好い。三界六道の教主、十方最勝、光明無量、三學無碍、億億衆生引導の能化、南無大慈大悲

釋迦牟尼如來も、三十二相八十種好の御姿は、時代毎にいろいろ御變りになつた。御佛でももしさうとすれば、如何か是美人と云ふ事も、時代毎にやはり違ふ筈ぢや。都でもこの後五百年か、或は又一千年か、兎に角その好みの變る時には、この島の土人の女所か、南蠻北狄の女のやうに、凄まじい顏がはやるかも知れぬ。」

「まさかそんな事もありますまい。我國ぶりは何時の世にも、我國ぶりでゐる筈ですから。」

「所がその我國ぶりも、時と場合では當てにならぬ。たとへば當世の上﨟の顏は、唐朝の御佛に活寫しぢや。これは都人の顏の好みが、唐土になずんでゐる證據ではないか？　すると人皇何代かの後には、碧眼の胡人の女の顏にも、うつつをぬかす時がないとは云はれぬ。」

わたしは自然とほほ笑みました。御主人は以前もかう云ふ風に、わたしたちへ御教訓なすつたのです。「變らぬのは御姿ばかりではない。御心もやはり昔の儘だ。」――さう思ふと何だかわたしの耳には、遠い都の鐘の聲も、通つて來るやうな氣がしました。が、御主人は榕樹の陰に、ゆつくり御み足を運びながら、こんな事も亦仰有るのです。

「有王。おれはこの島に渡つて以來、何が嬉しかつたか知つてゐるか？　それはあのやかましい

女房のやつに、毎日小言を云はれずとも、暮されるやうになつた事ぢやよ。」

三

その夜わたしは結ひ燈臺の光に、御主人の御飯を頂きました。本來ならばそんな事は、恐れ多い次第なのですが、御主人の仰せもありましたし、御給仕にはこの頃御召使ひの、兎脣の童も居りましたから、御招伴に預つた譯なのです。

御部屋は竹緣をめぐらせた、僧庵とも云ひたい拵へです。緣先に垂れた簾の外には、前栽の竹むらがあるのですが、椿の油を燃やした光も、さすがに其處までは屆きません。御部屋の中には皮籠ばかりか、廚子もあれば机もある、――皮籠は都を御立ちの時から、御持ちになつてゐたのですが、廚子や机はこの島の土人が、不束ながらも御拵へ申した、琉球赤木とかの細工ださうです。その廚子の上には經文と一しよに、阿彌陀如來の尊像が一體、端然と金色に輝いてゐました。これは確か康頼樣の、都返りの御形見だとか、伺つたやうに思つてゐます。

俊寛樣は圓座の上に、樂樂と御坐りなすつた儘、いろいろ御馳走を下さいました。勿論この

島の事ですから、酢や醤油は都程、味が好いとは思はれません。が、その御馳走の珍しい事は、汁、鱠、煮つけ、果物、――名さへ確かに知つてゐるのは、殆ど一つもなかつた位です。御主人はわたしが呆れたやうに、箸もつけないのを御覧になると、上機嫌に御笑ひなさりながら、かう御勧め下さいました。

「どうぢや、その汁の味は？ それはこの島の名産の、臭梧桐と云ふ物ぢやぞ。こちらの魚も食うて見るが好い。これも名産の永良部鰻ぢや。あの皿にある白地鳥、――さうさう、あの焼き肉ぢや。――あれも都などでは見た事もあるまい。白地鳥と云ふ物は、背の青い、腹の白い、形は鸛にそつくりの鳥ぢや。この島の土人はあの肉を食ふと、濕氣を拂ふとか稱へてゐる。その芋も存外味は好いぞ。名前か？ 名前は琉球芋ぢや。梶王などは飯の代りに、毎日その芋を食うてゐる。」

梶王と云ふのはさつき申した、兎脣の童の名前なのです。

「どれでも勝手に箸をつけてくれい。粥ばかり啜つてゐさへすれば、得脱するやうに考へるのは、沙門にあり勝ちの不量見ぢや。世尊さへ成道される時には、牧牛の女難陀婆羅の、乳糜の供養を

受けられたではないか？　もしあの時空腹の儘、畢波羅樹下に坐つてゐられたら、第六天の魔王波旬は、三人の魔女なぞを遣すよりも、六牙象王の味噌漬けだの、天龍八部の粕漬けだの、天竺の珍味を降らせたかも知らぬ。尤も食足れば淫を思ふのは、我我凡夫の慣ひぢやから、乳糜を食はれた世尊の前へ、三人の魔女を送つたのは、波旬も天つ晴見上げた才子ぢや。が、魔王の淺間しさには、その乳糜を獻じたものが、女人ぢやと云ふ事を忘れて居つた。牧牛の女難陀婆羅、世尊に乳糜を獻じ奉る、――世尊が無上の道へ入られるには、雪山六年の苦行よりも、これが遙かに大事だつたのぢや。『取彼乳糜如意飽食、悉皆淨盡。』――佛本行經七卷の中にも、あれ程難有い所は澤山あるまい。――『爾時菩薩食糜已訖從座而起。安庠漸々向菩提樹。』どうぢや。『安庠漸々向菩提樹。』女人を見、乳糜に飽かれた、端嚴微妙の世尊の御姿が、目のあたりに拜まれるやうではないか？」

俊寛樣は樂しさうに、晩の御飯をおしまひになると、今度は涼しい竹緣の近くへ、圓座を御移しになりながら、

「では空腹が直つたら、都の便りでも聞かせて貰はう。」とわたしの話を御促しになりました。

わたしは思はず眼を伏せました。兼ねて覺悟はしてゐたものの、いざ申し上げるとなつて見ると、今更のやうに心が怯れたのです。しかし御主人は無頓着に、芭蕉の葉の扇を御手にした儘、もう一度御催促なさいました。

「どうぢや、女房は相不變小言ばかり云つてゐるか？」

わたしはやむを得ず俯向いたなり、御留守の間に出來した、いろいろの大變を御話しました。御主人が御捕はれなすつた後、御近習は皆逃げ去つた事、京極の御屋形や鹿ケ谷の御山莊も、平家の侍に奪はれた事、北の方は去年の冬、御隱れになつてしまつた事、若君も重い疱瘡の爲に、その跡を御追ひなすつた事、今ではあなたの御家族の中でも、たつた一人姫君だけが、奈良の伯母御前の御住居に、人目を忍んでいらつしやる事、――さう云ふ御話をしてゐる内に、わたしの眼には何時の間にか、燈臺の火影が曇つて來ました。軒先の簾、厨子の上の御佛、――それもへうどうしたかわかりません。わたしはとうとう御話半ばに、その場へ泣き沈んでしまひました。御主人は始終默然と、御耳を傾けていらしつたやうです。が、姫君の事を御聞きになると、突然さも御心配さうに、法衣の膝を御寄せになりました。

「姫はどうぢや？　伯母御前にはようなついてゐるか？」

「はい。御睦しいやうに存じました。」

わたしは泣く泣く俊寛様へ、姫君の御消息をさし上げました。それはこの島へ渡るものには、門司や赤間が關を船出する時、やかましい詮議があるさうですから、髻に隱して來た御文なのです。御主人は早速燈臺の光に、御消息をおひろげなさりながら、所所小聲に御讀みになりました。

「……世の中かきくらして晴るる心地なく侍り。……さても三人一つ島に流されけるに、……などや御身一人殘り止まり給ふらんと、……都には草のゆかりも枯れはてて、……當時は奈良の伯母御前の御許に侍り。……おろそかなるべき事にはあらねど、かすかなる住居推し量り給へ。……さてもこの三とせまで、如何御心強く、有とも無とも承はらざるらん。……とくとく御上り候へ。戀しとも戀し。ゆかしともゆかし。……あなかしこ、あなかしこ。……」

俊寛様は御文を御置きになると、ぢつと腕組みをなすつた儘、大きい息をおつきになりました。

「姫はもう十二になつた筈ぢやな。——おれも都には未練はないが、姫にだけは一目會ひたい。」

わたしは御心中を思ひやりながら、唯涙ばかり拭つてゐました。
「しかし會へぬものならば、――泣くな。有王。いや、泣きたければ泣いても好い。しかしこの娑婆世界には、一一泣いては泣き盡せぬ程、悲しい事が澤山あるぞ。」
御主人は後の黒木の柱に、ゆつくり背中を御寄せになつてから、寂しさうに御微笑なさいました。
「女房も死ぬ。若も死ぬ。姫には一生會へぬかも知れぬ。屋形や山莊もおれの物ではない。おれは獨り離れ島に老の來るのを待つてゐる。――これがおれの今のさまぢや。が、この苦艱を受けてゐるのは、何もおれ一人に限つた事ではない。おれ一人衆苦の大海に、沒在してゐると考へるのは、佛弟子にも似合はぬ增長慢ぢや。「增長驕慢、尙非世俗白衣所宜。」艱難の多いのに誇る心も、やはり邪業には違ひあるまい。その心さへ除いてしまへば、この粟散邊土の中にも、おれ程の苦を受けてゐるものは、恆河沙の數より多いかも知れぬ。いや、人界に生れ出たものは、たとひこの島に流されずとも、皆おれと同じやうに、孤獨の歎を洩らしてゐるのぢや。村上の御門第七の王子、二品中務親王六代の後胤、仁和寺の法印寛雅が子、京極の源大納言雅俊卿の孫

に生まれたのは、かう云ふ俊寛一人ぢやが、天が下には千の俊寛、萬の俊寛、十萬の俊寛、百億の俊寛が流されてゐるぞ。――」

俊寛様はかう仰有ると、忽ち又御眼の何處かに、陽氣な御氣色が閃きました。

「一條二條の大路の辻に、盲人が一人さまようてゐるのは、世にも憐れに見えるかも知れぬ。が、廣い洛中洛外、無量無數の盲人どもに、充ち滿ちた所を眺めたら、――有王。お前はどうすると思ふ？ おれならばまつ先にふき出してしまふぞ。おれの島流しも同じ事ぢや。十方に遍滿した俊寛どもが、皆唯一人流されたやうに、泣きつ喚きつしてゐると思へば、涙の中にも笑はずにはゐられぬ。有王。三界一心と知つた上は、何よりもまづ笑ふ事を學べ。笑ふ事を學ぶ爲には、まづ増長慢を捨てねばならぬ。世尊の御出世は我我衆生に、笑ふ事を教へに來られたのぢや。大般涅槃の御時にさへ、摩訶伽葉は笑つたではないか？」

その時はわたしも何時の間にか、頬の上の涙が乾いてゐました。すると御主人は簾越しに、遠い星空を御覽になりながら、

「お前が都へ歸つたら、姫にも歎きをするよりは、笑ふ事を學べと云つてくれい。」と、何事もな

いやうに仰有るのです。

「わたしは都へは歸りません。」

もう一度わたしの眼の中には、新たに涙が浮んで來ました。今度はさう云ふ御言葉を、御恨みに思つた涙なのです。

「わたしは都にゐた時の通り、御側勤めをするつもりです。年とつた一人の母さへ捨て、兄弟にも仔細は話さずに、はるばるこの島へ渡つて來たのは、その爲ばかりではありませんか？　わたしはさう仰有られる程、命が惜いやうに見えるでせうか？　わたしはそれ程恩義を知らぬ、人非人のやうに見えるでせうか？　わたしはそれ程、——」

「それ程愚かとは思はなかつた。」

御主人は又前のやうに、にこにこ御笑ひになりました。

「お前がこの島に止まつてゐれば、姫の安否を知らせるのは、誰が外に勤めるのぢや？　おれは一人でも不自由はせぬ。まして梶王と云ふ童がゐる。——と云つてもまさか妬みなぞはすまいな？　あれは便りのないみなし兒ぢや。幼い島流しの俊寛ぢや。お前は便船のあり次第、早速都

へ歸るが好い。その代り今夜は姫への土産に、おれの島仕ひがどんなだつたか、それをお前に話して聞かさう。又お前は泣いてゐるな？　よしよし、ではやはり泣きながら、おれの話を聞いてくれい。おれは獨り笑ひながら、勝手に話を續けるだけぢや。」

俊寛様は悠悠と、芭蕉扇を御使ひなさりながら、島仕居の御話をなさり始めました。軒先に垂れた簾の上には、ともし火の光を尋ねて來たのでせう、かすかに蟲の這ふ音が聞えてゐます。わたしは頭を垂れた儘、ぢつと御話に伺ひ入りました。

四

「おれがこの島へ流されたのは、治承元年七月の始ぢや。おれは一度も成親の卿と、天下なぞを計つた覺えはない。それが西八條へ籠められた後、いきなり、この島へ流されたのぢやから、始はおれも忌忌しさの餘り、飯を食ふ氣さへ起らなかつた。」

「しかし都の噂では、——」

わたしは御言葉を遮りました。

「僧都の御房も宗人の一人に、おなりになつたとか云ふ事ですが、――」

「それはさう思ふに違ひない。成親の卿さへ宗人の一人に、おれを數へてゐたさうぢやから、――しかしおれは宗人ではない。淨海入道の天下が好いか、成親の卿の天下が好いか、それさへおれにはわからぬ程ぢや。事によると成親の卿は、淨海入道よりひがんでゐるだけ、天下の政治には不向きかも知れぬ。おれは唯平家の天下は、ないに若かぬと云つただけぢや。源平藤橘、どの天下も結局あるのはないに若かぬ。この島の土人を見るが好い。平家の代でも源氏の代でも、同じやうに芋を食うては、同じやうに子を生んでゐる。天下の役人は役人がゐぬと、天下も亡ぶやうに思つてゐるが、それは役人のうぬ惚れだけぢや。」

「が、僧都の御房の天下になれば、何御不足にもありますまい。」

俊寛樣の御眼の中には、わたしの微笑が映つたやうに、やはり御微笑が浮びました。

「成親の卿の天下同樣、平家の天下より惡いかも知れぬ。何故と云へば俊寛は、淨海入道より物わかりが好い。物わかりが好ければ政治なぞには、夢中になれぬ筈ではないか？　理非曲直も辨へずに、途方もない夢ばかり見續けてゐる、――其處が高平太の強い所ぢや。小松の内府なぞ

は利巧なだけに、天下を料理するとなれば、淨海入道より數段下ぢや。內府も始終病身ぢやと云ふが、平家一門の爲を計れば、一日も早く死んだが好い。その上又おれにしても、食色の二性を離れぬ事は、淨海入道と似たやうなものぢや。さう云ふ凡夫の取つた天下は、やはり衆生の爲にはならぬ。所詮人界が淨土になるには、御佛の御天下を待つ外はあるまい。――おれはさう思つてゐたから、天下を計る心なぞは、微塵も貯へてはゐなかつた。」

「しかしあの頃は每夜のやうに、中御門高倉の大納言樣へ、御通ひなすつたではありませんか？」

わたしは御不用意を責めるやうに、俊寛樣の御顏を眺めました、ほんたうに當時の御主人は、北の方の御心配も御存知ないのか、夜は京極の御屋形にも、滅多に御休みではなかつたのです。しかし御主人は不相變、澄ました御顏をなすつた儘、芭蕉扇を使つてゐらつしやいました。

「其處が凡夫の淺ましさぢや。丁度あの頃あの屋形には、鶴の前と云ふ上童があつた。これが如何なる天魔の化身か、おれを捉へて離さぬのぢや。おれの一生の不仕合はせは、皆あの女がゐたばかりに、降つて湧いたと云うても好い。女房に横面を打たれたのも、鹿ケ谷の山莊を假したのも、しまひにこの島へ流されたのも、――しかし有王、喜んでくれい。おれは鶴の前に夢中にな

つても、謀叛の宗人にはならなかつた。女人に愛欒を生じたためしは、古今の聖者にも稀ではない。大幻術の摩登伽女には、阿難尊者さへ迷はせられた。龍樹菩薩も在俗の時には、王宮の美人を偸む爲に、隱形の術を修せられたさうぢや。しかし謀叛人になつた聖者は、天竺震旦本朝を問はず、唯の一人もあつた事は聞かぬ。これは聞かぬのも不思議はない。女人に愛欒を生ずるのは、五根の欲を放つだけの事ぢや。が、謀叛を企てるには、貪嗔癡の三毒を具へねばならぬ。聖者は五欲を放たれても、三毒の害は受けられぬのぢや。して見ればおれの知慧の光も、五欲の爲に曇つたと云へ、消えはしなかつたと云はねばなるまい。――が、それは兎も角も、おれはこの島へ渡つた當座、毎日忌忌しい思ひをしてゐた。」

「それはさぞかし御難儀だつたでせう。御食事は勿論、御召し物さへ、御不自由勝ちに違ひありませんから。」

「いや、衣食は春秋二度づつ、肥前の國鹿瀨の莊から、少將のもとへ送つて來た。鹿瀨の莊は少將の舅、平の敎盛の所領の地ぢや。その上おれは一年程たつと、この島の風土にも慣れてしまつた。が、忌忌しさを忘れるには、一しよに流された相手が悪い。丹波の少將成經などは、ふさい

でゐなければ居睡りをしてゐた。」

「成經樣は御年若でもあり、父君の御不運を御思ひになつては、御歎きなさるのも御尤もです。」と

「何、少將はおれと同樣、天下はどうなつてもかまはぬ男ぢや。あの男は琵琶でも搔き鳴らしたり、櫻の花でも眺めたり、上﨟に戀歌でもつけてゐれば、それが極樂ぢやと思うてゐる。ぢやからおれに會ひさへすれば、謀叛人の父ばかり怨んでゐた。」

「しかし康賴樣は僧都の御房と、御親しいやうに伺ひましたが。」

「所がこれが難物なのぢや。康賴は何でも願さへかければ、天神地祇諸佛菩薩、悉あの男の云ふなり次第に、利益を垂れると思うてゐる。つまり康賴の考へでは、神佛も商人と同じなのぢや。唯神佛は商人のやうに、金錢では冥護を御賣りにならぬ。ぢやから祭文を讀む。香火を供へる。この後の山なぞには、姿の好い松が澤山あつたが、皆康賴に伐られてしまうた。伐つて何にするかと思へば、千本の卒塔婆を拵へた上、一一それに歌を書いては、海の中へ抛りこむのぢや。おれはまだ康賴位、現金な男は見た事がない。」

「それでも莫迦にはなりません。都の噂ではその卒塔婆が、熊野にも一本、嚴島にも一本、流れ

寄つたとか申してゐました。」
「千本の中には一本や二本、日本の土地へも着きさうなものぢや。ほんたうに冥護を信ずるならば、たつた一本流すが好い。その上康頼は難有さうに、千本の卒塔婆を流す時でも、始終風向きを考へてゐたぞ。何時かおれはあの男が、海へ卒塔婆を流す時に、歸命頂禮熊野三所の權現、分けては日吉山王、王子の眷屬、總じては上は梵天帝釋、下は堅牢地神、殊には內海外海龍神八部、應護の眦を垂れさせ給へと唱へたから、その跡へ並びに西風大明神、黑潮權現も守らせ給へ、謹上再拜とつけてやつた。」
「惡い御冗談をなさいます。」
わたしもさすがに笑ひ出しました。
「すると康頼は怒つたぞ。ああ云ふ大嗔恚を起すやうでは、現世利益は兎も角も、後生往生は覺束ないものぢや。――が、その內に困まつた事には、少將も何時か康頼と一しよに、神信心を始めたではないか？ それも熊野とか王子とか、由緖のある神を拜むのではない。この島の火山には鎭護の爲か、岩殿と云ふ祠がある。その岩殿へ詣でるのぢや。――火山と云へば思ひ出したが、

お前はまだ火山を見た事はあるまい？」
「はい、唯さつき榕樹の梢に、薄赤い煙のたなびいた、禿げ山の姿を眺めただけです。」
「では明日でもおれと一しよに、頂へ登つて見るが好い。頂へ行けばこの島ばかりか、大海の景色は手にとるやうぢや。岩殿の祠も途中にある、――その岩殿へ詣でるのに、康頼はおれにも行けと云うたが、おれは容易には行かうとは云はぬ。」
「都では僧都の御房一人、さう云ふ神詣でもなさらない爲に、御殘されになつたと申して居ります。」
「いや、それはさうかも知れぬ。」
　俊寛樣は眞面目さうに、ちよいと御首を御振りになりました。
「もし岩殿に靈があれば、俊寛一人を殘した儘、二人の都返りを取り持つ位は、何とも思はぬ禍津神ぢや。お前はさつきおれが教へた、少將の女房を覺えてゐるか？　あの女もやはり岩殿へ、少將がこの島を去らぬやうに、毎日毎夜詣でたものぢや。所がその願は少しも通らぬ。すると岩殿と云ふ神は、天魔にも増した横道者ぢや。天魔には世尊御出世の時から、諸惡を行ふと云ふ戒

行がある。もし岩殿の神の代りに、天魔があの祠にゐるとすれば、少将は都へ歸る途中、船から落ちるか、熱病になるか、兎に角に死んだのに相違ない。これが少将もあの女も、同時に破滅させる唯一の途ぢや。が、岩殿は人間のやうに、諸善ばかりも行はねば、諸惡ばかりも行はぬらしい。尤もこれは岩殿には限らぬ。奥州名取郡笠島の道祖は、都の加茂河原の西、一條の北の邊に住ませられる、出雲路の道祖の御娘ぢや。が、この神は父の神が、まだ聟の神も探されぬ内に、若い都の商人と妹背の契を結んだ上、さつさと奥へ落ちて來られた。かうなつては凡夫も同じではないか？ あの實方の中將は、この神の前を通られる時、下馬も拜もされなかつたばかりに、とうとう蹴殺されておしまひなすつた。かう云ふ人間に近い神は、五塵を離れてゐぬのぢやから、何を仕出かすか油斷はならぬ。このためしでもわかる通り、一體神と云ふものは、人間離れをせぬ限り、崇めろと云へた義理ではない。――が、そんな事は話の枝葉ぢや。康頼と少将とは一心に、岩殿詣でを續け出した。それも岩殿を熊野になぞらへ、あの浦は和歌浦、この坂は蕪坂なぞと、一一名をつけてやるのぢやから、まづ童たちが鹿狩と云つては、小犬を追ひまはすのも同じ事ぢや。唯音無の瀧だけは本物よりもずつと大きかつた。」

「それでも都の噂では、奇瑞があつたとか申してゐますが。」

「その奇瑞の一つはかうぢや。結願の當日岩殿の前に、二人が法施を手向けてゐると、山風が木を煽つた拍子に、椿の葉が二枚こぼれて來た。その椿の葉には二枚とも、蟲の食つた跡が殘つてゐる。それが一つには歸雁とあり、一つには二とあつたさうぢや。合せて讀めば歸雁二となる、――こんな事が嬉しいのか、康頼は翌日得得と、おれにもその葉を見せなぞした。成程二とは讀めぬでもない。が、歸雁は如何にも無理ぢや。おれは餘り可笑しかつたから、次の日山へ行つた歸りに、椿の葉を何枚も拾つて來てやつた。その葉の蟲食ひを續けて讀めば、歸雁二所の騒ぎではない。『明日歸洛』と云ふのもある。『清盛橫死』と云ふのもある。『康頼往生』と云ふのもある。おれはさぞかし康頼も、喜ぶぢやらうと思うたが、――」

「それは御立腹なすつたでせう。」

「康頼は怒るのに妙を得てゐる。舞も洛中に並びないが、腹を立てるのは一段と巧者ぢや。あの男は謀叛なぞに加はつたのも、嗔恚に牽かれたのに相違ない。その嗔恚の源はと云へば、やはり増長慢のなせる業ぢや。平家は高平太以下皆惡人、こちらは大納言以下皆善人、――康頼はかう

思うてゐる。そのうぬ惚れが爲にならぬ。又さつきも云うた通り、我我凡夫は誰も彼も、皆高平太と同樣なのぢや。が、康頼の腹を立てるのが好いか、少將のため息をするのが好いか、どちらが好いかはおれにもわからぬ。」

「成經樣御一人だけは、御妻子もあつたさうですから、御紛れになる事もありましたらうに。」

「所が始終蒼い顏をしては、つまらぬ愚痴ばかりこぼしてゐた。たとへば谷間の椿を見ると、この島には櫻も咲かないと云ふ。火山の頂の煙を見ると、この島には青い山もないと云ふ。何でも其處にある物は云はずに、ない物だけ並べ立ててゐるのぢや。一度なぞはおれと一しよに、磯山へ槖吾を摘みに行つたら、ああ、わたしはどうすれば好いのか、此處には加茂川の流れもないと云うた。おれがあの時吹き出さなかつたのは、我立つ杣の地主權現、日吉の御冥護に違ひない。が、おれは莫迦莫迦しかつたから、此處には福原の獄もない、平相國入道淨海もゐない、難有い、難有いとかう云うた。」

「そんな事を仰有つては、いくら少將でも御腹立ちになりましたらう。」

「いや、怒られれば本望ぢや。が、少將はおれの顏を見ると、悲しさうに首を振りながら、あな

たには何もおわかりにならない、あなたは仕合せな方ですと云うた。ああ云ふ返答は、怒られるよりも難儀ぢや。おれは、——實はおれもその時だけは、妙に氣が沈んでしまうた。もし少將の云ふやうに、何もわからぬおれぢやつたら、氣も沈まずにすんだかも知れぬ。しかしおれにはわかつてゐるのぢや。おれも一時は少將のやうに、眼の中の涙を誇つたことがある。その涙に透かして見れば、あの死んだ女房も、どの位美しい女に見えたか、——おれはそんな事を考へると、急に少將が氣の毒になつた。が、氣の毒になつて見ても、可笑しいものは可笑しいではないか？そこでおれは笑ひながら、言葉だけは眞面目に慰めようとした。おれが少將に怒られたのは、跡にも先にもあの時だけぢや。少將はおれが慰めてやると、急に恐しい顏をしながら、噓をおつきなさい。わたしはあなたに慰められるよりも、笑はれる方が本望ですと云うた。その途端に、——妙ではないか？　とうとうおれは吹き出してしまうた。」

「少將はどうなさいました？」

「四五日の間はおれに遇うても、挨拶さへ碌にしなかつた。が、その後又遇うたら、悲しさうに首を振つては、ああ、都へ返りたい、此處には牛車も通らないと云うた。あの男こそおれより仕

合せものぢや。――が、少將や康頼でも、やはり居らぬよりは、ゐた方が好い。二人に都へ歸られた當座、おれは又二年ぶりに、毎日寂しうてならなかつた。」

「都の噂では御寂しい所か、御歎き死にもなさり兼ねない、御容子だつたとか申してゐました。」

わたしは出來るだけ細細と、その御噂を御話しました。琵琶法師の語る言葉を借りれば、「天に仰ぎ地に俯し、悲しみ給へどかひぞなき。……猶も船の纜に取りつき、腰になり脇になり、丈の及ぶ程は、引かれておはしけるが、丈も及ばぬ程にもなりしかば、又空しき渚に泳ぎ返り、……是具して行けや、我乘せて行けやとて、をめき叫び給へども、漕ぎ行く船のならひにて、跡は白浪ばかりなり。」と云ふ、御狂亂の一段を御話したのです。俊寛樣は御珍しさうに、その話を聞いていらつしやいましたが、まだ船の見える間は、手招ぎをなすつていらしつたと云ふ、今では名高い御話をすると、

「それは滿更嘘ではない。何度もおれは手招ぎをした。」と、素直に御頷きなさいました。

「では都の噂通り、あの松浦の佐用姫のやうに、御別れを御惜しみなすつたのですか？」

「二年の間同じ島に、話し合うた友だちと別れるのぢや。別れを惜しむのは當然ではないか？

しかし何度も手招ぎをしたのは、別れを惜しんだばかりではない。——一體あの時おれの所へ、船のはひつたのを知らせたのは、この島にゐる琉球人ぢや。それが濱べから飛んで來ると、息も切れ切れに船船と云ふ。船はまづわかつたものの、何の船がはひつて來たのか、その外の言葉はさつぱりわからぬ。あれはあの男もうろたへた餘り、日本語と琉球語とを交る交る、饒舌つてゐたのに違ひあるまい。おれは兎も角も船と云ふから、早速濱べへ出かけて見た。すると濱べには何時の間にか、土人が大勢集つてゐる。その上に高い帆柱のあるのが、云ふまでもない迎ひの船ぢや。おれもその船を見た時には、さすがに心が躍るやうな氣がした。少將や康頼はおれより先に、もう船の側へ駈けつけてゐたが、この喜びやうも一通りではない。現にあの琉球人なぞは、二人とも毒蛇に嚙まれた揚句、氣が狂つたのかと思うた位ぢや。その内に六波羅から使に立つた、丹左衞門尉基安は、少將に赦免の教書を渡した。が、少將の讀むのを聞けば、おれの名前がはひつてゐない。おれだけは赦免にならぬのぢや。——さう思つたおれの心の中には、僅か一彈指の間ぢやが、いろいろの事が浮んで來た。姫や若の顏、女房の罵る聲、京極の屋形の庭の景色、天竺の早利即利兄弟、震旦の一行阿闍梨、本朝の實方の朝臣、——とても一一數へてはゐられぬ。

唯今でも可笑しいのは、その中にふと車を引いた、赤牛の尻が見えた事ぢや。しかしおれは一心に、騒がぬ容子をつくつてゐた。勿論少將や康頼は、氣の毒さうにおれを慰めたり、俊寛も一しよに乘せてくれいと、使にも頼んだりしてゐたやうぢや。が、赦免の下らぬものは、何をどうしても、船へは乘れぬ。おれは不動心を振ひ起しながら、何故おれ一人赦免に洩れたか、その譯をいろいろ考へて見た。高平太はおれを憎んでゐる。――それも確かには違ひない。しかし高平太は憎むばかりか、内心おれを恐れてゐる。おれは前の法勝寺の執行ぢや。兵仗の道は知る筈がない。が、天下は思ひの外、おれの議論に應ずるかも知れぬ。――高平太は其處を恐れてゐるのぢや。おれはかう考へたら、苦笑せずにはゐられなかつた。山門や源氏の侍どもに、都合の好い議論を拵へるのは、西光法師などの嵌り役ぢや。おれは眇たる一平家に、心を勞する程老耄れはせぬ。さつきもお前に云うた通り、天下は誰でも取つてゐるが好い。おれは一卷の經文の外に、鶴の前でもゐれば安堵してゐる。しかし淨海入道になると、淺學短才の悲しさに、俊寛も無氣味に思うてゐるのぢや。して見れば首でも刎ねられる代りに、この島に一人殘されるのは、まだ仕合せの内かも知れぬ。――そんな事を思うてゐる間に、愈船出と云ふ時になつた。すると少將の

妻になつた女が、あの赤兒を抱いた儘、どうかその船に乘せてくれいと云ふ。おれは氣の毒に思うたから、女は咎めるにも及ぶまいと、使の基安に賴んでやつた。が、基安は取り合ひもせぬ。あの男は勿論役目の外は、何一つ知らぬ木偶の坊ぢや。おれもあの男は咎めずとも好い。唯罪の深いのは少將ぢや。——」

俊寛樣は御腹立たしさうに、ばたばた芭蕉扇を御使ひなさいました。

「あの女は氣違ひのやうに、何でも船へ乘らうとする。舟子たちはそれを乘せまいとする。とうとうしまひにあの女は、少將の直垂の裾を摑んだ。すると少將は蒼い顏をした儘、邪慳にその手を刎ねのけたではないか？ 女は濱べに倒れたが、それぎり二度と乘らうともせぬ。唯おいおい泣くばかりぢや。おれはあの一瞬間、康賴にも負けぬ大嗔恚を起した。少將は人畜生ぢや。康賴もそれを見てゐるのは、佛弟子の所業とも思はれぬ。おまけにあの女を乘せる事は、おれの外に誰も賴まなかつた。——おれはさう思うたら、今でも不思議な氣がする位、ありとあらゆる罵詈讒謗が、口を衝いて溢れて來た。尤もおれの使つたのは、京童の云ふ惡口ではない。八萬法藏十二部經中の惡鬼羅刹の名前ばかり、矢つぎ早に浴びせたのぢや。が、船は見る見る遠ざかつてし

まふ。あの女はやはり泣き伏した儘ぢや。おれは濱べにじだんだを踏みながら、返せ返せと手招ぎをした。」

御主人の御腹立ちにも關らず、わたしは御話を伺つてゐる内に、自然とほほ笑んでしまひました。すると御主人も御笑ひになりながら、

「その手招ぎが傳はつてゐるのぢや。嗔恚の祟りは其處にもある。あの時おれが怒りさへせねば、俊寛は都へ歸りたさに、狂ひまはつたなぞと云ふ事も、口の端へ上らずにすんだかも知れぬ。」

と、仕方がなささうに仰有るのです。

「しかしその後は格別に、御歎きなさる事はなかつたのですか？」

「歎いても仕方はないではないか？　その上時のたつ内には、寂しさも次第に消えて行つた。おれは今では己身の中に、本佛を見るより望みはない。自土即淨土と觀じさへすれば、大歡喜の笑ひ聲も、火山から炎の迸るやうに、自然と湧いて來なければならぬ。おれは何處までも自力の信者ぢや。――おお、まだ一つ忘れてゐた。あの女は泣き伏したぎり、何時までたつても動かうとせぬ。その内に土人も散じてしまふ。船は青空に紛れるばかりぢや。おれは餘りのいぢらしさに、

慰めてやりたいと思うたから、そつと後手に抱き起さうとした。するとあの女はどうしたと思ふ？ いきなりおれをはり倒したのぢや。おれは目が眩らみながら、仰向けに其處へ倒れてしまうた。おれの肉身に宿らせ給ふ、諸佛諸菩薩諸明王も、あれには驚かれたに相違ない。しかしやつと起き上つて見ると、あの女はもう村の方へ、すごすご歩いて行く所ぢやつた。何、おれをはり倒した譯か？ それはあの女に聞いたが好い。が、事によると人氣はなし、凌ぜられるとでも思つたかも知れぬ。」

五

わたしは御主人とその翌日、この島の火山へ登りました。それから一月程御側にゐた後、御名殘り惜しい思ひをしながら、もう一度都へ歸つて來ました。「見せばやなわれを思はむ友もがな磯のとまやの柴の庵を」――これが御形見に頂いた歌です。俊寛様はやはり今でも、あの離れ島の笹葺きの家に、相不變御一人悠悠と、御暮らしになつてゐる事でせう。事によると今夜あたりは、琉球芋を召し上りながら、御佛の事や天下の事を御考へになつてゐるかも知れません。さう云ふ

御話はこの外にも、まだいろいろ伺つてあるのですが、それは又何時か申し上げませう。

（大正十年十二月）

昭和九年十二月一日印刷
昭和九年十二月五日發行

芥川龍之介全集第三卷

著作者　芥川龍之介

發行者　岩波茂雄
東京市神田區一ツ橋通町三番地

印刷者　白井赫太郎
東京市神田區錦町三丁目十七番地

印刷所　精興社印刷所
東京市神田區錦町三丁目十七番地

發行所　岩波書店
東京市神田區一ツ橋通町三番地
電話九段(33)〔一八七・一八八〕〔一八九・一八〇〕番
振替口座東京七四四一六番

（寺島製本）